

K y u s h u

I n s t i t u t e o f

T e c h n o l o g y

平成21年度

## 現状と課題

九州工業大学大学院工学研究院・工学府・工学部自己点検・評価報告書

九州工業大学大学院工学研究院部局評価委員会

# 目 次

1	はじめに	1
2	工学部・工学府・工学研究科の教育	
2.1	2009年度卒業生アンケート（工学部）	2
2.2	2009年度修了生アンケート（工学府・工学研究科）	32
2.3	教育達成度評価アンケート：雇用主（2007年3月以前卒業生）	56
2.4	教育達成度評価アンケート：雇用主（2007年3月以前修了生）	62
2.5	教育達成度評価アンケート：卒業生（2007年3月以前卒業生）	68
2.6	教育達成度評価アンケート：修了生（2007年3月以前修了生）	74
3	大学院工学研究院・工学府・工学部の管理運営	
3.1	大学院工学研究院・工学府・工学部の組織図	81
3.2	各種委員会活動の点検・評価	82
3.2.1	大学院工学研究院部局評価委員会	82
3.2.2	工学部教務委員会	83
3.2.3	工学部学生委員会	87
3.2.4	工学部入学試験委員会	89
3.2.5	大学院工学府・工学部教育方法等開発委員会	92
3.2.6	大学院工学府・工学部安全環境委員会	95
3.2.7	大学院工学研究院情報化推進委員会	96
3.2.8	大学院工学府広報委員会	100
3.2.9	工学部広報委員会	101
3.2.10	大学院工学府学務委員会	104
3.2.11	大学院工学府入学試験委員会	106
3.3	教員組織	108
3.3.1	教員の配置	108
3.4	事務組織	110
4	大学院工学研究院・工学府・工学部の財政	
4.1	運営費交付金配分状況	111
4.2	科学研究費補助金の採択状況	113
4.3	外部資金導入状況	114
4.3.1	寄附金（奨学寄附金）	114

4. 3. 2	民間等との共同研究	114
4. 3. 3	受託研究	115
4. 3. 4	寄附講座	115
4. 3. 5	寄附金の利息	116
5	大学院工学研究院・工学府・工学部と社会とのつながり	
5. 1	地域貢献活動	117
5. 1. 1	大学公開	117
5. 1. 2	公開講座等	118
5. 1. 3	北九州市民カレッジへの協力	121
5. 1. 4	出前講義	122
5. 1. 5	情報公開	126
5. 2	学生の国際交流	127
5. 2. 1	外国人留学生（国籍別・課程別・費用別）在籍状況一覧表	127
5. 2. 2	外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧	128
5. 2. 3	学生の海外派遣	129
6	おわりに	130

## 1. はじめに

このたび平成21年度版九州工業大学大学院工学研究院・工学府・工学部自己点検・評価報告書「現状と課題」を発刊する運びとなりました。工学部・工学研究科は平成20年度に工学研究院・工学府・工学部に改組されましたが、これまでに引き続き、卒業生・修了生アンケート、教育達成度評価アンケート、ならびに各種委員会の活動などについて記載しています。

平成16年度の国立大学法人化以降、各国立大学法人においては中期計画・中期目標の年度計画に基づいて教育・研究活動が進められています。工学研究院部局評価委員会は、卒業生・修了生及び企業へのアンケート調査を行い、その結果を分析して各種委員会の中期計画・中期目標にフィードバックすることなどを通じて教育研究活動の改善に資することを目的として活動しております。また、国立大学法人評価の際には、これらの結果は教育目標の達成度を測る指標として活用されております。

本冊子は6章から構成されています。

第2章「工学部・工学研究科の教育」では、平成22年1月に実施した卒業生・修了生に対するアンケート、同6月に実施した企業に対するアンケート、そして教育達成度評価アンケートと同時に実施した平成19年3月以前の卒業生・修了生に対するアンケートの結果について、過去のデータと比較し述べています。企業に対するアンケートに関しては、企業側から見た本学の卒業生・修了生の評価を“全体としての傾向”として簡潔にまとめしております。卒業・修了後3年を経過した本学同窓生を対象としたアンケートでは必ずしも十分とは言えないかもしれませんが、法人評価の観点からも有用と考えています。なお、平成20年度の工学部改組に伴い、大学院生の所属は「大学院工学府」となりましたが、修了生については修了時の所属である「工学研究科」との表記にしております。

第3章「大学院工学研究院・工学府・工学部の管理運営」では、平成21年度の大学院工学研究院・工学府・工学部組織および各種委員会の活動等について記載しています。

第4章「大学院工学研究院・工学府・工学部の財政」では、外部資金の獲得状況、民間との共同研究等について記載しています。

第5章「大学院工学研究院・工学府・工学部と社会のつながり」では、公開講座、出前講義、国際交流等について記載しています。

平成18年度版より、閲覧の利便性を考慮して本報告書を工学部のホームページに掲載しております。これにより、学内外に九州工業大学大学院工学研究院・工学府・工学部の内容を公表し、社会に開かれた大学としての役割を果たしたいと考えております。

最後となりますが、平成21年度版「現状と課題」は多くの教育職員および事務職員の皆さまの協力により纏められました。この「現状と課題」が当部局の現状の達成状況を見つめ、更なる改善への道しるべとなることを願っております。

平成23年2月吉日

渡辺 義則（大学院工学研究院部局評価委員会委員長）

## 2 工学部・工学府・工学研究科の教育

### 2.1 2009年度卒業生アンケート（工学部）

※アンケート実施年月日 平成22年 1月26日

※アンケート回収率

学年	配付枚数	回収枚数（回答率）
4年生（卒業予定者）	572枚	381枚（66.6%）

[1]所属する学科・コース名を書いて下さい。

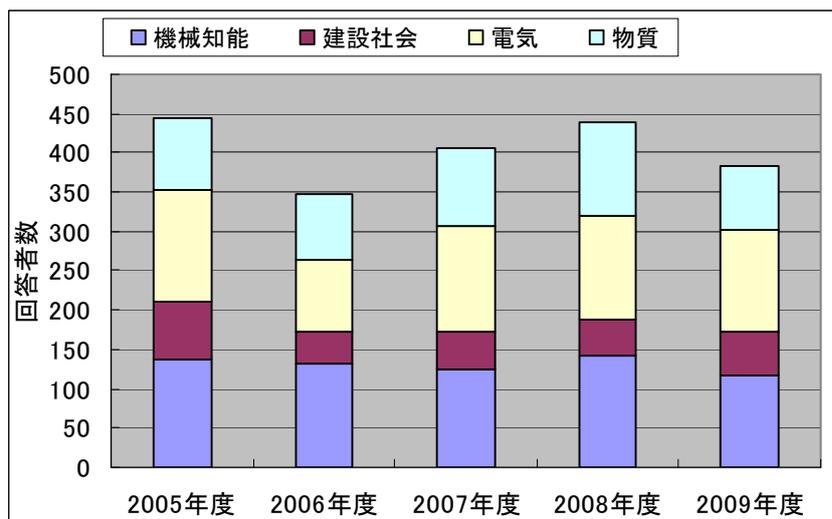
機械知能工学科 (117名)

建設社会工学科 (55名)

電気工学科 (129名)

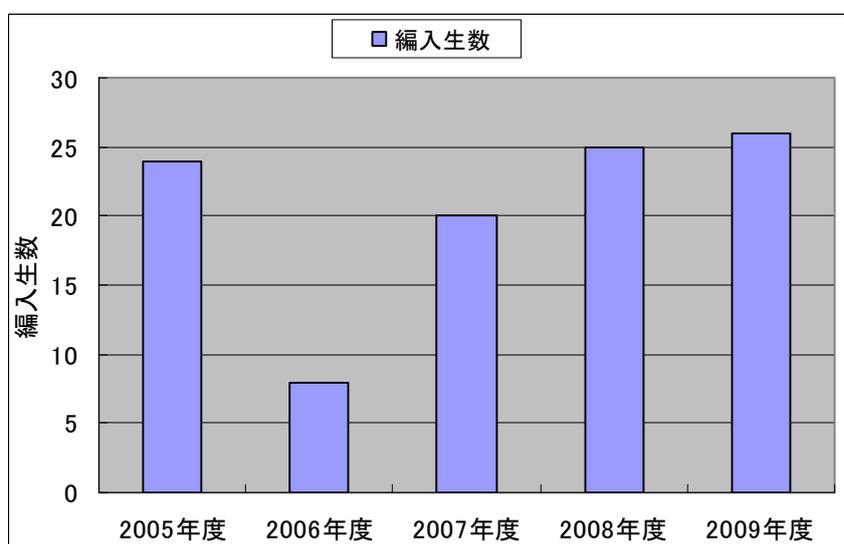
物質工学科 (82名)

昨年と比較して、回答者数が減少している。回答率を増加させる工夫が必要と思われる。



[1-1] 3年次編入の人は [ ] に○を入れて下さい。 [26名]

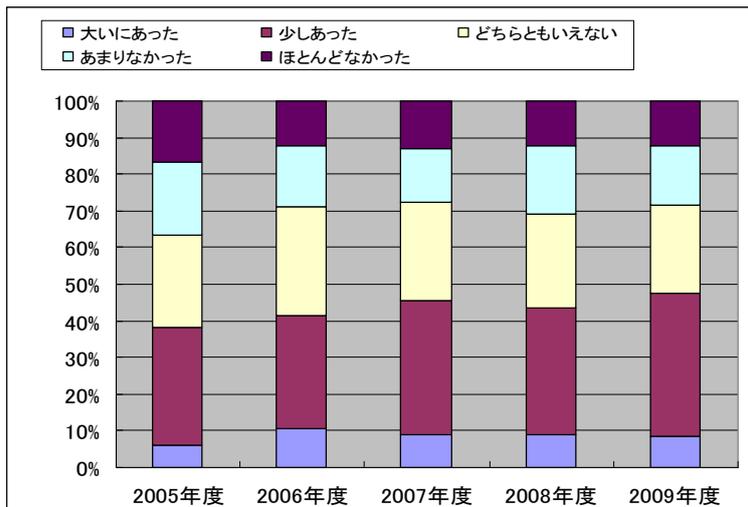
本年度は全員回答している。2007年から回答率が増加しており、2008年、2009年は、ほとんどの編入生が回答しているようである。今後もこの水準を維持できればよいと考えられる。



[2]大学教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねします。

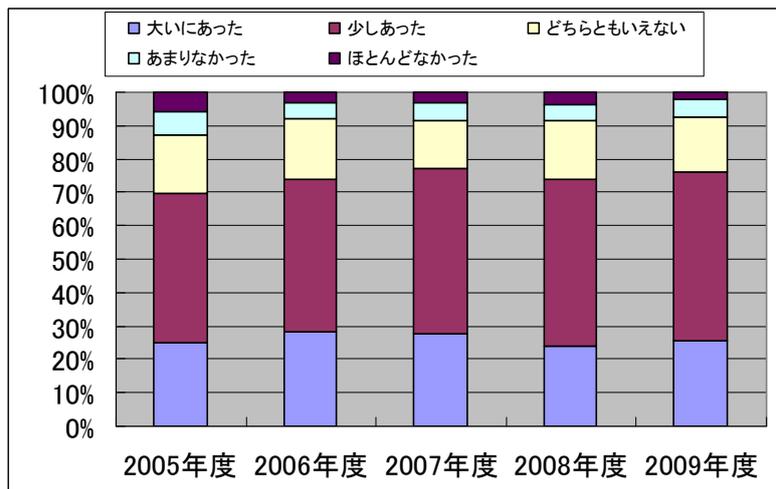
[2-1]人間科学科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。（法学、経済学、社会学、哲学、倫理学、歴史学、語学、保健体育学、文学、教育学等）

効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した割合が増加し 50%に近づいてきている。このことより、人間科学科目において、持続的な教育改善が行われているものと判断される。



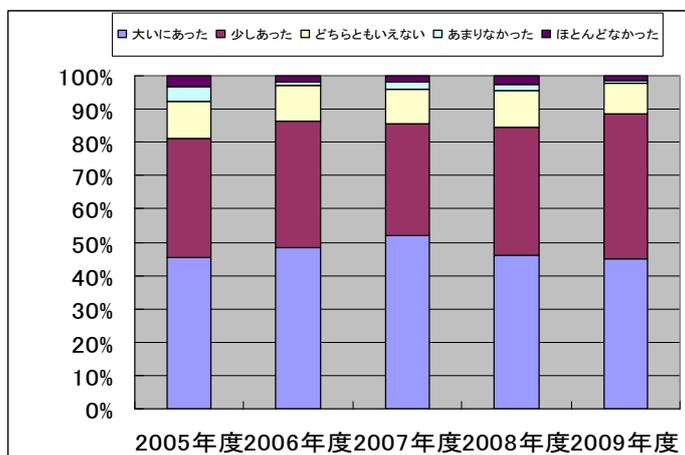
[2-2]工学基礎科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。（数学、物理学、化学、情報関連基礎科目）

効果がなかった（ほとんどなかった＋あまりなかった）と回答した割合が 10%未満に維持されている。一方、効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した割合は 70%以上と高い水準を維持している。これらのことより、工学基礎科目において、質のよい教育が維持されているものと判断される。



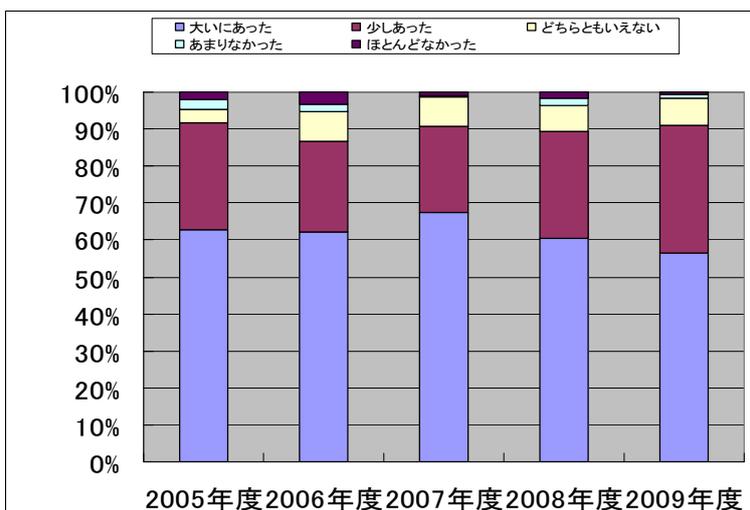
[2-3]工学専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した学生の割合は、毎年度 80%以上であり、高い水準が維持されている。このことより、工学専門科目教育が学生の自己形成に大いに役立っているものと判断される。



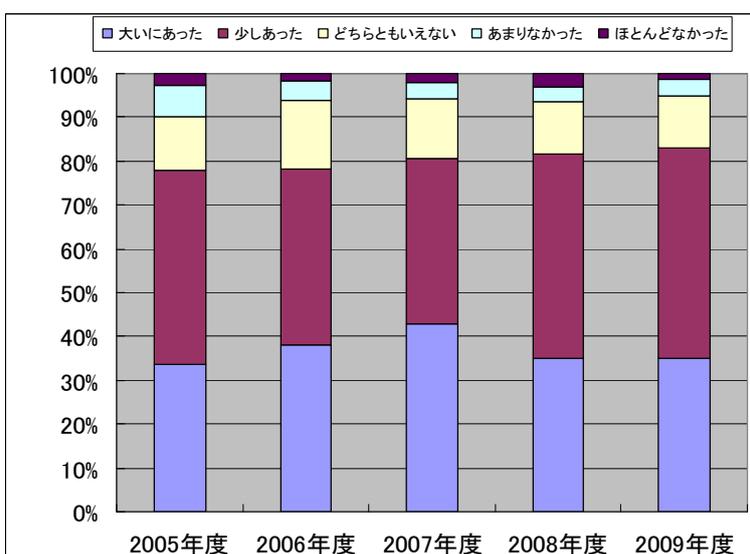
[2-4] 卒業研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。

効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した学生の割合は、毎年度、90%程度であり、非常に高い水準が維持されている。このことより、卒業研究が学生の自己形成に大いに役立っているものと判断される。



[2-5] 実験・実習・演習・製図はあなたの自己形成に効果がありましたか。

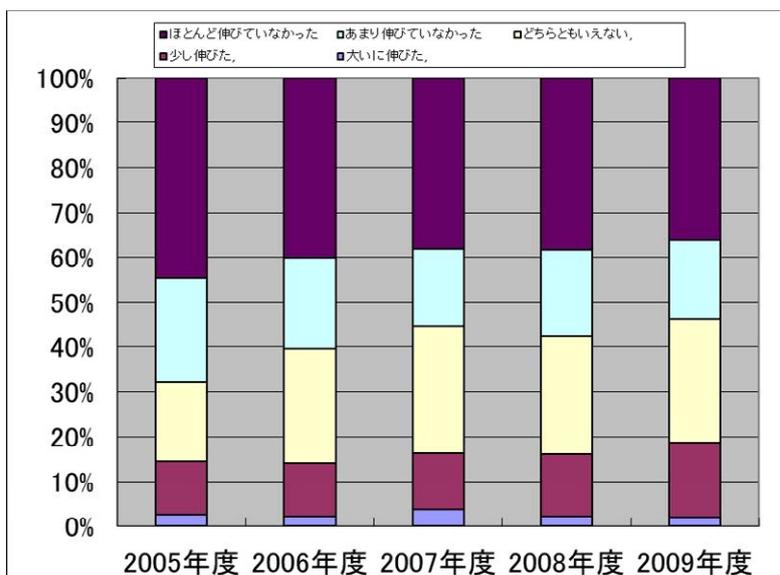
効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した学生の割合が毎年度増加し、かつ、非常に高い水準に維持されている。このことより、実験・実習・演習・製図において質の高い教育改善が行われているものと判断される。



[3] 英語力についてお尋ねします。

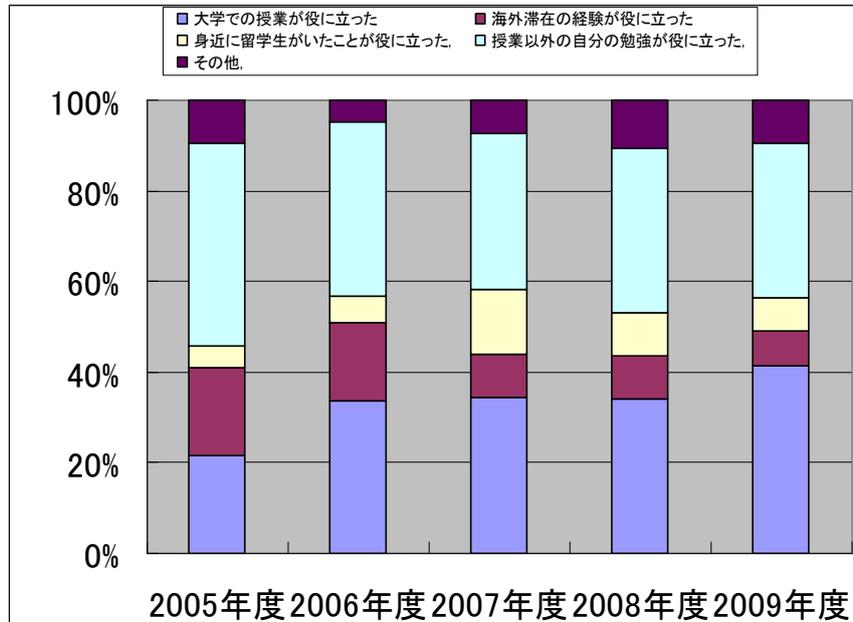
[3-1] 大学の4年間であなたの英語力は伸びましたか。

英語力が伸びた（大いに伸びた＋少し伸びた）と回答している学生が年々増加し、伸びていないと回答する学生の割合は減少している。以上のことから、英語教育に関して持続的な教育改善が行われているものと考えられる。しかし、伸びていないと回答する学生の割合が依然かなり高い状況であり、今後、さらなる改善が望まれる。



[3-2][3-1]でA（大いに伸びた）またはB（少し伸びた）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

英語力が伸びた理由についての回答では、毎年度、大学での授業が役に立った割合と授業以外の自分の勉強が役に立った割合を加えた割合が約70%である。大学での授業が役に立ったと回答する学生の割合は年々増加しており、英語教育に関する改善の効果がでていいるものと考えられる。一方、授業以外の自分の勉強が役に立ったと回答する学生の割合は減少している。英語力を伸ばすには、授業だけでなく、自習をもっと促す必要もあると考えられる。



E（その他） [具体的に： ]

- ・ 大学院試のためのTOEICに向けた勉強
- ・ アルバイトで英語を教える機会があった。
- ・ 英語力の必要さを知り、英語に取り組む意識が変わった。
- ・ ゼミ
- ・ 論文（英語）を読むことによる。
- ・ 横山先生のおかげです。
- ・ 研究室に入ってから英語の論文を読む機会が増えたこと。
- ・ 英文購読で身についた
- ・ 卒業研究で英語の論文を読んだため。

[3-3][3-1]でD（あまり伸びていない）またはE（ほとんど伸びていない）と答えた方：その理由は何ですか。

英語力が伸びていない理由として、高校までのように英語に関する授業時間数多くないことや、自習意欲の低下、低学年でしか英語科目がないことを理由として挙げる学生が多い。3年次以上での英語科目の配置や英語自習意欲の向上法などの検討が必要と考えられる。

- ・ ほとんど使わなかったから
- ・ あまりふれる機会がなかった
- ・ 英語教育が少なすぎる！
- ・ 学習をやっていない
- ・ 4年間授業がなく、英語ばなれとなった
- ・ 英語の講義（必修）が少ない！

- ・ 授業以外で英語にふれなかったから。
- ・ 3年次編入のため。
- ・ 興味を持てなかったから。
- ・ 英語の授業がない
- ・ 授業レベルが低すぎる。
- ・ 勉強してないから
- ・ 英語の授業が少なく。内容がショボい。
- ・ 元々力があつたから
- ・ 英語の授業がほとんどないから
- ・ 自主的に学習しなかったから
- ・ やってない
- ・ 自主的に行なわなかった
- ・ 英語が嫌いなため。
- ・ 英語に触れる機会が少ないため。
- ・ 英語の必修講義があるのが大学1年のときだけで、その講義しか受けず、大学2～4年は英語を勉強しなかったから。
- ・ 授業以外でほとんど勉強しなかったから
- ・ 継続して勉強しなかったから。
- ・ 英語の重要性を理解していなかったため。
- ・ 実際に使う機会が少なかったから。
- ・ 時間少ない。内容薄い。
- ・ 真剣に学ぶ姿勢がない。
- ・ 大学一年でしか学んでないから。
- ・ 英語の授業が、一年のみだから。
- ・ 授業のレベルが高校の時より低かったから。
- ・ 英語にふれる機会がほぼなかった。
- ・ 予備校時代ほど高度な英語、英文を読んでいない。
- ・ 3年～英語にふれる機会が減ったため
- ・ 編入生は英語を受けていません。卒業研究で少し力が付きましたが、レベルは低いです。
- ・ 英語の授業を自ら受講しなかったため。
- ・ 力がついたかわからない
- ・ 勉強していないので
- ・ 受講した英語科目が少なかった
- ・ 授業内容が簡単で、1・2年で授業が終わったから。
- ・ 英語にふれる機会がなかった。
- ・ 使う機会がない。一・二年で授業がおわる
- ・ 海外の人と接する機会が少なかったから。
- ・ 英語に触れる機会が少なかったから。
- ・ 英語に接する時間がへった
- ・ 中学校並みの授業が行われている。
- ・ 英語を使う機会が授業を含めて少なかったから。
- ・ 英語の授業は基本的に1、2年次で終わったため、その後自分で勉強していないため
- ・ 2年の後期以降で英語にあまり触れていないから
- ・ 3、4年で授業を取らなかった
- ・ 英語の授業が少ない
- ・ 英語をほとんど学習してなかったから
- ・ 1年時以外英語に触れる機会を作らなかったため
- ・ 授業以外に英語の勉強をしていなかったため
- ・ 他の勉強に力をいれてしまい、あまり意識して勉強にとりくまなかったので自分の考えがあまかったので伸びなかった
- ・ 英語に触れる機会が少なすぎる。
- ・ 授業以外で英語を使うような環境ではないから。
- ・ 英語の学習時間が高校のときに比べ、少ないから。
- ・ 授業が無いので勉強しない
- ・ 自主性不足
- ・ 英語を学ぶ機会が少なかった。

- ・ 英語にふれる機械が減ったから。
- ・ 英語を使っていないから
- ・ 努力不足
- ・ 勉強不足
- ・ 英語を勉強しなくていい環境だから
- ・ 意味がなかった
- ・ 勉強不足
- ・ 興味を持たなかった。気憶も特に残っていない。
- ・ 英語の授業がそう多くなかったため。
- ・ 受験英語の続きの感じがあり実用的なものが少なかった。
- ・ 大学3年から全く英語を学習していない為
- ・ そのような講義がなかった
- ・ 高校時代のように毎日やるわけではないから。
- ・ ほとんど勉強しなかったから。
- ・ 英語の学習は1、2年次までしか受けず、自己学習も行わなかったため
- ・ 高校よりも英語に触れる機会がへった。
- ・ 英語を必要とする環境にいなかったから。
- ・ 英語にとりくむ姿勢がわるかった
- ・ 大学での授業以外に勉強があまりできなかった。
- ・ 講義数が少なく、あまり影響がなかった。
- ・ 1年時以外英語の勉強をしていない。
- ・ 高校を卒業して英語をほとんど勉強しなくなったから
- ・ 英語を使う機会があまりなかった。
- ・ 勉強することがあまりなかったから
- ・ 授業以外でほとんどしてないため
- ・ TOEICを受けたり、英語を勉強しなかったから
- ・ 帰宅後の学習がなかった
- ・ 高校のときのほうが勉強していた。
- ・ あまり勉強していなかったから
- ・ 意味がない。
- ・ 劣化する一方だった。
- ・ 勉強をしなかったため。
- ・ 高校までの授業と大差なかったから。
- ・ 授業でしか勉強していないから。
- ・ 2年以降は、ほとんど英語を使う機会がなかった
- ・ 高校の方が授業が充実していた。
- ・ 授業が少ないから
- ・ 英語に触れる機会が減った
- ・ 英語は使わないとすぐ忘れるから
- ・ 週一の授業ではあまり効果はないと思う。
- ・ 授業に英語があまりないから
- ・ 英語の勉強をしないから
- ・ わからないから
- ・ 積極的に、英語力を伸ばそうとしなかったから
- ・ 環境が整っていないから。
- ・ 積極的に予習・復習をしなかったので
- ・ 英語の講義をあまり受けていない
- ・ 自分の努力が足りなかった。
- ・ 自分自身で興味をもって取りくむことができなかった。
- ・ 英語にふれる時間が少ないことと、文法の理解。
- ・ 英語の講義数が少なすぎる
- ・ 英語を勉強する時間が減ったから。
- ・ 英語を話す機会が少なくなった。
- ・ 向上心がなかったから

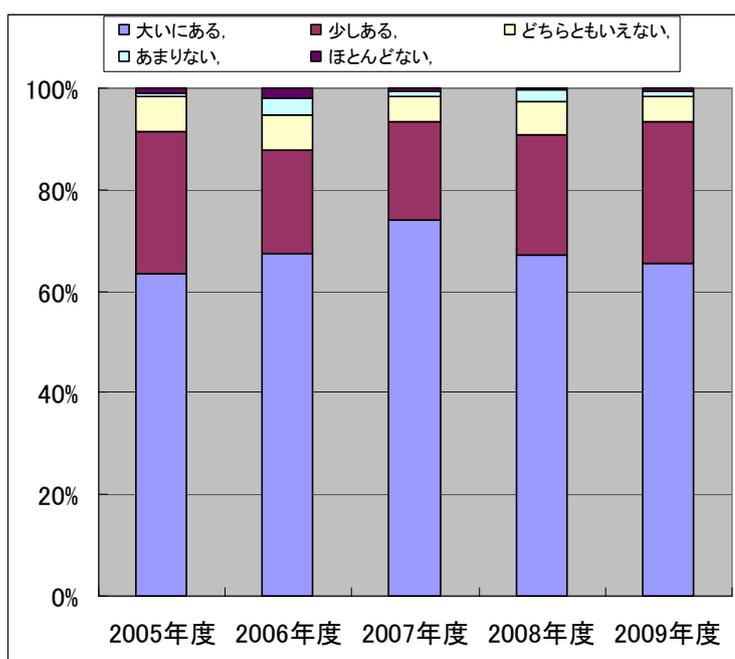
- ・ 興味がわかなかつた。
- ・ 会話を中心とした授業が少なかった。
- ・ 英語科目が少なかったため。心の弱さ。
- ・ 自主的な勉強が足りなかつたから。また、授業の内容はもっと改善の余地があると思う。
- ・ 勉強不足
- ・ 予習、復習をしなかつたから
- ・ 2、3年であまり英語の授業がなかつたので勉強しなかつたから
- ・ 英語に向き合う時間がほとんどなかつたから。
- ・ 勉強をしなかつた
- ・ TOEICの点数
- ・ 積極的な学習をしなかつた
- ・ 自分の力不足
- ・ 勉強不足
- ・ 勉強量の少なさ
- ・ 授業で満足してしまいあまり勉強しなかつた
- ・ 高校までの学力と変化なし
- ・ 英語を学ぶ機会が減つたから。
- ・ 勉強していないから。
- ・ 2年以降全く英語に触れなかつた
- ・ 内容が薄い。授業時間が短い。
- ・ 英語を使う機会がほとんどなかつた為
- ・ すぐに忘れるから
- ・ 勉強しなかつたから
- ・ 英語の授業が少ない
- ・ 必修科目取得以来、論文サーベイ・作成以外で英語に触れていないため。
- ・ なにもしなかつたから
- ・ 難しかったため
- ・ そこまで本格的には取り組まなかつた。
- ・ 1、2年の時だけしか英語の授業を受けていない為。
- ・ 知識も会話力もどちらも中途半端な授業だったと思う。
- ・ 高校の時とほぼ一緒。実用的なものが少ない
- ・ 高校の方が勉強してた。
- ・ 単位さえ取ればいいと考えていたため。
- ・ 英語を用いる機会が高校よりも減少したから。
- ・ 他の科目での勉強が忙しくて手につかなかつた
- ・ 英語の授業が一年次のみだったため
- ・ 英語に対して苦手意識があつたので、勉強にあまり身が入らなかつたから
- ・ 英語のカリキュラムが少ない。実践的ではなかつた。
- ・ 1年生、2年生のときは英語への意識が低かつたから
- ・ 英語に解れてない
- ・ 自分で勉強しなかつたから
- ・ 授業のみでの学習だったので。リスニングがほとんど無かつたので。
- ・ あまり勉強しなかつたから
- ・ 英語をつかう機会が少なかった。
- ・ 授業以外での学習をしなかつたから。
- ・ 英語を大学でやらなかつたから
- ・ やってないから
- ・ 授業のレベルが低かつた。
- ・ 必修英語科目はTOEICに役立たない
- ・ ほとんど英語にふれなかつたから。
- ・ 勉強をする機会がなかつたから
- ・ 授業が少なかった。
- ・ 3～4年で英語の授業がないから。
- ・ あまり実践的な学習内容ではなかつた。

- ・ 勉強する機会が少なかった
- ・ 勉強不足が主な原因
- ・ TOEICなど具体的な目標があったほうがいい。また、今の授業ではコミュニケーション(トーキング)力はぜったい伸びない
- ・ 1年のとき以外、英語にふれていない
- ・ 授業内容が分かりづらい
- ・ 英語を使う機会が少なかったため。
- ・ ただ単位を取ることに執着していたため。
- ・ 特に集中して勉強した訳じゃないから
- ・ 簡単すぎた。TOEICの授業がよかった
- ・ 3、4年でまったく使わなくなった。英語があまり必要とされなかった。
- ・ 自ずと行わなかったので
- ・ 英語の勉強にける時間がほとんどなかった
- ・ 基礎的で、尚且つ、学年が上がると選択科目となり、あまり英語に触れる機会がないから
- ・ 英語の勉強をしていなかったから。
- ・ 二年生までしか英語の科目がないので、英語にふれ合う機会が減った
- ・ 講義が少ない、レベルが低い
- ・ 高校のときより英語にふれている時間が短い。
- ・ 量が少ないから。
- ・ 授業時間が少なかった
- ・ 英語が嫌い。
- ・ 授業でのリーディングをやっていないから
- ・ 高校の時よりも英語ができなくなっている
- ・ 英語の勉強をほとんどしていないから。
- ・ 大学で英語習っていません
- ・ 試験に通るような勉強しかなかったから
- ・ 普段使わないから
- ・ 英語にふれる機会が少なかったから。
- ・ 英語を学ぶ機会が皆無になったから

#### [4] 卒業研究についてお尋ねします。

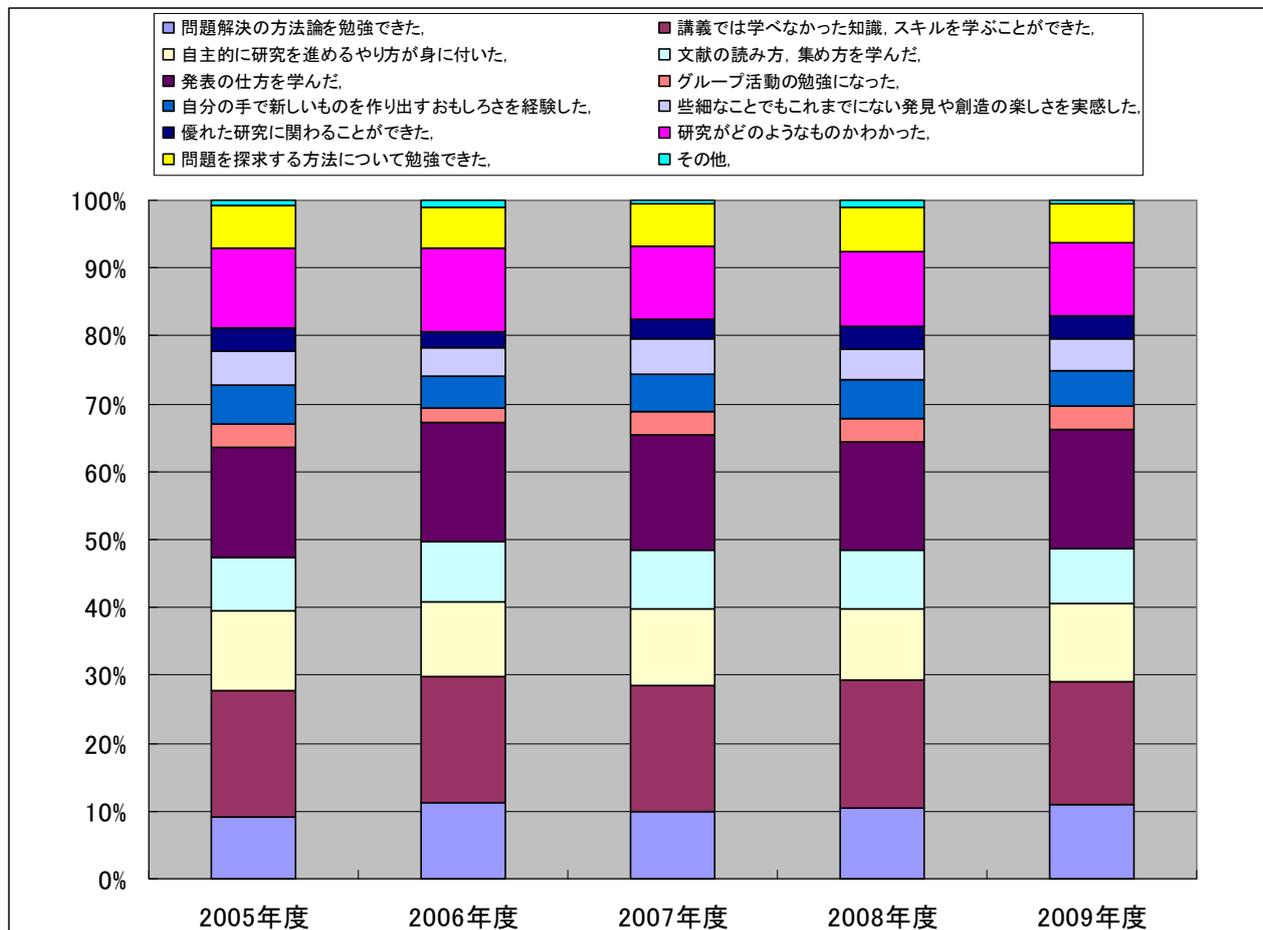
##### [4-1] 卒業研究の意義はあると思いますか。

卒業研究の意義について、ある(大いにある+ある)と回答した学生の割合は、毎年度、約90%程度である。今後もこの水準を維持することが重要である。



[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

卒業研究に関し意義がある（大いにある＋ある）と回答した理由には、研究の仕方や問題解決方法が学べた、発表の仕方が学べた等、授業では学べなかった知識・手法に関するものが多かった。このことから、卒業研究を行う意義が高いことが確認できる。



L(その他)[具体的に： ]

- ・ 自分の未熟さに気づけた
- ・ 大学に行った実感がわく。
- ・ 忍耐力がついた。
- ・ 大変だった(である)
- ・ ようやく大学生になった気がした。
- ・ 1つのことを深く勉強できるのが良かった
- ・ 楽しかった。

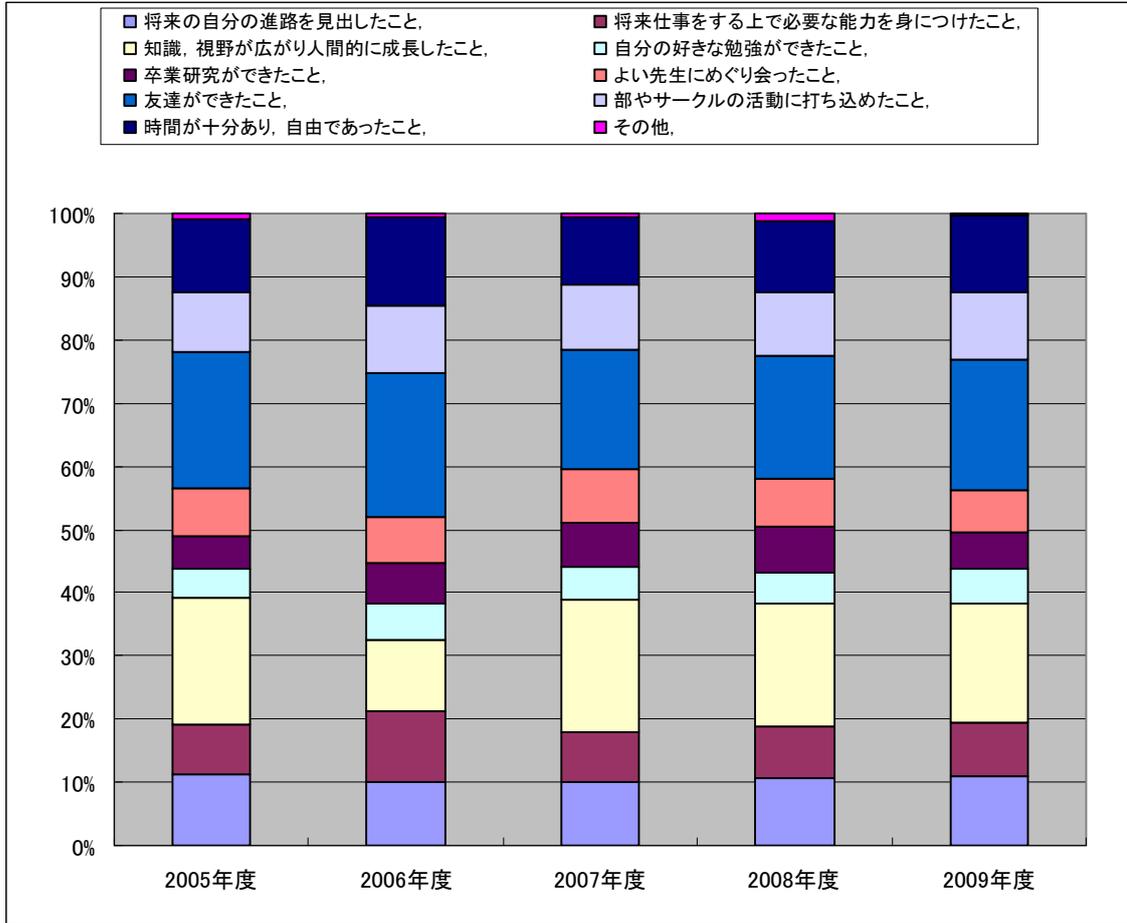
[4-3][4-1]で卒業研究の意義がD（あまりない）またはE（ほとんどない）と答えた方：その理由は何ですか。

卒業研究の意義がない（あまりない＋ほとんどない）と回答した学生が僅かながらいる。自分自身の希望していた研究テーマではない等の理由により、卒業研究を行う意欲が非常に低くなっていることが原因のように思われる。研究室配属方法の改善等でこの問題に対応可能かどうかの検討を行う必要があるように思われる。

- ・ 研究内容が就職しても使えそうにない。過程も含め
- ・ 興味がない。
- ・ 電気電子系なのにやっていることが物質に近かったから。
- ・ だるい
- ・ 発表のための研究になってしまうから。フォントとか図の形式とかの直しに時間をとられたり…

[5] 大学生生活を振り返って、どのようなことがよかったですか。（複数回答可）

例年と同様に、知識や視野の広がり、友人が出来たことなど、多面的にバランスのある回答となっている。全般的に、大学生活が有意義であったと感じている証しであるように思われる。



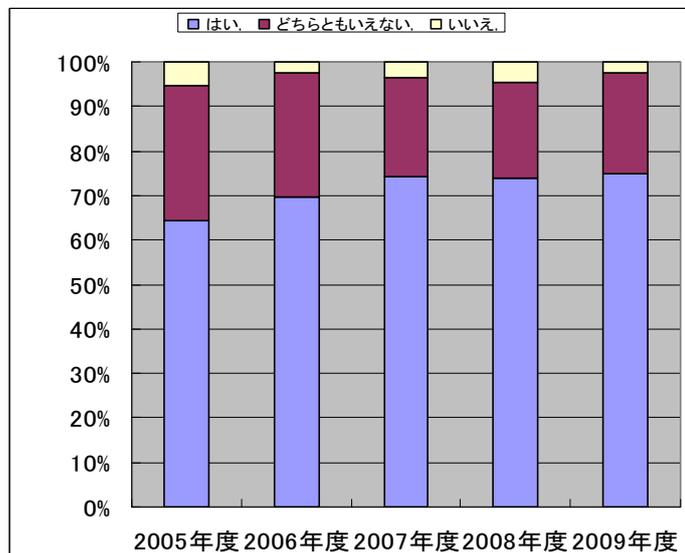
J (その他) [具体的に: ]

- ・ 社会勉強
- ・ 資格をとれた

[6] 入学した学科についてお尋ねします。

[6-1] 現在の学科に入学してよかったですか。

入学した学科については、良かったと思わない学生の割合は、例年と同様、数%と非常に低い。第一希望で入学していない学生が含まれていることを考慮すれば、非常に良い結果が得られているものと考えられる。



[6-2][6-1]でC(いいえ)と答えた方：その理由は何ですか。

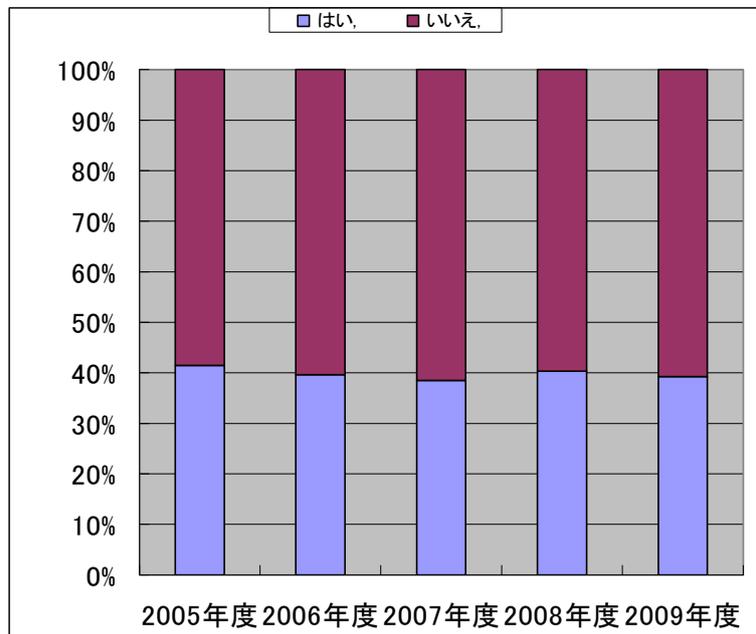
入学した学科について良かったと思わない理由では、もともとその学科に興味がなかったといった理由が多いようである。入試やコース配属方法などをより弾力的に運用することでの対応も考えられるが、それにも限度があるもの考える。

- ・ 自分の知識の基礎分野が違っていた。
- ・ 電気の分野、情報の分野に惹かれたから。
- ・ 適当に決めた第二次希望であったから。
- ・ 工学部じゃないところがよかった
- ・ 入学以前から工学に興味が無かったから。
- ・ 拘束時間が長い
- ・ むくわれないから
- ・ もっと興味のある分野が他にできたから。
- ・ 化学系の勉強・研究の方がおもしろかったから。
- ・ 分野としておもしろかったが好きにはなれなかったから。

[7]入学時の目標の達成についてお尋ねします。

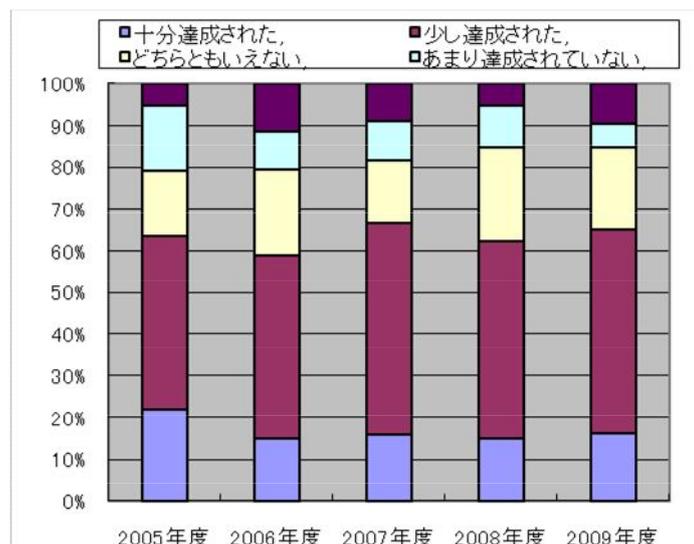
[7-1]あなたは入学の時に大学で達成したい目標がありましたか。

入学時に目標を持っていない学生が約60%で、全くと言っていいほど年度ごとの変化がない。特に、勉強や研究に関する目標の有りで、学生の勉強意欲がかなり異なるものと考えられる。広報活動などを通して、大学入学時に目標を持つことの有用性を高校生に啓蒙することを検討する必要があると考えられる。



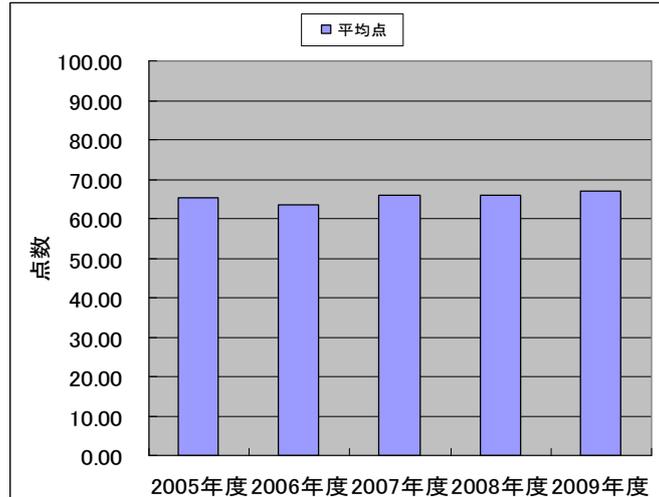
[7-2][7-1]でA(はい)と答えた方、それは現在どの程度達成されていますか。

達成された(十分達成された+少し達成された)と感じている学生の割合が約60%で例年推移している。今後、達成されたと考える学生割合の増加が望まれる。



[8]在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

満足度は、毎年度、約65点となっている。期待度に対する満足度の達成割合がほぼ良い状況にあるものと判断される。

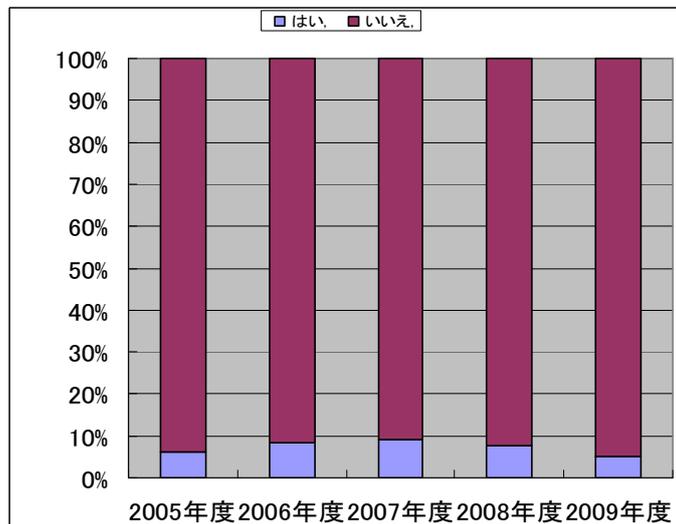


[9]卒業により取得予定の資格についてお答え下さい。

(本学の教育目標に適合しない資格(自動車免許等)は除外します。)

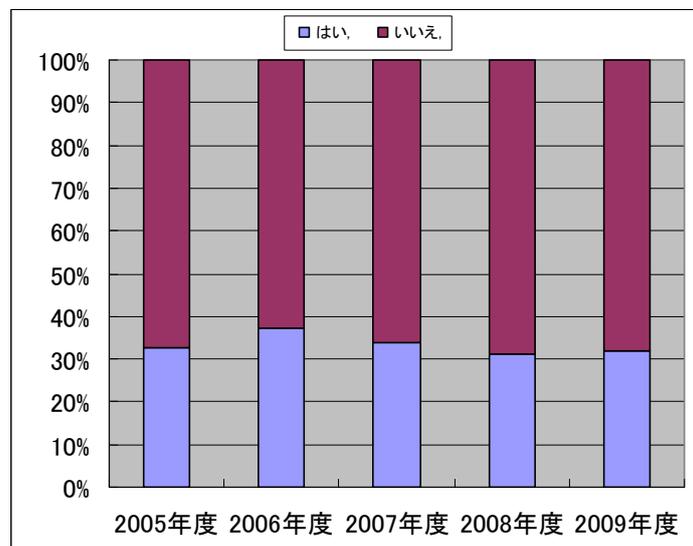
[9-1]あなたは教員免許取得を目標としていましたか。

2007年度をピークに教員免許の取得の希望者割合が減少している。5%程度の学生が教員免許取得希望を持っていることは認識しておくべきである。しかし、実際に教員をどの程度目指していたか等についての情報収集が必要であろう。



[9-2]教員免許(数学)が可能でしたら、あなたは取得を希望しましたか。

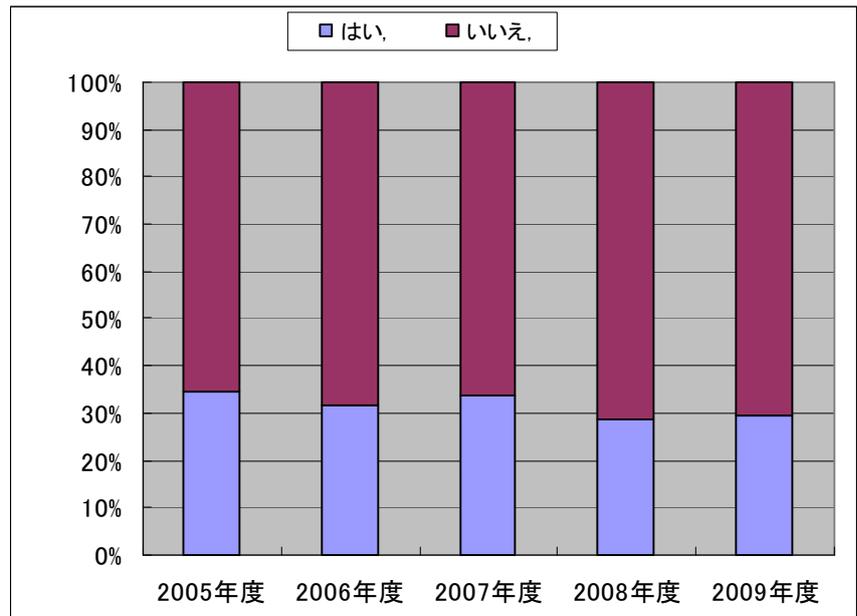
数学教員免許取得希望に関しては、毎年度、30%余りで推移している。30%の学生が全て強く希望している場合には、工学部として、数学教員免許取得が可能なカリキュラム導入の検討が必要となると考えられる。希望の度合いを調べる必要がある。



[9-3]あなたは卒業後資格(教員免許を除く)を取得する予定ですか。

卒業後の資格取得を予定している学生は、毎年度、30%程度である。

資格取得が就職先において必要となりそうな場合には取得を考えているものと予想される。就職先と無関係に取得したいのかどうかのアンケートを行う必要があるものと考えられる。



[9-4] [9-3]でA (はい) と答えた方: どのような資格を取得する予定ですか。

正式名称で無いものも含まれているようである。先輩などから取得の必要性を聞かされ資格取得を希望しているものと考えられる。

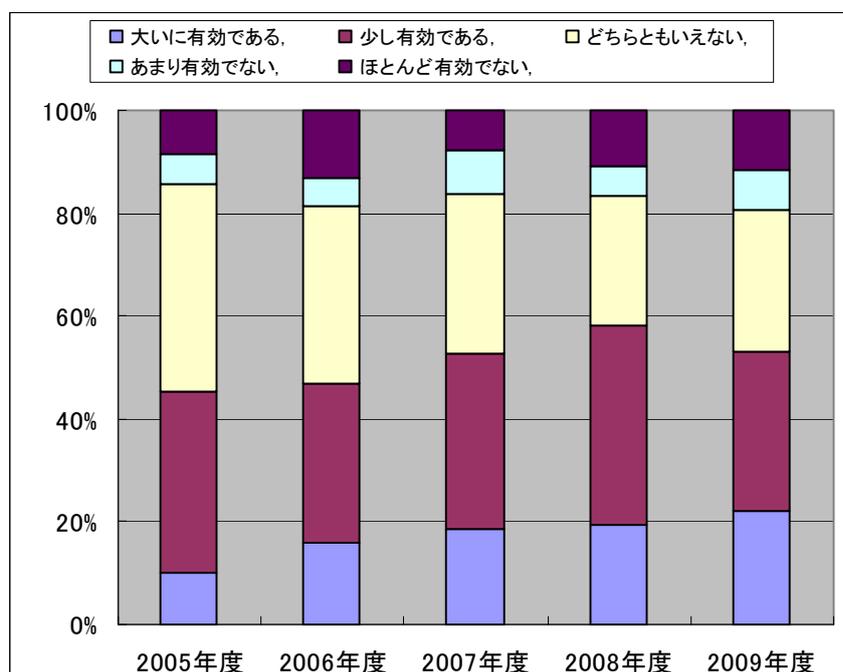
- ・ 技術 I
- ・ 未定
- ・ 危険物取扱者
- ・ 航空無線通信士
- ・ TOEICテスト、技術士補
- ・ ドイツ語または中国語技能検定。
- ・ 就業の際に必要な資格。機械の取り扱いやその他
- ・ 未定
- ・ 機械設計
- ・ 電気・工事関係
- ・ 電気工事士
- ・ TOEIC700点
- ・ 技術士補
- ・ 土木系に必要なもの
- ・ 技術士
- ・ 1級土木施工管理技士
- ・ 測量士補・建築士2級・技術士補
- ・ 管理業務主任者
- ・ 測量士
- ・ 技術士
- ・ 技術士
- ・ 技術士
- ・ 技術士
- ・ 土木技術士
- ・ 1級土木施工管理技士
- ・ 技術士等
- ・ 未定
- ・ まだ具体的には決めていません。
- ・ 建築士
- ・ 技術士、技術士補

- ・ 技術士
- ・ 技術士
- ・ 一・二級建築士
- ・ 技術士
- ・ 技術士など
- ・ 土木分野の資格
- ・ 技術士など
- ・ 技術士
- ・ 土木施工管理技士
- ・ 技術士(電気)
- ・ 土木系様々
- ・ 技術士、測量士
- ・ いろいろ
- ・ 決めてないけど何か。電検とか。
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電気工事士、電気主任技術者、宅建主任者
- ・ 電検
- ・ 第三種電気主任技術者
- ・ 第三種電気主任技術者
- ・ 電気関係
- ・ 電気主任技術者
- ・ 公務員
- ・ 電気関連など
- ・ 電気主任技術者。
- ・ 電気主任技術士
- ・ 危険物、電気主任、電気工事士
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電験3種
- ・ MBA
- ・ 電気主任技術者
- ・ エンベディドシステムスペシャリスト。
- ・ 電気工事士
- ・ プログラム系の仕事
- ・ 電検
- ・ 電験Ⅲ種
- ・ 電気検定やTOEIC
- ・ 電気工事士
- ・ 電験三種、できれば在学中、TOEICスコア630点以上。
- ・ 電気主任技術者
- ・ わかりません。
- ・ 情報処理技術
- ・ 第1級陸上無線技術士
- ・ 第一級陸上無線技術士
- ・ 電検
- ・ 電検
- ・ 電検
- ・ 電験3種など
- ・ 電気関係
- ・ 危険物責任者
- ・ 電検
- ・ まだ考えていない
- ・ 電験Ⅰ種
- ・ 進路により
- ・ 簿記、危険物取扱

- ・ 基礎情報処理
- ・ 公害防止管理者
- ・ いろいろ
- ・ 会計士
- ・ 危険物やハンゲル語
- ・ 化学系、安全衛生系、環境系
- ・ 工業系の資格、会社で役立つような
- ・ X線関係など
- ・ 危険物取扱
- ・ 危険物
- ・ MOS
- ・ 技術者なんたらみたいなのやつ
- ・ 仕事に必要な資格

[9-5][9-3]でA（はい）と答えた方：大学の授業は資格取得に有効ですか。

資格取得に大学の授業が有効（大いに有効+少し有効）と考える学生の割合は徐々に増加しており、この3年間では50%を超えている。一方、有効でない（あまり有効でない+ほとんど有効でない）と考える学生の割合が今年度約20%に達している。この増加傾向が続くのであれば、この学生達がどのような資格取得を希望しているのかのアンケートを実施して、授業に資格取得を意識した内容を盛り込むべきかどうかの検討を行う必要があるかもしれない。



[9-6][9-5]でD（あまり有効でない）またはE（ほとんど有効でない）と答えた方：その理由は何ですか。

学生の想定する取得資格の種類・必要性に大きな幅があると思われるような雑多な回答となっている。大学が提供すべき内容や方向を逸脱しないことに留意しつつ、学生のニーズに合わせるような工夫があれば良いが、雑多なニーズに合わせることは現実的には困難と考えられる。

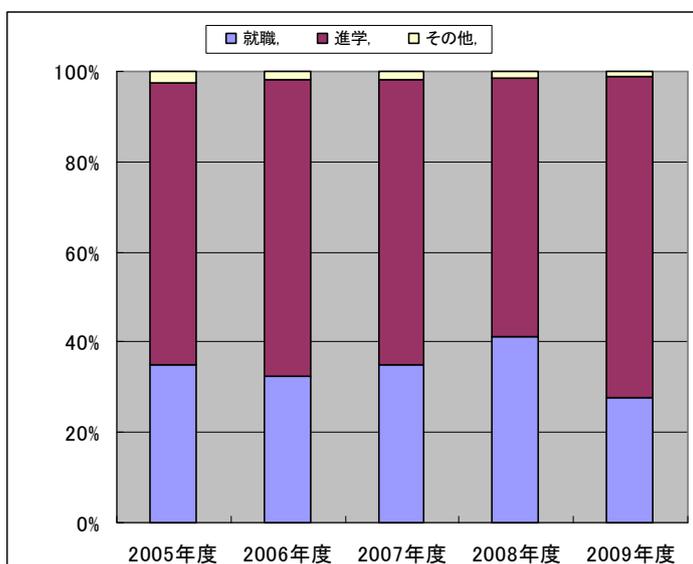
- ・ 授業内容が大学外向きではない。
- ・ 大学授業と関連がないため。（部で必要）
- ・ 継続して勉強するには短いため。
- ・ 関連なし
- ・ 資格の受験対策向きではないから。
- ・ 専門でないので。
- ・ エンベデッドシステムスペシャリストは情報処理の分野だから。
- ・ 学科と違う系統の仕事についたから
- ・ 学生を置き去りにした授業は身につきにくい。

- ・ 法規に関する勉強をしないといけないから。
- ・ 大学にいかなくてもとれる
- ・ 資格の勉強と学校の勉強は異なる分野だから
- ・ 教える内容が専門的すぎる
- ・ 大学卒業と関係のない資格だから
- ・ どんな資格があるのかわからない。事務が全く相談にのってくれない。←自主性を育ませるため？それにしても放置すぎ。聞いても答えてくれなかった。自分で探すにも1、2年のときは必要性を感じられず勉強しない人がほとんど。
- ・ 取得単位が多すぎる。
- ・ 資格の有意性について教えていないため。
- ・ 資格の勉強を授業でしたら専門学校みたいだし、有効でなくていい。個人で勉強するものだと思う。
- ・ あくまで直接的に有効とは言えないと思う。目的が資格をとるための授業ではないと考えるから。
- ・ Excel、Wordの特別な操作を習うことがないため
- ・ 分野が狭すぎる。
- ・ 大学で学ぶことは資格取得に対し、視野が広すぎる。

[10] 卒業後の進路についてお尋ねします。

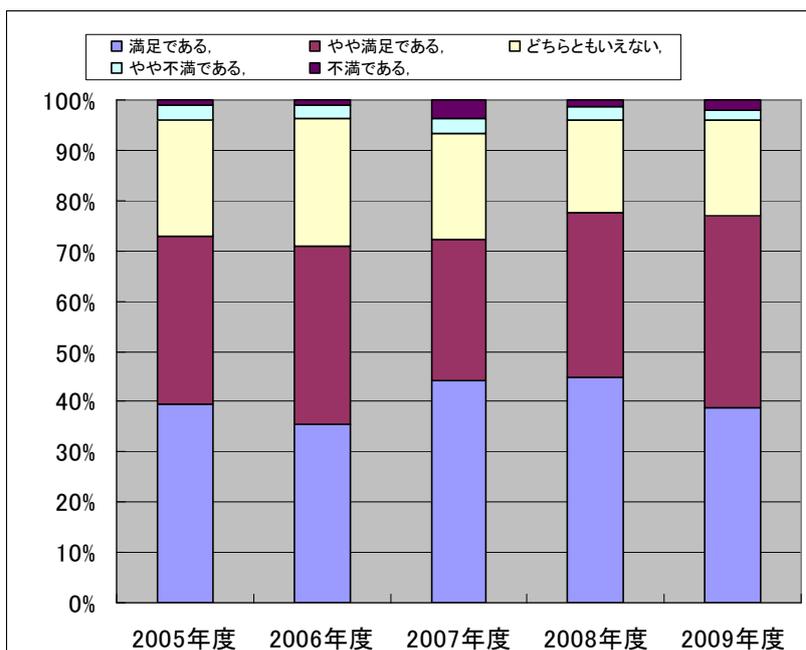
[10-1] あなたは卒業後就職しますか、進学しますか。

進学する卒業生が 2005 年度から 2007 年度には 60%強と安定していたものが、2008 年度以降変動する傾向が認められる。



[10-2] あなたは卒業後の進路に満足していますか。

2005 年度から 2009 年度の傾向を見る。「満足である」と「やや満足である」が 70%以上の高い水準にあり、しかも、その割合が増加している。



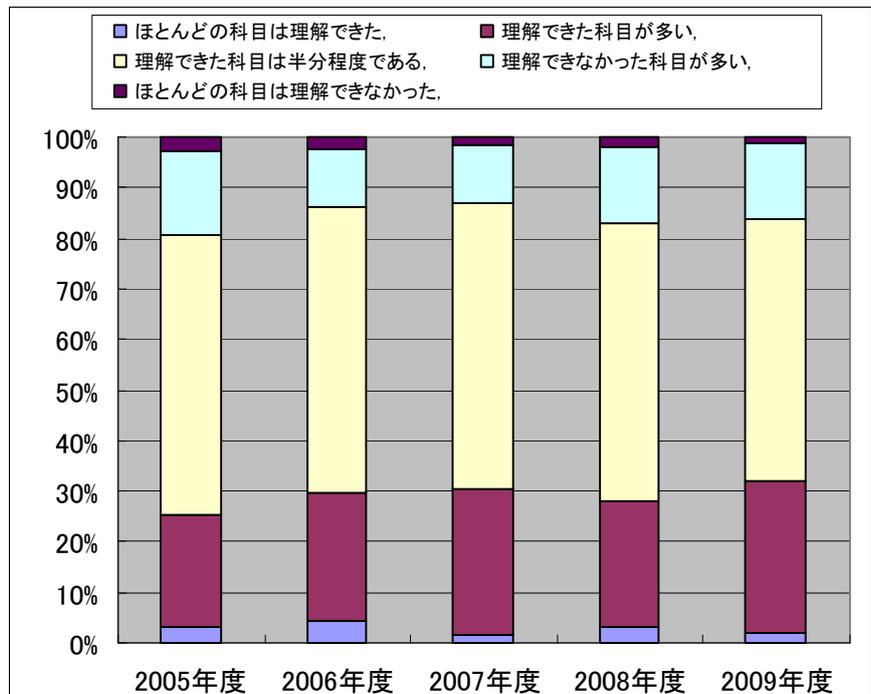
[10-3][10-2]でD（やや不満である）またはE（不満である）と答えた方：その理由は何ですか。

卒業後の進路に関すること、自分の希望通りにいかなかったことへの不満をあげた卒業生が比較的多かった。

- ・ 当初から進路予定はなかったが、就職できないとは思ってなかった
- ・ 希望先でない
- ・ 研究内容が就職と関連がない。
- ・ 勤務地
- ・ 就職した方が良かったから
- ・ 希望の専門分野ではないから。
- ・ 周りの雰囲気進学を希望してしまったから
- ・ 道を誤った
- ・ 出来れば就職をしたかった
- ・ 就職も考えていたから。
- ・ ブラックだから
- ・ 希望の職種に入れなかったから。
- ・ 希望の職種ではないから。

[11] これまでに受講した科目の理解度はどの程度ですか。

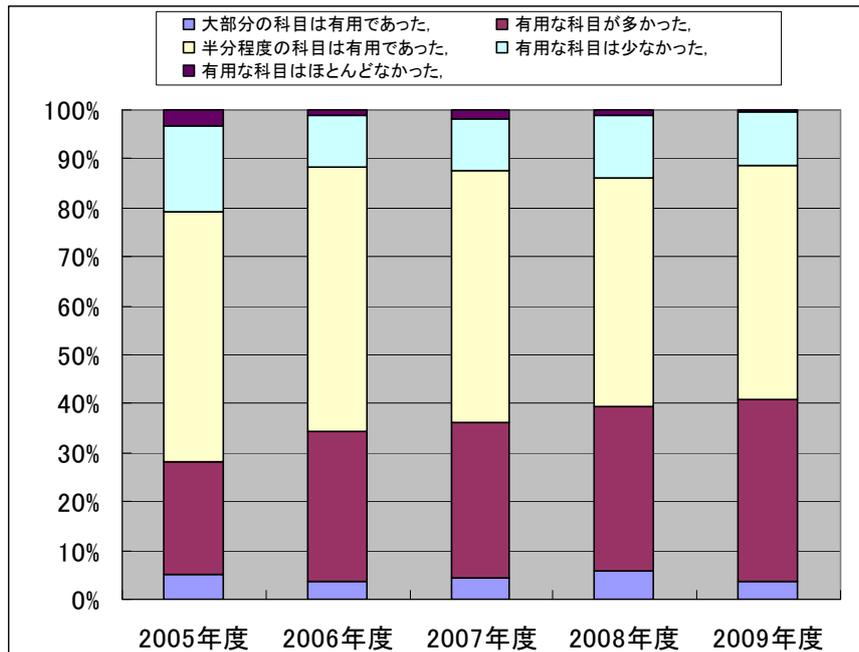
2005年度から2009年度の傾向を見る。「ほとんどの科目は理解できなかった」と「理解できなかった科目が多い」の割合が、2005年度の約20%から減少し、特に、2006年度、2007年度には約13%に減少している。しかし、2008年度、2009年度には、再び、20%近くに増加している。今後の動向を観察する必要がある。



[12]履修価値のあった科目の割合についてお尋ねします。

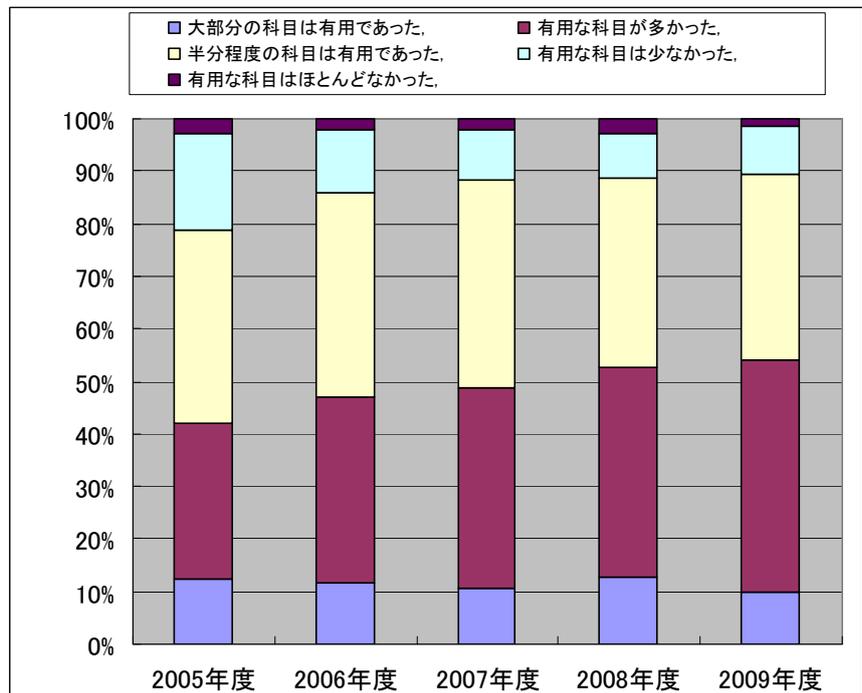
[12-1]受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

2005年度から2009年度の傾向を見る。「有用な科目はほとんどなかった」と「有用な科目は少なかった」の割合が約20%から減少して、特に、2006年度～2009年度には10%強になっている。その一方で、「有用な科目が多かった」と「大部分の科目は有用であった」の割合は30%弱から、2009年度には40%強に増加し、改善の傾向にある。



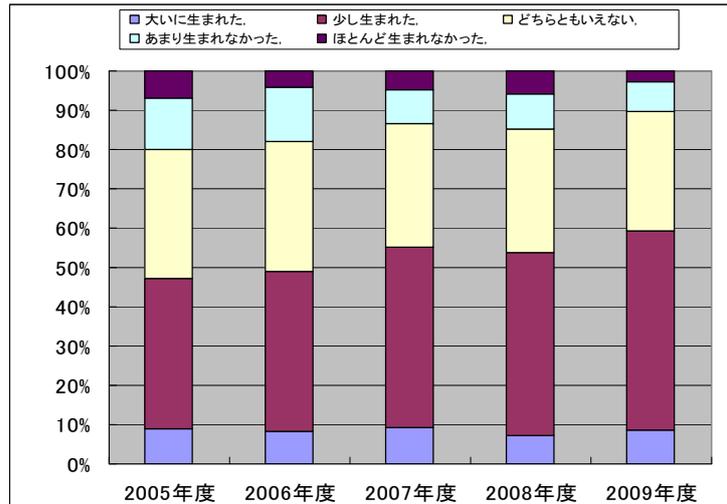
[12-2]受講した実験・実習科目の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

2005年度から2009年度の傾向を見る。「有用な科目はほとんどなかった」と「有用な科目は少なかった」の割合は20%強から減少して、特に、2007年度～2009年度には10%強に減少している。その一方で、「有用な科目が多かった」と「大部分の科目は有用であった」の割合は40%強から、2009年度には55%弱に増加し、改善の傾向にある。



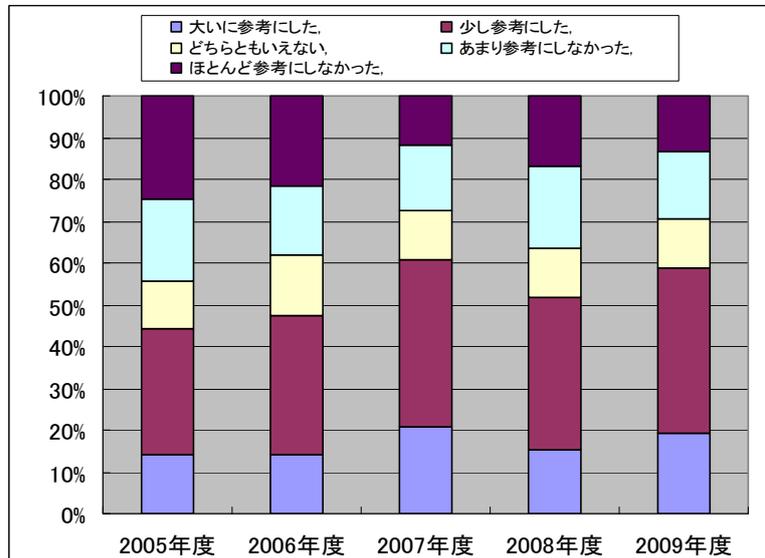
[13]大学における教育により、将来への自信や意欲が生まれましたか。

2005年度から2009年度の傾向を見る。否定の割合は20%から10%に減少し、肯定の割合も約45%から60%弱に増加しており、改善の傾向にある。



[14]講義科目を選択する際に、シラバスを参考にしましたか。

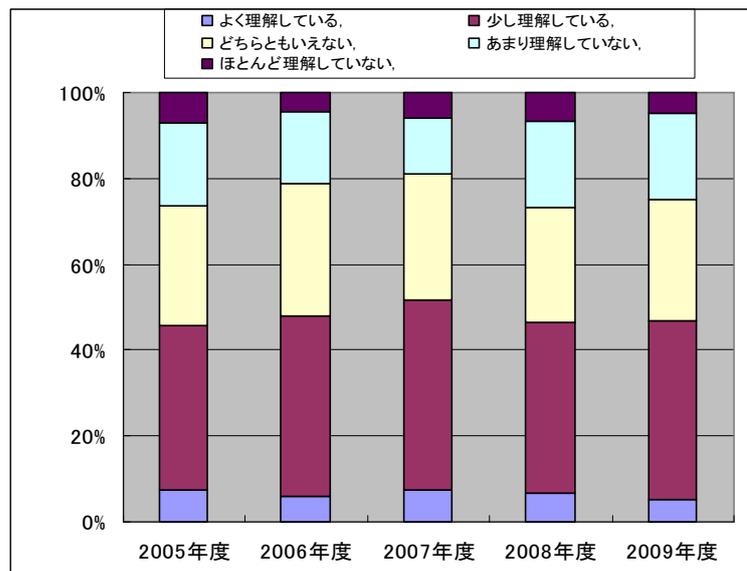
2005年度から2009年度の傾向を見る。「ほとんど参考にしなかった」と「あまり参考にしなかった」という否定の割合が約45%から30%弱に減少し、「少し参考にした」と「大いに参考にした」という肯定の割合が約45%から約60%へと増加しており、改善されている。



[15]カリキュラムについてお尋ねします。

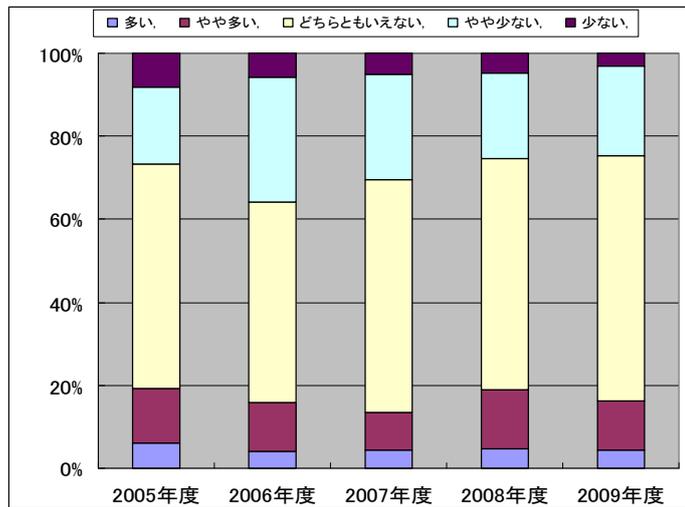
[15-1]カリキュラムの中で、科目間のつながりを理解していますか。

2005年度から2007年度には、3年連続して、「ほとんど理解していない」と「あまり理解していない」という否定的な回答が30%弱から20%弱と減少し、「少し理解している」と「よく理解している」という肯定的な回答が約45%から50%強に増加しており、改善の傾向にある。しかし、2008年度と2009年度には、やや元に戻っている。



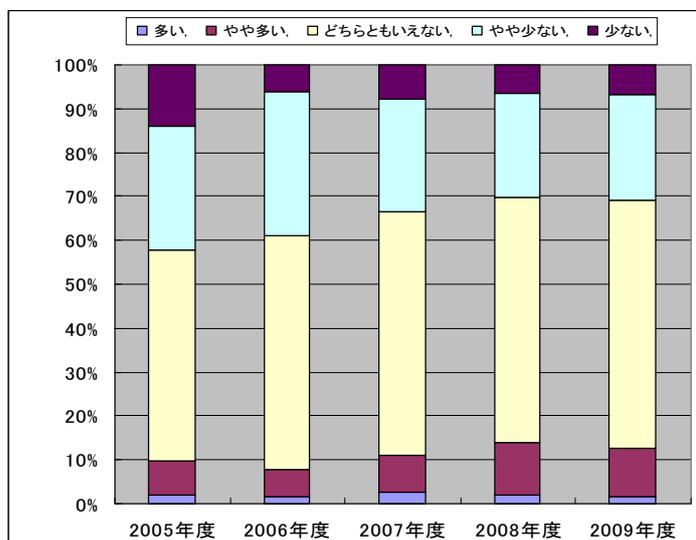
[15-2]カリキュラムの中で、実験・実習科目の比重は多いと感じますか、少ないと感じますか。

2005年度から2009年度の傾向を見る。「少ない」と「やや少ない」は30%程度、「やや多い」と「多い」も15%程度であり、その割合にあまり変化はない。



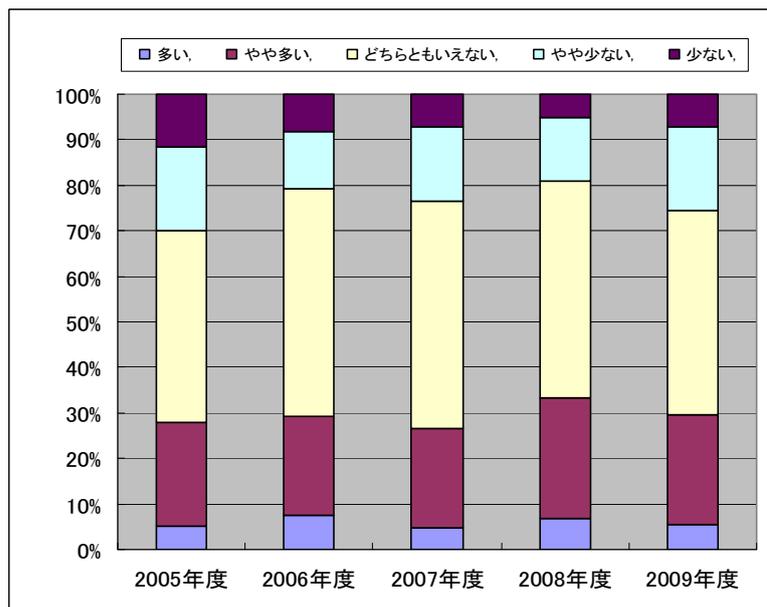
[15-3]カリキュラムの中で、演習時間の比重は多いと感じますか、少ないと感じますか。

2005年度から2009年度の傾向を見る。「少ない」と「やや少ない」は約45%から、2009年度には約30%に減少しており、演習時間の比重が少ないと感じる学生が減少している。



[16]受講した科目全般について、教育への熱意があった担当教員の割合はどの程度ですか。

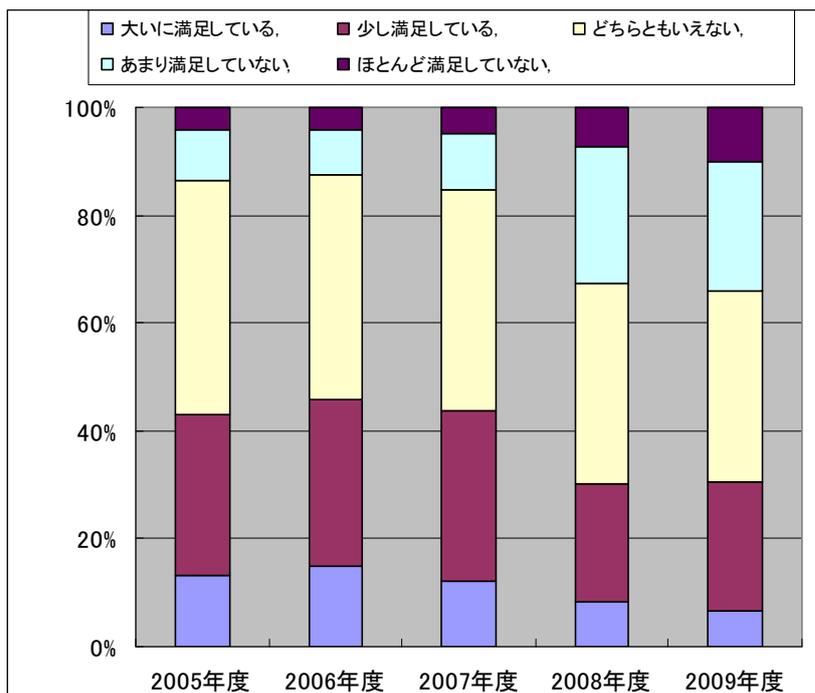
2005年度から2009年度の傾向を見る。2005年度から2008年度では、「多い」と「やや多い」が約25%から35%弱に増加し、「やや少ない」と「少ない」が30%から約20%弱に減少しており、教育の熱意に対する評価が上昇している。しかし、2009年度には、やや元に戻っている。



[17]成績評価についてお尋ねします。

[17-1]成績評価（秀、優・良・可・不合格・未履修）に満足していますか。

2005年度から2009年度の傾向を見る。2005年度から2007年度は、「大いに満足」と「少し満足」が約45%であったが、2008年度、2009年度には約30%に減少し、その一方で、「あまり満足していない」と「ほとんど満足していない」が約15%から30%強に増加している。今後の動向を観察する必要がある。



[17-2][17-1]でD（あまり満足していない）またはE（ほとんど満足していない）と答えた方：その理由は何ですか。

種々の理由が回答されたが、大きく分類すると、成績についての不満足度が強いことの原因として、「自分の努力の不足や結果が伴わない勉強」をあげるものと、「成績評価の手続きの公正さについての疑念」をあげる者がいた。特に、前者の理由が非常に多かった。

- ・ 不合格となった科目が多かった。
- ・ 優秀な科目をとれたのが自分の得意科目と1年次の科目が多いため
- ・ テスト勉強しなかったから
- ・ 留年したから。
- ・ 自分の力不足
- ・ 可が複数ある
- ・ 先生によってちがうから
- ・ 悪い
- ・ 良くなかった
- ・ もう少しでも良い成績を残したかった。
- ・ 試験勉強を妥協してしまった所があったから
- ・ 未履習及び不合格が多かったため。
- ・ もっと真剣に取り組めたのではないかと思う。
- ・ 試験に十分な準備をしてのぞめていなかったから
- ・ 勉強不足
- ・ 成績が悪いから。
- ・ あまり勉強しておらず、可を取得した科目が多かった
- ・ 通学時間があればもっとできたはず！！
- ・ まだ上に行けたはずだと思うから、自分が悪いだけです。
- ・ しっかり勉強すればよかった
- ・ よく理解しないままテストに挑んでいたこと。
- ・ 勉強不足
- ・ あまりよくないから。
- ・ もっと努力していればよかった
- ・ 留年したから。

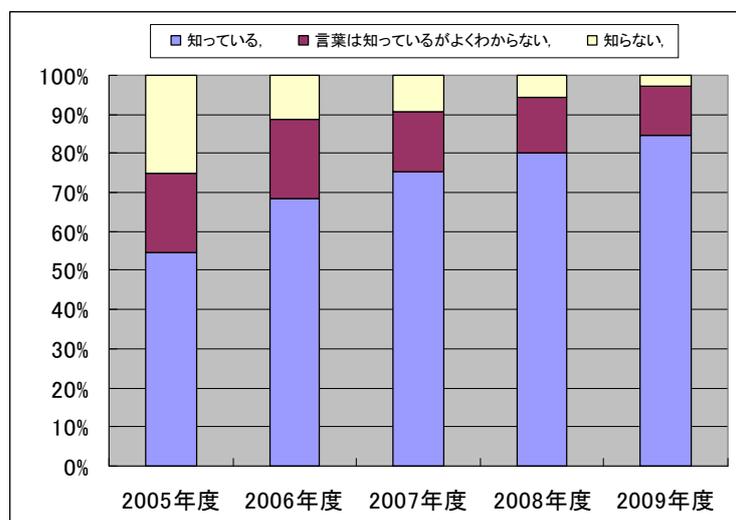
- ・ 日頃からちゃんと勉強すべきだった。
- ・ あまくみすぎていた。
- ・ 頑張りが足りなかった。
- ・ 勉強不足
- ・ 積極的に自分で勉強しなかったから
- ・ 勉強した分の点数が取れなかったから。
- ・ 優以上が少ないため
- ・ 点数が低い、もっと勉強できた。
- ・ もっと勉強できたと思うから
- ・ 環境への適応
- ・ 入学後にやりたいことができ、機械についての勉強に熱意が持てなかった。
- ・ 苦手な科目があり、よい成績が得られなかったから。
- ・ 良い成績ではなかった。
- ・ 本気でやらなかった
- ・ 悪いから
- ・ 勉強に力を入れるべきだった
- ・ 取得単位数が少ない
- ・ 成績にこだわると視野を狭めてしまいそうだから。
- ・ 積極的に取り組むべきだった。単位を取得できればいいやと思っていた
- ・ 思ったような成績がとれなかったため
- ・ 十分な準備をせずに試験を受けていた。
- ・ もっと勉強すればと後悔しているから。
- ・ 学習時間に比べて成績が伸びなかった
- ・ よくなかったので
- ・ 勉強をしなかった。
- ・ 遊ぶ事を重視したために勉強を怠った。
- ・ 悪いから
- ・ 勉強量と成績が比例してない
- ・ 勉強不足
- ・ 勉強不足。
- ・ 学習次第ではもう少し良い成績だったと思うから
- ・ 3. 0はいきたかった
- ・ 一年次にサボりすぎた。
- ・ 就職活動で不利になるから
- ・ 勉強不足
- ・ 向上心が足りなかった
- ・ もう少し出来たはず
- ・ 先生によって、評価の仕方が全く違うから
- ・ 3年以降成績が下がってしまったことによる。
- ・ 努力不足だったから
- ・ 勉強不足のため
- ・ 自分の努力不足
- ・ 同じ科目でも先生によって当たりはずれがあり、テスト内容も違うので
- ・ 悪いから
- ・ あまりよい成績でない
- ・ もっと勉強すべきだった。
- ・ バイトのしすぎ
- ・ 少しなまけていた時期があったので
- ・ 勉強不足
- ・ もう少しがんばれた
- ・ GPAが悪い
- ・ 評価があまり良くない
- ・ もっといい成績を取れたはずである
- ・ 評価方法があまり分からない。同じ科目でも先生によって評価が全くことなる

- ・ 勉強できていなかったから
- ・ 悪いから
- ・ 未履修が多くなった。
- ・ 悪かったため
- ・ 自分の勉強不足を感じる為。
- ・ 自分の勉強不足で、理解できてないものが多かった
- ・ もう少しまじめにやればよかった。
- ・ 努力が足りなかった。
- ・ 内容を理解していない事がわかるから。
- ・ 努力が足りなかった。
- ・ 本気度が足りなかった
- ・ 可を取ることに満足してしまったため
- ・ 自分が怠けてしまったから
- ・ もう少しがんばれたと思う。
- ・ べんきょうしてないから
- ・ 可の割合が多い。
- ・ 1、2年の時にもっと勉強しておけばよかった
- ・ 全体的に低かったから
- ・ もう少し点数は伸びたと思うから
- ・ テストで点がとれてない
- ・ 低いから
- ・ 意識を高く持って学習しようという気持ちが足りなかったため。
- ・ あまりよくなかったから。
- ・ 今になって、昔勉強しておけば良かったと思っているから。
- ・ GPAが低かったから。
- ・ もっと勉強すればよかった
- ・ 良い成績とは言えないから。
- ・ 可が多かった
- ・ もうちょい良い成績を修めたかった
- ・ 点数が低かった。
- ・ 学位取得を優先し、深く勉強しなかったため
- ・ あまり取れていなかったから
- ・ 学習量の割に成績が伸びなかった。
- ・ 勉強不足でした。
- ・ GPAが低いから。

[18] オフィスアワー（質問・相談時間）についてお尋ねします。

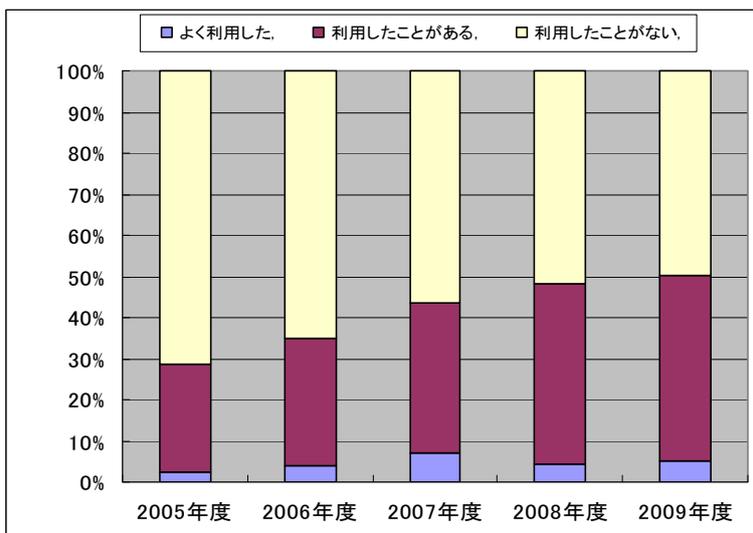
[18-1] オフィスアワーという制度を知っていますか。

2005 年度から 2009 年度の傾向を見る。2005 年度から 2009 年度にかけて「知っている」は約 55%から約 85%に増加し、「知らない」は約 25%から 5%弱に減少している。大きく改善されている。



[18-2] オフィスアワーを利用して、教員に質問した経験がありますか。

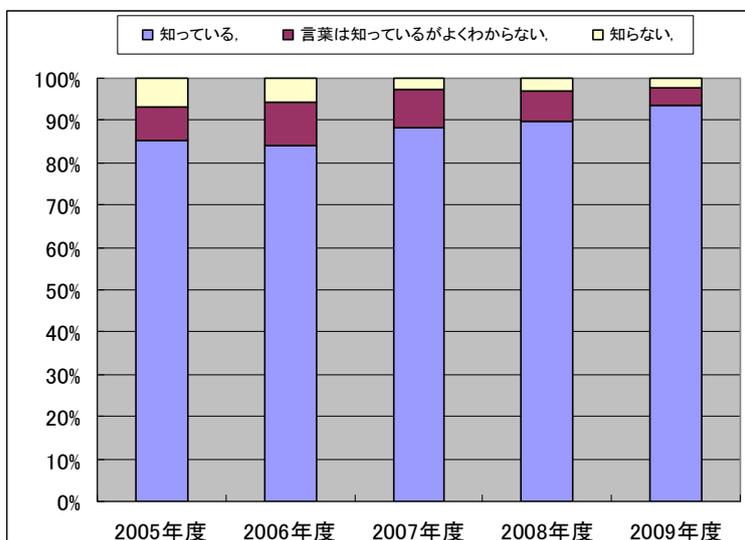
2005年度から2009年度の傾向を見る。「よく利用した」と「利用したことがある」は、30%弱から50%へと大きく増加している。



[19] ティーチングアシスタント (TA) についてお尋ねします。

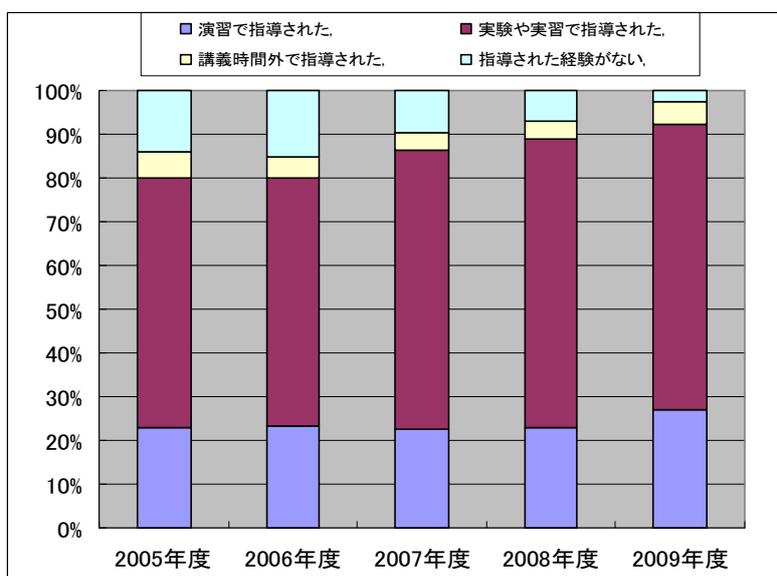
[19-1] ティーチングアシスタント (TA) という制度を知っていますか。

TA制度を「知っている」の割合は、2005年度から徐々に増え、2009年度には約95%になっている。制度が定着している。



[19-2] ティーチングアシスタント (TA) に指導してもらった経験がありますか。(複数回答可)

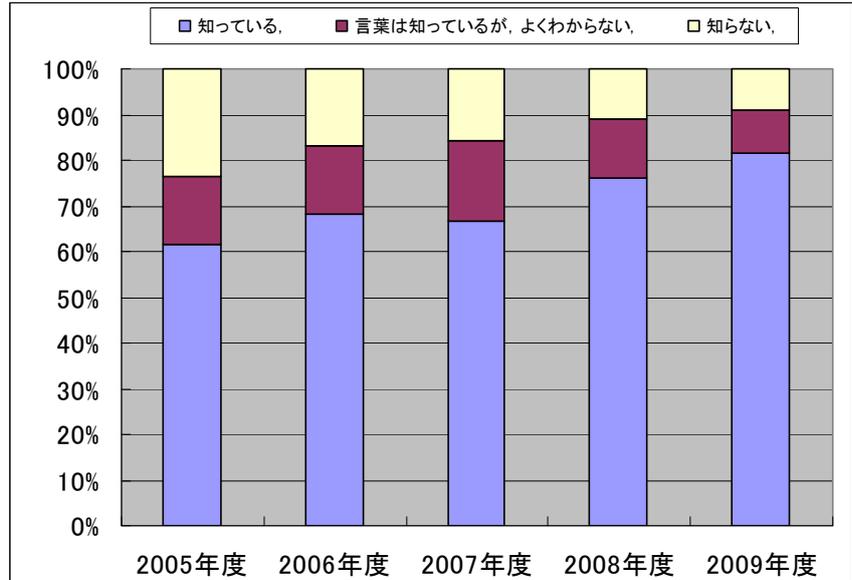
2009年度には、95%強が「演習」「実験・実習」「講義時間外」のいずれかの指導を受けた経験があり、制度が定着している。



[20] 指導教員制度についてお尋ねします。

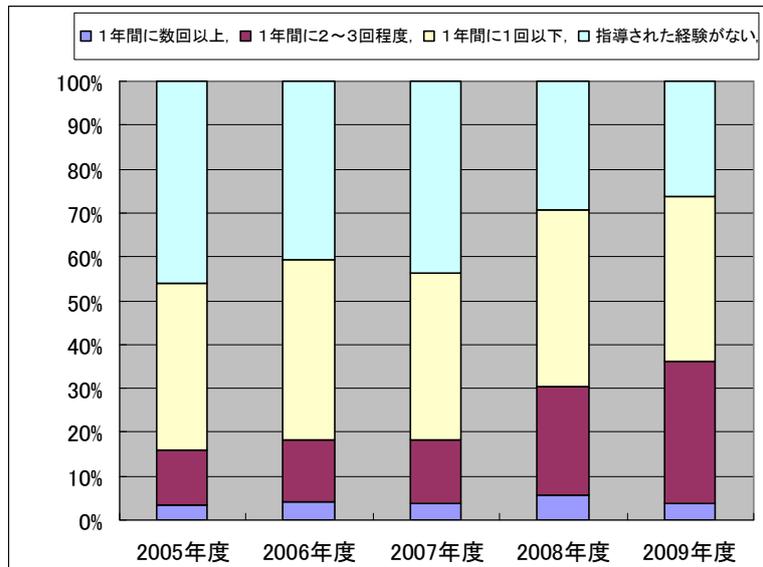
[20-1] 指導教員制度を知っていますか。

指導教員制度の周知は、2005年度から2009年度にかけて改善しており、2009年度には、80%強の学生が「知っている」と答えている。しかし、「知らない」または「言葉は知っているが、よくわからない」の割合がまだ20%あることは、制度の周知方法も含めて今後の検討課題である。



[20-2] 1年生から3年生の間に、指導教員から指導やガイダンスを受けた経験がありますか。(受けた経験のある方は、1年間の平均的な回数を答えて下さい。)

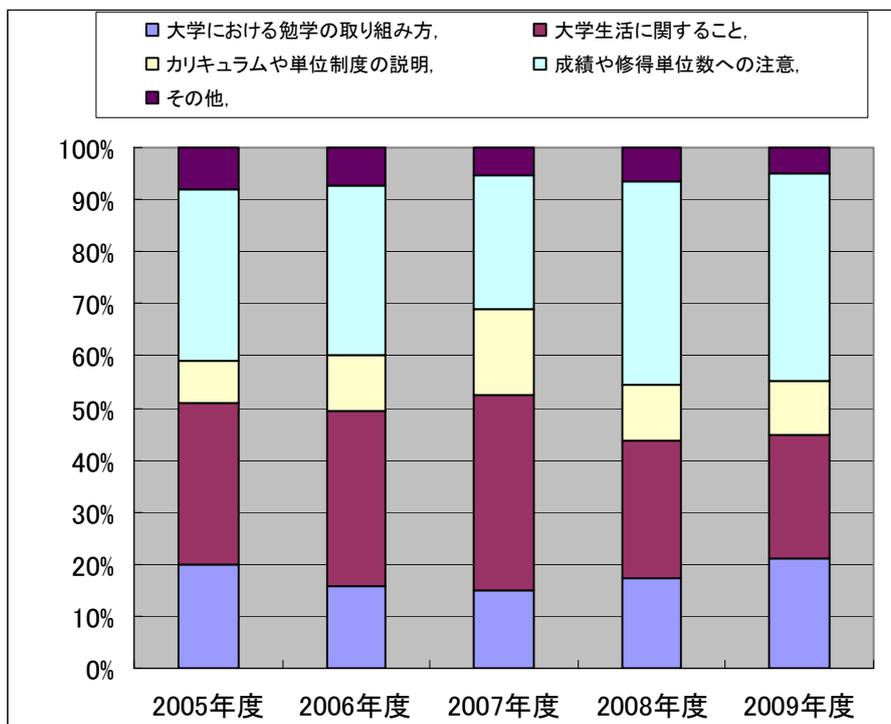
指導された経験が無い割合は着実に減少しているが、まだ25%強程度ある点については、その理由を明らかにすることが望まれる。



[20-3][20-2]でA（1年間に数回以上）、B（1年間に2～3回程度）、C（1年間に1回以下）のいずれかを答えた方：1年生から3年生の間に、指導教員から指導を受けた内容を答えて下さい。（複数回答可）

複数回答であり、勉学の取り組み、生活全般、カリキュラム、単位、成績のいずれも話題になっている。

進学、進路、成績、大学生活、就職、などについての相談が実施されている点は指導教員制度の趣旨に合致している。



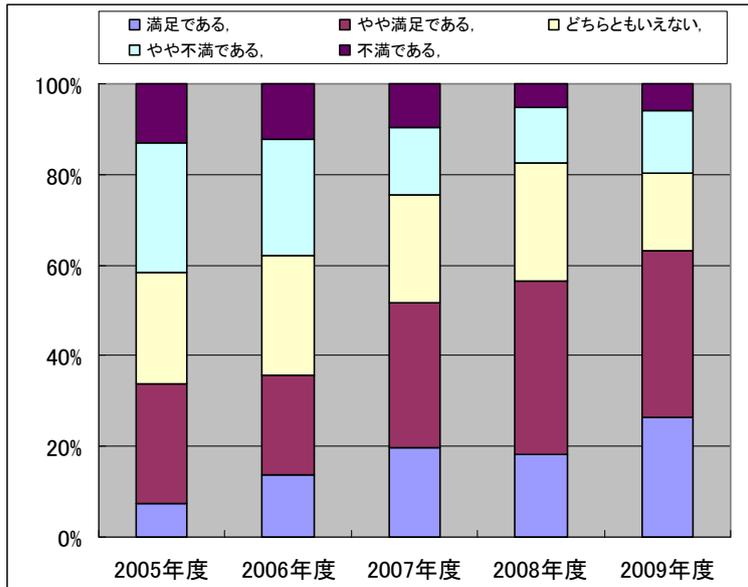
E（その他）[具体的に： ]

- ・ 進路相談
- ・ 友達ができなくて、留年しそうだったこと。
- ・ 他大学への進学を考えているということ
- ・ 忘れた。
- ・ 留学について。
- ・ 院
- ・ いっしょにお茶をのんだ
- ・ 私生活における生活態度など
- ・ 転科の相談
- ・ 進路について。
- ・ 成績は問題ない。
- ・ 成績の提出に行った。
- ・ 進路について
- ・ 就職活動の面接指導
- ・ 進路
- ・ 大学院に関して
- ・ 研究室について
- ・ 進路について
- ・ 学習自己評価のやつ。
- ・ 成績提出
- ・ 卒業後の進路

[21]施設や設備等についてお尋ねします。

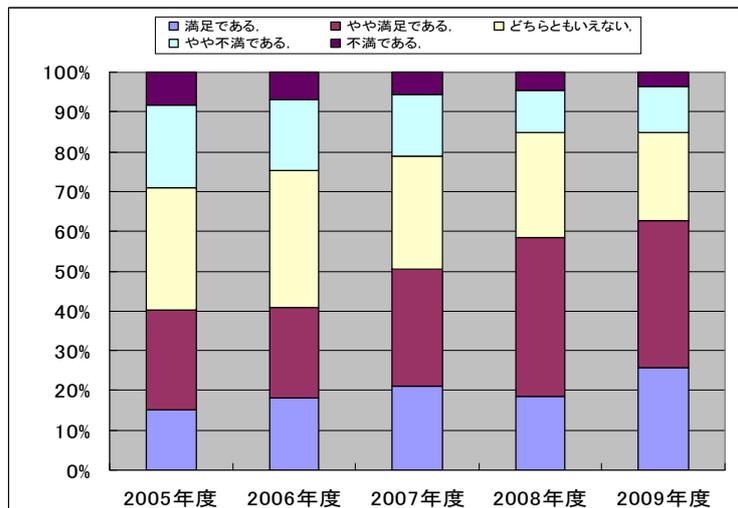
[21-1]教室の広さ、席数、明るさ等について、満足していますか。

2006年度以前は「不満である」と「やや不満である」とする意見が40%程度あったが、2009年度以降には20%に減少している。その一方で、「満足である」と「やや満足である」が約35%から65%弱に急増している。学生の満足度が大きく改善されている。



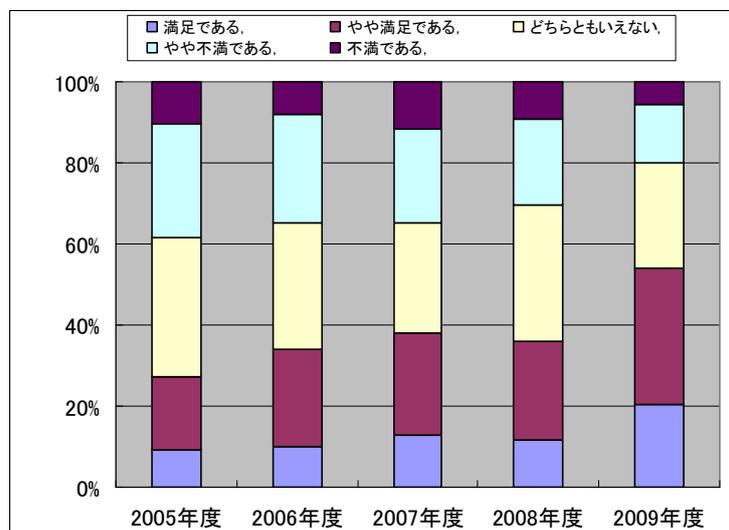
[21-2]必要な設備(マイク、OHP、プロジェクタ等)に満足していますか。

2006年度以前は「満足である」「やや満足である」とする意見が40%強であったが、2009年度には60%強に増加している。学生の満足度が改善している。



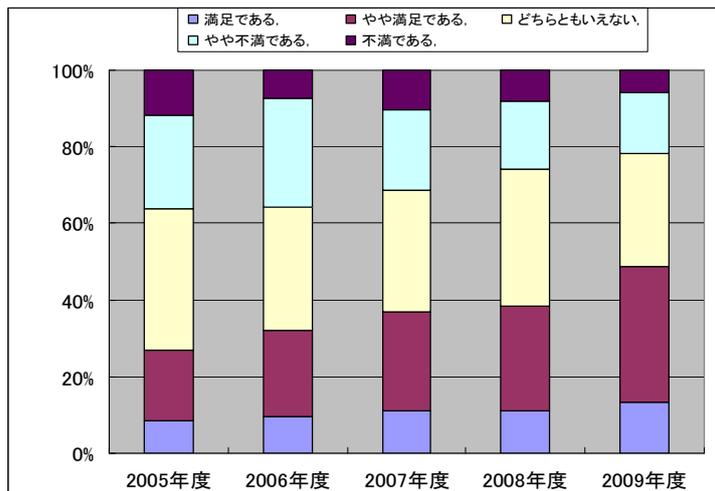
[21-3]1年生から3年生の間に利用した実験室・実習室の広さ、明るさ等について、満足していますか。

2005年度に「満足である」「やや満足である」とする意見が25%強であったが、2009年度には約55%に増加している。学生の満足度に明らかな改善がみられる。



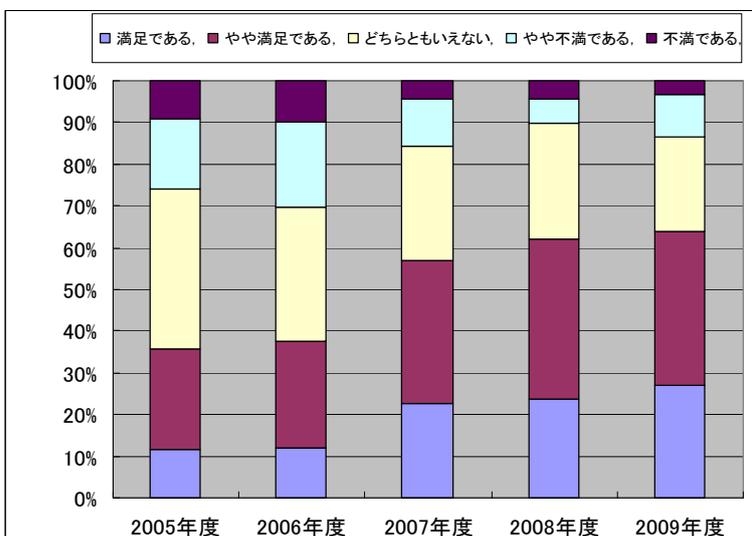
[21-4] 1年生から3年生の間に利用した実験・実習に必要な設備・装置について、満足していますか。

2005年度に「満足である」「やや満足である」とする意見が25%強であったが、2009年度には約50%に増加している。学生の満足度に明らかな改善がみられる。



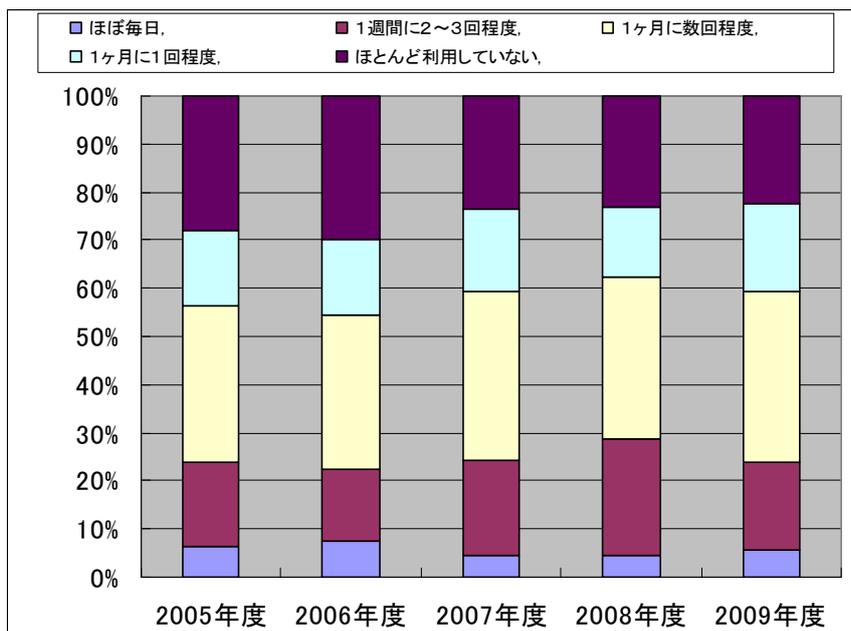
[22-1] 情報機器（コンピュータ端末等）の整備状況について満足していますか。

昨年度に引き続き明確に改善傾向がみられる。しかし不満足とする意見もまだ1割あり、今後も継続して改善の努力が必要である。



[22-2] 1年生から3年生の間に、講義以外でネットワークや情報サービス（ソフトウェア、教材を含む）を、どの程度利用しましたか。

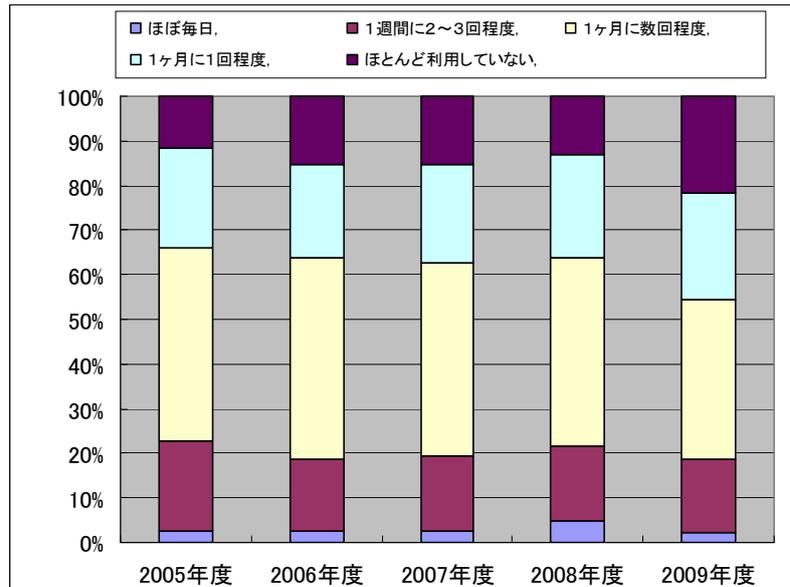
利用頻度はほぼ横ばい状態である。情報端末としての携帯電話の普及等が理由として考えられるので、原因の調査を行う必要がある。ITに関しては現行レベルを考えると機器の充実よりも情報ネットワークの重要性を理解させるためのカリキュラムを充実させることが重要である。



[23]図書館についてお尋ねします。

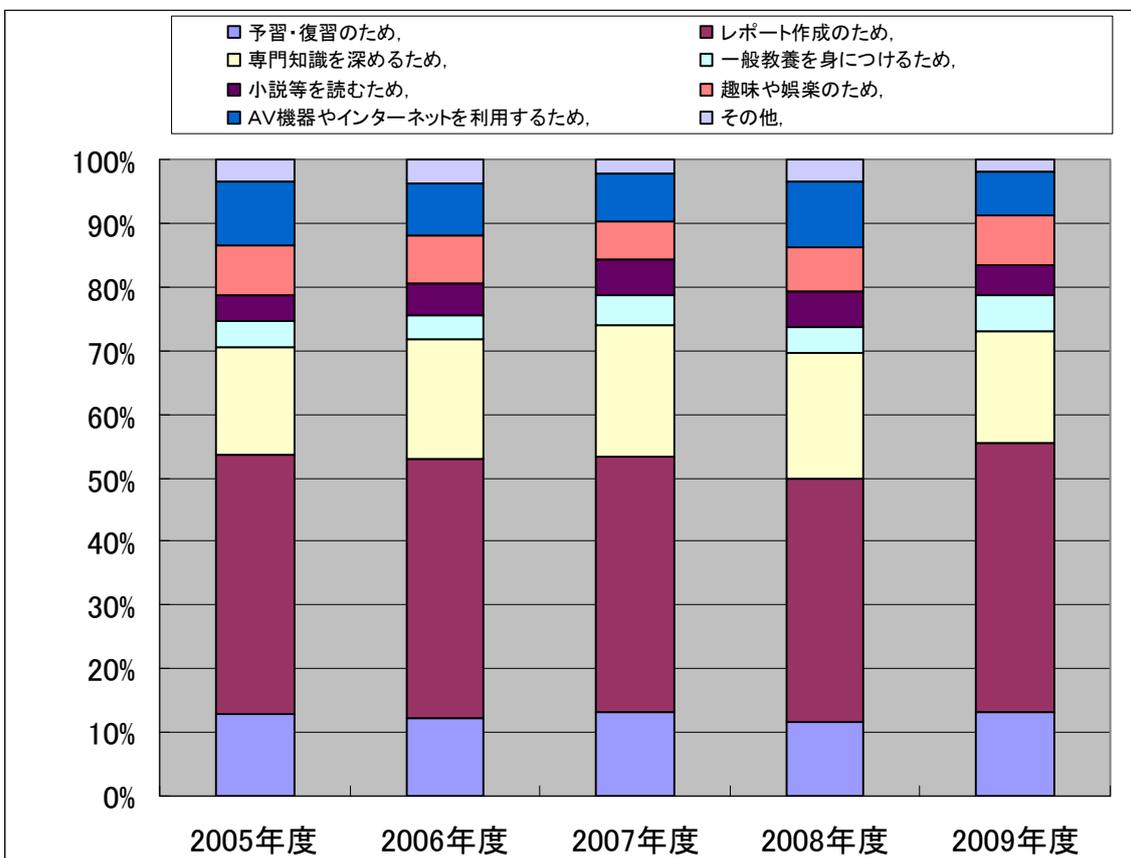
[23-1]図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

1ヶ月に1回以下しか利用しない学生が増加傾向にある。図書館の利用を講義などで促す努力が必要であろう。インターネットのウィキペディアなどでは得られない情報が図書館には詰まっていることを教えるべきである。



[23-2]図書館を利用する主な理由を教えてください。(複数回答可)

昨年度と似た傾向である。インターネットを利用するための図書館利用が2008年度は増えたが、2009年度は元に戻っている。小説等を読むための利用が最も比率が高く、余暇として図書館を利用していることがうかがわれる。図書館本来の目的と合致するかどうかは議論の対象となるところもあるかもしれないが、現在ではIT情報を駆使できる能力は学生のような若者にとって非常に価値があると思われる、この点は大学側も真剣に努力すべきと思われる。



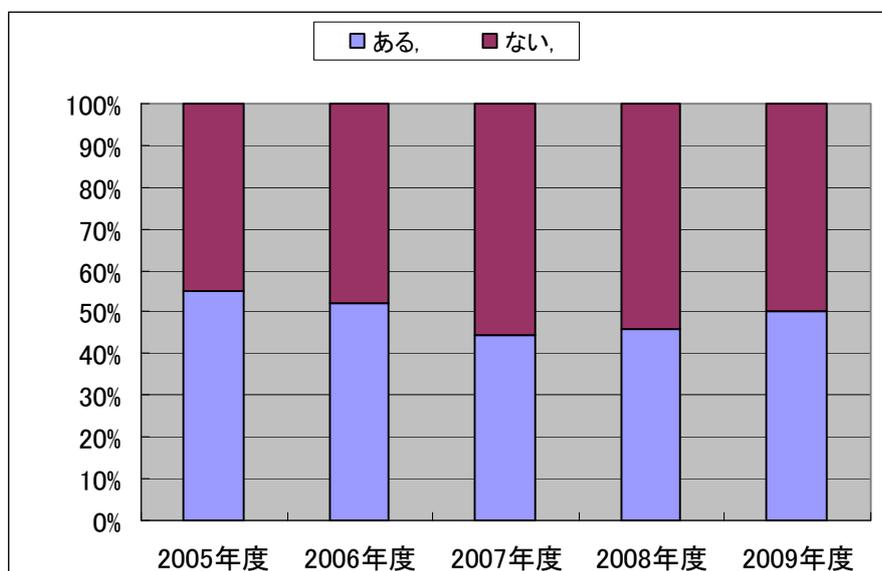
H (その他) [具体的に: ]

- ・ テスト勉強
- ・ 論文検索
- ・ テスト勉強のため
- ・ 試験勉強
- ・ テスト勉強
- ・ 新聞
- ・ テスト勉強
- ・ 卒論・研究のため。
- ・ 友人とテスト勉強するため
- ・ テスト勉強
- ・ テスト勉強
- ・ 新聞
- ・ 時間つぶしできとうな本をよむ
- ・ 成績閲覧のため

[24]工場見学やインターンシップ（工場実習）についてお尋ねします。

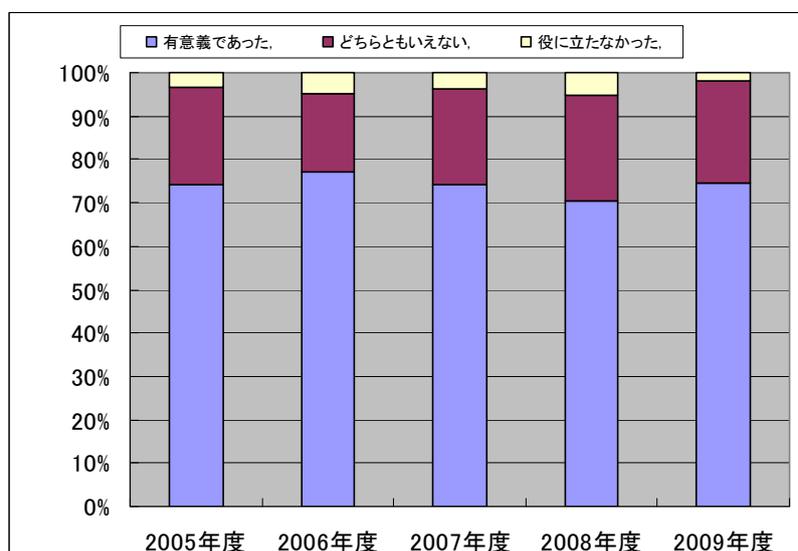
[24-1]工場見学やインターンシップに参加した経験がありますか。

2007年度までは減少傾向にあったが、その後増加に転じている。就職難とリンクしている可能性がある。就職前に現場の内容や雰囲気を知ることが重要であり、半数以上の卒業生が経験していないという事実は無視できないものと思われる。大学側もさらなる改善へ向けた努力が必要であろう。



[24-2][24-1]でA（ある）と答えた方。工場見学やインターンシップに参加した経験が、自分自身の成長のために有意義であり、履修した価値がありましたか。

ここ5年間では大きな変化はなく、70%のインターンシップ経験者が有意義と答えている。インターンシップ参加者が増大するよう今後も努力が必要である。



## 2. 2 2009年度修了生アンケート（工学府・工学研究科）

※アンケート実施年月日 平成22年 1月26日

※アンケート回収率

課程	配付枚数	回収枚数（回答率）
博士前期課程	339枚	252枚（74.3%）
博士後期課程	11枚	5枚（45.5%）

[1]あなたの課程、専攻についてお答え下さい。

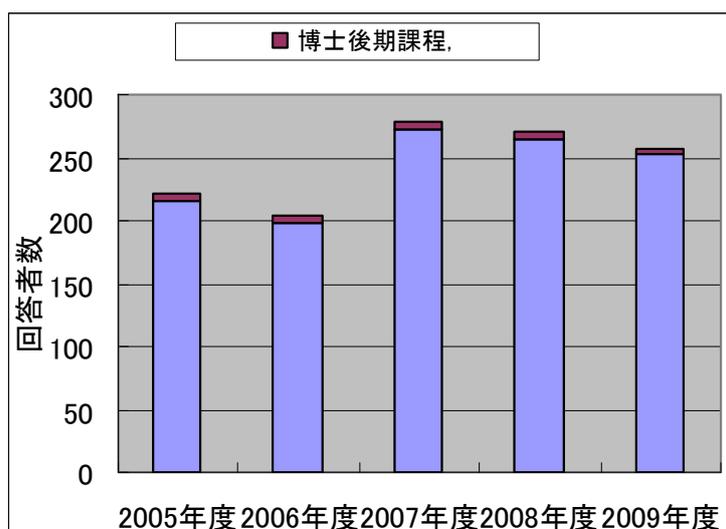
[1-1]あなたが修了される課程

は何ですか。

A（博士前期課程）252名

B（博士後期課程）5名

博士前期課程の回答者数は前年度とほぼ同じでかなり高い回答率である。博士後期課程は回答率が下がっているが母数が小さいからこの変動で一喜一憂することはない。アンケートの趣旨を理解してもらう努力は続ける必要がある。



[1-2]あなたが修了される専攻

は何ですか。

機械知能工学：77名

建設社会工学：20名

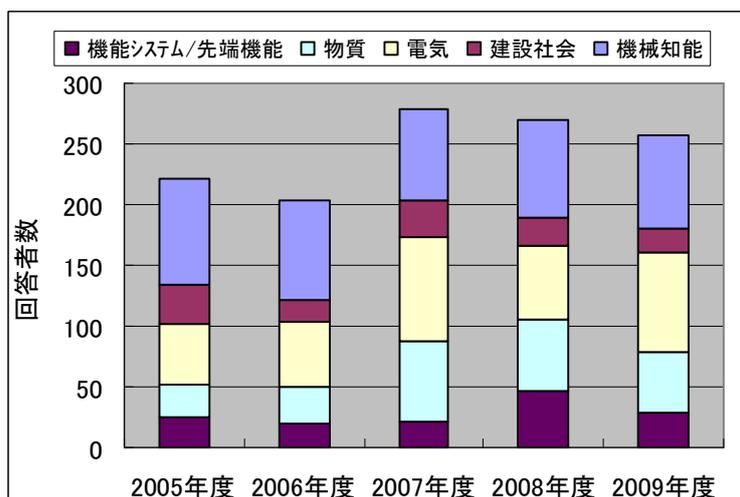
電気工学：81名

物質工学：50名

機能システム創成工学

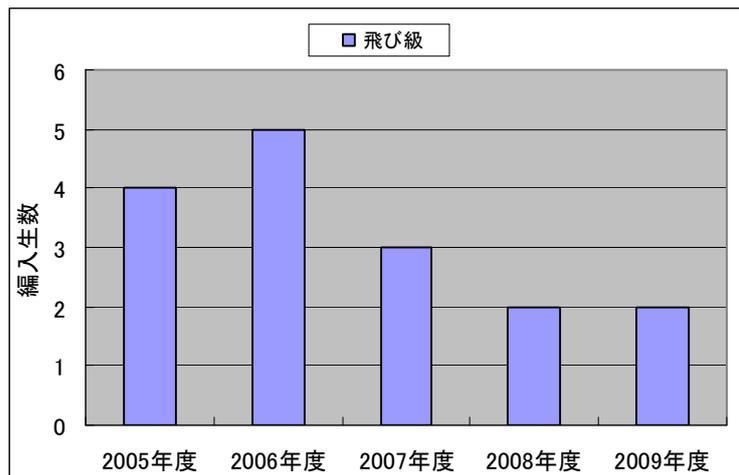
／先端機能システム工学

：29名



[1-3]飛び級入学の方は [ ] に  
○を入れてください。 [2名]

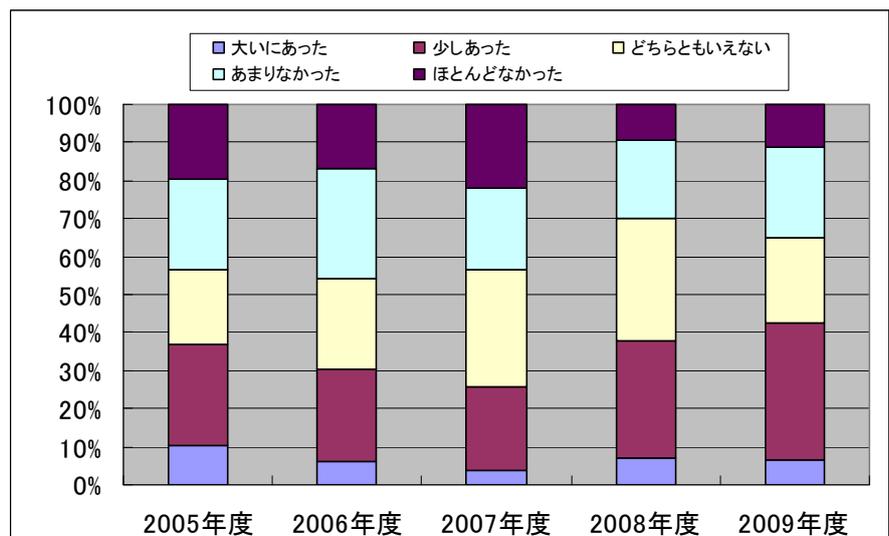
飛び級の入学者の数は2名で前年度と同じである。飛び級は多ければよいというものではないため、現時点では、調査を継続的に実施し、将来、飛び級にまつわる問題を検討しなければならない時の資料とすべきである。



[2]工学府・工学研究科における大学院教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねします。

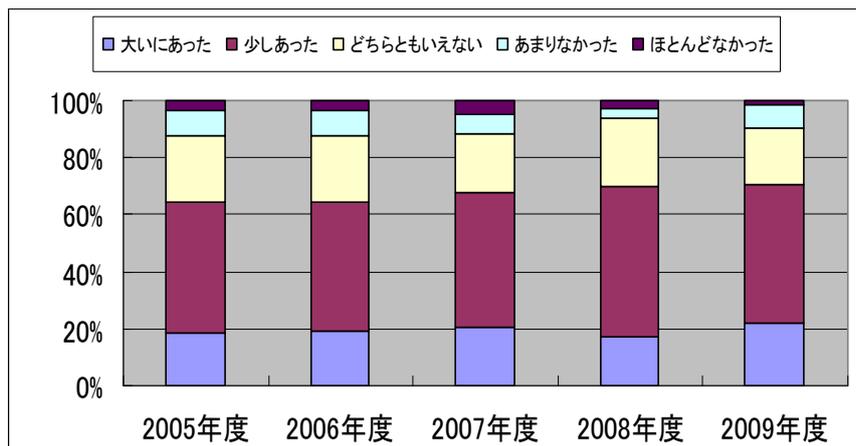
[2-1]外国語科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。  
(受講生のみ)

「大いにある」は2008年度と同程度、「少しはある」は微増で、ここまでで40%を達成している。「どちらともいえない」が半分程度に減少し、「あまりなかった」、「ほとんどなかった」が2008年度に比べて増えており、この傾向が今後続くのか注意が必要である。外国語科目は他の「共通科目」、「専門科目」比べて効果があったと回答した比率が少なく、修了生が社会人となった時に外国語でのコミュニケーション能力が今後重要になって行くことを考慮すれば、効果を上げる努力が必要である。



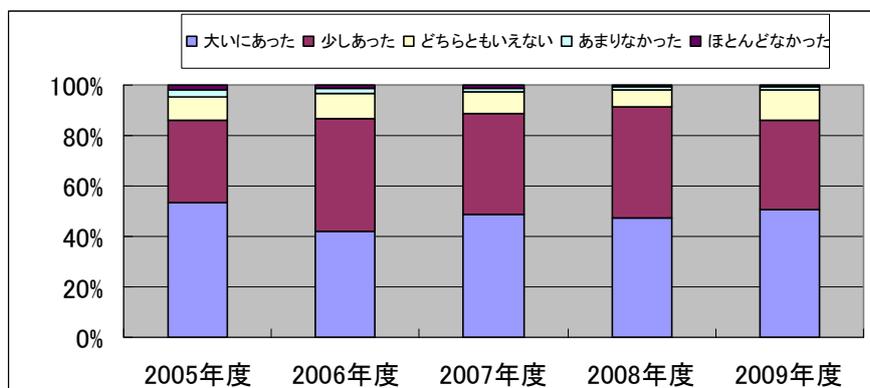
[2-2] 共通科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

昨年度と同様の傾向を示し、共通科目の教育効果については、「少しはある」以上が70%の水準にあり、一定の効果を果たしていると思われる。また、「あまりない」「ほとんど無い」はあわせても5%で良好な状況にある。



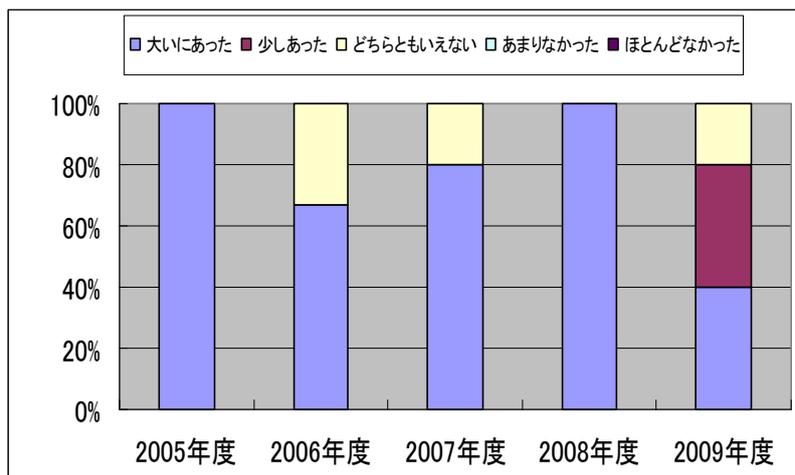
[2-3] 専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

安定した推移を示し、ここ5年間は大きな変化はない。「少しはある」以上が90%以上ということから専門科目の自己形成に対する高い影響力がうかがえ、良好な状況にある。



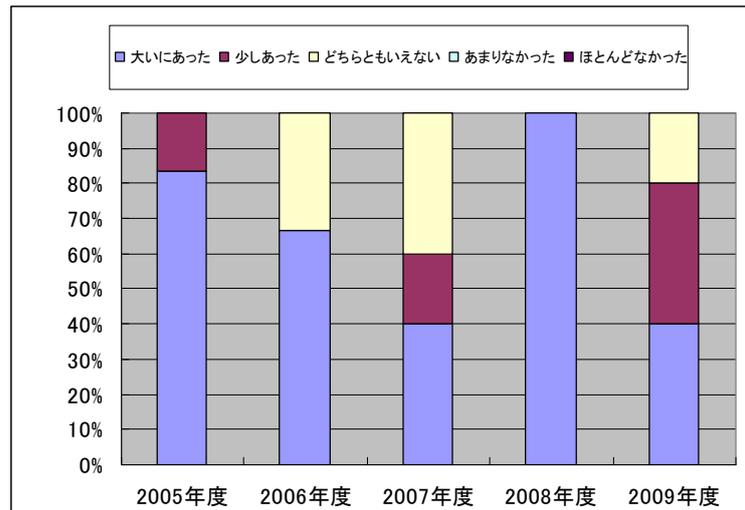
[2-4] 学外研修・特別演習はあなたの自己形成に効果がありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者は5名で2名が「大いにあった」、2名が「少しあった」、1名が「どちらともいえない」と回答している。回答数が5名であることや、本人の自己努力によるところもあり一概にアンケート結果から議論すべきではない。博士後期課程の学生数が少ないことを考慮すれば、事前の準備をきちんとし、100%「大いにあった」になるべきであろう。



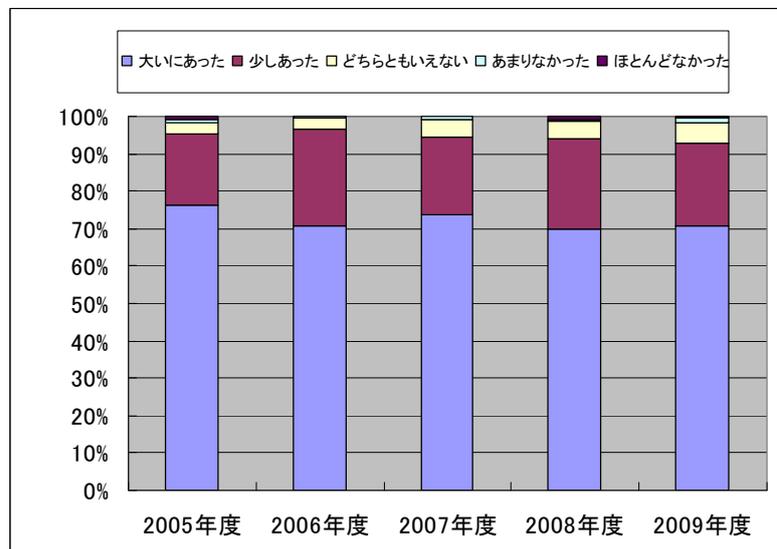
[2-5] プロジェクト研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者は5名と少ないので統計データとしての有効性の判断には慎重を要するが、ここ5年間では、似たような傾向を示している。



[2-6] 学位(修士・博士)論文のための取組みはあなたの自己形成に効果がありましたか。

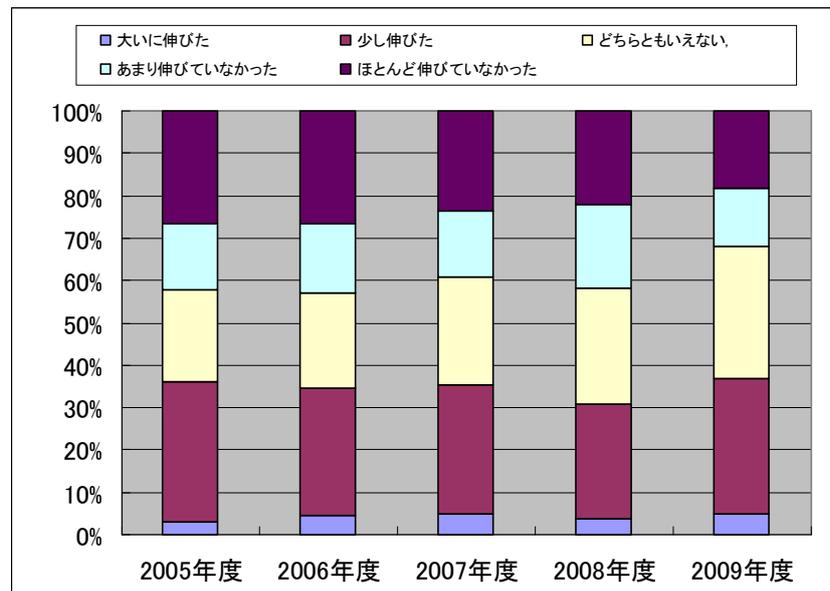
昨年度とほぼ同様であり、学位(修士・博士)論文取り組みの自己形成効果については、「大いにあった」と「少しあった」の合計が9割以上の水準を保持しており、一定の教育効果が肯定的に受け止められていると判断できる。



[3] 英語力についてお尋ねします。

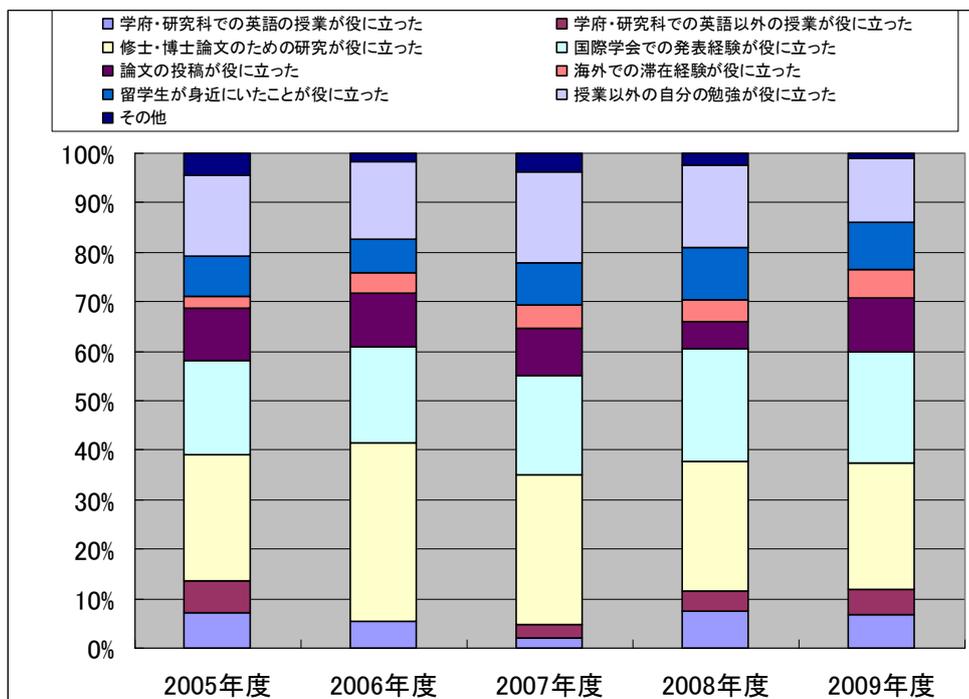
[3-1] 研究科の在学期間であなたの英語力は伸びましたか。

英語力が「ほとんど伸びていない」とする者と「あまり伸びていない」とする者の合計は30%強で2008年度より減少しているが、依然高い水準にある。外国語によるコミュニケーション能力が企業において重視される傾向は続くので、今後もこの割合が減少する努力が必要である。



[3-2][3-1]でA（おおいに伸びた）またはB（少し伸びた）と回答された方：その理由は何ですか。（複数回答可）

ここ6年間で全体の比率に大きな変化はない。強いて言えば、「授業以外の自分の勉強が役に立った」が減少傾向にあり、これを、工学府の語学カリキュラムの充実の結果ととらえるか、学生の語学に対する学習意欲の低下ととらえるかについては、調査を行う必要がある。外国語によるコミュニケーション能力の必要性が高くなることを考慮すれば、「英語の授業」「修士・博士論文のための研究」「国際学会への発表」「論文投稿」「留学生との交流」など、英語にふれあう機会を増やすことが必要と思われる。



I（その他）[具体的に： ]

- ・ NOVA
- ・ 英会話学校に通って英語の勉強をした。

[3-3][3-1]でD（あまり伸びていない）またはE（ほとんど伸びていない）と答えた方：その理由は何ですか。

社会に出てからの英語の必要性の認識不足、さらに英語に接する機会が少ないことなどから、英語学習に対する努力の不足を自分自身で感じている。何れにしても「英語力」を必要とする機会増大の方策が望まれる。

- ・ なまけていた
- ・ 継続して勉強していないため。
- ・ 接する機会が少なかった。
- ・ 英語を日常的に利用する機会が無い
- ・ 使わないから。
- ・ あまり学習しなかったから
- ・ 英語を用いる機会が少なかった
- ・ 英語力を伸ばすために特別なことをしなかったから
- ・ 授業でやる程度では勉強にならなかった
- ・ 英語が身近な言語ではなかったため
- ・ 英語に触れる機会が少なかった。
- ・ 勉強していなかったから。
- ・ 習慣で勉強しないと、すぐに忘れてしまう
- ・ 積極的に取りくまなかったため

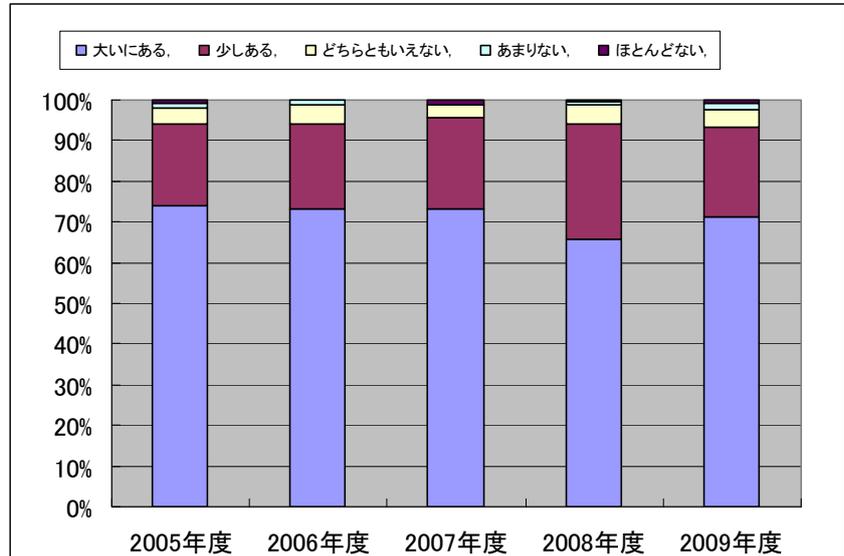
- ・大学の授業だけでは数が少ない
- ・会話やヒアリングなど総合的な英語力を授業で必要としなかったから
- ・高める意識が低かった。
- ・必要な機会をつくらなかった。
- ・英語が苦手。
- ・英語を使用する機会がないため
- ・勉強していないから
- ・使う機会がなかったから
- ・英語を使う機会がない。
- ・英語に触れる機会がなかった。
- ・英語と接する機会が少なかったから
- ・勉強しなかったから
- ・輪講で英語のテキストを読んだが、専門的で実用的ではなかったため
- ・英語をしゃべる環境がなかったから
- ・英語の学習にあてる時間が少なかったため。
- ・論文のサーベイ・国際学会の発表以外で英語に触れていないため。
- ・英語を使う機会がない
- ・勉強していないから。
- ・授業の数が少なかった。
- ・あまり英語に触れる機会がなかった。
- ・勉強する機会が大いに減少したため。
- ・わからない
- ・してないから
- ・勉強していない
- ・英語ポスターの発表をしたが、身にはつかなかった。
- ・学部1年の授業しかなく、他は選必なのでとる必要がないため。強制的に聞く、話す機会を増やすと良いと思う。
- ・自分の努力不足
- ・勉強していないから。
- ・むしろ縮んだと思うから
- ・英語で会話する訓練が足りなかったから。
- ・英語を話す機会がほとんど無いため
- ・特に英語力を計る機会はないため。
- ・読めても書けないから
- ・論文は読めても英会話ができないため
- ・効果的な勉強方法ではなかったから。
- ・あまり英語に触れる機会がなかったから。
- ・英語にふれる機会が少なかった。ラジオ英会話を受講していたがそれだけでは不足していた。
- ・自主的な勉強をしなかったから。
- ・ほとんど使わないから
- ・勉強してないから
- ・英語に接する機会がほとんどなかった
- ・英語科目がためにならなかった。
- ・研究中心の生活だったため
- ・勉強量不足
- ・ブランクがある。
- ・英語をあまり使わなかったため
- ・勉強不足
- ・英語を使う場面がほとんどなかったから。
- ・使用頻度の少なさ、取り組み方が不十分であった。
- ・授業以外に英語を勉強することがなかったため
- ・勉強しなかったこと

- ・ 実際に使う機会が無かった。
- ・ 研究に時間をとられ、勉強できなかった
- ・ 努力が足りませんでした。

[4]学位（修士・博士）論文のための取組みについてお尋ねします。

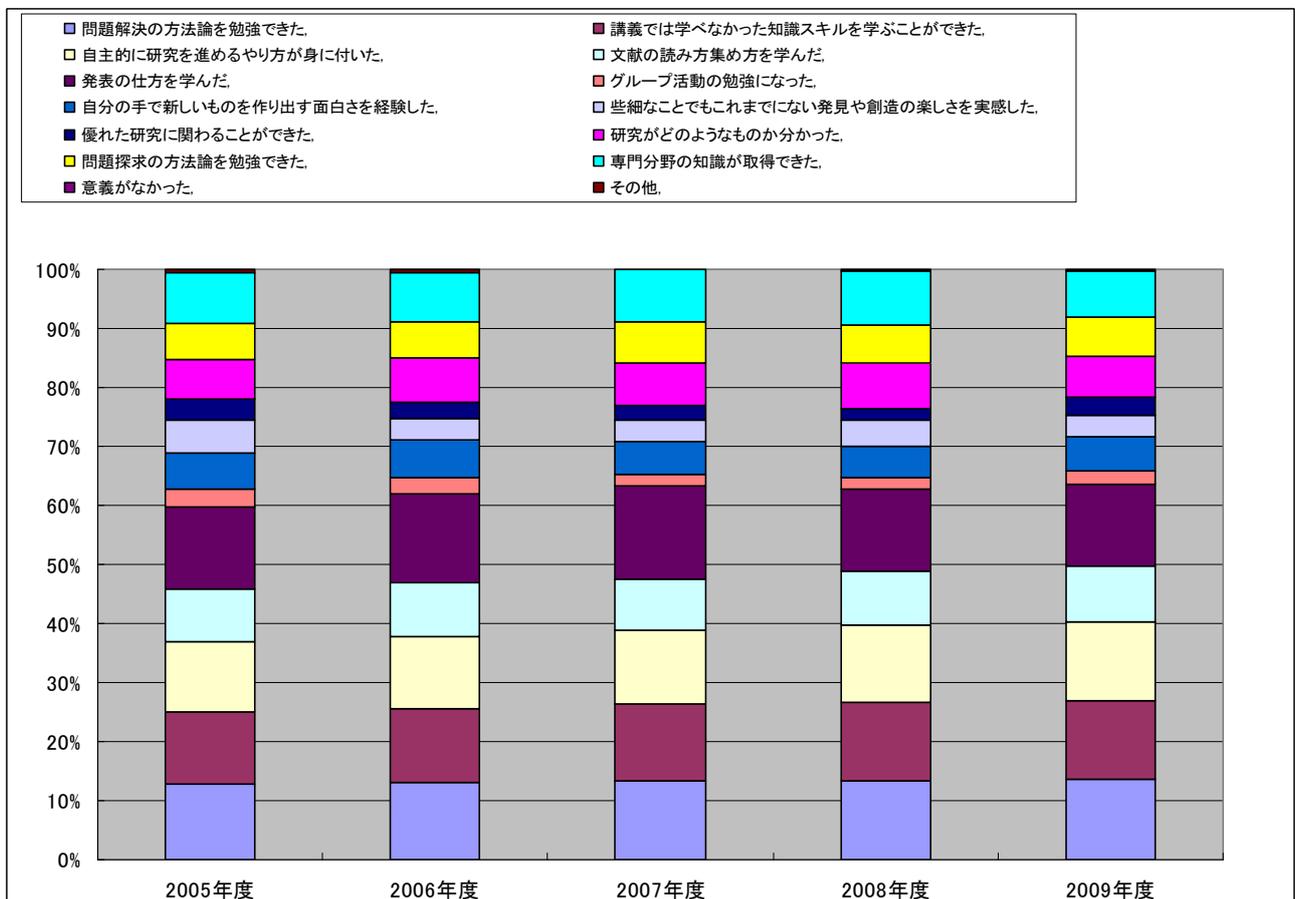
[4-1]学位論文の意義はあると思いますか。

ここ6年間、傾向はあまり変化しておらず、学位論文のための取組は大学院教育において重要と判断される。



[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

ここ6年間比率に大きな変化はなく、課題解決の方法論、講義では学べない知識・スキルの取得、文献の読み方・集め方、発表の仕方が上位を占めており傾向は変化していない。



N (その他) [具体的に: ]

- ・ 説得力のある文章を書く能力を身に付けた。

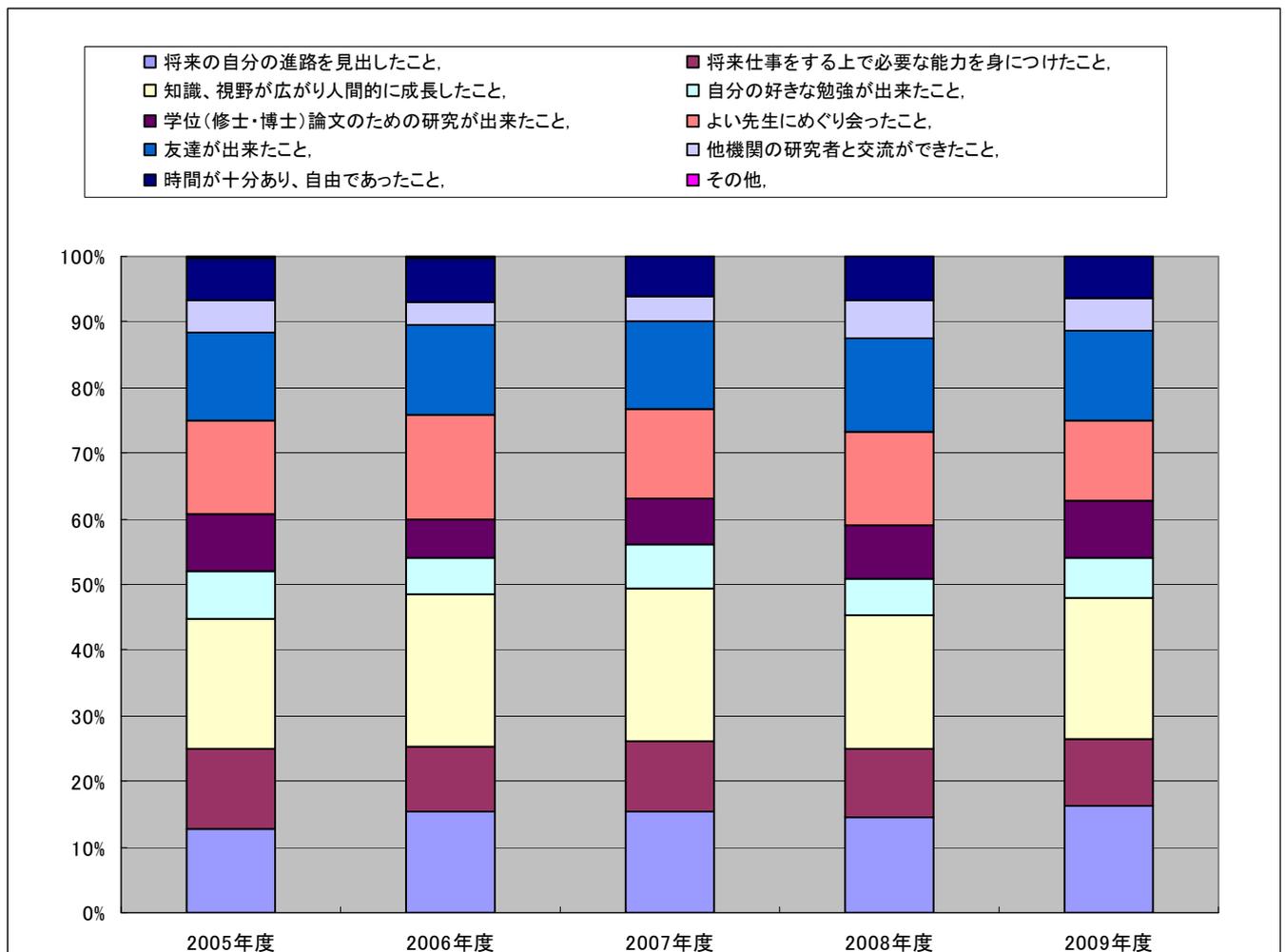
[4-3][4-1]でD (あまりない) またはE (ほとんどない) と答えた方: その理由は何ですか。(複数回答可)

指導教員とのミスマッチ、学生本人の意識不足が下記の回答から伺える。学生が希望通りの研究室を選べない場合については、学生の悩みを聞くルートを充実させる必要があるかもしれない。

- ・ 必修科目であるためか、教授には学生により良い環境で実験してもらおうというような気持ちがなく、道具としか見ていないためモチベーションが保てない。選択必修にすべき。
- ・ 提案手法があまり現実的でない。実験環境が十分調っていない。
- ・ 自己満足
- ・ ほとんど担当教授の方針に従わざるを得ないため学生自身が考える楽しさを見出せないため
- ・ 何も勉強できてないから

[5] 学府・研究科生活を振り返って、どのようなことが良かったと思いますか。(複数回答可)

昨年度とほぼ同じで「将来の自分の進路を見いだした」と「知識・視野が広がり人間的に成長した」、「友達ができた」「良い先生に巡り合えた」などが割合的に多く、研究生活が人生の一つの大きなかなめになっていることが分かる。

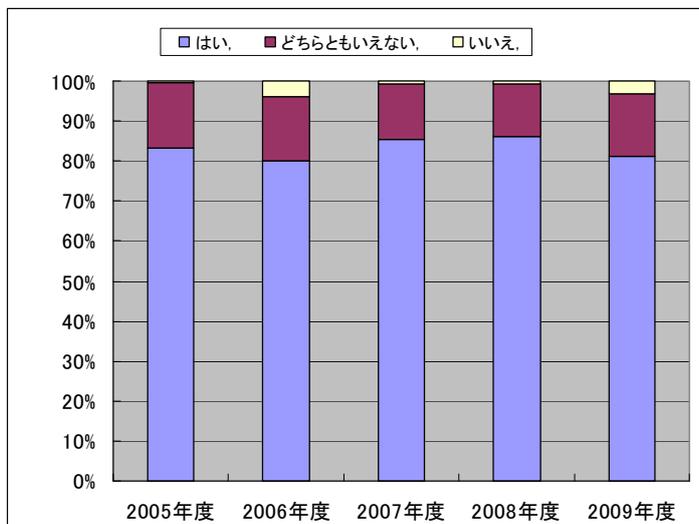


J (その他) [具体的に: ] (回答者なし)

[6]入学した専攻についてお尋ねします。

ここ6年間、「はい」がこれまでになく高い値をしており、院生の意識の高さが伺える。

[6-1]現在の専攻に入学してよかったと思いますか。 [6-2][6-1]でC(いいえ)と答えた方:その理由は何ですか。

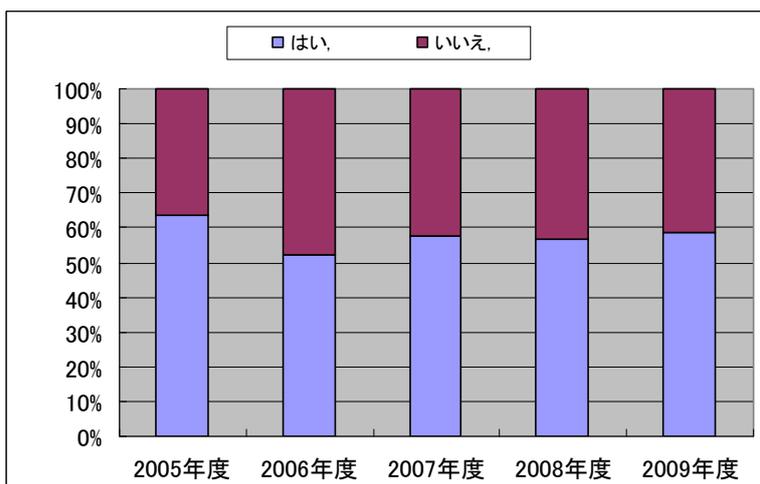


- ・ 就職できた  
学士は夜間主コースで卒業した者です。修士1年の際、就職活動の際〇〇教授に、夜間主ということでも悲しいことを言われました。ただし、自分を高める上では、この専攻に入学してよかったです。
- ・ 意味がなかった
- ・ 研究費、授業のレベル、就職の機会等機械知能や電気に比べ劣っている
- ・ 興味が湧かなかった。
- ・ 機電系が就職の時有利と感じたため。
- ・ M1の3月に中間発表があり、その影響で就職活動に制限がかかった。(M1の12月に実施ならよい)また、M2の3月に学会があり、卒業旅行を楽しんで行けない。
- ・ 修士論文の単位数が電気より少ないので、授業を多く受けなければならない

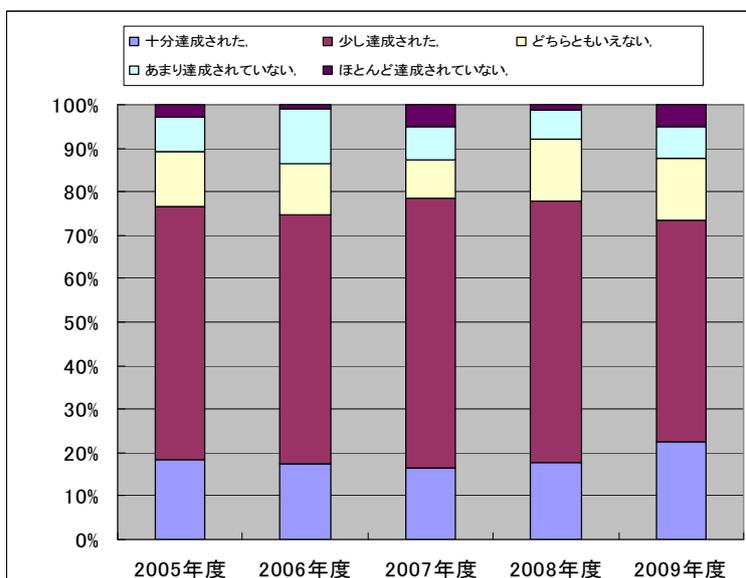
[7]進学時の目標についてお尋ねします。

[7-1]あなたは進学の際に研究科で達成したい目標がありましたか。

昨年度と全く同じで目標を持って進学した院生の割合は60%近くある。今後の推移を慎重に見守る必要がある。

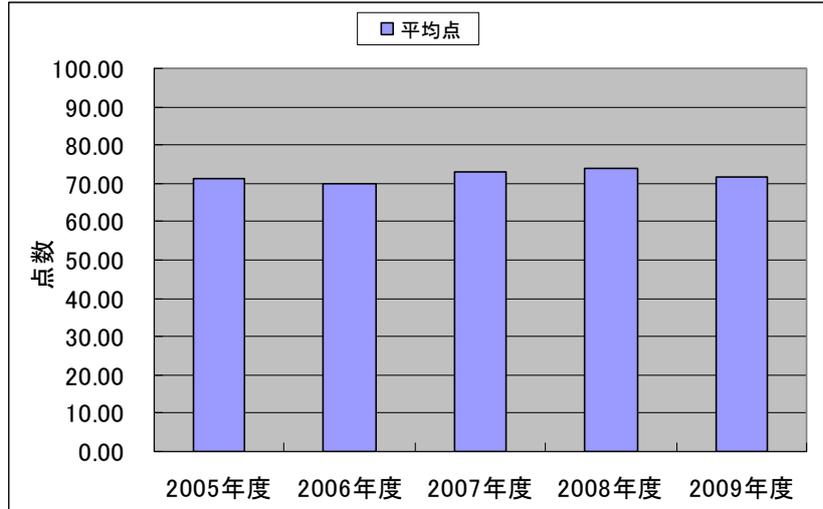


達成感を有している院生の割合は70%強、「ほとんど達成されていない」とする院生は5%程度であり、達成されたと感じている学生の割合が多い。比率については6年間大きな変化はないが、重要な項目であり、今後注意を払って推移を見守っていく必要がある。



[8]学府・研究科在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

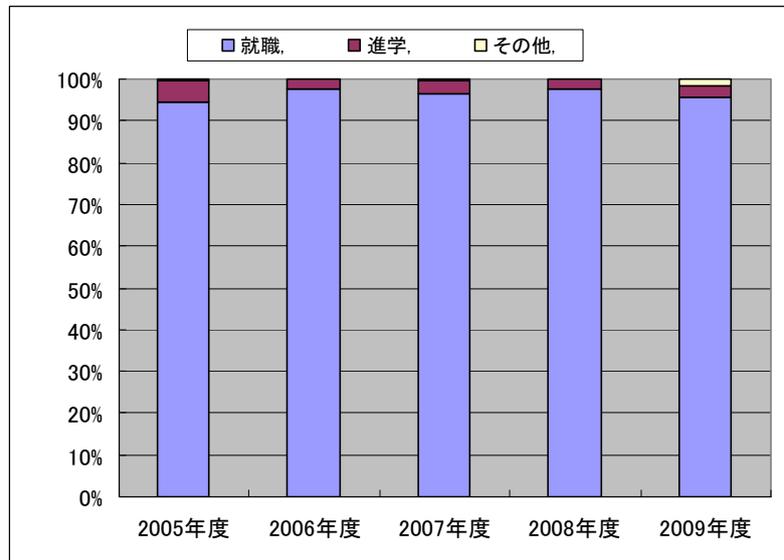
達成感を有している院生の増減と同調しているように見える。さらに向上に向けた努力が必要であろう。



[9]修了後の進路についてお尋ねします。

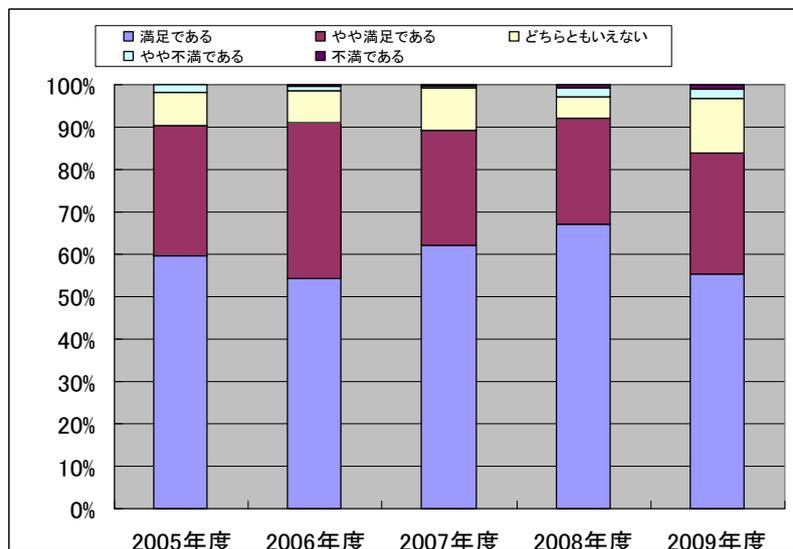
[9-1]あなたは修了後就職しますか、進学しますか。

就職する院生が95%以上で残りの学生が進学する様子は変わらないが、今後後期課程の充足率向上に向けた努力が必要であろう。



[9-2]あなたは修了後の進路に満足していますか。

修了後の進路に満足を感じている院生の割合が減少しており、2009年度はその傾向が強まった。原因についての精査、特に企業の景況感との関連付けが必要であろう。



[9-3][9-2]でD（やや不満である）またはE（不満である）と答えた方：その理由は何ですか。

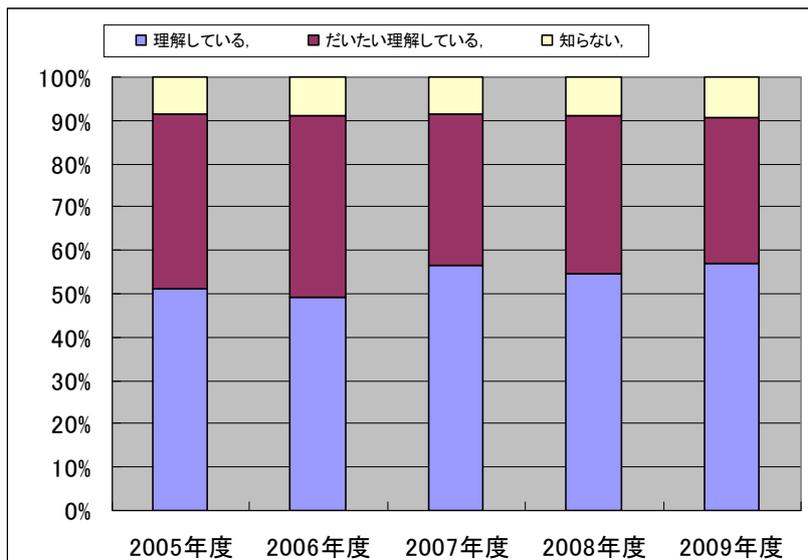
不満足感と言うよりは不安感と言った方が適切と思われる。

- ・ 希望した職種につくことができなかった
- ・ 就活
- ・ 就職うまくいかなかった
- ・ 希望通りでないため。
- ・ 希望している職と違うため
- ・ 思い通りの就職先でなかった

[10]研究活動についてお尋ねします。

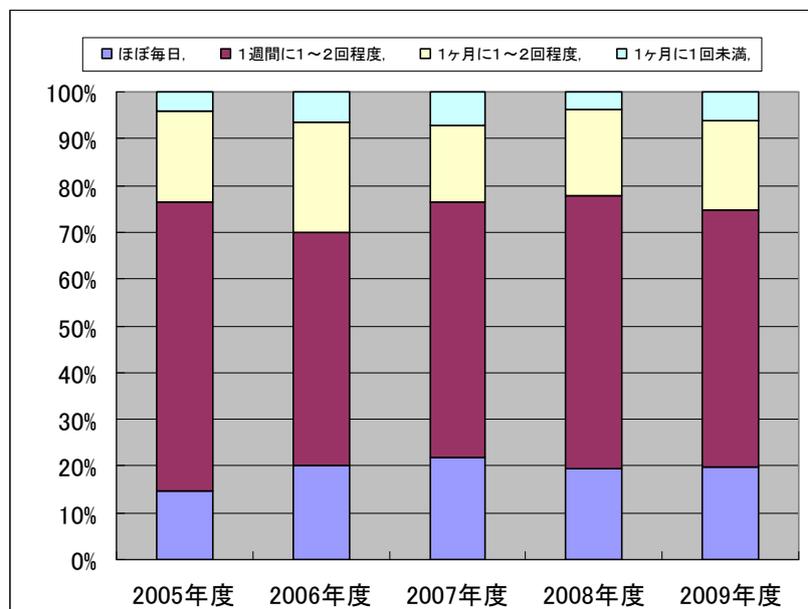
[10-1]進学時の研究室の配属決定方法を理解していますか。

研究室配属決定方法を知らない院生は10%前後で変わらないが、さらなる周知徹底が必要であろう。



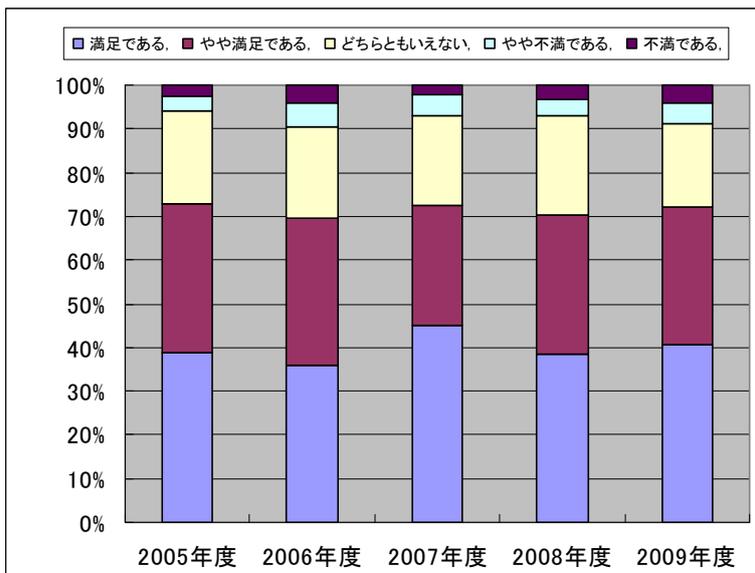
[10-2]研究指導はどの程度の頻度で受けましたか。

「ほぼ毎日」の研究指導を受けた院生の割合は変わらないが、「1週間に1～2回程度」の院生が減少し、「1ヶ月に1～2回程度」、「1ヶ月に1回未満」と回答した院生が増える兆しも見えるので、その原因を調査し、教員が院生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策、特に事務的仕事の軽減策を講じる必要がある。



[10-3] あなたの研究に対する指導方法について、どのように思っていますか。

「不満である」と「やや不満である」と回答した割合はやや増加の傾向がみられる。更に院生の研究指導方法改善の努力・工夫を続ける必要がある。



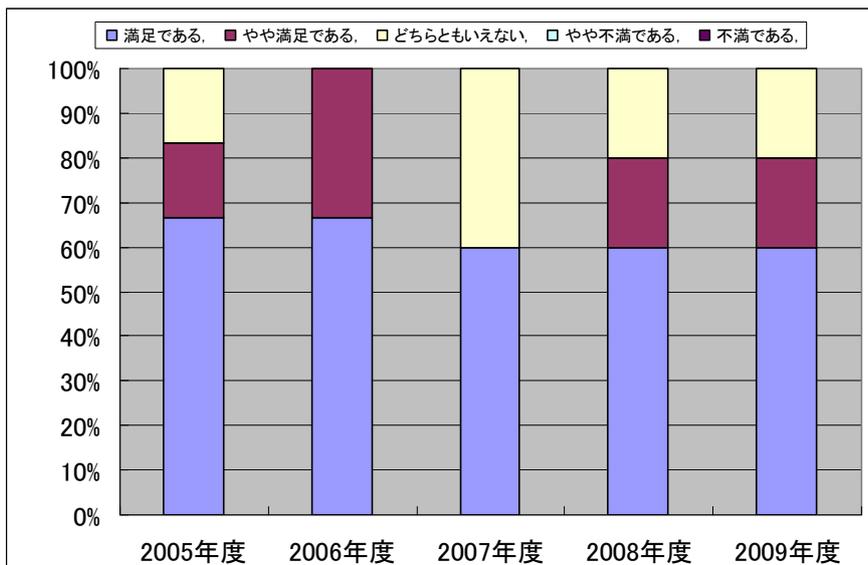
[10-4][10-3]でD（やや不満である）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。

一部解釈不能な理由もあるが、特に指導時間が少なかった場合に不満を感じている様子が伺える。その原因を調査し、教員が院生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策を早急に講じる必要がある。

- ・ おもしろくない
- ・ 教授に質問に行くと、「わからない」と「自分で調べて」としか言われぬ。これは指導ではないと思う。
- ・ 研究の目的がはっきりしていない。説明がない。
- ・ 特定の学生に課題を集中して与えられる、報告したことを教員が覚えていない。
- ・ 人の話を聞いてほしい
- ・ 差別、ワイパックス
- ・ 先生が忙しい。
- ・ 放任主義である。
- ・ 自分の可能性に自信がなくなった
- ・ 適切なアドバイスもあまりなく、論文のための下請け業者のように扱われているような気がしたため。
- ・ 助教が人間的におかしいから。(担当)
- ・ 自分の研究に対してほとんど何も考えてなく、アドバイスをもらいにいったりディスカッションしても結局最後には逆ギレして自分で考えてやれって具合になっていたから。
- ・ 先生が忙しく、コミュニケーションがとれないことが多かった
- ・ 出来る限り自分で理解できるよう努めてきたが、どうしても分からず先生に尋ねた時、明確な解答が得られずはぐらかされた
- ・ 指導に納得できない点も多く、理不尽な要求をされることも多々あった。
- ・ 無駄に報告回数が多く、自由に活動する時間がうばわれる。ゼミの内容も、意味なし。教授も、自分の研究を助けたいのか、邪魔したいのかがわからない。
- ・ 指導回数が少ないから
- ・ 自由なのはいいが、具体的な指示がないので大変

[10-5] あなたの研究に対する指導体制（指導教官グループ）について、どのように思っていますか。（博士後期課程の方のみ）

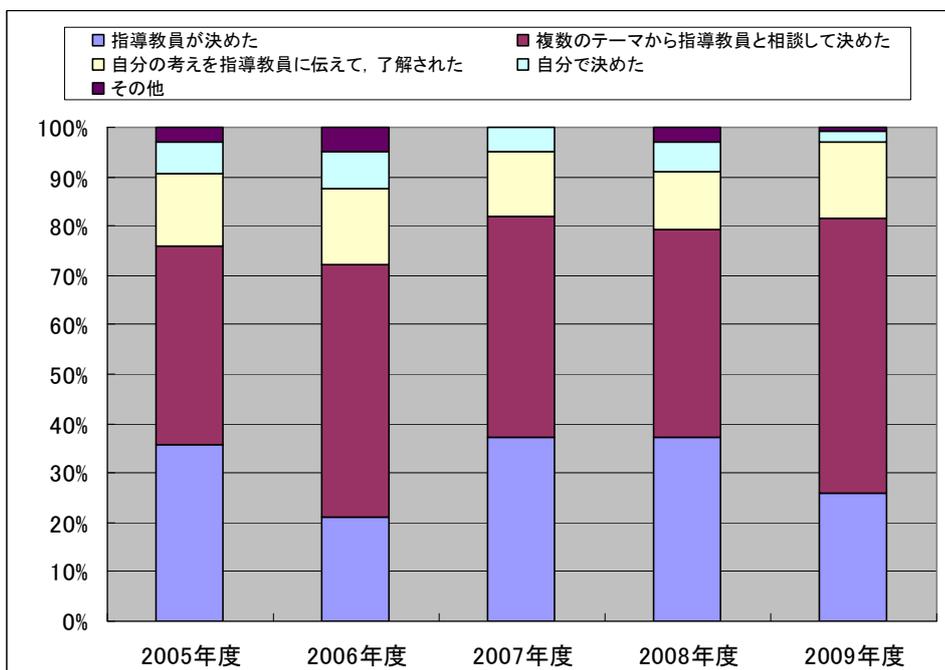
後期課程修了生の有効回答は少なく統計的な意味づけが困難であるが、特に否定的な解答は無い。



[10-6] [10-5]でD（やや不満）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。（回答者なし）

[10-7] 研究テーマはどのように決定されましたか。

指導教官との話し合い、あるいは複数の候補から研究テーマを決める割合が増えた。

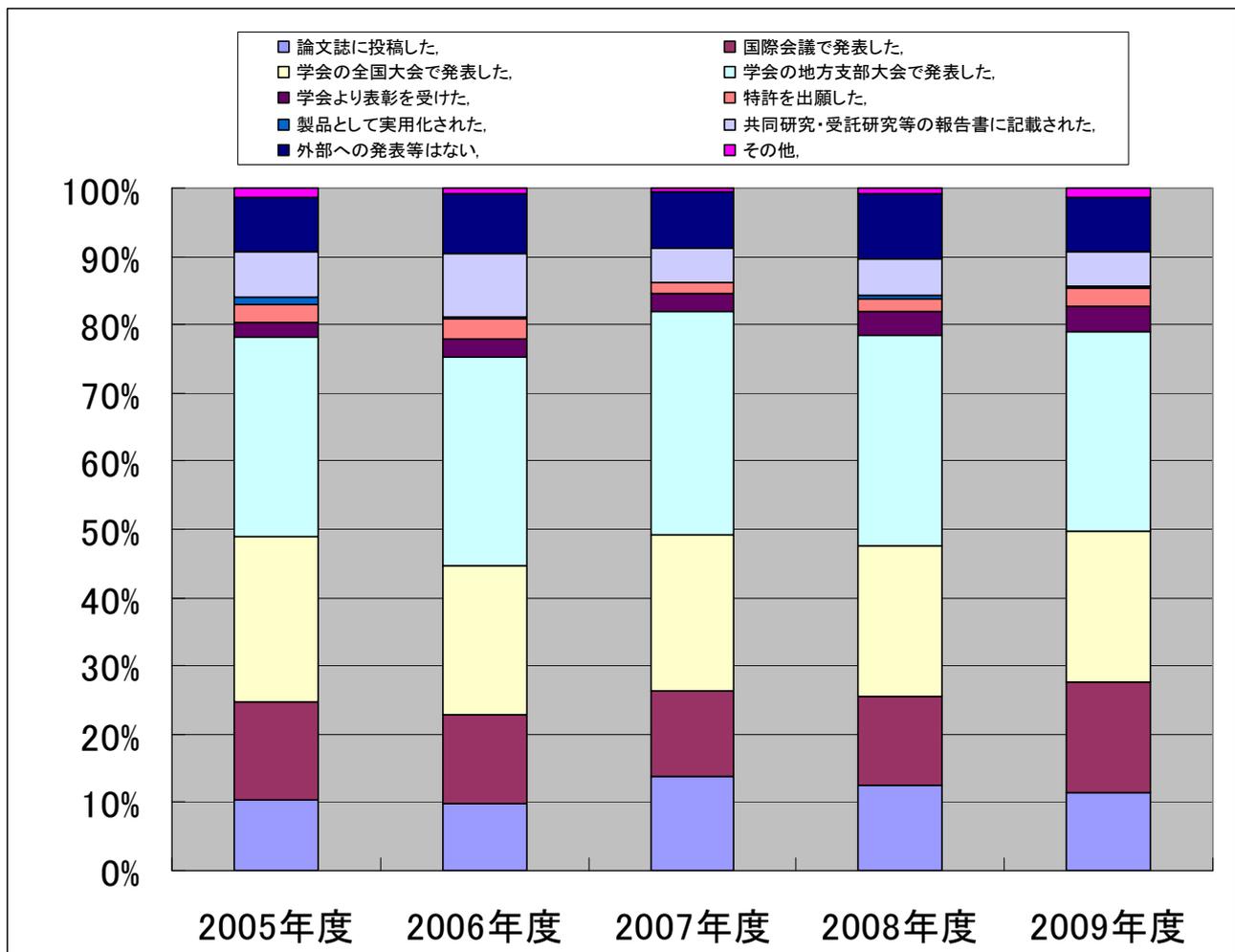


E（その他） [具体的に： ]

- ・ じゃんけん
- ・ 学部時代からの研究テーマを引き継いだ

[10-8]あなたが在学中に研究したテーマの成果は下記のうちどれに該当しますか。(複数回答可)

論文誌への投稿が増加し、国際会議や学会の全国大会での発表も高い水準を維持している傾向は変わらないが、まったく発表しないケースも見られるので、さらに改善が必要と思われる。

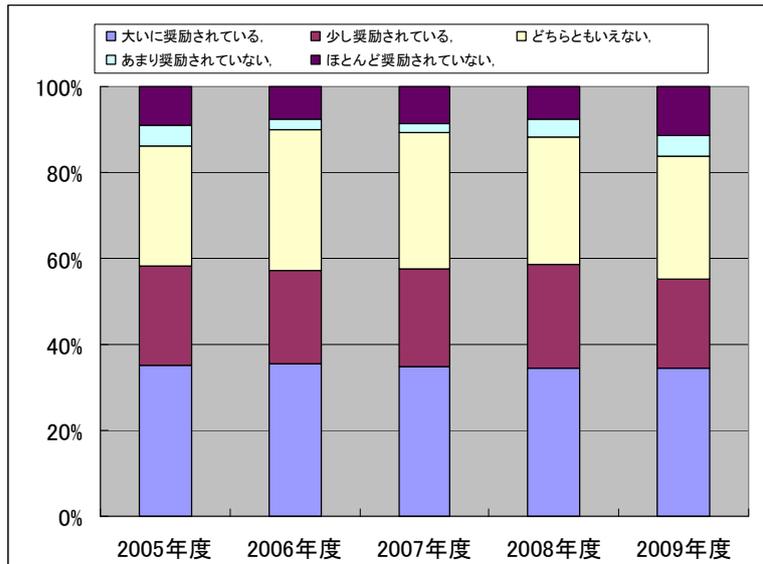


J (その他) [具体的に: ]

- ・ 学会の全国大会に発表の予定
- ・ 役に立たない
- ・ 地域(研究対象地)の住民の方々から喜ばれた。
- ・ 今後施工される。
- ・ 地方支部大学の発表を予定
- ・ 今後の学会で教授を通して発表される予定

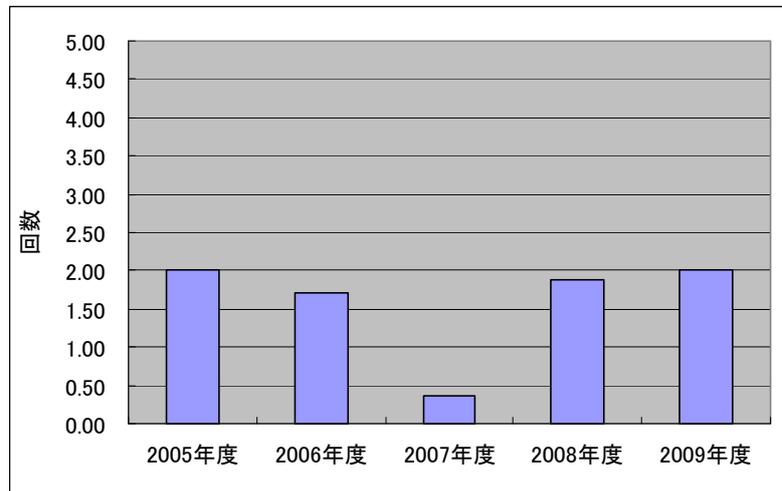
[10-9] 学外での研究活動（学会発表や他機関での研究活動等）を奨励されていましたか。

ほとんどあるいはあまり推奨されていないと感じている学生の割合が増加している。教員側の意識の改革が必要である。



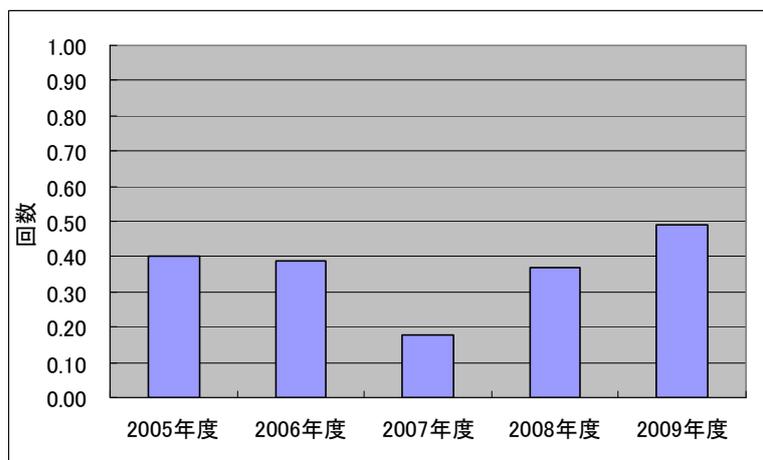
[10-10] あなたは在学中に国内学会（大会等）で何回発表しましたか。

2007年度激減した院生の発表回数が2008年度は復旧し、2009年度はほぼ横ばいである。在学年数からみて、2回程度は妥当であろう。



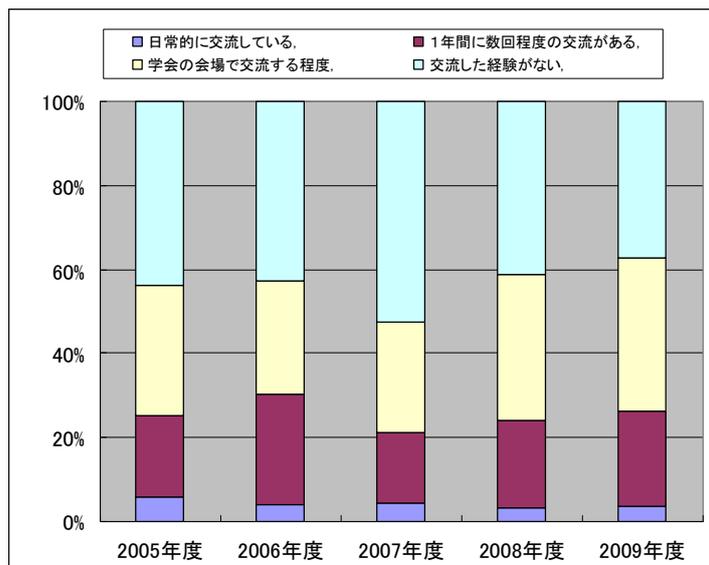
[10-11] あなたは在学中に国際会議で何回発表しましたか。

2007年度激減した院生の発表回数が2008年度は復旧し、2009年度は微増している。



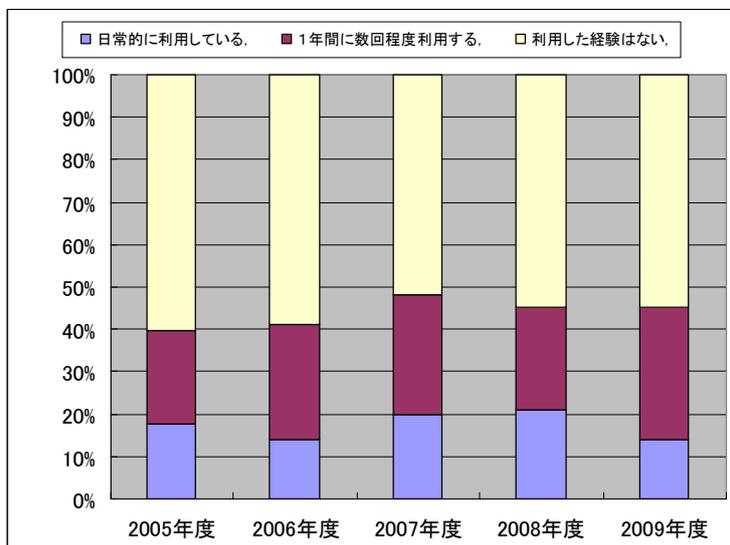
[10-12]学外の研究者(国内および国外)と研究交流した経験がありますか。

交流した経験のない学生の比率が減少している。国際的な交流の活発化がみられる。



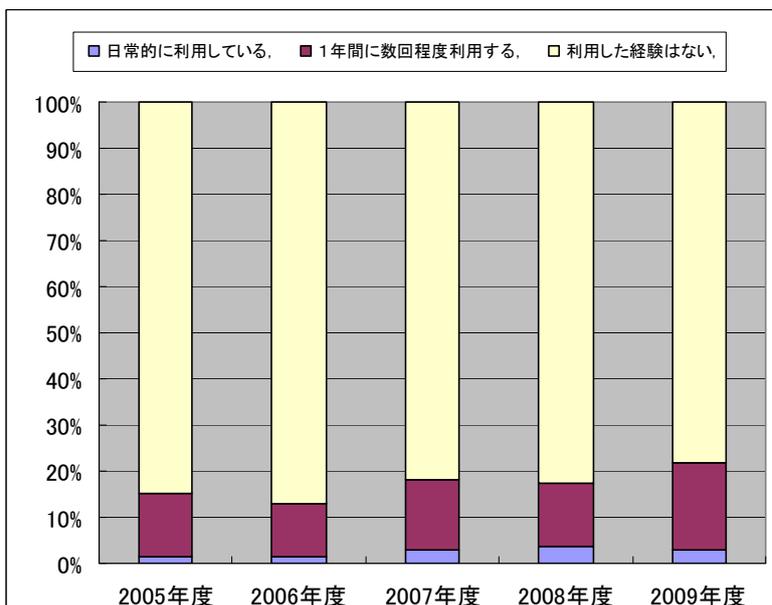
[10-13]学内の共同利用施設(情報科学センター、機器分析センター等)を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合が50%近くになっているものの、日常的に利用している学生数が減少の傾向を示している。



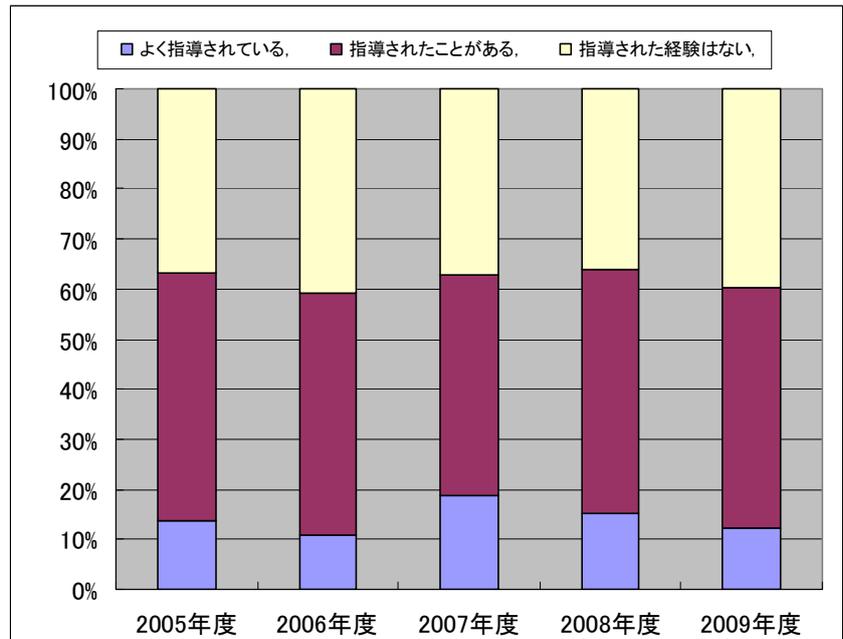
[10-14]学外の共同利用施設等を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合が微増し、20%を超えた。



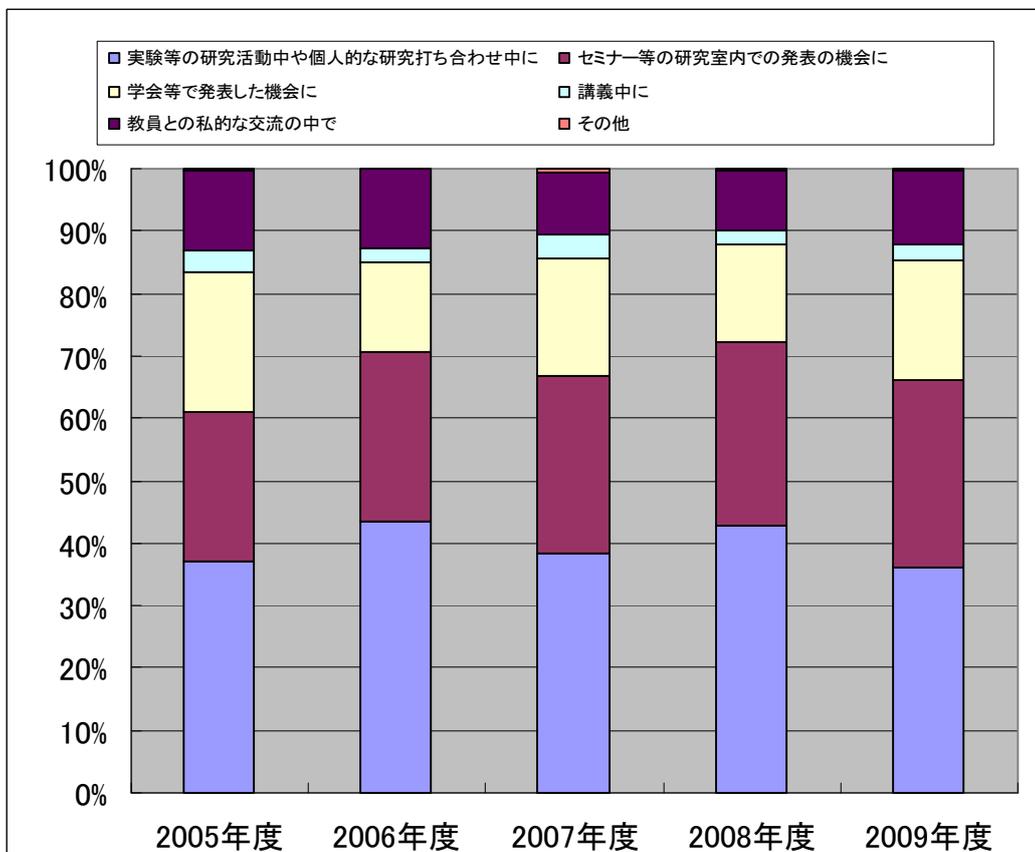
[10-15] 学位論文の研究を通して、研究遂行に対して競争意欲が向上するような指導を受けたことがありますか。

よく指導されている院生がやや減少している、指導改善の取り組みは必要である。



[10-16] [10-15]でA (よく指導されている) またはB (指導されたことがある) と答えた方: それほどのような機会に指導されましたか。(複数回答可)

教員との個人的な研究打ち合わせやセミナー、学会発表等で指導を受けている学生の割合は 90%弱に達し、この傾向はあまり変化がない。



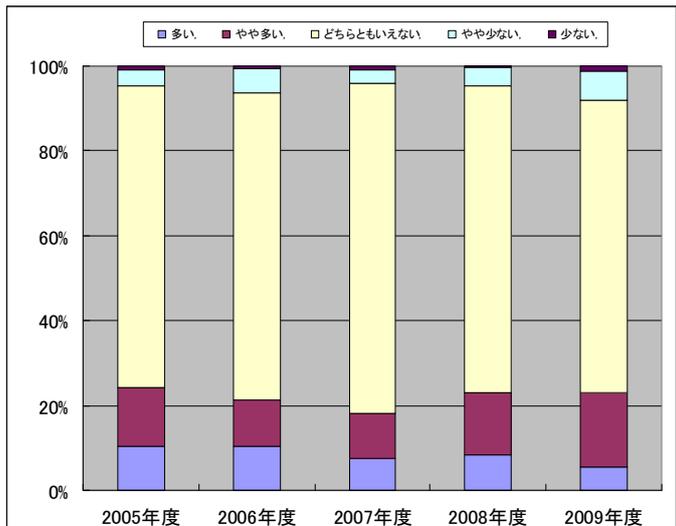
F (その他) [具体的に: ]

- ・ 共同研究で他大学(韓国)の方に。

[11]工学府・工学研究科における講義・演習等についてお尋ねします。

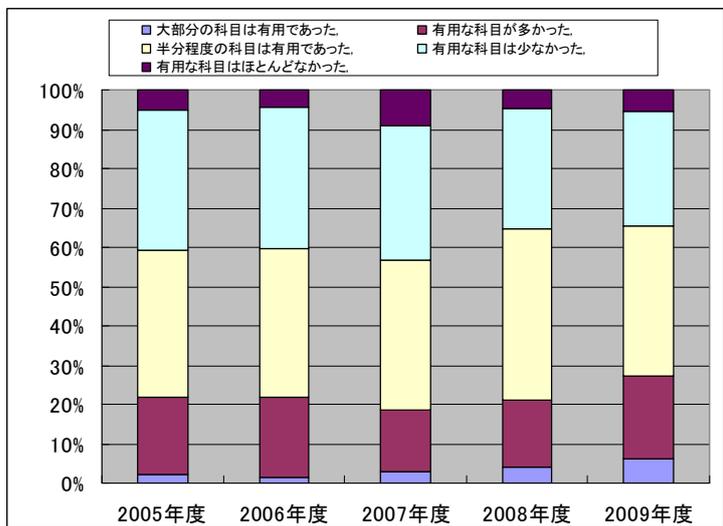
[11-1]工学府・工学研究科における講義・演習等の必要要件単位数は多いでしょうか、少ないでしょうか。

「やや多い」、「多い」と回答した院生は横ばいである。「やや少ない」、「少ない」と回答した院生が増加の傾向にある。



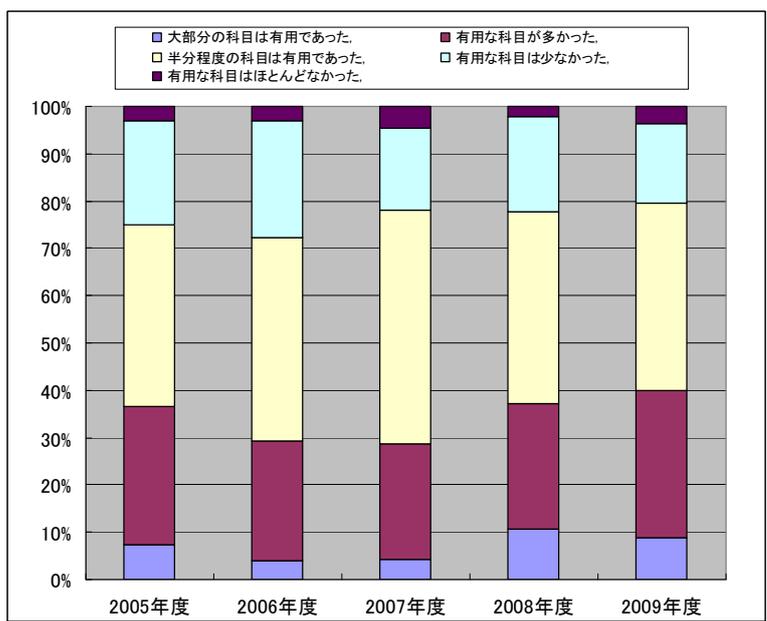
[11-2]工学府・工学研究科で受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の研究に役立った科目の割合はどの程度ですか。

「有用な科目が多かった」と回答した院生はやや増加の傾向がみられる。有用な科目が増加するように、さらなる講義（演習）内容の改善が必要である。



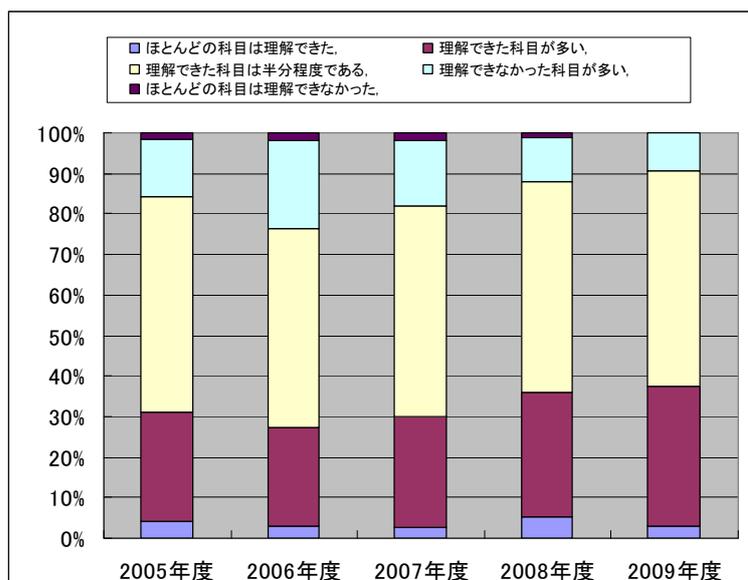
[11-3]工学府・工学研究科で受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

「大部分の科目は有用であった、有用な科目が多かった」は2008年度よりも更に増加した。「半分以上の科目は有用であった」までを含めた修了生は、ピーク時の81%には及ばないものの、やや増加して80%程度となっている。受講者の意識・学力を把握、考慮した講義（演習）内容の検討が引き続き必要と思われる。



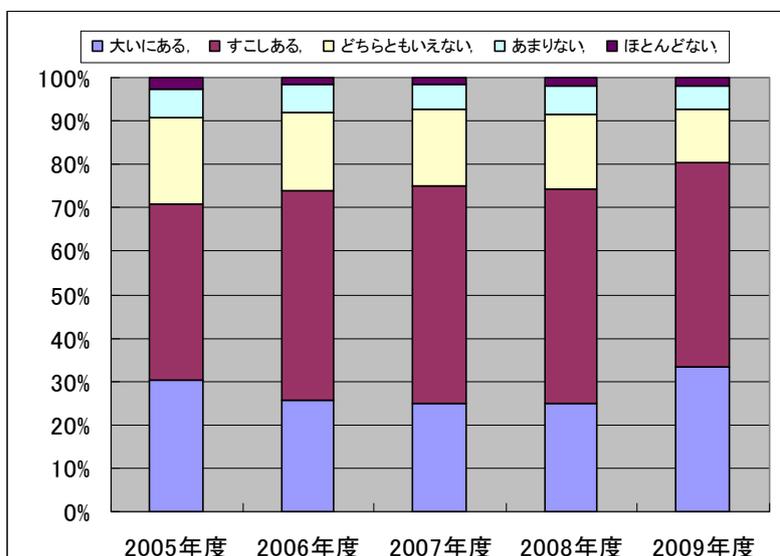
[11-4]工学府・工学研究科で受講した講義科目の理解度はどの程度ですか。

「理解できた科目が半分以上」の修了生の割合が2004年度の86%から減少傾向にあり、2006年度に80%を割ったが、2009年度は90%強まで増加した。また「理解できなかった科目が多い」の割合も前年と比べて減少している。引き続き講義内容や教授方法の検討・改善が必要と思われる。



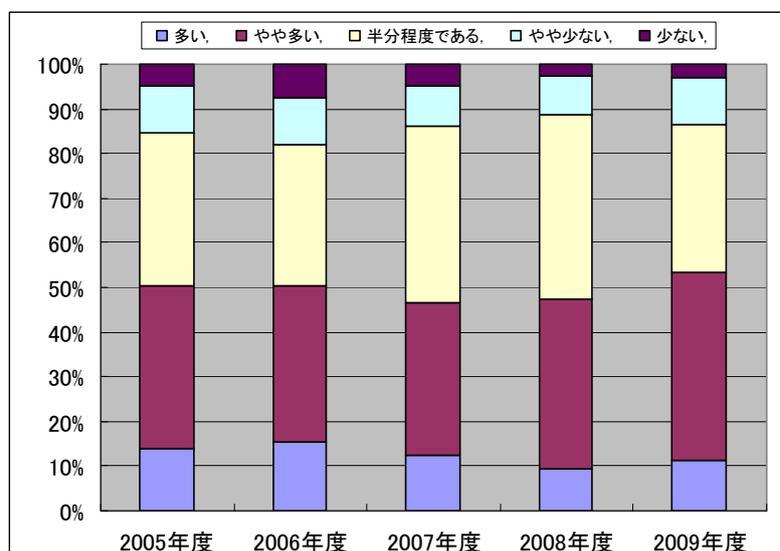
[11-5]学部で履修した科目と研究科で履修した科目の間に、つながりがあったと思いますか。

「学部で履修した科目との関連がある」と回答した修了生の割合が67%から順次80%程度まで増加しており、学部で履修した科目との関連性は向上していると判断できる。



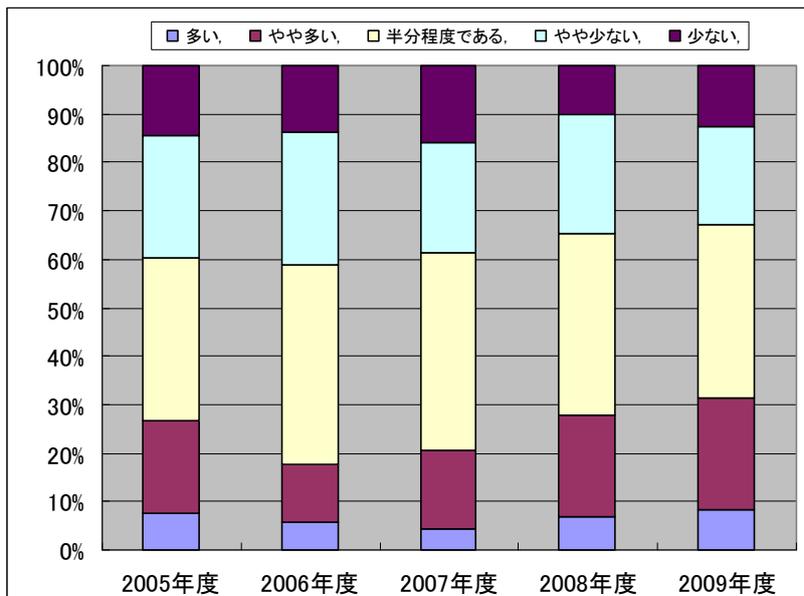
[11-6]工学府・工学研究科で履修した科目全般について、教育への熱意があった担当教員の割合はどの程度ですか。

「半分以上の教員に熱意があった」と回答した修了生の割合は、2006年度に若干の減少を見せたが、2004年度の80%から2008年度の88%までほぼ順次増加し、2009年度では若干の減少を見せているが、過去5年間は80%台で推移している。



[11-7]工学府・工学研究科で履修した科目で、就職後、仕事をする上で役に立つと思う科目はどれくらいありましたか。

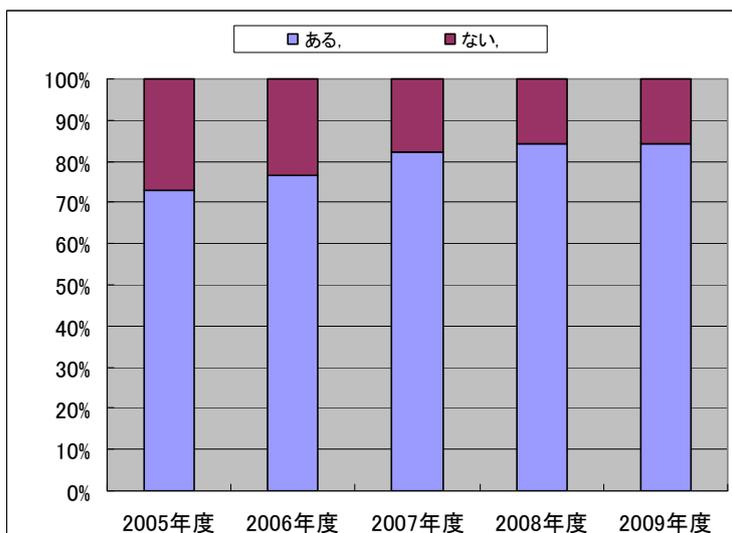
「半分以上の科目は仕事に役に立つ」と回答した修了生は、2006年度 59%から2009年度 67%まで増加しており、「実学」の観点からの教育効果は向上していると思われる。



[12] TA、RA等の制度についてお尋ねします。

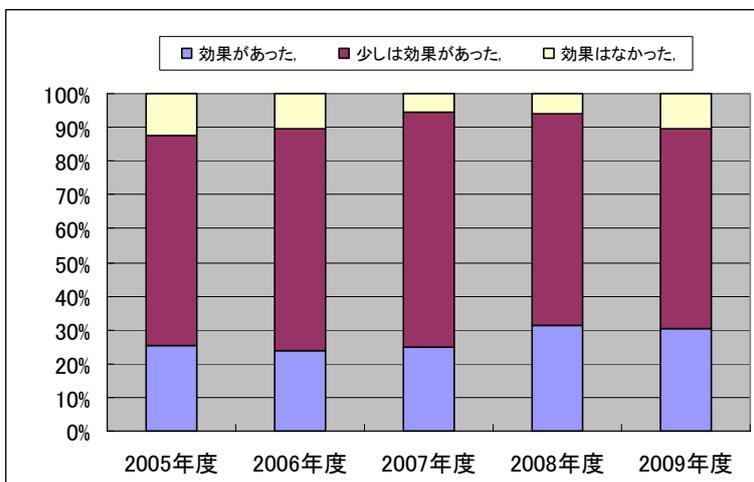
[12-1] TAを担当したことがありますか。

TA経験者は2007年度以降の80%以上に達しており、2008年度同様最高に達している。



[12-2] [12-1]でA（効果があった）と答えた方：TA活動を通して、学部学生に対して教育的効果があったと思いますか。

「効果があった」とする回答は30%、「少しは効果があった」とする回答はおおよそ60%で二つの回答を併せると90%前後が、TAが学部教育に貢献していると自己評価している。



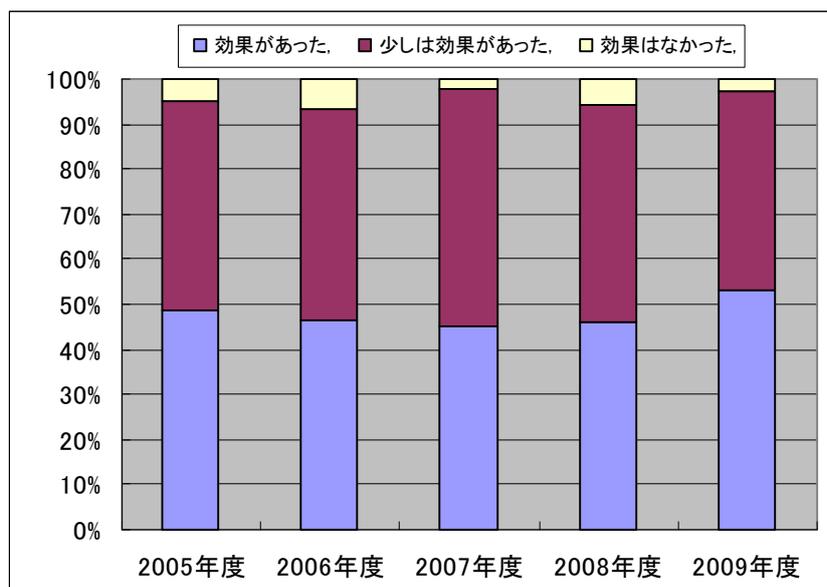
[12-3][12-2]でC（効果はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。

「効果がなかった」とする回答は5%から12%の間を前後しているが、過去5年間は減少傾向にあったが2009年度は10%となった。具体的な回答は以下の通りである。TA活動がマニュアル化したものになっており、教員の作業を補助するものである場合がほとんどとしている。TAの業務内容が、直接学部学生とのコンタクトを伴わない作業については、学部学生への教育効果を理解しにくくしている。TA制度の有効な活用についてさらに検討を進める必要がある。

- ・ 事務的な作業にとどまったから
- ・ 学部学生に直接指導することは無かったから。
- ・ やる気のない学生が多い
- ・ 良くなったと思わないから
- ・ 授業に参加していないため。
- ・ 実験のTAとしてではなく、教員不在時の課題を通知する程度なので
- ・ プリントの印刷、回収、採点くらいしかしていないので
- ・ 教員の手伝いだった。
- ・ 直接学生と接することがなかったの。
- ・ 提出物の採点だったので
- ・ マニュアル通りの作業だったから。
- ・ ただの作業である。
- ・ 教官ほどの指導はできないため
- ・ 学部生との関わりは少なかったため

[12-4][12-1]でA（ある）と答えた方：TA活動は、自分自身にとって教育的効果があったと思いますか。

95%以上が、教育効果があったと答えており、TA活動が充分機能していると思われる。



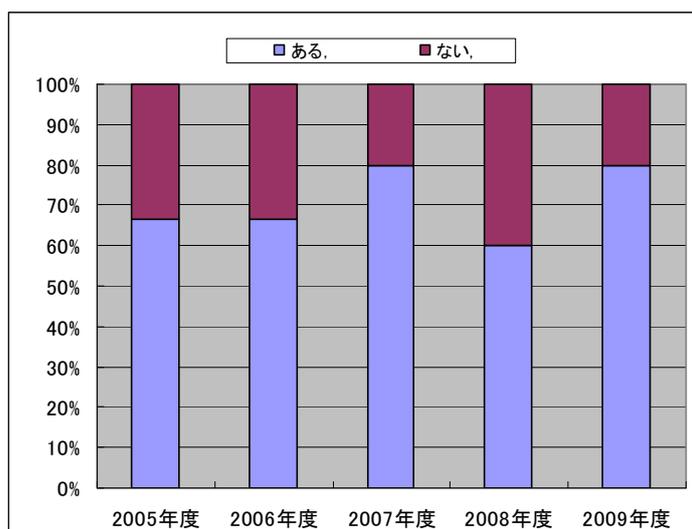
[12-5][12-4]でC（効果はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。

TA活動は自分自身にとって教育的効果がなかったとする回答は2009年度には3%であり、この制度が十分教育的な効果を上げていると判断できる。具体的な回答は以下の通りであるが、少数意見である。

- ・ 仕事は何もなかったの。
- ・ 実験のTAとしてではなく、教員不在時の課題を通知する程度なので
- ・ 逆に具体的にどのような効果があると思いますか？
- ・ 作業を行っただけなので。研究が忙しいのに時間を取られて困った

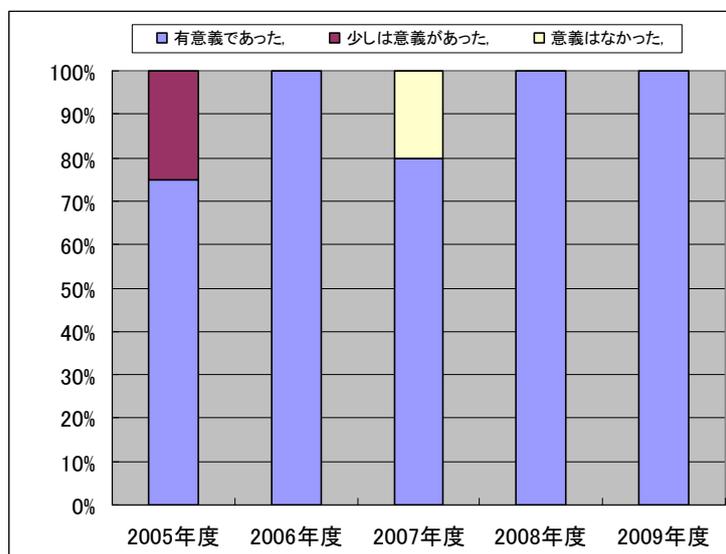
[12-6] RAを担当したことがありますか。(博士後期課程の修了生のみ)

例年RAを経験した博士後期課程の学生は60%以上となりRA制度が定着しつつある。2009年度は2008年度の大幅な減少の反動のためか80%にまで回復している。



[12-7][12-6]でA(ある)と答えた方。RA活動は、自分自身にとって意義があったと思えますか。

2005年度以来2009年度までRA活動の体験者全員がRAを肯定的に考えており、2006年度および2008年度には100%の博士後期課程学生がRAに「意義があった」と評価している。2007年度にはそれが80%と減少している。

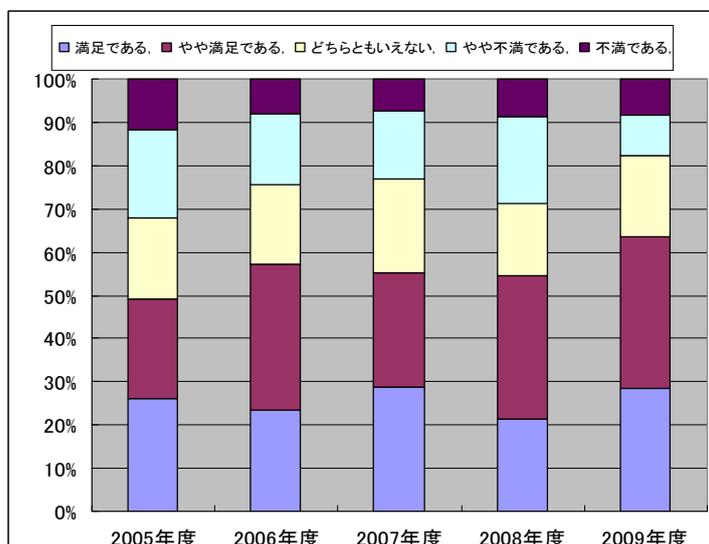


[12-8][12-7]でC(意義はなかった)と答えた方：その理由は何ですか。(博士後期課程の修了生)  
(回答者なし)

[13]施設・設備等についてお尋ねします。

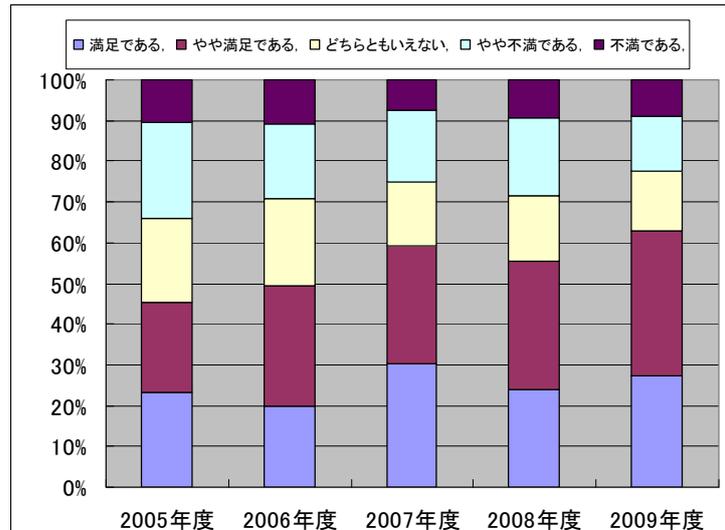
[13-1]研究に使った実験室・実習室のスペースや環境等について満足していますか。

「満足、やや満足」と解答した学生はほぼ半数以上である。2009年度は最高値64%に達している。改築等が進んできているためと思われる。なだらかであるが次第に満足度は増加してきている。



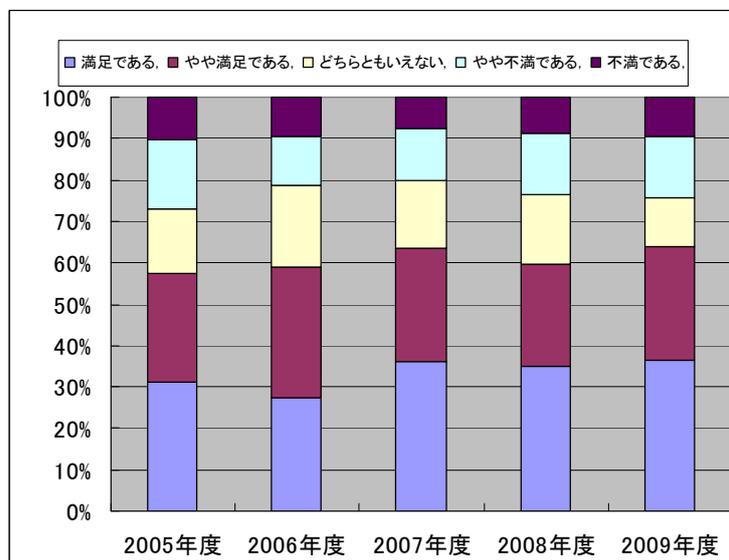
[13-2] 研究に必要な設備・装置について満足していますか。

「満足、やや満足」とした回答は2006年度46%であったが、次第に満足度は増しており2009年度では、63%になった。引き続き、効果的な整備を進めべく検討する必要がある。



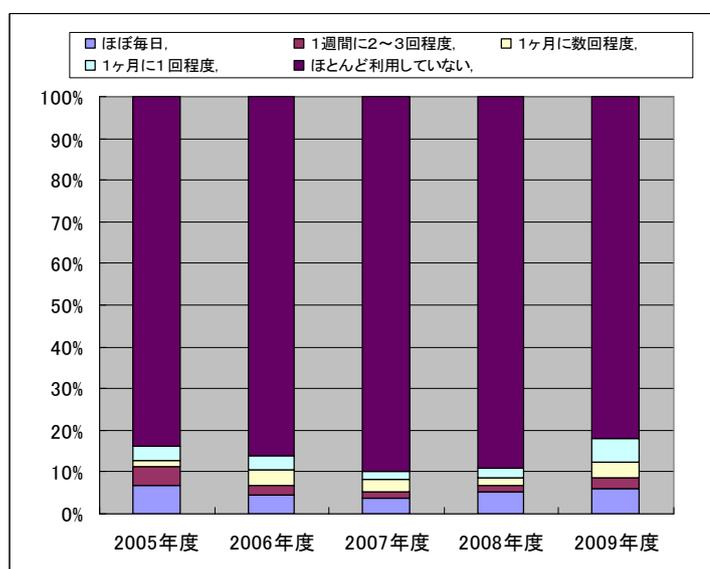
[13-3] 研究に必要な情報機器（コンピュータ端末等を含む）の整備状況について満足していますか。

「満足、やや満足」と回答した学生の割合は63%程度で定着している。引き続き整備していく必要がある。



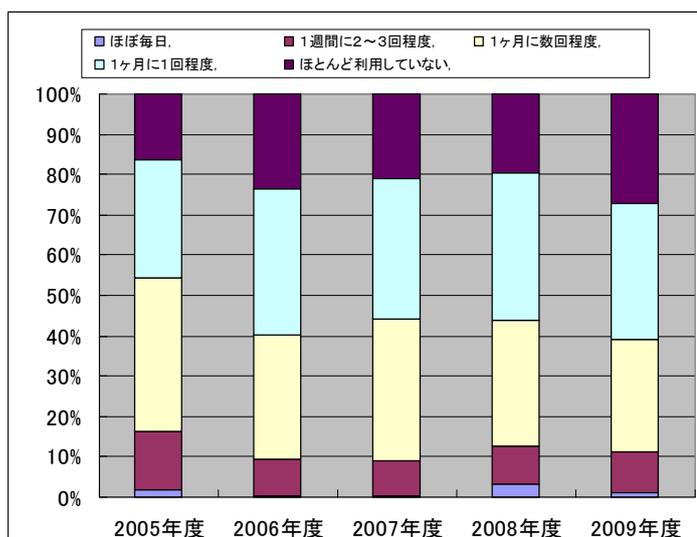
[13-4] 情報科学センターが提供しているサービスをどの程度利用していますか。（インターネットや電子メールを除く。）

約80%以上の学生が情報科学センターのサービスを利用していない。2009年度は、利用率が最も高い結果となっている。研究活動において、必ずしも情報科学センターのサービスを必要としないことから、サービス利用の促進をすべきかどうかの検討をする必要がある。



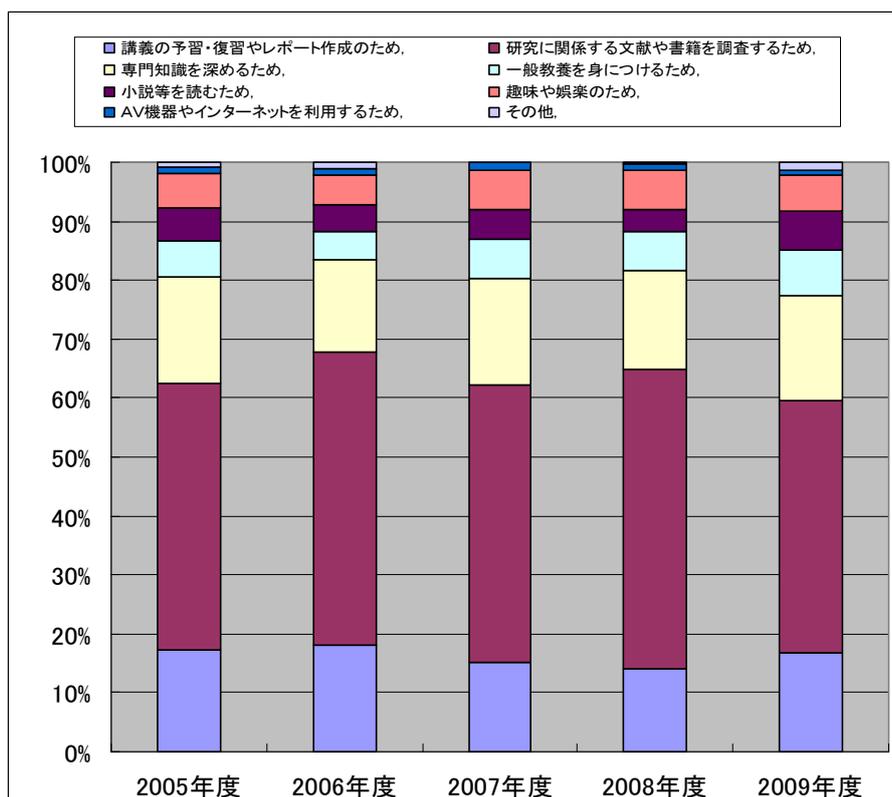
[13-5] 図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

1週間に2～3回程度まで日常的に利用している学生の割合は2007年度には10%を割っていたが、2008年度からまた10%を超える割合に戻っている。2009年度では、月に1回程度以上利用する学生の割合は73%となり、2008年度から減少している。但し、インターネットによる論文検索等は増加していることを、図書館の利用として加味しているかが分からない。



[13-6] 図書館を利用する主な理由をお答えください。(複数回答可)

学生が講義、研究、専門知識および一般教養に関して図書館を利用している割合は、それぞれおおよそ18%、43%、18%、7%程度で合計は85%程度である。



H (その他) [具体的に: ]

- ・ アルバイト
- ・ 英語、科学雑誌を読むため
- ・ 新聞を読むため。
- ・ 騒がしく、集中できないため、利用しない。
- ・ 学習スペースとして
- ・ 新聞を読むために利用している。
- ・ 講演会などで利用したことがある

## 2. 3 教育達成度評価アンケート：雇用主 (2007年3月以前卒業生)

本節(2.3)と次節(2.4)では、まだ、九州工業大学工学部及び大学院工学府(旧工学研究科)における教育効果が残っていると思われる入社後3年程度を経過した本学卒業生・修了生を対象に、他大学と比較した教育レベルのアンケート調査を実施し、その結果をまとめています。なお、この時、彼らが在職する各会社・各機関(彼らの雇用主)に対しては、本アンケート調査は他大学の卒業生及び修了生に対する本学学生が受けた教育レベルの評価を行うためのものであり、対象者本人の評価を行うものではないことを断わっています。

※アンケート実施年月日 平成22年 6月10日

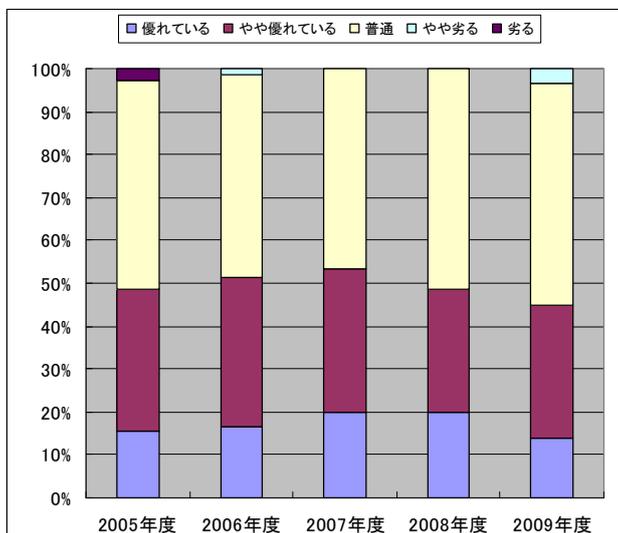
※アンケート回収率

配付枚数	回収枚数(回答率)
127社	30社(23.6%)

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

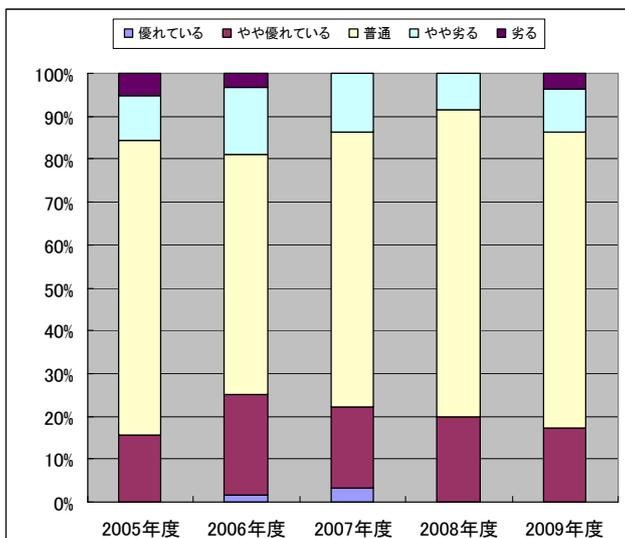
### (1) 卒業生が受けた教養(人文・社会等の一般教養)教育のレベル

「優れている、やや優れている」が2007年度53%で最大に達しているが、以後年々減少し2009年度には45%になっている。注視しておく必要がある。



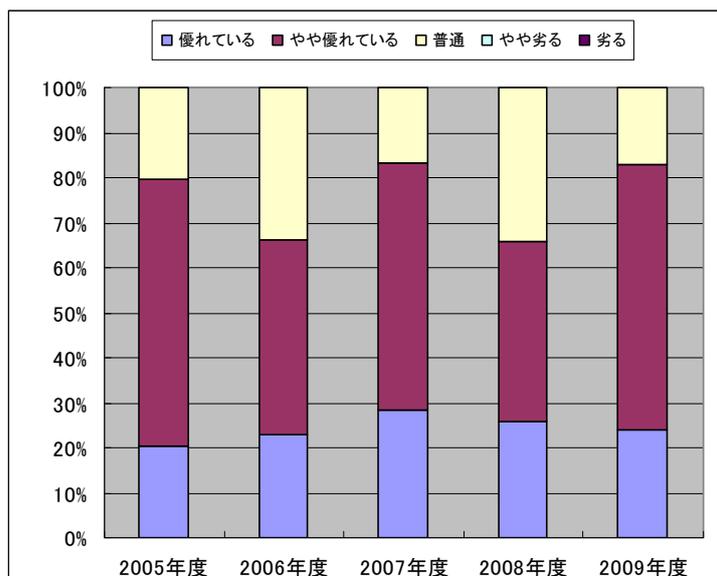
### (2) 卒業生が受けた語学(特に英語)教育のレベル

80%以上が「普通以上」と回答しているが、2008年度には92%であったのが、2009年度では86%に減少した。「優れている、やや優れている」が2006年度から減少の傾向にあり、比率を増やす努力が必要である。



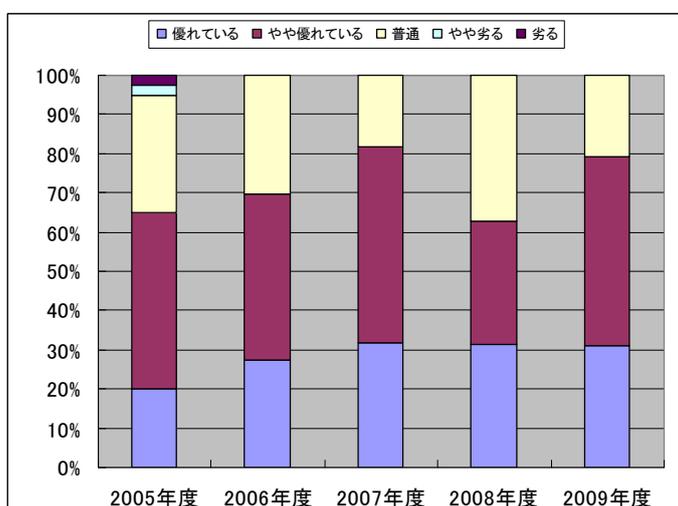
### (3) 卒業生が受けた理数系(数学・物理・化学)教育のレベル

「優れている、やや優れている」と回答した企業が2005年度にほぼ80%、2007年度は83%、2009年度は83%に達した。年度ごとに一定していない。「優れている」について限れば、2007年度以降比率が減少してきている。この比率を更に上げる努力が必要である。



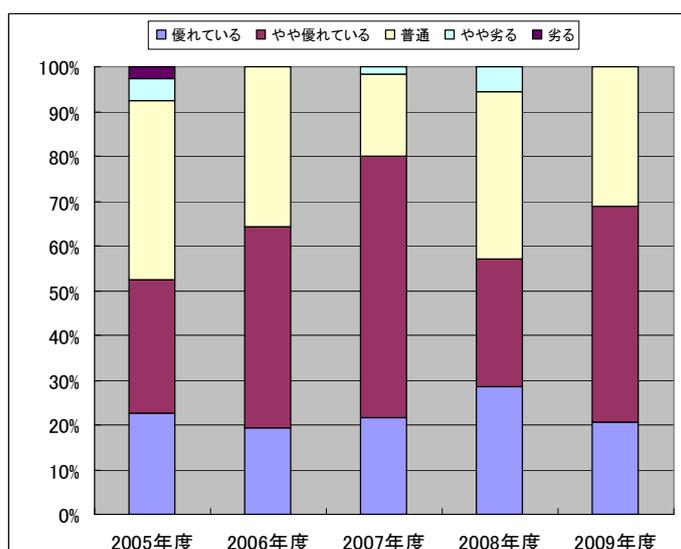
### (4) 卒業生が受けた専門教育のレベル

卒業生の専門教育レベルについては、「優れている、やや優れている」が2005年度の65%から増加を続けたものの、2008年度には63%へ大幅な減少を示した。しかし2009年度では回復し80%としており、引き続き注視しておく必要がある。



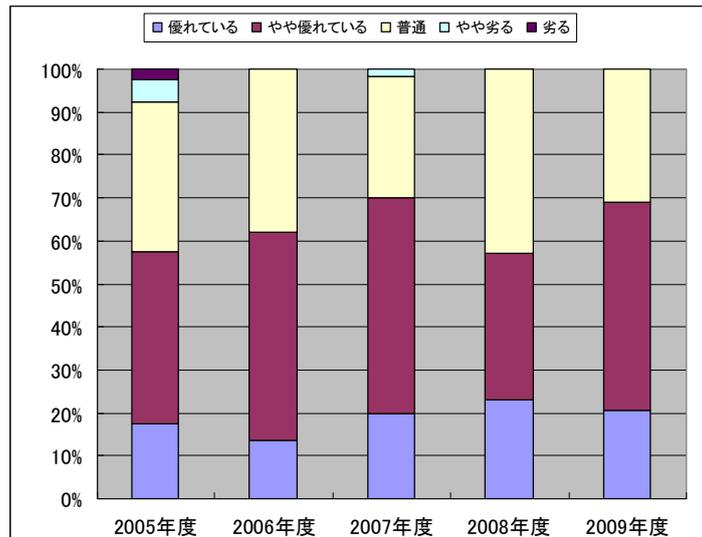
### (5) 卒業生が受けた課題探求能力教育のレベル

「優れている、やや優れている」が2005年度の50%台から2007年度には80%に達した。しかし、2008年度には57%と大幅な減少を示した。2009年度では回復し70%としている。引き続き注視しておく必要がある。



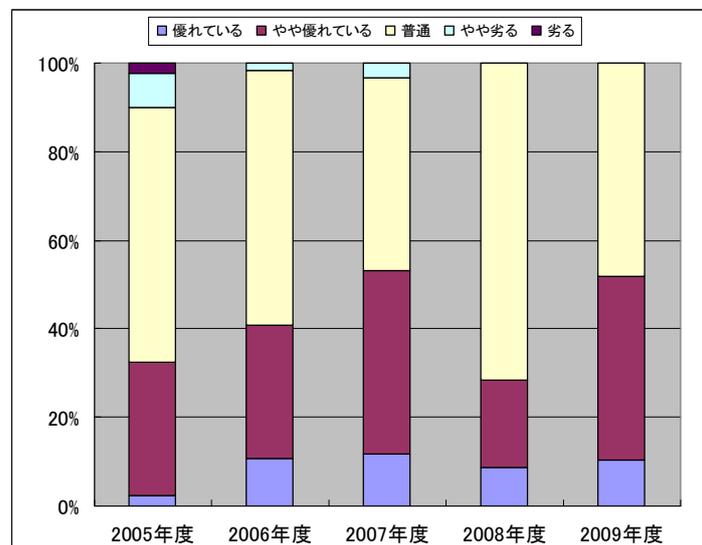
(6) 卒業生が受けた課題解決能力教育のレベル

「優れている、やや優れている」は2008年度を除き年々増加し2009年度はほぼ70%にまで上昇している。2008年度の60%になったことから、引き続き注視しておく必要がある。



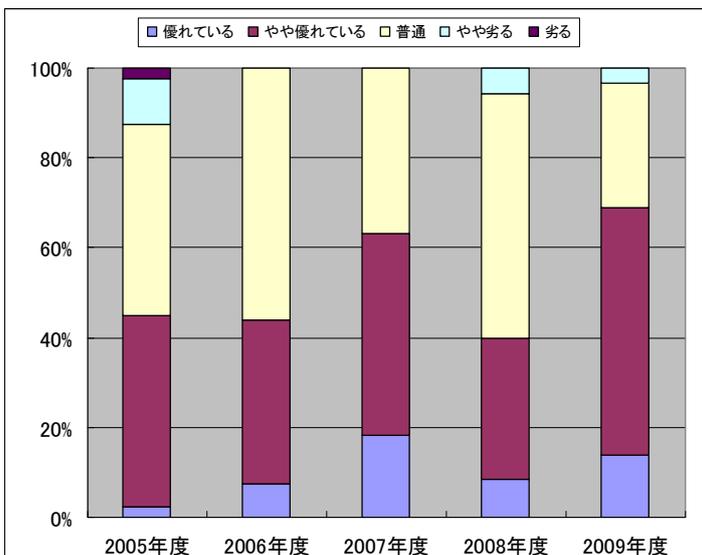
(7) 卒業生が受けた独創性教育のレベル

「優れている、やや優れている」は2008年度を除き年々増加し2009年度はほぼ50%台にまで上昇している。しかし、2008年度は30%未満になったことから、引き続き注視しておく必要がある。



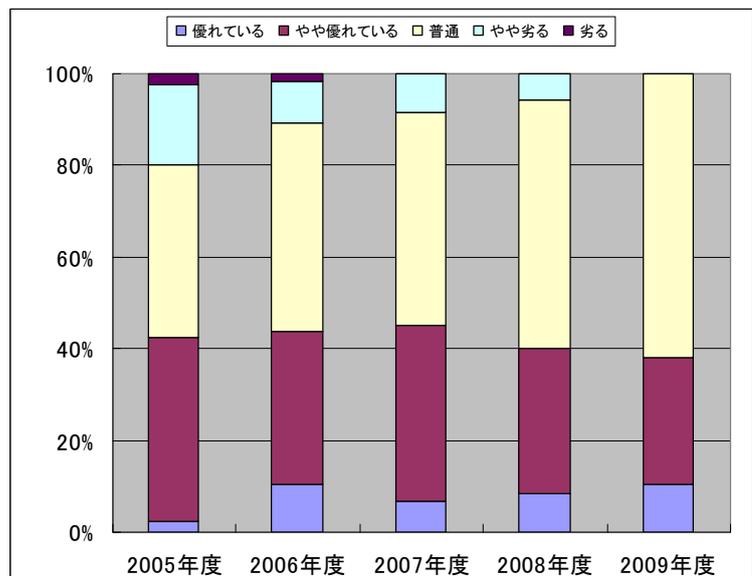
(8) 卒業生が受けた構想力教育のレベル

「優れている、やや優れている」は2005～2006年度は45%前後を推移してきた。2007年度には一気に60%を超えたが、2008年度は40%にまで大幅に減少した。2009年度は最高値の68%を記録しているが、変動があり今後も推移を見守る必要がある。



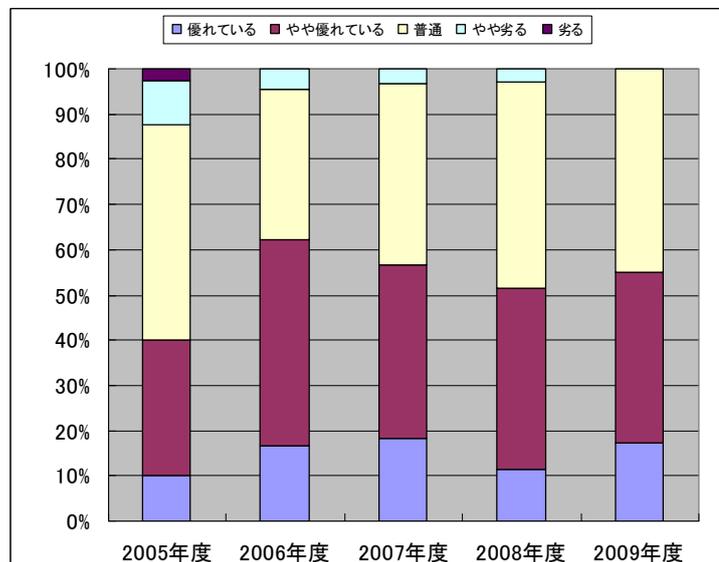
### (9) 卒業生が受けた表現力教育のレベル

2005年度以降「普通」以上の評価が漸増し、2009年度は100%に達している。「やや優れている」以上の評価は2007年度以降減少傾向にある。この3年間「劣る」の評価はなくなり、「やや劣る」の評価も減少し2009年度は0%になった。今後「優れている」「やや優れている」の比率増加が望まれる。



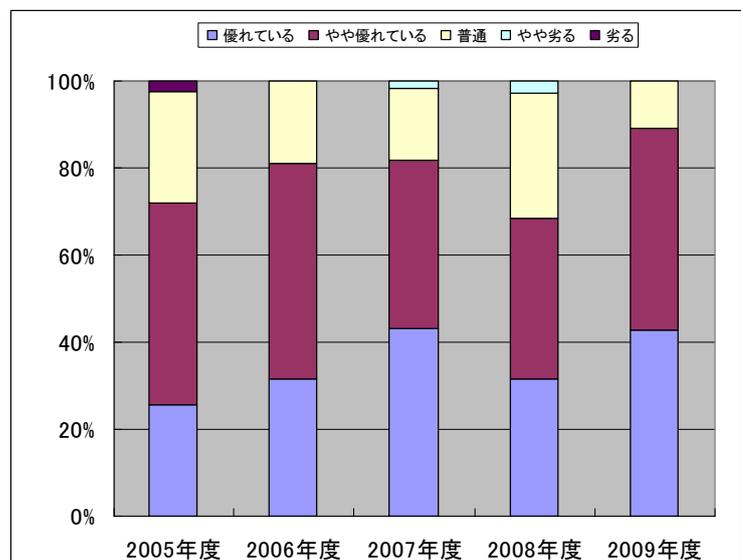
### (10) 卒業生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

コミュニケーション能力に関しては「普通」以上の評価が増加傾向を続けている。2006年度以降95%以上で推移し、2009年度は100%に達している。またこの4年間「劣る」の評価はなくなり、改善の傾向が見られる一方で、「やや優れている」以上の比率は50%以上ではあるが、減少傾向にある。この点、今後注意して推移を観察する必要がある。



### (11) 卒業生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

「普通」以上の評価が95%以上で、「やや優れている」以上の評価が凡そ70%以上で推移している。全体として評価は高いと言える。



2. 貴社・貴機関が九州工業大学 工学部 卒業生に望む事項（卒業生の資質等）がございましたらご記入ください。

「勉学」、「エンジニアとしての素養」といった面で一定の好評価があるが、「コミュニケーション能力」、「表現力」、「語学力」「積極性」、また「基礎学力」「技術的な基礎力」の育成への期待がある。

- ・ コミュニケーション能力向上。仕事に対する能動的な対応。
- ・ 企業が望む事項として、チームワーク性、チャレンジ性、規律性、責任性であり、能力としては、知識・技能、折衝力、判断力、企画力、指導力が必要になると思います。社会人となりまず必要な事はあいさつが出来る事です。
- ・ 英語を中心とするコミュニケーションやプレゼンテーション能力の向上を望みます。
- ・ 弊社においても、将来海外での業務拡大を考えていますので、英語等の語学力のレベルアップを希望致します。
- ・ モノづくりへの情熱
- ・ 高い技術力と専門性の習得に力を注いでもらいたい
- ・ 特になし
- ・ 問題に対する原因究明の真因への探究心と継続力。TOEIC $\geq$ 700への取組み。
- ・ 表現力・コミュニケーション力に更なる力があれば非常に高いレベルになると感じました
- ・ 元気で実直な人材。探求心があり、好奇心旺盛な人材
- ・ 海外での勤務については意識して頂きますので語学学習に対する取組みにはチャレンジしてもらいます。
- ・ 課題解決の応用力を身に付けられるような、授業があれば望ましいと感じました。
- ・ 主体的に課題に取り組むことができる。コミュニケーション能力が高い。国際的な視野を持っている。学生の方を期待しております。
- ・ 更なる課題探求能力の向上を望みます。
- ・ 貴校の卒業生については、教養・専門教育レベル共に高い水準であり、比較的短期間で技術分野の業務の中核を担うことが出来ること迄到達されております。応用力、創造力についても、十分に力を発揮されています。貴校ということだけでなく全体一般的な傾向ですが、コミュニケーション能力(高度な交渉でなく、対話能力)、プレゼン能力(主に、自分の意見を話すこと)にやや劣る傾向がある、というのが新入社員全般に感じられるところです。
- ・ 若者らしい視点で独創的なアイデアを追求し、それをわかりやすく、表現する能力、プレゼンする能力に期待しています。与えられた仕事(役割)を最後まで完遂する強い意志を持った若者が最近少ない様に感じています。(一般論ですが…。)
- ・ 御校に限った話ではありませんが、明朗快活、粘り強く業務に取り組む、等。
- ・ 貴学の学生は知的好奇心に優れ、高い能力を身に付け技術部門の各分野で活動しています。学生らしい視点、広い視野で考える力を養って頂ければと思います。

3. 九州工業大学 工学部の教育に対して、ご意見・ご要望（企業が必要とする人材の専門分野、専門知識等）がございましたらご記入ください。

要望・意見は、以下のとおり業務に応じて多岐に亘る。専門的素養と同時に「分析力」、「判断力」、「行動力」等、総合的な「人間力」への期待がある。

- ・ コミュニケーション能力向上。仕事に対する能動的な対応。
- ・ 弊社における業務では、浄水工学、上水道、下水道等の分野が多いため、それらの専門知識の教育を希望致します。
- ・ これからも優良人材の育成をお願いします
- ・ 技術力と専門性に加え、語学力の強化にも力を注いでもらいたい。社会情勢の把握に努めてもらいたい
- ・ 工学実験における、結果まとめ～考察、発表の強化。専門的知識については、配属部署で活用レベルは、変わりますが、考察力の鍛練は、全ての部署で、役に立ちます。\* 以前も厳しかったですが、会社に入ると、役に立っている気がします。
- ・ エンジニアとしての素養を身に付けることのできる教育の実施。技術的な課題に直面したときのアプローチの仕方。
- ・ 学生のうちから企業等第三者との接点を持って頂き、コミュニケーショントレーニングをして頂ければと考えます。(貴学だけに限ったことではございません)
- ・ より一層、ソフトウェア開発原語による実習を望みます。
- ・ 鋳鉄を中心とした材料系及び、設計、設備管理等を踏まえた機械系の高い専門性を有した学生の方を期待しております。

- ・ しっかりしたカリキュラムに基づいた教育が行われていると感じられます。弊社は水・空気・環境機器のメーカーですので、これらの専門分野をある程度修得した人材を希望するところではありますが、まずは基礎(機械、電気、化学など、それぞれの専門の基礎)の出来た人材が重要と考えます。
- ・ 近年、景観・環境といった分野を志望する学生が多い様に感じます。総合建設コンサルタントとしては、いつの時代にも欠かせない“インフラストラクチャー”の建設と維持管理についてその責任・使命と魅力に興味を持った学生を真に必要としています。
- ・ 企業の性格によって違うと思いますが、スペシャリストよりもジェネラリストを育成して欲しい。※広く、又、ある程度深く。
- ・ 今後とも宜しくお願い致します。
- ・ 技術者としての基礎教育を引き続きしっかりと教育を行って頂きたいと思います。社会人としてのマナーや業務上必要な専門知識は、入社後に教育・育成して参ります。
- ・ 専門知識や専門領域の広さも必要ではありますが、当社としては、その前にある、「豊かな人間性」や「良識」と言った事も是非学内でも教えて頂きたいと思います。

#### 4. 全体としての傾向

2009年度においては「普通」以上の評価が全ての項目において85%を越えている。語学以外の10項目は95%を超え、「理数系」、「専門」、「課題探求能力」、「課題解決能力」、「独創性」、「表現力」、「コミュニケーション能力」、「仕事に取り組む熱意」の8項目は100%であるが、「語学」に対して「やや劣る」「劣る」とした評価に注視する必要がある。

2009年度の「やや優れている」以上の評価は、「理数系」83%、「専門」79%、「課題探求能力」69%、「課題解決能力」69%、「独創性」52%、「構想力」68%、「表現力」38%、「コミュニケーション能力」55%、「仕事に取り組む熱意」89%であり、卒業生は引き続き企業から概ね高い評価を得ていると判断される。しかし、「教養」、「語学」、「表現力」の評価が50%以下と低く、特に「語学」が17%と低く緊急に対処する必要がある。

社会・企業等から要望の高い「語学」、「コミュニケーション能力」については、「普通」以上の評価はここ数年増加し2009年度に100%となった点で改善が見られるが、「やや優れている」以上の評価は、いずれも減少傾向にある。これらの項目で一層の改善をいかに進めていくか、課題が残されている。

## 2. 4 教育達成度評価アンケート：雇用主 (2007年3月以前修了生)

※アンケート実施年月日 平成22年 6月10日

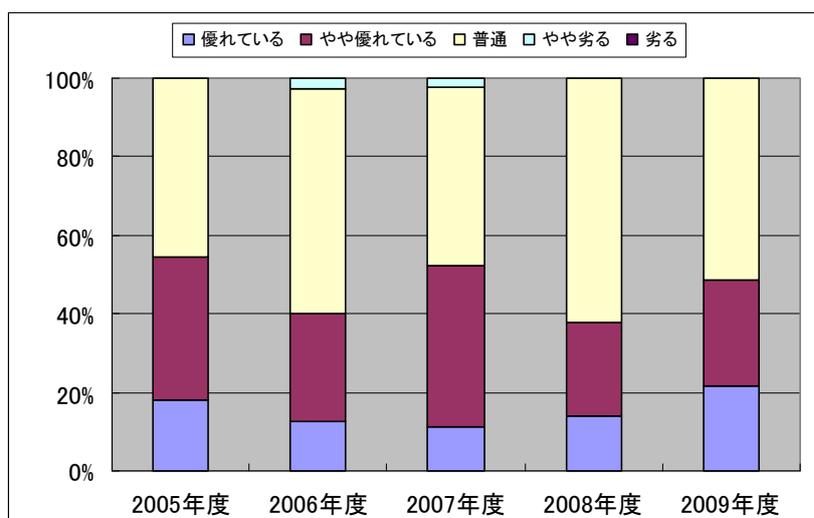
※アンケート回収率

配付枚数	回収枚数 (回答率)
114社	39社 (34.2%)

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

(1) 修了生が受けた教養（人文・社会等の一般教養）教育のレベル

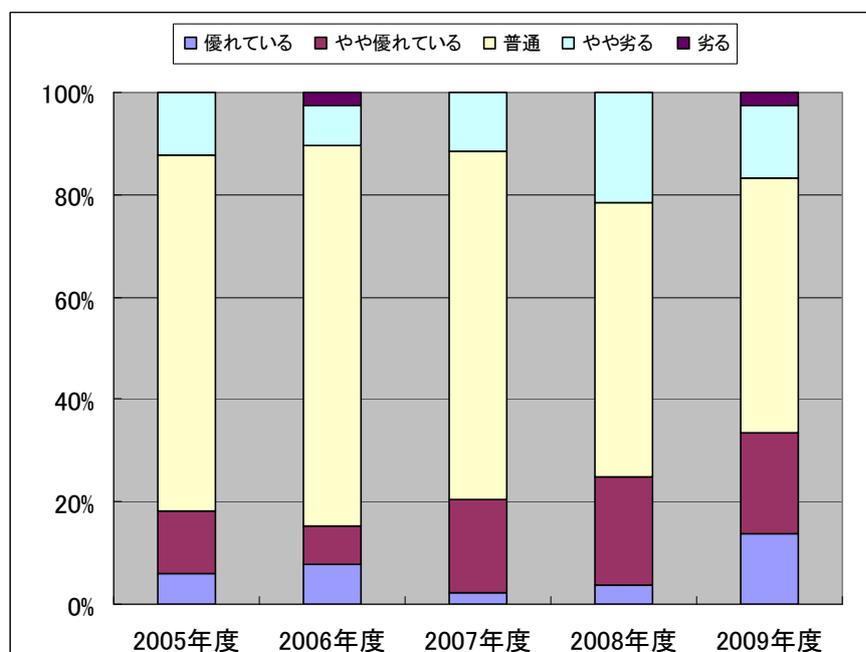
「やや優れている」「優れている」の評価が40%～55%で推移している。全体として企業側の評価はこのレベルに定着しているとみられる。



(2) 修了生が受けた語学（特に英語）教育のレベル

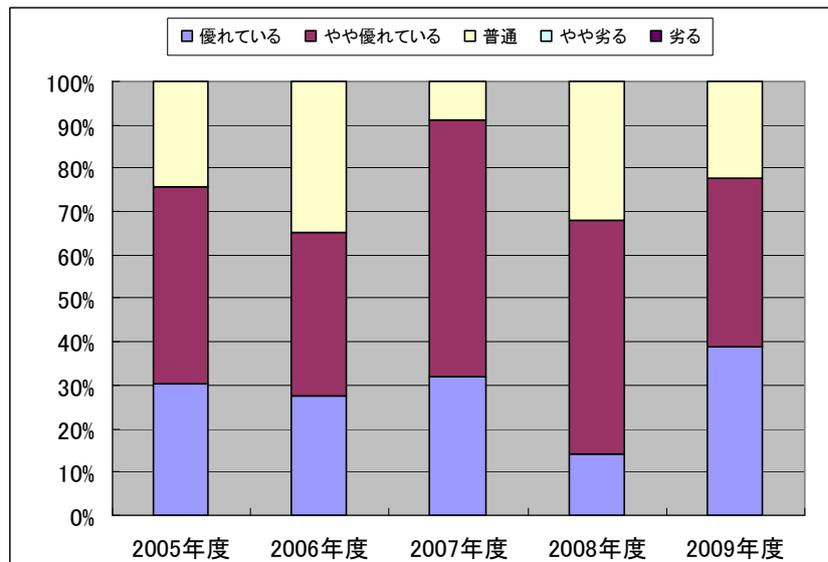
「普通」以上の評価が過去2年間80%前後で推移している。

「やや優れている」以上の評価はこの4年間増加傾向にあり、2009年度は32%となった。しかし、この数値は「教養」、「理数系」等と比較すると低い数値である。着実な改善への対策が必要であると考えられる。



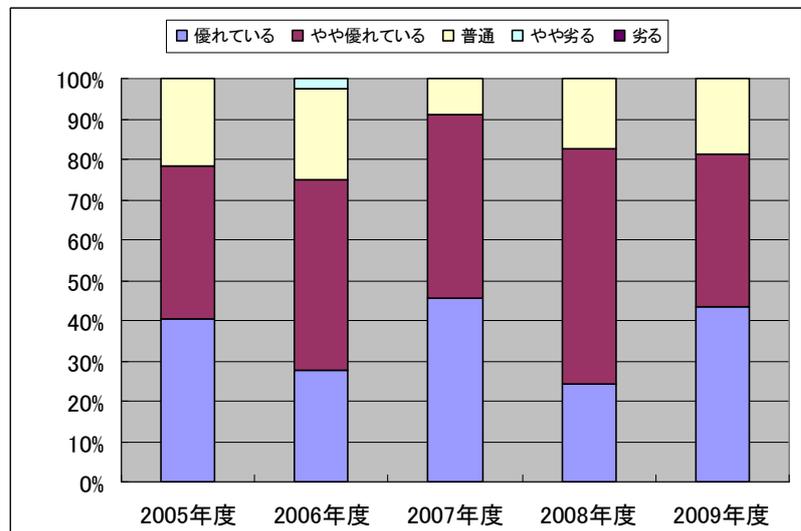
(3) 修了生が受けた理数系(数学・物理・化学)教育のレベル

「優れている」「やや優れている」の評価は、2007年度を除けば2005年度以降65%以上で推移しており、全体的に企業側の評価は高いものと判断される。



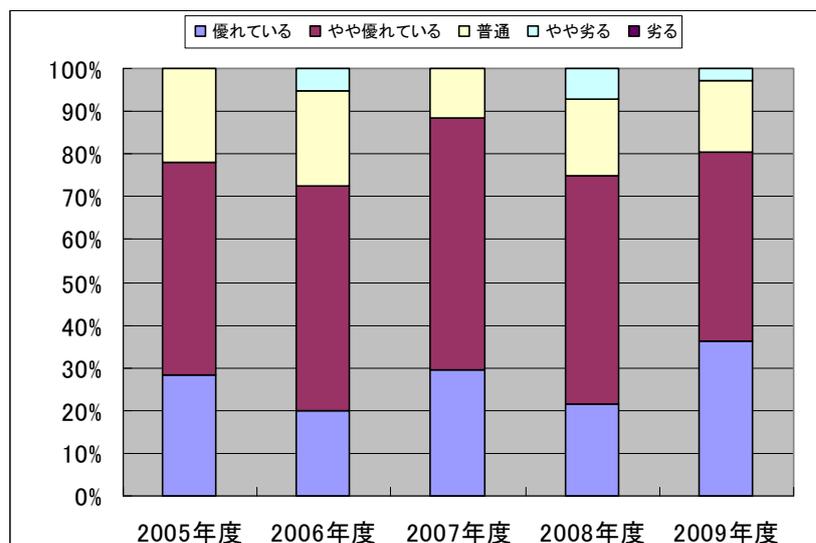
(4) 修了生が受けた専門教育のレベル

2007年度以降「普通」以上が100%である。また「優れている」「やや優れている」合計の評価は、2007年度以降80%以上である。「優れている」の評価に隔年ごとにジグザグな変動が見られるものの企業側の評価は極めて高いことがわかる。



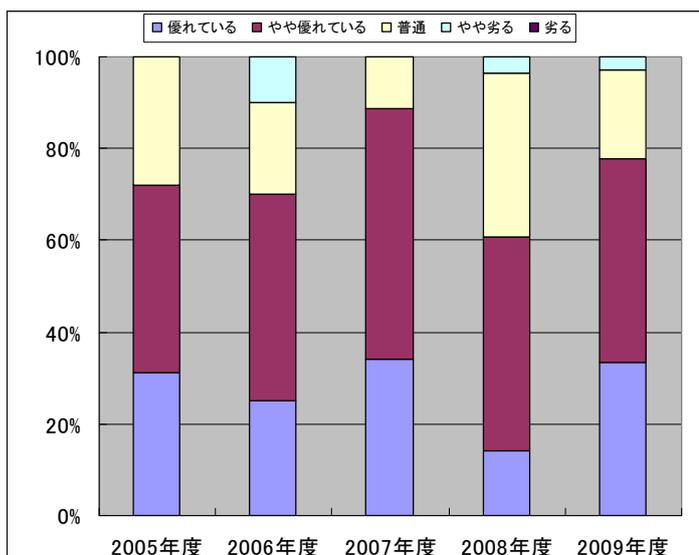
(5) 修了生が受けた課題探求能力教育のレベル

「やや劣る」の評価が2009年度には3%あるが、「やや優れている」以上の評価は2005年度以降70%台以上で推移し、2009年度は80%であった。2007年度には89%と突出した年もあり、企業側の評価は概ね高いと判断される。



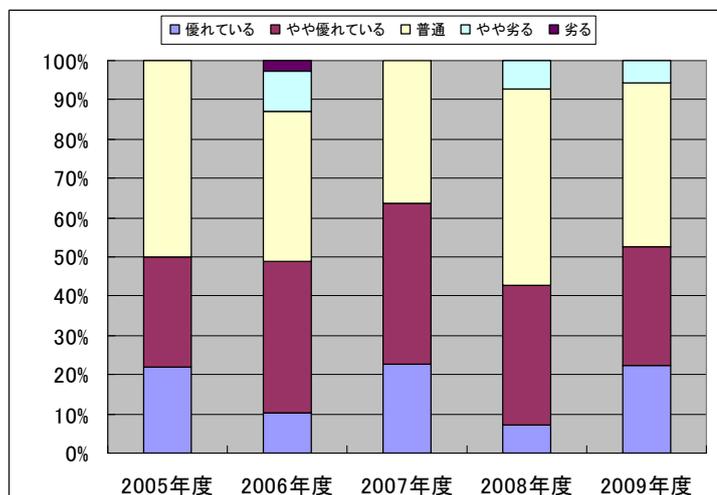
(6) 修了生が受けた課題解決能力教育のレベル

「やや優れている」以上の評価は2005年度～2007年度に70%以上で推移しているが、2008年度は約60%程度と減少後、2009年度は78%に増加した。「普通」以上の評価は97%で2008年度とほぼ同じである。2007年度が突出している傾向が見られるが、母集団の特性の年度変化といった要因を考慮する必要があると思われる。



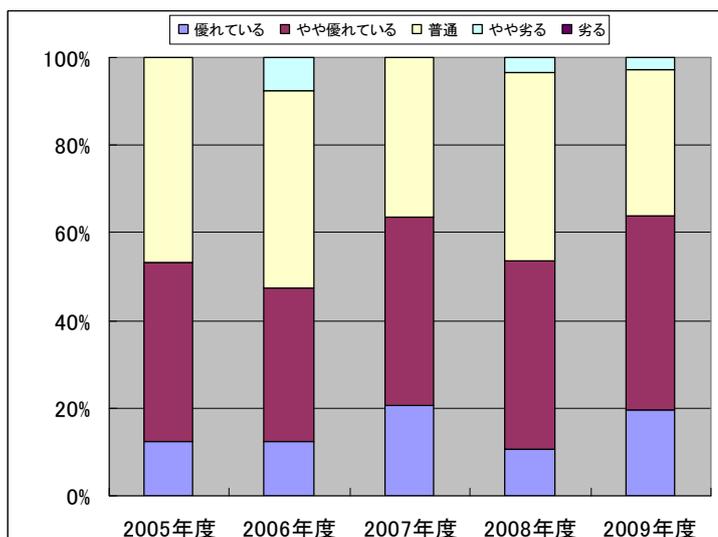
(7) 修了生が受けた独創性教育のレベル

2009年度は「普通」以上の評価が94%であり、「劣る」は0%であった。2005年度～2009年度の「やや優れている」以上の評価はおおよそ50%以上で推移しているが、2008年度だけ前年度から20%ほど減少して43%となっている。引き続き、継続的な工夫が必要であろう。



(8) 修了生が受けた構想力教育のレベル

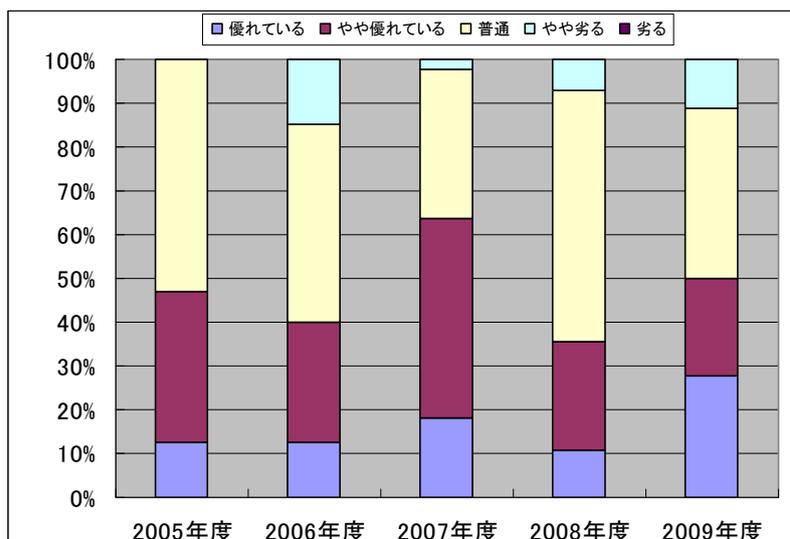
2007年度が比較的好結果となっているが、2009年度を含めてその他の年度はおおよそ同様の傾向を示している。2009年度は「普通」以上の評価が98%で、「やや優れている」以上の評価は64%程度であった。「やや劣る」の評価が3%程度あるが、まずまずの評価と言ってよいであろう。



### (9) 修了生が受けた表現力教育のレベル

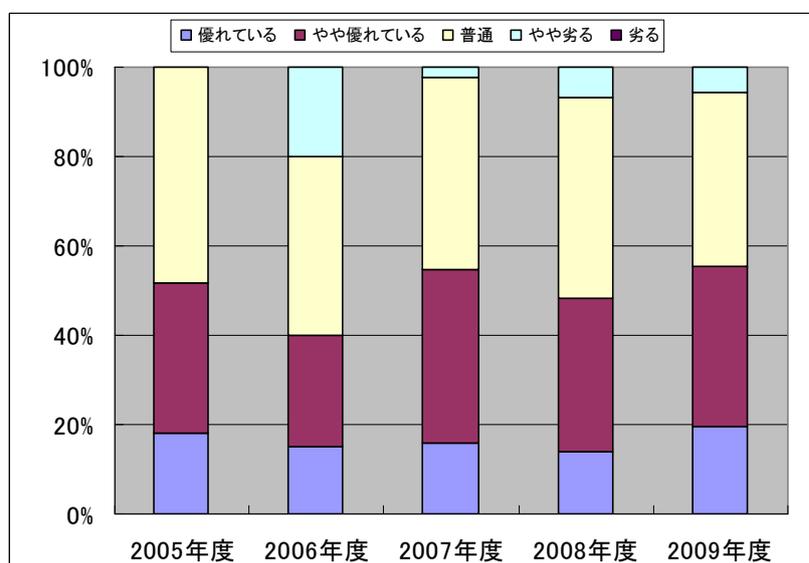
多くの項目でジグザグの傾向が見られるが、「普通」以上の評価は概ね90%で推移している。

「やや優れている」以上の評価は2007年度に64%と高い値を示したが、その他の年度は概ね40～50%の範囲で推移している。継続的な対応が必要であろう。



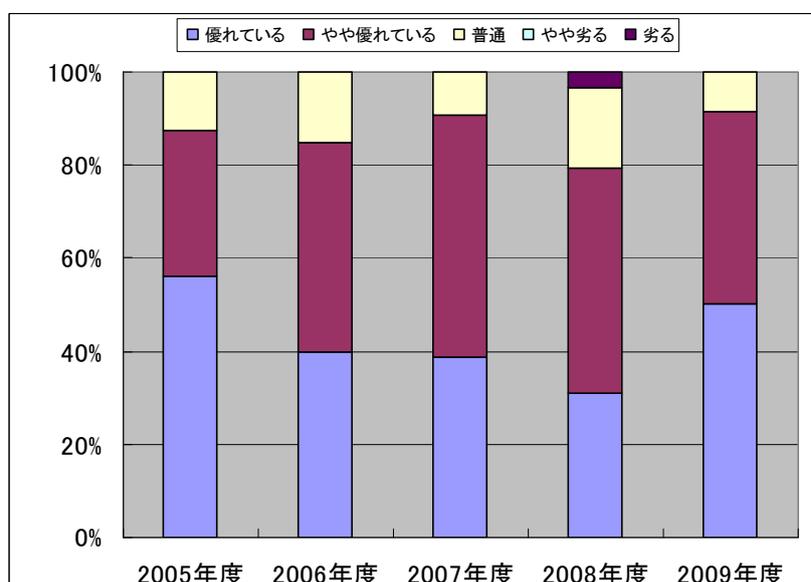
### (10) 修了生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

2009年度の「やや優れている」以上の評価が前年度から5%ほど増加し56%であり、「普通」以上は94%である。今後「普通」以上が100%に、また「やや優れている」以上が着実に増加するよう工夫が必要であろう。



### (11) 修了生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

2005年度以降「やや優れている」「優れている」を合わせた評価はほぼ80%以上の数値を確保している。「普通」以上の評価は、2008年度を除き100%であり、全体的に本学の修了生は企業から高い評価を受けていると考えられる。また2008年度に「劣る」の評価が3%ほどあった。



2. 貴社・貴機関が、九州工業大学 大学院工学研究科 修了生に望む事項（修了生の資質等）がございましたらご記入ください。

キーワードとして列挙する。「主体性」、「積極性」、「人間力」、「コミュニケーション力」、「幅広い視点」、「意欲」、「課題解決能力」、「好奇心」、「チャレンジ精神」等。また同時に「理数系及び専門分野の基礎教育レベルの充実」、「体系的で幅広い基礎知識」習得への期待がある。学部卒業生と比較して修了生の評価は概ね高いと言える。

- ・ 専門知識に加え、人間性(協調性、積極性、善悪判断等)を持った人材を採用したいと考えております。
- ・ 現状でもよく教育されていると感じますが、引続き、社会に出て活躍する意欲を高く持ってもらえればと思います。
- ・ 経済産業省の提唱する「社会人基礎力」が、新入社員に求めるものと言えます。専門知識の前段階として、まずは「社会人基礎力」を身につける教育を徹底的に行なっていただければと考えます。
- ・ 大学で勉強する内容が、そのまま実務で活かされる事は少ない訳ですが、大切なのは、基礎学力(能力)と真剣(真面目)に取り組む姿勢だと思います。大学での研究活動はそのような姿勢を磨く良い活動だと思います。
- ・ 課題を深く追求していく姿勢は重要ですが、それに対する執着心と、特に、自らが考え、課題を創出していけるセンスが欲しいです。加えて、語学を含むコミュニケーション能力は不可欠。
- ・ 最後まで原因をつきとめる探究心。自分が先頭となって行なうリーダーシップ
- ・ 優れた人材に来て頂いたと感じております。長所をのばす方針が活かされているように感じます。その点が良いと思います。
- ・ 理数系、専門知識は、非常に高いレベルで教育されていると感じております。この知識を、業ムへ充分に発揮できる様、問題解決の手法、課題ばらし、分析方法の育成を実施しています。
- ・ より広い・深い技術的探求心。技術探求と業務成果のバランス感覚。
- ・ 九工大卒の社員は総じて優秀で大変役立っています。
- ・ モノづくりへの情熱
- ・ 基礎学力を十分に備えてほしい。
- ・ 発想力(企業でのものづくりに必要)。機転(業務のスムーズ化)。協調性・素直さ(仕事を覚える速さ)
- ・ グローバル人材育成に向けた語学(英語)のトレーニング。自分で問題を解決できる能力。
- ・ 一定レベル以上の能力・知識を持っていれば、差が出る部分は課題(仕事)に対する熱意だと考えており、今後とも熱意ある九工大生を社会に輩出して頂ければと思います。
- ・ 現状のままで満足しております。当社では各個人が目標のために必要なことを考えて行動できる方、やる気のある方を求めていますので、該当する方であれば本人の人柄重視で判断いたします。
- ・ 論理的な考え方ができ、第三者に分かりやすく説明する力を保有している学生。遠慮することなく、自分の考えをはっきりと述べるができる学生。
- ・ 充分能力を活かしていると思いますので、これ以上特に望むことはありません。
- ・ 大学で学んだ専門分野に固執するのではなく、そこで学んだ方法論を他の技術分野にも柔軟に応用できる好奇心豊かな人物を育成して頂きたい。
- ・ 研究に対する意識・意欲・スキルの高い方が多いと理解しています。今後は少子化となり、売手市場にはなってきますが、よりハングリーな外国人が国内にも増えてくることとなります。グローバルな視点で世界で通用する技術を身につけ、個性・アイデンティティをしっかりと持てる人材となることを学生時代から意識していただきたいと考えます。
- ・ 与えられた研究に取り組むのではなく、主体的に問題意識を持ち、研究に取り組む姿勢を身につけさせて欲しい。文章力、コミュニケーション能力の向上施策へ取り組んで欲しい。英語力の強化へ取り組んで欲しい。
- ・ それぞれの分野の基礎をしっかりと身につけて欲しい
- ・ これからも明るく忍耐強い学生を創出して下さい
- ・ 英語力の向上(苦手な人、TOEICスコアが低い人が多い)。積極性(大学でのことなら自分の専門・研究について。その他プライベート。仕事に対して。など)
- ・ 御校に限った話ではありませんが、明朗快活、粘り強く業務に取り組む等。
- ・ 特にございません。弊社に入社して頂いた修了生は、非常に優秀な人材ばかりで、即戦力として活躍しております。今後とも、ぜひ貴大学より採用をしていきたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。
- ・ 今後、会社としては更なるグローバル化へ向かうこととなります。出身分野によっては英語力に非常に優れていますが、全体的に語力をUPされるとより即戦力となると思われれます。
- ・ 貴大学から敝社に来られている社員は、総じて、優秀であると感じています。特にしっかりと自分の意志、意見を持ち、周囲の雑音に左右されない方が多いと思います。そうした方々を通じ、今後貴大学との間で、いろいろと協力関係を築いていければと思います。

### 3. 九州工業大学 大学院工学研究科の教育に対して、ご意見・ご要望（企業が必要とする人材の専門分野、専門知識等）がございましたらご記入下さい。

キーワードとして、「コミュニケーション能力」、「粘り強さ」、「課題解決能力」、「基礎学力」、「専門知識」、「幅広い知識」が挙げられる。また、「(修了生の) 研究レベルの維持・向上」への期待がある。

- ・ 人間性を高める教育の実施。
- ・ 今後生産年齢人口が減少していく中、少ない人材で企業を運営していくには既存の技術だけでなく、新しい材料、新しいアプローチが求められると思います。
- ・ 経済産業省の提唱する「社会人基礎力」が、新入社員に求めるものと言えます。専門知識の前段階として、まずは「社会人基礎力」を身につける教育を徹底的に行なっていただければと考えます。
- ・ 機械・電気・材料等の知識を有する人材を希望します。更に知識ではありませんが、新しい技術知識を貪欲に吸収しようという熱意姿勢がある方を希望します。
- ・ 専門知識そのものの習得より、新しい未知の課題に対してどう取り込むか、という“プロセス”を是非学んできて頂きたいです。(大学での専門が会社でそのまま使えることの方が少ないので)
- ・ 統計学。
- ・ 土質力学(圧密、動的特性)、強震動予測、地下水解析の分野に強い、(あるいは専門とする)人材を望んでいます。
- ・ 最近の本人の状況を見ていると、非常に努力しているのは、理解していますが、コミュニケーション能力が、不十分に感じています。
- ・ 制御コースについて。プログラミングやシミュレーション等のソフトだけでなく、ハードを含めた制御システム全体としての知識が修得できると良いと思います。
- ・ 年度によって必要とする分野は異なりますが、現状は機械系を中心に展開しています。
- ・ これからも優良人材の育成をお願いします
- ・ 要望の一例ですが、塑性加工(樹脂成形、プレス、アルミダイキャストの加工)技術において付加価値の高い応用技術教育を進めて頂けると有難いという意見があります。
- ・ 一般常識、語学力。材料工学、化学工学。
- ・ 半導体に関する専門領域を習得できるカリキュラムや設備の充実。
- ・ 個人差はありますが、専門知識に偏りがちな面(卒業後の仕事ぶり)を、より行動面に生かせるような教育を希望します。
- ・ 一般的に理数系の能力は優れていると思いますが、これからのことを考えるともう少し語学力を付けるようにさせてはと思います。
- ・ 在学のうちにTOEIC受験をすすめて下さい。
- ・ 今後とも宜しくお願い致します。
- ・ いつも優秀な学生を紹介いただきありがとうございます。
- ・ 敝社は、土木構造物の設計を中心に事業展開していますが、最近いわゆる工学部的な基礎知識を疎かにし、観念的な議論に終始する学生が多く見受けられます。(これは貴大学に限ったことではありませんが…)世の中の流れと関係なく、物事の原理原則を大事にしなければならない事を、教育していただければと思います。

### 4. 全体としての傾向

2009年度における「普通」以上の評価は、「教養」100%、「語学」83%、「理数系」100%、「専門」100%、「課題探求能力」97%、「課題解決能力」97%、「独創性」94%、「構想力」98%、「表現力」89%、「コミュニケーション能力」95%、「仕事に取り組む熱意」100%であり、ほぼ例年通りと言える。また、2009年度における「やや優れている」以上の評価は、「教養」48%、「語学」32%、「理数系」77%、「専門」81%、「課題探求能力」80%、「課題解決能力」78%、「独創性」53%、「構想力」64%、「表現力」50%、「コミュニケーション能力」56%、「仕事に取り組む熱意」91%であり、2008年度より全体的に多少増加している。特に、「理数系」、「専門」、「課題探求能力」、「課題解決能力」、「仕事に取り組む熱意」と高い評価を得ている。語学では「やや優れている」以上の評価が2006年度から毎年5%程度増加して2009年度に32%となり、改善の傾向が見られるが、同時に「劣る」の評価が3%存在する。もとより母集団に英語が不得意な傾向があるが、「教養」、「理数系」、「専門」の評価に比べてかなり低いレベルにあり、着実な改善への工夫が必要であろう。また、「語学」以外に、「やや優れている」以上の評価が50%を切っている「教養」の強化も課題であろう。

## 2. 5 教育達成度評価アンケート：卒業生 (2007年3月以前卒業生)

本節(2.5)と次節(2.6)では、まだ、九州工業大学工学部及び大学院工学府(旧工学研究科)における教育効果が残っていると思われる入社後3年程度を経過した本学卒業生・修了生を対象に、彼らが大学時代に受けた教育レベルと満足度に対するアンケート調査を実施し、その結果をまとめています。

※アンケート実施年月日 平成22年 6月10日

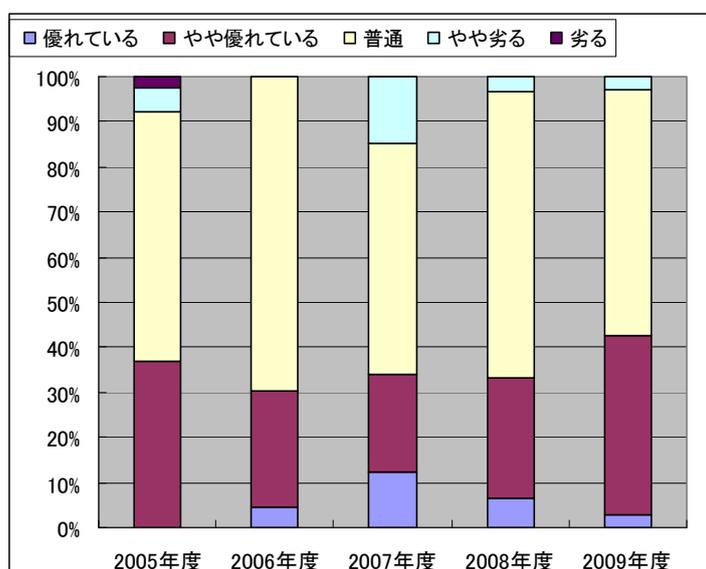
※アンケート回収率

配付枚数	回収枚数(回答率)
149名	33名(22.2%)

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

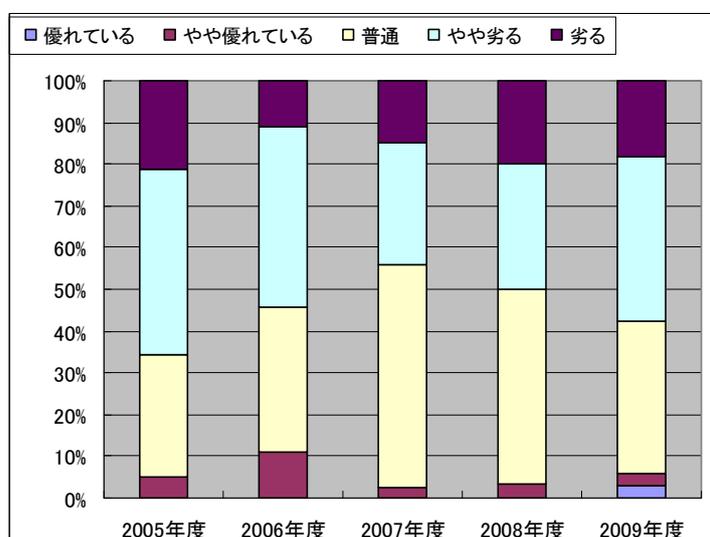
### (1) あなたが受けた教養教育 のレベル

2009年度は、「普通」以上の評価が前年と同程度の97%になった。「やや劣る」は3%程度あり、教養教育レベルは概ね肯定的評価を受けていると判断される。「やや優れている」以上の評価は2009年度で43%あり、今後さらに向上させるための改善が必要であろう。



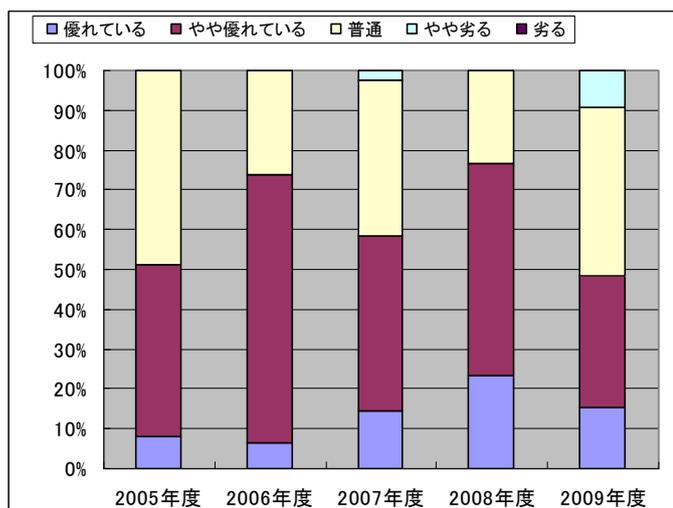
### (2) あなたが受けた語学(とくに英語)教育のレベル

「普通」以上の評価が2009年度42%、「やや劣る」以下の評価が58%となった。「やや劣る」以下の評価は2007年度以降増えており、緊急に解決する必要がある。



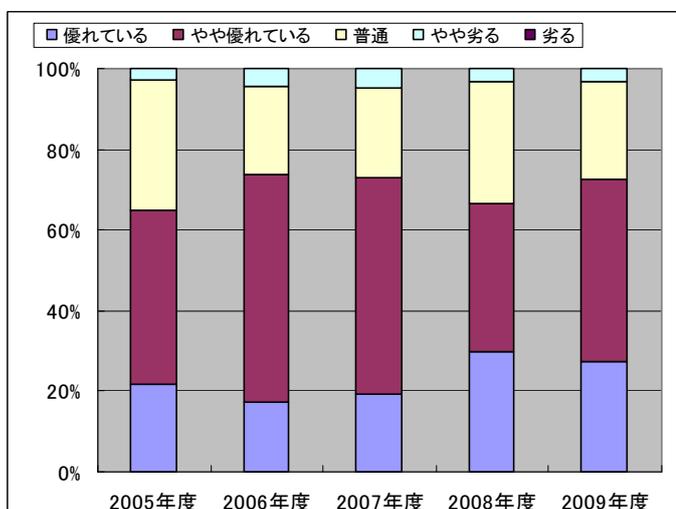
### (3) あなたが受けた理数系教育のレベル

2008年度は75%程度にまで伸びている。また「優れている」については倍増しており、理数教育のレベルが高く評価されていることがわかる。しかし2009年度においては「優れている」「やや優れている」が2～3割減り、「やや劣る」が1割程度増えているおり2005年当時の評価に戻った感がある。



### (4) あなたが受けた専門教育のレベル

2008年においては「優れている」のみについては5割程度増加している。学生によっては高く評価しているものが増えていることがわかる。2009年度においても「優れている」「やや優れている」が全体の75%を占め依然高く評価されていることがわかる。

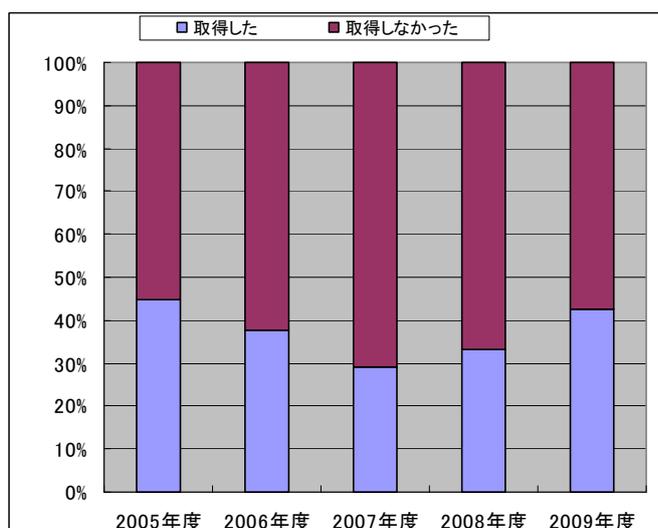


### (5) あなたは入社後資格を取得しましたか？

○入社後取得した資格（具体的に）

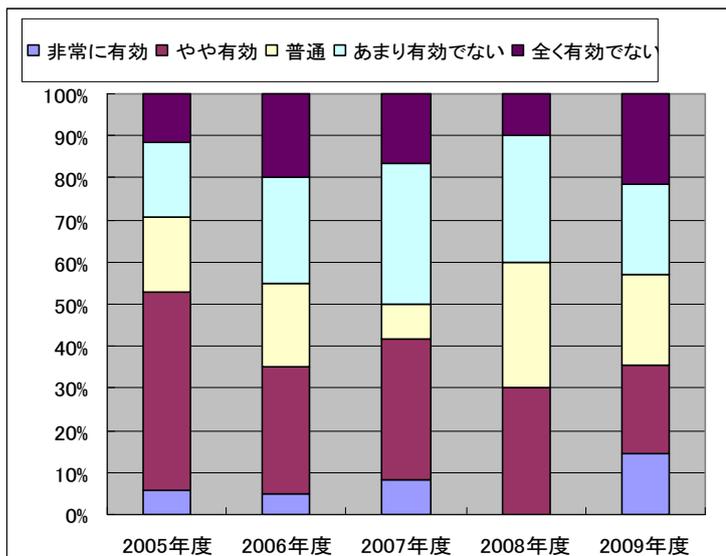
- ・ QC検定
- ・ ガス溶接技能者、酸欠
- ・ 中国語検定4級
- ・ 電気工事士
- ・ VEリーダー(VEL)
- ・ 危険物取扱者乙種第四類
- ・ 危険物取扱者甲種、溶接管理技術者一級
- ・ 基本情報処理、ソフトウェア開発技術者
- ・ 技術士補、測量士補、環境計量士、公害防止管理者、下水道技術検定
- ・ 危険物取扱者/乙4、エネルギー管理士/電気
- ・ 技術士補
- ・ 消防設備士乙6、危険物取扱い乙4

2008年度より10%程度増加していることがわかる。今後、資格に関する意識を高める教育も必要と考えられる。



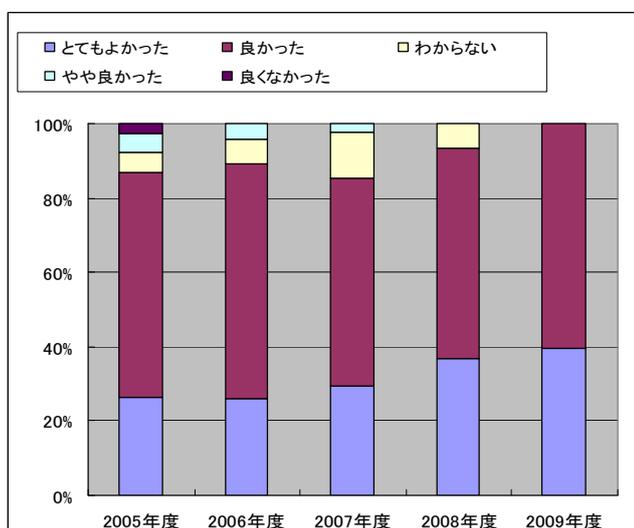
(6) 資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

2008年では「全く効果がない」と「非常に有効」が同じ比率で増えている。卒業生が本学の教育が資格取得に必ずしも有効であったと必ずしも評価していない。有効でなかったとの評価に関しては資格の種類（例えばフォークリフト等）と大学教育のマッチングの問題等も関与しているものと考えられる。



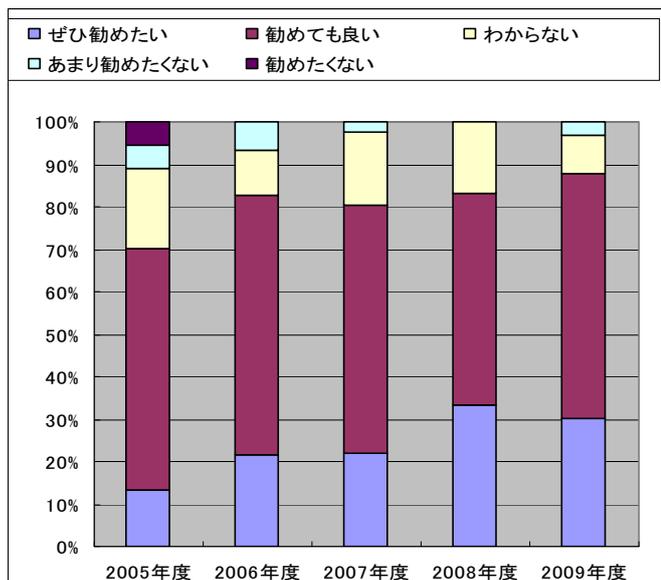
(7) あなたは、九州工業大学工学部を卒業してよかったと思いますか？

「とても良かった」「良かった」の評価が100%にまでに達した。ほぼ全ての卒業生が今の仕事を続けていく上で、本学で受けた教育の成果を肯定的に考えている。



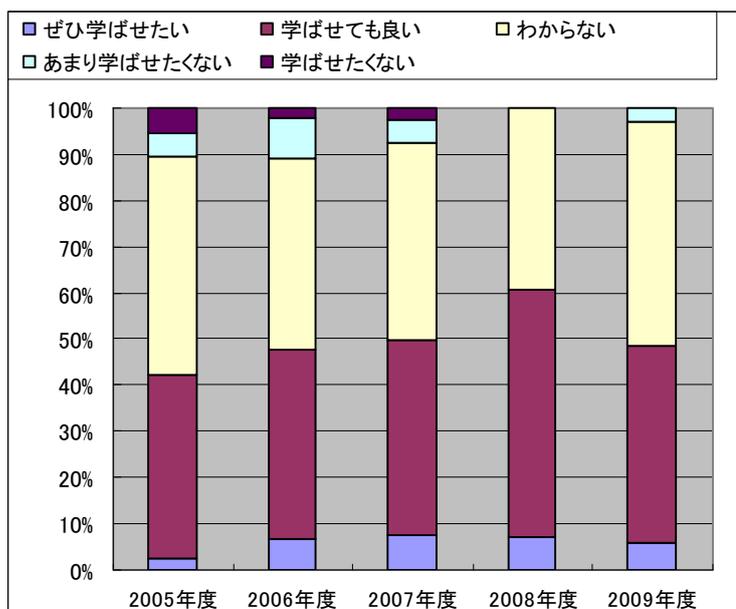
(8) あなたは、九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思いますか？

「ぜひ勧めたい」「勧めても良い」の割合が9割程度にまでに伸びた。就職者は九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思う傾向がさらに上昇している。



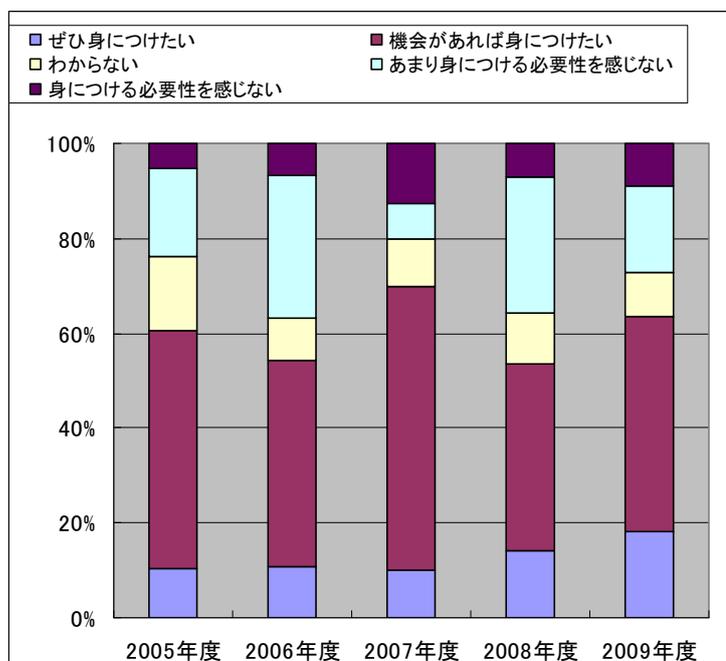
(9) あなたは、将来、子供ができたら、九州工業大学に学ばせたいと思いますか？

「ぜひ学ばせたい」、「学ばせても良い」の割合は50%程度にまで減少している。九州工業大学工学部を後輩に勧めたいと思っている90%と比べてかなり低い。これは、子供に対してより慎重になる結果と思われる。「わからない」の割合は、50%にまで増加しており、より魅力ある大学にする努力が必要である。



(10) あなたは、更に高度な学力(修士、博士)を身につけたいと思いますか？

「あまり身につける必要性を感じない」「身につける必要性を感じない」の割合が依然3割程度あるが、高度な専門性を「ぜひ身につけたい」と考えるものが2割程度にまで増えている。以上より2極化の傾向がさらに進んでいる。



## 2. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して良かった点がありましたらご記入下さい。

九州工業大学で学んだことが十分職場で役立っている。特に研究室に入ってから研究と教育によって習得したことが有効であったと考えられる。専門教育や実験実習の満足度は高く、研究指導では学術面の指導のみならずサークルや共同研究を通じての有意義な人的交流も特筆されている。就職者が工学部に在学して良かったと述べている事柄は今後も継続していく必要がある。

- ・ 専門的な知識を幅広く学べた事。歴史がある所。
- ・ 尊敬できる先生、先輩に出会えたこと。今の職場に就職できたこと。
- ・ 電気工学の基礎知識を修得できたこと。
- ・ 就職に大変有利なのは自分にとって良かった。研究も最先端であり、大変やりがいがあった。
- ・ 単位取得が難しかったので、必死になって勉強した。進級要件が厳しかったので、学友たちと協力し合って勉強できたのが良かった。

- ・ ネームバリューがある。テスト等いい結果を残さなければ、留年などの可能性があるため緊張感のある学生生活を送れた。
- ・ プログラミング等、専門知識を学ぶ事ができた。
- ・ 専門性が特に活かせていないのですが、考え方等に関しては少しは身につけているかと、思います。
- ・ 1. 知能制御実験(ロボカーレース)、2. 卒業研究(ウェブ張力制御実験システムの構築)において、実際にシステムを組んでいくという作業を経験できたことは、今の職種(生産技術)に非常に役立つと思う。また、外国人(ニコラ・イヴァン・ジャブカーロ氏)と共同で研究をしたという経験も今の業務(海外への生産ライン展開)に有益だったと感じる。大学で上記のような良い経験をしたこと、また、小倉でよく遊んだ思い出も工学部に在学して良かった点である。
- ・ 演習、実験が多く、実機に触れる機会が多かったため、ものの実際の動き、理論だけではない部分を肌で感じる事ができたこと。
- ・ 最先端の分野の全く新しい事にチャレンジできた事です。
- ・ 実験による学習が多く、資材が豊富だった。図書館に入門書・参考書が豊富だった。単科大学の割に敷地が広く、グラウンド、体育館、プール等の運動施設を利用できた。卒業してからも交流を続けている友人、先輩、後輩がいる。
- ・ 大学で学んだ専門教育は、就職してからも非常に役に立っています。大学で使用した教科書は今でも業務遂行の助けになっています。各先生方の厳しい御指導のおかげで忍耐力が付いたと思います。私の代の話ですが就職先が多かったこと
- ・ 社会に出てからも通用する専門的な勉強ができたこと。
- ・ 専門的知識を十分に習得できた事はもちろん、様々な人達との交流が深められた事。
- ・ サークル活動を通して、素晴らしい仲間ができ、コミュニケーション能力や協調性が高められたこと。人文科目「哲学」「法学」で、高い倫理観を持てたこと。(社会に貢献したいという気持ちが強まった。)
- ・ 大学らしい落ちついた環境で勉強、生活ができて良かった。
- ・ 専門分野の知識が身についた
- ・ 専門文野の教育(先生)が優れている点が良かったと思います。
- ・ 建設社会工学科は、他学科に比較して少人数である分、チームワークや礼儀等が自然に身につく。授業が分かり易い。部活動・サークル豊富。
- ・ 専門科目が充実していた。実験数も多く、理論との結び付きを体感できる。
- ・ 専門分野でのレベルの高い講義を受ける事ができたので、業務で役立つことが多々ある。
- ・ 就職が他大学と比べて有利だったこと。実験設備が充実していること。
- ・ 工学部においては、専門分野は、非常にレベルの高い(分野が豊富、専門性が高い)と感じ、卒業後誇れる学力を見に付けることが出来ました。
- ・ 教科書だけの授業に捉われず、実験・実習により、視覚的に物事を観察することにより、問題解決への近道となった。
- ・ 製図の知識が得に役に立っている。

### 3. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して不満を感じた点、こう改善すべきだと感じた(例えばこういう技術(科目)を教えてほしかった)点がありましたらご記入ください。

学部の教育の目的や課程と日常の会社業務遂行に必要なとされる能力や資格の差異については本人の意識も截然としていないため、アンケートには「不満」として表れてしまったように見受けられる。特に卒業後の業務内容との関係で一般教育や専門科目に対する要望が示されている傾向にあり、そのため実践的教育を望む声が多い。大学教育における論理的思考能力の育成という基本的課題との調和を図りながら、英語教育、実験・実習など実践的科目のより一層の充実が求められている。

- ・ ものづくりのフロー。品質保障の考え方(統計的な考え方)。
- ・ 1. 入社して感じたこと。理論は分かるが、実際の作業になると、できない事が多い。実技の場を増やし、物事を根本から理解する力を養うことができればよかった。2. 改善すべき点。選択科目で構わないので、wordやexcelなどのデータ処理能力を向上できる講義があれば、良かったと思う。
- ・ 資格取得の為のセミナーの定期開催。(PCスキルアップ目的、専門知識向上のため)
- ・ 英語については全てイマイチ。会社で“大学生生活の勉強の大切さ”を訴えてくれる授業があれば良かった。企業、工場見学(あったと思うが数、種類が少ない)
- ・ 語学については、もう少し力を入れて良いと思う。日頃の業務の中でも、もっと語力(英語)があればと思う場面が多々ある為。
- ・ 1. 製図知識。私は制御工学コースだったので、製図は必修ではなかった。入社後、製図知識は必須だったので、在学時に履習していればと思った。ただし、難しい図面である必要はなく、簡単なシャフトやブロックを加工方法、公差(精度)について考慮して製図できるレベルの教育が必要だと思う。2. 生産設備の電気知識。一般的な機械で用いられるリレー、シーケンサー等の電気知識を講義の中に取り入れてほしかった。特にシーケンサー、シーケンス制御は製造業では広く使われているものなので実験・実習で実際に触れて学ぶことが必要である。
- ・ 自分の積極性がなかったことが要因ではあるが、資格試験の斡旋が多くあった方がよかったと思う。
- ・ 自分は若松のひびきのキャンパスの1期生でした。入学当初は、校舎もなく、研究室の机やイスも無い状態だったので実際に研究が動き出したのが遅かったですが、それは仕方の無い事かなと思います。論文を読む事が多かったのも、もっと専門的な英語力を身につけたかったです。

- ・ 社会に出てから役立つことは研究室に配属されてからの方が多くありました。学部生の早い時期から研究室に触れる機会がもっと多くあればと思います。
- ・ 大学で学んだ専門分野を生かせる職は少ない。専門分野よりも英語の方が断然必要です。九工大は英語のレベルが低い。英語の教育ももっと力を入れるべきだと思います。
- ・ 油圧(空圧)技術(油圧システム、回路設計)
- ・ 研究成果の発表(プレゼンテーション)機会がもっと増えると良いと思います。
- ・ 専門科目の講義は、学生数が多いのも一因あると思うが、先生の一方的な話が多かった。将来のビジョンや目標が明確でないと、つらい学生生活となりうる。もっと1年次に「大学の意義」「カリキュラムの主旨」といった詳細の説明をしたらよいと思う。
- ・ 自分で努力すべきかもしれませんが、このような技術(科目)を勉強すると、何の役に立ち、何が出来るようになるのかなどを先に紹介すると、理解しやすいと思います。
- ・ 英語(語学)力。プレゼンテーション能力向上(スキルアップ)。
- ・ 専門文野の実験等が3回生からはじまるが、2回生くらいからやりたかった。また、現場に触れる機会が少なかったと感じる。
- ・ 上下水道(特に降雨強度)関連の授業。材料工学(コンクリートばかり取り沙汰されるが、アスファルトや砕石等の材料も学びたかった)
- ・ 設計製図でのCADを利用した講義を積極的に取り入れてほしかった。CADを用いた講義もあったが、基本的には手書きが主であったため。
- ・ 入社して困ったことはExcelとCADの使い方があまり分からなかったことなので、大学の講義で学ぶ機会があれば良かったと思います。
- ・ 入試から語学(特に英語)の能力を求められていないことがあり、生徒も語学にあまり興味がない人のあつまりになってしまっているものだと感じました。(意識が低い。)英語力がつくようなカリキュラムがあった方が良いと思います。(入試でのWeightを大きくなど)
- ・ 学科の名前が機械科でないため、資格取得の際に科目免除にならない場合がある。

#### 4. 全体としての傾向

回答のあった卒業生は33名(回答率22.2%)であった。同じような事柄について問2の「在学して良かった点」と問3の「不満を感じた点」で相反する形の回答も散見され、各人の在学中や就職後の充実感・手応えと言ったものが多様であること、また卒業生の向上心が高いことを反映している。

学部教育と大学院前期、そして大学院後期の教育の目的と実社会の業務遂行における能力・資格の差異が本人にも截然と意識されていないためアンケートには「不満」として表現されてしまったような部分が見受けられる。

大学教育における論理的思考能力の育成という基本的課題との調和を図りながら、英語教育、実験・実習、プレゼンテーションなど実践的科目のより一層の充実が求められている。

## 2. 6 教育達成度評価アンケート：修了生 (2007年3月以前修了生)

※アンケート実施年月日 平成22年 6月10日

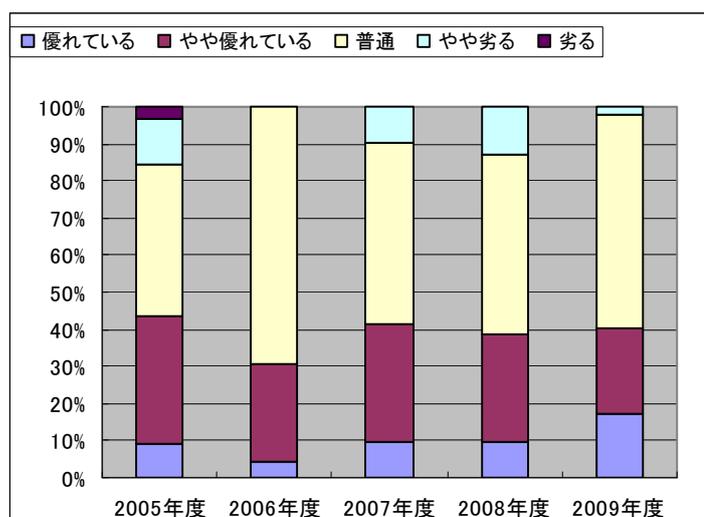
※アンケート回収率

配付枚数	回収枚数(回答率)
156名	47名(30.13%)

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

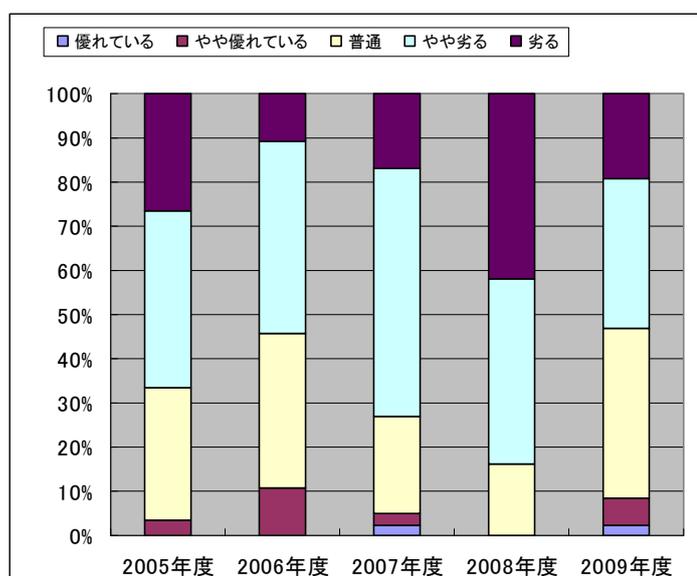
### (1) あなたが受けた教養教育のレベル

2009年度は「優れている」と「やや優れている」の割合が2008年度とほぼ同程度であったが「やや劣る」の割合が大幅に減少しており、教養教育のレベルについては肯定的に評価されている。



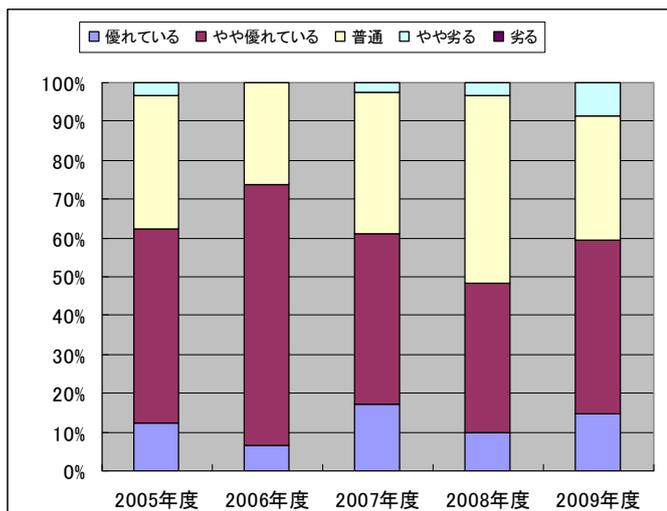
### (2) あなたが受けた語学(特に英語)教育のレベル

英語等の語学教育については、現状の批判的評価が前年度より減少し肯定的評価も少し出てきたが、今後も英語教育を改善する必要がある



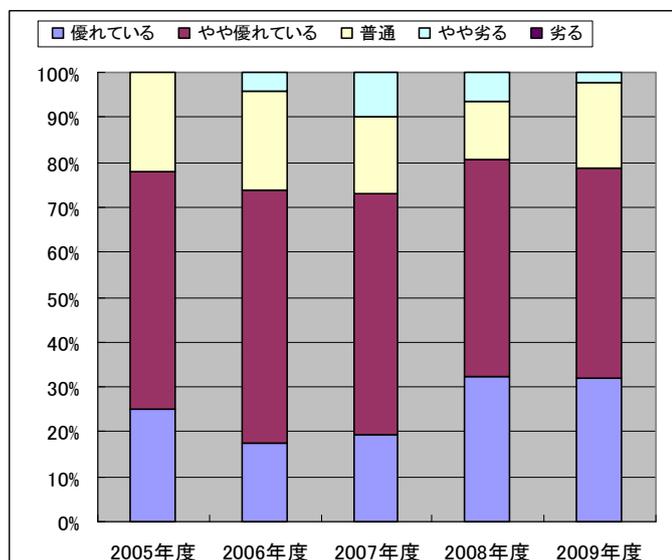
### (3) あなたが受けた理数系教育のレベル

理数系の教育レベルについては、肯定的評価が6割程度であり良い評価を得ているが、やや劣るも10%程度にまで増えており対策が必要であろう。



### (4) あなたが受けた専門教育のレベル

専門教育のレベルについては、肯定的評価が8割程度あり現在の教育内容が肯定的に評価されていると判断できる。

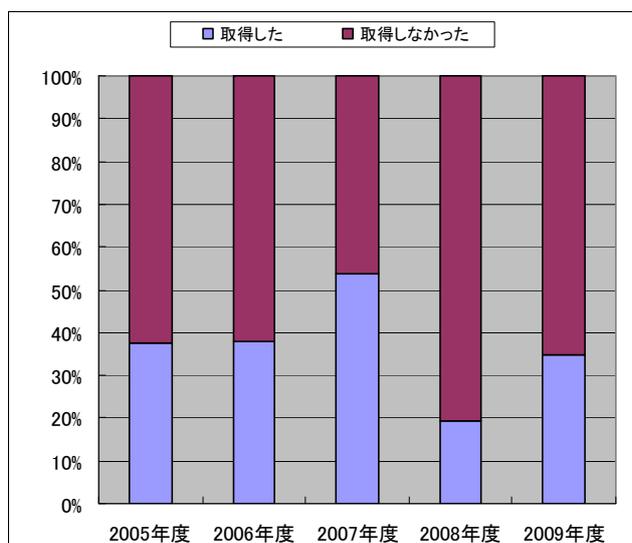


### (5) あなたは入社後資格を取得しましたか？

○入社後取得した資格（具体的に）

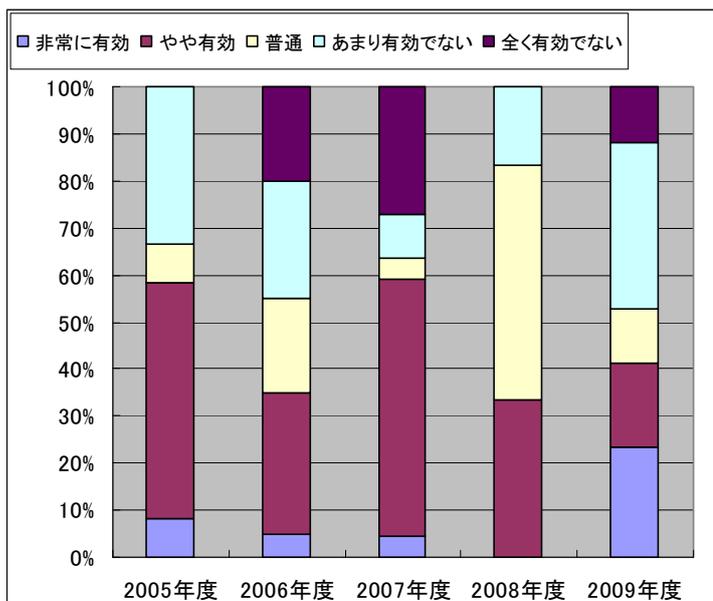
- ・ 玉掛、床上クレーン
- ・ 公害防止管理者
- ・ 乙種第4類危険物取扱者、機械保全技能士2級
- ・ Red Hat認定技術者(RHCT)
- ・ エネルギー管理士、高圧ガス製造保安責任者。
- ・ 公害防止管理者大気
- ・ 危険物取扱乙4
- ・ 技術士一次試験合格
- ・ 自動車整備士
- ・ エックス線作業主任者
- ・ 生産能率士4級
- ・ 公害防止管理者、エネルギー管理士、環境計量士等
- ・ 技術士補
- ・ 危険物取扱者(甲)
- ・ QC検定2級
- ・ QC2級

入社後に何らかの資格を取得した者の比率が2008年度より15%増加している。



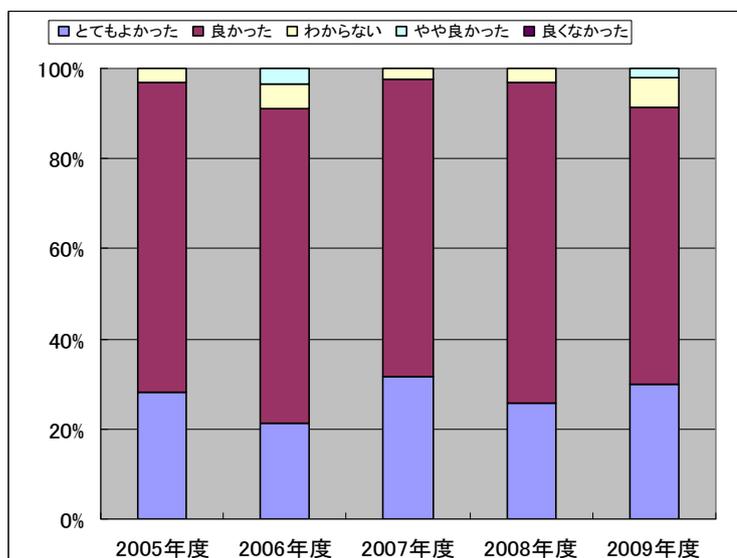
(6) 資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

資格取得に対する本学の教育を肯定的に評価する者と否定的に評価する者数が拮抗し両極化していることがわかる。今後の調査が必要である。



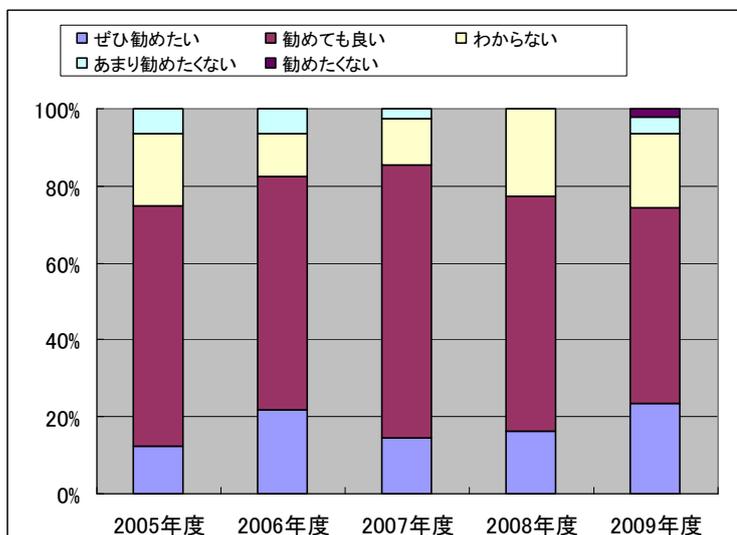
(7) あなたは、九州工業大学大学院工学研究科（博士前期又は後期課程）を修了してよかったと思いますか？

工学研究科の教育のあり方としては、「わからない」が若干増えたものの、大多数から肯定的評価を受けていると判断できる。



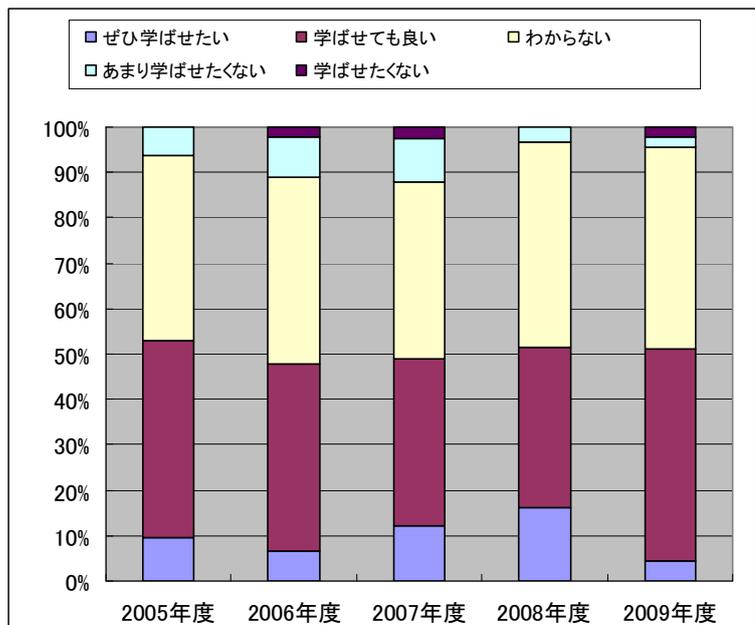
(8) あなたは、九州工業大学大学院工学研究科を魅力ある研究科として後輩に勧めたいと思いますか？

2008年度から2009年度の傾向を見ると「ぜひ勧めたい」が微増したが「あまり勧めたくない」以下が数%出てきた。今後は「わからない」以下の比率を下げっていく必要がある。



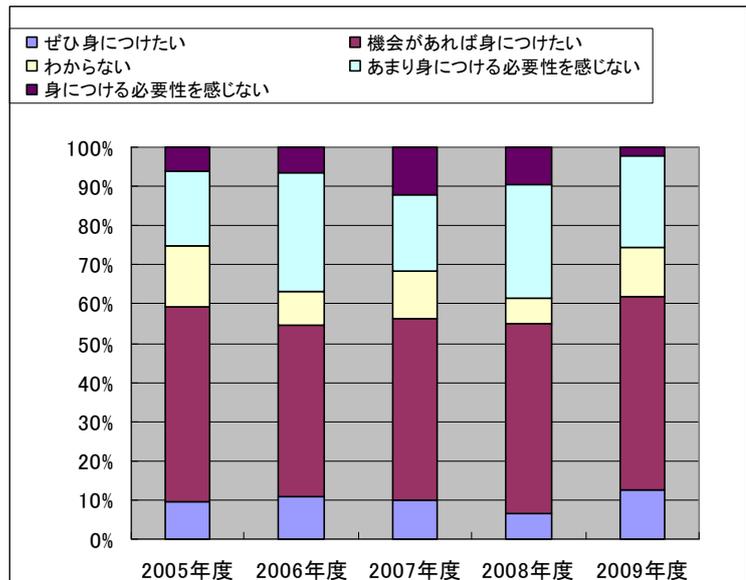
(9) あなたは将来、子供ができた  
ら、九州工業大学に学ばせたいと思  
いますか？

2008年度から2009年度の傾向を見  
る。「ぜひ学ばせたい」と「学ばせ  
ても良い」が合計で過半数を超えて  
いる。しかし依然「わからない」以  
下の回答も多い。より魅力ある大学  
にする努力が必要である。



(10) あなたは、更に高度な学力 (博  
士) を身につけたいと思いますか？

「ぜひ身につけたい」と「機会があ  
れば身につけたい」の合計は昨年度  
より微増した。一方で、「あまり身  
につける必要性を感じない」と「身  
につける必要性を感じない」は1割  
以上減少している。高度な学力を身  
につける意義を周知する必要がある。  
る。



## 2. あなたが、九州工業大学大学院工学研究科に在学して良かった点がありましたらご記入ください。

大学院に在籍して良かった点として、研究指導を通しての教員とのコミュニケーション、在籍中に学んだ専門知識、研究室での先輩、同輩、後輩との交流や深いつながり、インターンシップ体験や学会発表、産学連携などを挙げている。このような評価は昨年と同様であり、今後もその維持と一層の高度化を図りたい。

- ・ 「自分が所属している研究室の教授」、「歴代の卒業生の方々」のおかげで、就職活動時に様々な情報をもらうことができたり、相談にのってもらえたこと。
- ・ 新しい発見や探求心、学問・研究への「あるべき姿勢」を時には、感情的な面もあり、理屈の多い話もありましたが、教授・助教授・技官の方々は、熱意をもって、ご指導していただきました。以上が、本当に良かったと感じている点です。
- ・ 有機化学系の授業が充実していて、わかりやすかった。
- ・ 長期インターンシップ制度(3カ月)を利用して、企業で開発に携わることができたこと。

- 基本を学べるどころ。工学は新しい技術も出てきますが、基本となる部分は変わらないと思います。基本をきちんと学べたところがよかったと思います。
- 機能システム創成工学専攻。1. 1つの専門分野のみでなく、他分野の知識も身に付いた。2. 1より、業務を進める上で確認したい項目に対し、どの分野から調べたら良いかイメージしやすい。3. 結果を導く為のアプローチ方法や、結果を出す力が身に付いた。
- 研究時で学んだ事や研究過程で悩むことでスキルUPにつながった。
- 就職活動が楽しかった。
- 研究において、学校内だけでなく、企業、他の大学などと協同で研究を行っており、高度な研究ができた。
- 高度な専門教育を学べた。
- 講義の中に実践教育に近いことをする場合があり、他の大学等ではあまり経験出来ないことを学べた点は良かったと思う。
- 機械工学の知識、研究を通しての考える力は仕事でも役に立っています。学生生活は勉学以外も、本当に楽しかった。
- 私の研究室は、産学連携の研究を多く実施していましたので、自分が担当する研究に責任感と誇りを持って進めることが出来ました。学会発表も何度か機会を与えて頂き、高度なレベルでの情報交換も経験することが出来ました。
- ツール・実験機が充実していた点。自由にテーマを決めて研究できた点。
- 職種がSEなので直接業務に使える教育は少ないが、情報系出身者とは一つ違った視点で提案することに役立っている。特に製造工場なので生産第一(物流第一)ということもあり、生産技術系の専門的な教育を受けれた事が良かった。
- 当時は、就職率が良かった為、有名企業からの募集が多かったと感じましたし、研究室に所属することで、物事に対する考え方やプレゼンの方法など、就職しても十分に役立つ知識を多く学べたと思います。
- 優秀な先生方のもとで、専門的な事を学べて良かったと思います。友人にも恵まれて、楽しいキャンパスライフをおくることができました。
- 生命体工学研究科では、多様な分野の教授が在籍されていたので、講義を通して、さまざまな分野について学ぶことができました。
- 専門知識の習得はもちろんですが、実験等で多くの器具に触れ、技術を身近な存在として感じる事ができたことは非常に有意義だったと思います。加えて、学祭等の行事で、人と人との付き合いというものに関し非常に多くのことを学べたことに感謝しています。
- 在籍中に学んだ専門的な学問は、現在の業務で役に立つことが多く、また原理・原則を理解した上で、様々な検討を行う姿勢を、先生方の指導により、身につけることができた。
- 工学に対する基礎知識を学べたこと
- 卒業後も語り合える仲間ができた事。専門知識を多く学べた事。
- 研究室に配属してから、実際に基板の回路設計が出来たこと。会社の業務でも活かすことが出来た。
- 教授が九州工業大学出身だったので、身近に感じた。実験装置が古かったが、より専門的なものだった。(会社に入って、実験装置の知識が役に立った。)
- 良い就職先の推薦があったこと。(多い)先輩方のおかげです
- 熱心に指導頂ける教員がみえたこと
- 研究室がよかった。(文武両道)研究室で身につけた“ものの考え方”が仕事でいきている。
- 機能システム創成工学専攻において、自身の専門分野以外の機械、物質といった分野を学んだ事で、現在でも他の分野に抵抗なく、興味を持つ事ができている。他の専攻より、講義が面白かったと思う。
- 専門性のある研究を行うことで、就職後各職場で業務内容をすばやく吸収することや、応用することに役立つ。また就職活動においても、専門的な研究を行うことは大きなアピールとなる。
- 留年率からも明らかなように、指導が甘くないこと。
- 学会発表の機会を多くいただいたので、プレゼンテーションのスキルや度胸が多少身についたと思います。専門と異なる分野に就職したので、専門的な知識はめったに役に立ちませんが、課題の発見・解決のためのアプローチにどんなものがあるか、少し詳しくなったのは役に立っていると思います。

3. あなたが、九州工業大学大学院工学研究科に在学して不満を感じた点、こう改善すべきだと感じた(例えばこういった技術(科目)を教えてほしかった)点がありましたらご記入ください。

英語教育の必要性を求める意見が多い。また、より実践的な専門科目や社会的に必要とされる教養やスキルを求める声も多い。今後は高度な専門教育と同時に企業等で求められるビジネスマインドを涵養するような教育への対応を考える必要がある。

- ・ 社会人になってから感じた事ですが、やはり最低限英語は必要だと思います。「読み・書き」だけでなく、「話す(コミュニケーションをとる)」が少しでもできると便利だと思います。コミュニケーション能力の不足を痛感しています。
- ・ リアルタイムに製造や開発など、将来の進路につながる分野の情報を学生へ、伝達する手段を増やしていただけると、学生も最、真剣に、学問・進路を考えると感じます。
- ・ ある資格の取得を目的とした科目があっても良かったと思う。学んだことが実際にどういう所で活かされるかということが分かってくるとモチベーションも上がってくる。
- ・ 数学の授業が少なく、わかりにくい授業も多い
- ・ もっと多くの企業と共同研究・開発を行い、実際の工学というものを体験できると良い。
- ・ インターンシップを必須としたほうがよいと思います。社会経験があるかないかで大学の科目に対する取り組み方が変わってくると思います。
- ・ 大学院の授業では、語学は必要ないのでは？と感じた。全体的に言える事だが、もっと対話形式の授業をして頂きたい。(一方通行すぎると感じた)
- ・ 科目(講義)はあくまでおまけのようなもので、授業の内容(密度)が低かったように思う。就職には有利な大学だが、学部の授業も院の授業もレベルが低い。(教授にやる気が感じられない)。学生の質が落ちたという前に、授業を充実させるべき。(社会に出て、他大学の情報を知って、そう思いました。)
- ・ 実験等を合理的に行うことが出来る手法についての講義を開講してほしい。(実験計画法など)。品質工学に基づく「ものづくり」を考える講義が少なかったように感じた。
- ・ 語学(得に英語)。統計学。機械材料(得に樹脂)。
- ・ (学部時代)数学系の授業は、講師が黙々と黒板へ書き、生徒はノートをとるので精一杯になり、あまり教えてもらったという記憶がありません。先生同士でお互いの授業をしてみるなど、これからは授業自体に工夫をしていくべきではないでしょうか。でないと、過去問がまわって、それを自主勉強すればいいというもたないことになってしまうと思います。(修士時代)ロボットプログラム、シミュレーション、実験などを組み合わせて総合的レベルを上げるような授業を経験してみたかったです。社会に出る前に、社会の動向、企業比較など就職に身近なネタを自ら分析し、報告するような授業など。
- ・ 実用的な技術。“安全”の考え方。
- ・ やはり語学教育に注力すべき。これからの時代グローバルに活躍できないとすぐにとりのこされてしまう。
- ・ 入試に英語の試験がない段階で、基本的に他大学との英語スキルの差が大きいと感じました。英語の講義はあるのですが、内容にTOEIC等を積極的に受けるようなものを取り入れた方がよいと思います。
- ・ 研究室同士の交流がもっと欲しかったと思います。特に学科が変わると何をやっているか良くわからない。自分が学んだことに対してはわかるけど、九工大がどんな事が強い大学なのか理解できないまま、卒業してしまう学生も多いと思います。
- ・ 英語に関して、勉強するしないは本人の問題として、直に必要性を体感できる場が早い段階であれば、英語習得に対する姿勢は違っていたかもしれません。
- ・ 業務を行う上で、大学で学んだ内容が役立つことがあるが、当時はその学問がどのようなシーンで使われるのかわからなかった。もっと実務労働者による講演などの特別講演が聞きたかった。
- ・ 施設の老朽化(物質工学科)。材料に対する、さらに高度な知識を学びたかった。機械や電気など知識の入門程度は学びたかった。
- ・ 英語全般にさらに力を入れるべきである。研究室間のつながりを強化してはどうか。(似た様な研究分野では勉強会などをすると良いと思う)。
- ・ 授業の中で、実際に基板の回路設計を実施して欲しい。
- ・ 大学院の講義では、土木分野の職種に関して具体的にどんな仕事内容かわかるような話が少しあるともっとよかった。(勉強に熱心になったと思う)
- ・ 自分の研究室だけかもしれないが、先生1人に対する学生の数が多過ぎて、学生へのフォローができていない。研究を自分で考え→課題見つけ→対策を立て→解決する→成果を出す、という教育がなされなく、社会人になって苦労した。全体的に教授に与えられたテーマを淡々とこなし、授業の単位を取って修了するだけって風土がある。より自発的に考えさせる風土作りと教育が必須。
- ・ 英語教育のあり方。
- ・ 電気工学科も製図をするべき。
- ・ 電気回路の作成技術をもっと教育してほしかった。
- ・ 学部1年～3年で行われた授業で、講師の教え方が下手。(大多数、一部例外あり)大学は自分で勉強するところとはいえ、ひどい。
- ・ 外国語、特に英語に関する講義を必修としてほしかった。学生時代は基本的なものしか必修でなかったため、3年～4年、院1年～2年の間でも英語を必修とすることで語学力の向上へつなげてほしかった。

- ・ 研究所、科により、実力差が大きいついている。個人の問題も大きいですが、研究科同志で互いの研究を磨き合う場があつて良いと思う。さらに言えば、学科の枠を超えて学び合う場があれば良いと思う。
- ・ 数式を解くだけでなく、Matlab等で実際に計算を行うような、より実践的な教育があればよいと感じた。
- ・ 語学(特に英語)についてよりレベルの高い教育が必要だと思う。
- ・ 職業柄、半導体の設計関連の科目が勉強できたら、良かったと思います。電気・電子のわりに戸畑は充実していなかったような記憶があります。英語の文章を書く機会が増えたらいいと思います。メールや技術文書等の作成の必要があると思うので。

#### 4. 全体としての傾向

回答者 47 名、回答率 30.13%である。修了生の工学研究科に対する評価はかなり高く、研究室での生活が充実したものであったことをうかがわせる。また、専門性、プレゼンテーション能力、問題解決能力の向上にも十分な満足度が得られているものと判断される。しかし、英語教育については 1.の(2)にあるように「ふつう」以上の評価が 5 割近くにまで改善しているが、依然修了生は不足感を感じており、大学院の英語教育のあり方を議論し、対策を施す必要がある。

### 3 大学院工学研究院・工学府・工学部の管理運営

#### 3. 1 大学院工学研究院・工学府・工学部の組織図

平成21年度の管理運営組織並びに意志決定体制を、図3. 1. 1及び図3. 1. 2に示す。

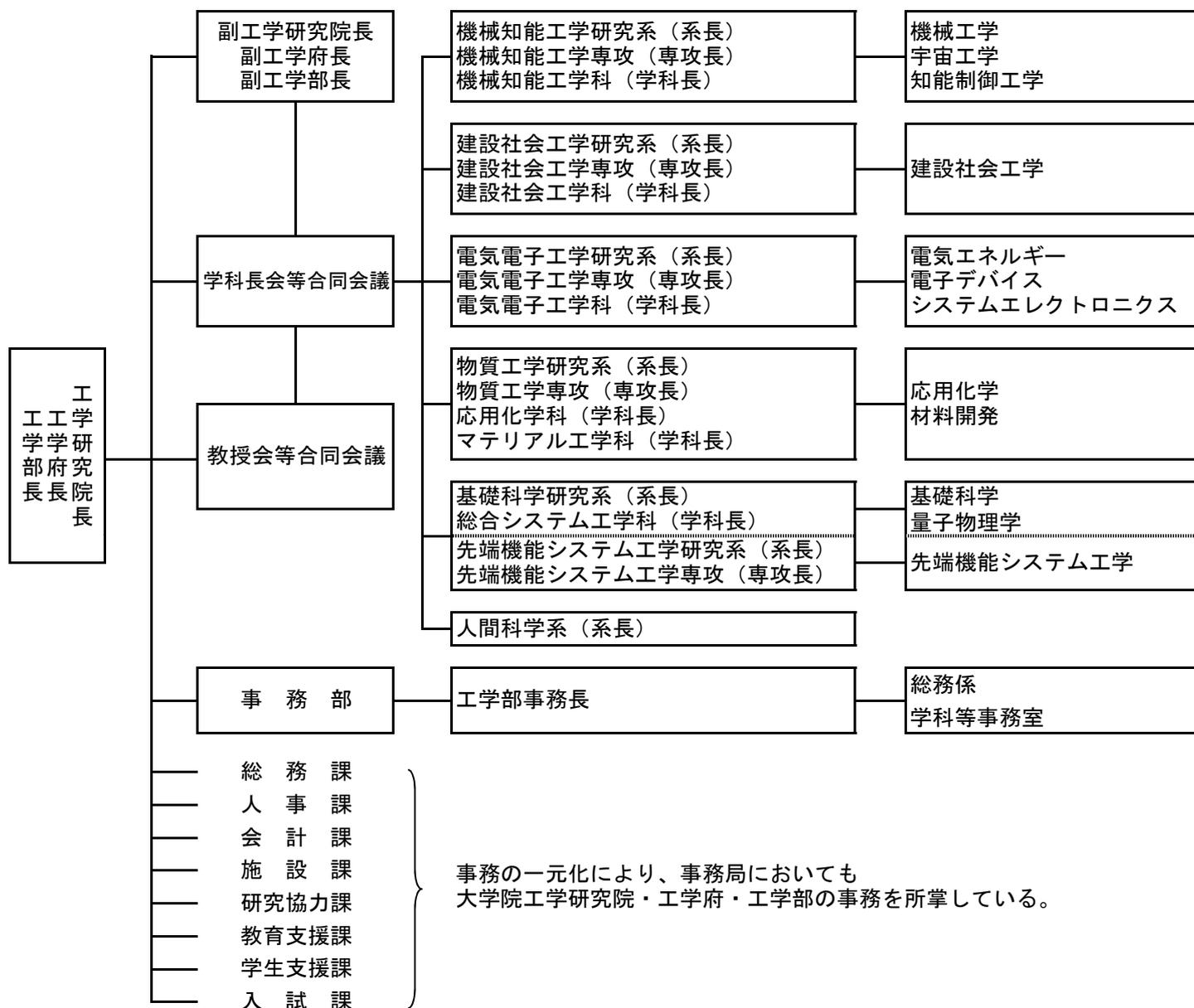


図3. 1. 1 組織図

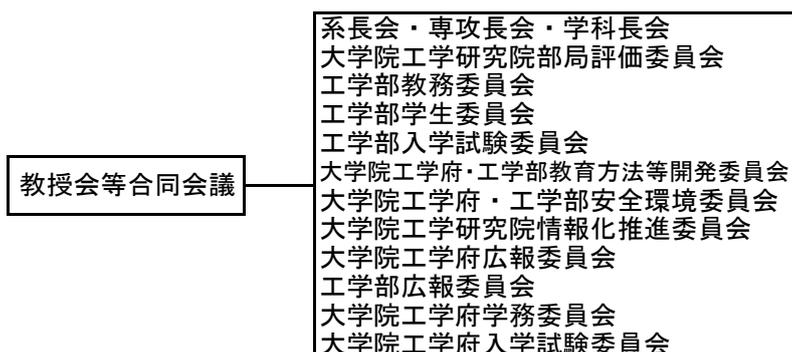


図3. 1. 2 各種委員会

## 3. 2 各種委員会活動の点検・評価

### 3. 2. 1 大学院工学研究院部局評価委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 平成20年度卒業生、修了生アンケートの解析・まとめ
- (2) 平成20年度企業アンケートの実施と解析・まとめ
- (3) 平成18年度以前の卒業生、修了生アンケートの解析・まとめ
- (4) 平成20年度版「現状と課題」の発行
- (5) 平成21年度の各種アンケートに関する検討
- (6) 平成21年度教育職員評価の実施（教育職員評価実施委員会委員として）

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 各種アンケートの結果をまとめ、「現状と課題」に掲載した。
- (2) 平成20年度卒業生・修了生アンケート内容を検討した。
- (3) 平成20年度企業アンケート内容および実施方法を検討した。

#### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 各種アンケート結果の効果的な活用  
長年に亘り、卒業生、修了生、企業を対象とした3種類のアンケートを実施しており、現状の問題点・課題が認識され、その改善への努力も為されているが、それらに関連する委員会にフィードバックして教育改善に反映させるなど、蓄積したデータを組織的に、より効果的に役立てていく工夫が必要と思われる。
- (2) 教育と研究の活性化システム  
第一期中期目標・中期計画に対する法人評価を踏まえて、教育水準の維持・向上とそれを保証する研究水準の一層の向上へ向けて、工学研究院・工学府・工学部の組織体制を活用した着実な取り組みが望まれる。
- (3) 平成21年度実施の教育職員評価  
次回の教育職員評価に向けて、平成20年度工学部改組による部局の新体制（学科の新設、学生定員変更など）を勘案すべき評価項目等について見直す余地がある。

#### 4. 委員会の議論に使用された資料

- ・平成20年度卒業生・修了生アンケート、平成20年度企業アンケート、平成18年度以前の卒業生・修了生アンケート
- ・大学院工学研究院部局評価委員会内規
- ・大学院工学研究院教育職員評価実施委員会要項
- ・九州工業大学基本規則（評価関係抜粋）
- ・九州工業大学評価実施規則
- ・九州工業大学教育職員評価実施要項
- ・九州工業大学教育職員評価システム運用方針
- ・大学評価委員会議事録
- ・大学評価委員会教育評価部会議事要旨

#### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

上記3. (1) (2) (3) と同様

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 教育職員評価システム  
平成21年度実施の教育職員評価は20年度大学評価委員会の議を経て、平成18年度実施の第1回教育職員評価（平成18年度）の評価方法に準じて実施されたが、第1回評価での「最良」の比率の大きさが議論となり、4段階評価から5段階評価へ変更された。  
次回の教育職員評価に向けて、平成20年度工学部改組による部局の新体制（学科新設、学生定員変更など）を勘案すべき項目等、見直す余地がある。
- (2) 各種アンケート結果のフィードバック  
蓄積したデータを組織的、効果的に役立てていく工夫が必要と思われる。
- (3) 企業アンケート  
質問項目のより適切な表現など、一部再検討する余地があるように思われる。

### 3. 2. 2 工学部教務委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

##### (1) 授業関係

- イ) キャリア科目及びインターンシップについて
- ロ) 衛星データ利用のための人材育成プログラム関係新設科目について
- ハ) 昌原大学校との短期プログラムに係る授業科目について
- ニ) 図書館教育資源のシラバス掲載および図書館リテラシーについて

##### (2) 教育関係

- イ) GPA について
- ロ) 9月卒業に関する申合せについて
- ハ) 卒業生・修了生アンケート及び教育達成度評価アンケート結果について
- ニ) 学習・教育目標の認知度調査について
- ホ) 学習成果自己評価シートについて
- ヘ) 工学府・工学部教育運営改善会議からの審議依頼事項について
- ト) 工学部基礎共通実験実習経費について
- チ) 授業時間15週の保証について
- リ) 出席管理システム（ポータルシステム）の導入について
- ヌ) 推薦入学合格者の入学前教育について
- ル) 「成績評価に対する異議申立書」に関する手続きについて
- ヲ) 全学科共通科目について
- ワ) 電子学修成果自己評価シートについて
- カ) 平成21年度の中期目標・中期計画について
- ヨ) 平成21年度コース分けスケジュールについて
- タ) 平成22年度シラバスについて
- レ) 平成22年度学年暦について
- ソ) 平成22年度以降の年度計画（案）について
- ツ) 平成22年度新入生オリエンテーションについて
- ネ) 平成22年度入学生の指導教員の割り振りについて
- ナ) 編入学生への出身高専等で修得した科目の内容調査書について
- ラ) 履修単位の上限を超える履修について
- ム) 新入生配付資料（履修のしおり）について

##### (3) 学生関係

- イ) 編入学生の単位認定について
- ロ) オールドドミニオン大学（ODU）夏期コース受講に係る工学部授業科目の認定について
- ハ) 外国語能力試験の成績に基づく単位認定について
- ニ) 学生生活実態調査の「大学への要望等」について
- ホ) 工学部学習支援室について
- ヘ) 受験料補助運用要項の改正および実施について
- ト) 障害学生への修学支援について

- チ) 新型インフルエンザの対応について
  - リ) 成業の見込みがないと認められる者の除籍について
  - ヌ) 卒業査定・進級査定に関する学生通知について
  - ル) 平成22年度工学部研究生等事務手続要領について
  - ヲ) 連続する2年間で30単位を取得できない学生について
  - ワ) 「期末試験の監督補助員派遣についての要項」について
  - カ) 除籍対象学生への通知について
  - ヨ) 全学生の保証人への成績郵送について
  - タ) 履修登録をしていない学生について
- (4) その他
- イ) 福岡県立ひびき高等学校との高大連携について

## 2. 今年度採択した事項

### (1) 授業関係

- イ) キャリア科目及びインターンシップについて  
インターンシップ科目を、平成22年度まで実施される「総合連携実習」を引き継ぐ形で開設することとし、キャリア教育科目については、平成23年度の開設に向けて、今後、検討することとした。
- ロ) 衛星データ利用のための人材育成プログラム関係新設科目について  
衛星データ利用のための人材育成プログラムに係る科目として「宇宙画像処理体験」を電気電子工学科が担当窓口とし、実際の運用は理数教育支援センターで行い、平成22年度から設置することとした。
- ハ) 昌原大学校との短期プログラムに係る授業科目について  
昌原大学校との短期プログラムに係る授業科目を「日本語入門」と「材料科学のための機器分析の基礎と応用」とした

### (2) 教育関係

- イ) GPA について  
学修細則を GPA 算出の対象としない科目を設けることができるよう改正を行った。
- ロ) 「成績評価に対する異議申立書」に関する手続きについて  
「成績評価に対する異議申立書」について手続き方法の見直しを行った。
- ハ) 9月卒業に関する申合せについて  
9月卒業に関する申合せを策定した。
- ニ) 学習・教育目標の認知度調査について  
昨年度に引き続き、全学生に対して学習・教育目標の認知度調査を行い、その直後に学習・教育目標の資料を配布し認知の徹底を行った。
- ホ) 授業時間15週の保証について  
平成23年度から授業時間15週を保証するために、今後検討を行うこととした。
- ヘ) 出席管理システム（ポータルシステム）の導入について  
学生証(ICカード)を利用した出席管理システムを平成22年度から導入することとした。  
また、出席管理システムの導入に伴い学生ポータルシステムも導入することとした。

- ト) 推薦入学合格者の入学前教育について  
推薦入学合格者の入学前教育について次のとおり内容の見直しを行った。
    - ・新たに大学での学習の目的と動機を身に付けることを目的としたガイダンスを大学で実施することとした。
    - ・通信教材の科目を、国語・英語・数学から物理・化学・数学に変更した。
  - チ) 電子学修成果自己評価シートについて  
学修自己評価システムの試行を機械知能工学科（機械・宇宙工学コース）で行い、平成 22 年度の新入生（1 年生）から運用を開始することとした。
  - リ) 平成 22 年度シラバスについて  
平成 22 年度のシラバスから、データを学修自己評価システムで利用するため到達目標を箇条書きで記載するように様式を変更することとした。
  - ヌ) 平成 22 年度学年暦について  
平成 22 年度の学年暦について、オープンキャンパスの実施に配慮した前期試験の期間を設定した。
  - ル) 平成 22 年度入学生の指導教員の割り振りについて  
平成 22 年度入学生の指導教員の割り振り方法について確認した。
  - ヲ) 履修単位の上限を超える履修について  
履修単位の上限を超える履修について、今後、運用基準を検討することとした。
  - ワ) 新入生配付資料（履修のしおり）について  
新入生オリエンテーション資料として新たに「履修のしおり」を作成することとした。
- (3) 学生関係
- イ) 工学部学習支援室について  
工学部学習支援室の運営方法について検討を行った。
  - ロ) 受験料補助運用要項の改正および実施について  
情報処理技術者試験の制度変更に伴い受験料補助運用要項の改正を行った。
  - ハ) 障害学生への修学支援について  
障害のある学生の修学支援について、平成 22 年度入試に対象学生が受験していることから入学後の支援体制の確認を行った。
  - ニ) 新型インフルエンザの対応について  
新型インフルエンザに罹患した学生に対して配慮を行うこととした。
  - ホ) 成業の見込みがないと認められる者の除籍について  
成業の見込みがないと認められる者の除籍について、学修細則第 15 条第 3 号特別の事由があると認められた者の運用方法、手続き等を、今後検討することとした。
  - ヘ) 除籍対象学生への通知について
  - ト) 全学生の保証人への成績郵送について  
全学生の保証人へ、5 月に前年度分の成績を郵送した。
  - チ) 履修登録をしていない学生について  
履修登録をしていない学生について、指導教員を通して指導を行い、さらに保証人へ郵送により通知を行った
- (4) その他

### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 授業関係
  - イ) キャリア科目およびインターンシップについて
- (2) 教育関係
  - イ) 単位の実質化（1単位 45 時間相当の学習の確保、15 週の確保）
  - ロ) 学修自己評価システムの運用について
  - ハ) 成業の見込みがないと認められる者の指導等について
  - ニ) JABEE 受審に関する対応について
  - ホ) 出席管理システムの有効利用について
- (3) 学生関係
  - イ) 欠席または不登校学生の早期発見と指導教員による指導（グループ担任制）について
  - ロ) 学習支援室の運営について
- (4) その他

### 4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 九州工業大学中期計画・中期目標
- (2) 教育委員会資料
- (3) 学修自己評価システムの利用マニュアル
- (4) 教務委員会資料等

### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 教育研究棟の改修等に伴い、講義室の数が減少しているため講義室の整備が望まれる。

### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 授業関係
  - イ) 授業日数の確保については、授業時間 15 週の確保と併せて、今後検討する必要がある。
  - ロ) CAP 制（履修登録単位数の上限）による履修者数の変動については、動向を確認し今後検討することも必要と考えられる。
- (2) 教育関係
  - イ) 単位の実質化（1単位 4 5 時間相当の学習の確保）については、授業時間 15 週の確保と併せて、今後検討する必要がある。
  - ロ) 推薦入学合格者の入学前教育については、内容の見直しを行った。
- (3) 学生関係
  - イ) 出席管理システムについては、平成 22 年度から導入することを決定した。
  - ロ) 欠席または不登校学生の早期発見については、出席管理システムのデータを有効に活用する方法を検討する必要がある。

### 3. 2. 3 工学部学生委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 中期目標・中期計画の実行
- (2) 二輪車の迷惑駐輪の防止策の検討
- (3) 100周年記念事業の選考
- (4) ものづくり工房使用団体の選考
- (5) 期末試験における不正行為防止
- (6) 日本学生支援機構奨学生の選考
- (7) 学生生活実態調査の実施とその評価
- (8) 学内での飲酒について
- (9) 工大祭への対応
- (10) 新入生研修の実施日程
- (11) 合同企業説明会の開催
- (12) 安全保障輸出管理に係る外国人留学生受入実施要項の検討
- (13) 授業料特別免除推薦候補者選考基準の改定

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 東門駐車場・職員宿舎付近の本来駐輪禁止の区域に二輪車の駐輪されているケースが多く見られるため、掲示による駐輪指導と併せて違反車両へのチェーンロック実施の周知も行うこととした。
- (2) 試験における不正行為の防止策として、履修者が70名以上の科目については、科目担当教員に加えて試験監督補助員として技術職員を1名配置するようになった。
- (3) 工大祭実行委員会から100周年記念行事として、グラウンドにて花火を上げる計画が提出された。これに対し、今年度(創立100周年)は特例として十分に安全が確保されていれば認めることとし、11月22日に打ち上げが行われた。
- (4) 安全保障輸出管理に係る外国人留学生の取り扱いについて、留学生に対する平等性を確保すべきとの観点から、外国ユーザーリスト掲載機関ないし懸念国からの留学生の受け入れにも余地を残すこととした。
- (5) 授業料特別免除推薦候補者選考基準について、平成19年度入学者からはGPAが正式導入されているため、それに合わせた改定を行った。

#### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 工学部キャリアセンターの機能充実  
各学科・専攻を横断して捉えた統一的な就職支援体制構築の第1歩として、工学部にもキャリアセンターが設立された。現在は、就職セミナー・説明会の実施、インターンシップ情報の提供などを行い、各学科・専攻で行っている個々の学生に対する細やかな就職指導との併用する形で、キャリア教育を行っている。今後は、就職面接指導などが常時受けられる体制にするなど、より機能を充実させていくことが必要になる。
- (2) 安全保障輸出管理に係る外国人留学生受入実施要項について  
外国ユーザーリスト掲載機関ないし懸念国からの外国人留学生受入については、受入の余地は残されたものの、実際に受け入れる時に取るべき対応を決定するにはもっと議論を尽くす必要がある。
- (3) 国際交流会館の収容能力増大  
平成21年度後期から留学生の数が特に増加し、国際交流会館ではこれまで1年間の入居が認められ

ていたものを半年へと短縮せざるを得なくなった。今後、特に工学研究府においては外国人留学生の増加が見込まれるため、それを見越した対策（国際交流会館の増築など）を検討すべきである。

#### 4. 委員会の議論に使われた資料

- ・九州工業大学中期目標・中期計画
- ・平成 21 年度～平成 22 年度における年度計画等について（評価と翌年度計画案）
- ・H21 年度日本学生支援機構奨学生 工学部推薦者選考資料
- ・第 49 回工大祭花火企画書（工大祭実行委員会）
- ・学生生活実態調査結果

#### 5. 工学部・工学研究府の現状に関する意見、又は改善に関する提言

試験中の不正行為の発覚が絶えない。不正行為を働いた学生達からは罪の意識というものがあまり感じられない。学生生活実態調査で得られた記述からは、学生の立場から学生側のモラルの欠如も指摘されている。単に不正行為をしづらい環境に持って行くだけでなく、学生側の意識を変える教育も併せて必要かもしれない。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

特に該当事項なし。

### 3. 2. 4 工学部入学試験委員会

#### 1. 今年度、本委員会が取り組んだ課題

- (1) 平成22年度編入学試験について
- (2) 平成22年度入学者選抜要項について
- (3) 中期目標・中期計画について
- (4) 平成24年度センター入試試験科目について
- (5) 応用化学科（等）のセンター入試科目に生物を導入しないことについて
- (6) 新型インフルエンザ対応について
- (7) 平成22年度推薦入学試験について
- (8) 平成22年度一般入学試験について
- (9) 平成22年度帰国子女特別入試・私費外国人留学生試験について
- (10) 平成23年度編入学試験の募集要項について
- (11) 平成22年度個別学力検査追加合格者決定要領について
- (12) 平成22年度欠員補充第2次募集の選考方法等について

#### 2. 今年度、本委員会が採択し、実施した事項

通常の選考・審査、募集要項の作成については例年どおり実施した。ここでは、新たに実施した事項についてのみ記す。

- (1) 平成22年度編入学試験について
  - ・昨年度と同様、合格者が定員を満たさなかった場合の説明に使用するため、各学科で不合格理由について記録を残し、入試委員が把握しておくこととした。
  - ・昨年度と同様、面接員は専門学科の教員のみとし、学科・コースごとに5名で構成することとした。
  - ・昨年度危惧していた、編入学試験応募者の大幅減少については、今年度においては起こらなかった。しかし、当面は高専への広報活動の強化を続けることが必要と考えられる。
  - ・編入学試験選考方法について、変更を行わないこととした。即ち、現行通り「合格者の点数は最低点を600点以上とする。」とした。その理由の詳細については、第1回工学部入学試験委員会議事録要旨に記述した。
- (2) 平成22年度入学者選抜要項について
  - ・平成22年度入学者選抜要項について決定し教授会に上程した。「選抜」と「入試」の文言について、全体的な修正を行った。また、推薦・一般・帰国子女・私費外国人の募集要項については、選抜要項に基づき作成するので、教授会では審議しないこととした。要項の改名を行った。（推薦入試学生募集要項、一般入試学生募集要項、帰国子女特別入試学生募集要項）
- (3) 中期目標・中期計画について

中期目標・中期計画の中で未実施項目（I-1-17）について、昨年度作成された、入試成績、入学後の学生成績情報、卒業後の進路データを網羅するデータベースを基に、選抜区分ごとに入学後のGPAの推移について調べ、各学科の選抜区の定員調整の参考資料として活用できるようにし、活用した。卒業後の就職先のデータをどのように解析すべきかが課題として残されている。
- (4) 平成24年度一般入試からのセンター試験の科目変更について

大学入試センター試験において、平成23年度までは、地理歴史・公民の教科の内、「世界史A」・「世界史B」・「日本史A」・「日本史B」・「地理A」・「地理B」・「現代社会」・「倫理」・「正治・経済」の9科目のうちから1科目を選択とされていたが、平成24年度一般入試からは、「世界史B」・「日本史B」・「地理B」・「倫理、政治経済」の4科目から1科目を選択とする予告を平成22年度入学者選抜要項及び一般入試学生募集要項に記載した。
- (5) 応用化学科（等）のセンター入試科目に生物を導入しないことについて

昨年度、応用化学科より、後期日程試験においてセンター試験の利用教科・科目として生物を選択科目として導入したいとの申し出があり、検討を行った結果、平成22年度の入試より、応用化学科単独で実施する方向で準備を行うこととなっていたが、次の理由により中止し、平成24年度以降に再度検討することとなった。主な理由は、センター入試の

理科の選択科目が従来の3科目から2科目に変更となったことにより、センター入試科目に生物を選択した場合、第2志望・第3志望で合格する受験生の層を極端に狭める可能性が生じたため。

(6) 新型インフルエンザ対応について

国立大学協会からの提言で新型インフルエンザ対応について、本学においては、全国的に迅速な対応として、個別学力検入試の前期日程・後期日程の追試験のための準備に取り組むことを行った。

- ・平成22年度一般入試学生募集要項に「新型インフルエンザ罹患者及び濃厚接触者等罹患者の疑いのある者への追試験の実施」の項目を掲載した。
- ・一般入試の前期日程において追試験対象者が工学部受験者1名あり、追試験を行った。後期日程の追試験対象者はいなかった。
- ・追試験受験者の成績は、本試験と同じ配点・審査基準の下に審査された。

(7) 平成22年度推薦入学試験について

- ・昨年同様、推薦入試の合格点については600点に固定せず、600点以上を合格の目安とすることとした。また、編入学同様、各学科で不合格理由について記録を残し、入試委員が把握しておくこととした。
- ・推薦入試学生募集要項については、昨年度全学入試委員会より合冊提案があったが、21年度同様、分冊で作成をした。

(8) 平成22年度個別学力検査追加合格者決定要領について

一般入試（前期日程及び後期日程）の正員数の決定において、その補欠者数は正員数全体の3割と定められている。その正確な人数は、正員数全体に0.3をかけたの後、四捨五入によって決定することとした。

### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 中期目標・中期計画の課題（I-1-17）であった「長期間にわたる受験生の入学試験成績情報、入学後の学生の成績情報（成績の推移情報）、卒業後の進路に関する情報を網羅するデータベースを構築して、入試データの追跡調査を行い、追跡調査結果のデータに基づいた入学者選抜方法の改善に取り組む」については、20年度にはデータベースの構築、21年度にはそのデータベースを用いて追跡調査を行い、入学者選抜方法の改善として、選抜区分ごとに入学後のGPAの推移について調べ、各学科の選抜区の定員調整の参考資料として活用できるようにし、活用した。しかし、卒業後の就職先のデータをどのように解析すべきかが課題として残されている。その資料は、平成21年度学部入学者選抜方法研究専門部会によって作成された。平成23年度入学者選抜要項においても入学者選抜方法の改善、特に選抜区の定員調整の参考資料とすることが期待される。
- (2) 20年度の委員会では、応用化学科において、後期日程試験のセンター試験利用教科・科目として生物を選択科目として導入することが合意され、21年度にその実施に向けた準備を行う必要があったが、24年度からのセンター試験科目体制が大幅に変更したことに伴い、22年度からの導入を行わないこととなった。24年度からのセンター入試の情勢を見極めつつ導入について再考することとなっている。
- (3) 入試結果の情報開示については、昨年度と同じ体制で行われた。特に、面接試験を含む選抜区（推薦・帰国子女・編入学・私費外国人留学生）は、一般入試に比べ、定量的な判定が難しい部分があるため、開示範囲を拡大できるよう、試験方法の整備を行っておく必要がある。

### 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 平成21年度、平成22年度入学者選抜要項
- (2) 平成22年度、平成23年度編入学学生募集要項
- (3) 平成21年度帰国子女特別選抜学生募集要項、平成22年度帰国子女特別入試学生募集要項
- (4) 平成21年度推薦入学学生募集要項、平成22年度推薦入試学生募集要項
- (5) 平成21年度、平成22年度私費外国人留学生入試学生募集要項

- (6) 平成21年度一般選抜学生募集要項、平成22年度一般入試学生募集要項
- (7) 平成22年度欠員補充第2次学生募集要項
- (8) 中期目標・中期計画(案)

#### 5. 工学部の現状に関する意見、又は改善に関する提言

- (1) 広報委員会の努力により、今年度は、工学部の受験倍率は前期日程が2.34倍、後期日程が2.39倍と2倍以上の倍率を昨年度に続き維持することができた。高い倍率を維持することは、レベルのそろった学生を獲得する上で重要であるので、今後も広報活動についての一層の努力を期待したい。
- (2) 編入学試験の応募者については、平成21年度の23名に比べると、本年度は38名に増加した。しかし、平成19年度(52名)、20年度(36名)と減少傾向が続いてきた。今年度の増加は昨年度の広報活動の強化の努力による可能性があるが、平成23年度入試において減少する場合には、さらなる広報活動の強化対策を、工学部として考えて行く必要がある。
- (3) 新型インフルエンザの対応については、本学は全国的なレベルとして迅速であったことが社会的に評価された。しかし、そのための追試試験の予告のための会議や追試作成者に対して定例的ではない負担が強いられた部分があった。実施する当事者(入学試験作成者等)への柔軟な対応が求められる。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 入学試験成績情報、入学後の学生の成績情報、卒業後の進路に関する情報を網羅するデータベースについては、昨年度の委員会において作成され、今年度はそのデータベースを用いて追跡調査を行い、入学者選抜方法の改善として、選抜区分ごとに入学後のGPAの推移について調べ、各学科の選抜区の設定調整の参考資料として活用した。今後の課題は「残された課題、又は将来解決すべき事項」の(1)で述べている点である。
- (2) 今年度から、応用化学科における後期日程のセンター試験利用教科・科目として生物を選択科目として導入することが平成22年度の入学者選抜要項に盛り込まれる予定であったが、その予告を行わないこととなった。しかし、今後の検討する課題として残る。「残された課題、又は将来解決すべき事項」の(2)を参照せよ。
- (3) 一般入試の後期日程において、合格者発表後、入学手続き者数が定員を満たさない学科が生じた。そのため追加合格候補者(8名)を合格者等選考方法に基づいて作成された補欠者リストから選出した。追加合格者が何故生じたかの原因究明とそれが今後起こらないようにするための対策をねっておく必要がある。
- (4) 次年度から始まる新しい中期目標・中期計画の入学試験委員会に関わる課題の準備を行う。

### 3. 2. 5 大学院工学府・工学部教育方法等開発委員会

#### 1. 今年度、本委員会が取り組んだ課題

- (1) 授業評価アンケートの実施と実施方法の改善およびweb化の一部試行
- (2) 公開授業（公開授業週間）の実施
- (3) 学生と教員との懇談会の実施
- (4) FD講演会の実施
- (5) FD活動の公表（FDニュースレター発行）
- (6) 中期計画における年度計画の実施と次期中期計画における年度計画案の作成

#### 2. 今年度、本委員会が採択した事項

##### 2-1 授業評価アンケートの実施と実施方法の改善およびweb化の一部試行

授業評価アンケートについては、当委員会内にWGを設置しアンケートの実施方式・内容について検討を重ねた。また、平成20年度のアンケート結果の解析を行った。更に、web化導入に向けて検討を重ね、情報関係科目でweb化によるアンケートを実施した。懸念された回収率は、従来の紙を回収する場合と同等であり、web入力依頼のアナウンスに効果があることが示唆された。

今年度は、昨年度に引き続き大学院ならびに学部の全科目を対象とした授業アンケートを行った。今年度のアンケート結果に対する解析は来年度行われる予定である。

##### 2-2 公開授業（公開授業週間）の実施

教員研修の一環として定例化した公開授業を今年度も実施した。なお、今年度から、実施方法を変更しており、対象は実験を含む全科目であり、実施期間を後期の11月9日（月）～13日（金）の1週間とした。原則全ての講義・実験を公開の対象として、各教員は自由に公開されている講義・実験に参加できるようにする「公開授業週間」とした。参観公開授業総数（参観者がおられた授業総数）は学部79、大学院11、参観教員総数は学部授業・実験101名、大学院授業13名であった。

\*公開授業週間の概要についてはFDニュースレターNo.3を参照。

##### 2-3 学生懇談会の実施

昨年度に引き続き「学生と教員との懇談会」を11月20日（金）10:00～13:00に附属図書館4階グループ研究室において実施した。出席教員は工学部・工学府FD委員会委員7名、学生委員会副委員長1名、広報室長1名であり、参加学生は26名であった。

\*学生懇談会の概要についてはFDニュースレターNo.3を参照。

##### 2-4 講演会の実施

第5、第6回、第7回FD講演会を実施した。

###### 第5回FD講演会

日 時：平成21年7月22日（水）  
15時30分～16時30分

場 所：戸畑キャンパス事務局第一会議室

講演者：株式会社東芝 電力流通・産業システム社浜川崎工場 技術責任者  
澄川 俊雄 氏

講演題目：「企業における人財育成の経験からの大学教育への期待」

###### 第6回FD講演会

日 時：平成22年1月27日（水）  
13時00分～17時00分

場 所：C-1B講義室

講演者・講演題目：外部講師

- ①立教大学 北本俊二先生「立教大学における理系学生への教育方法」
- ②東京農工大学 吉永契一郎先生「理工系学士課程教育の課題」  
学内講師
- ①応用化学科 岡内辰夫先生「物質工学実験 B における PBL 教育の実践」
- ②総合システム工学科 中尾基先生「総合システム工学科 PBL 科目」
- ③人間科学系 虹林慶先生 「リレーセミナーの実践」

#### 第7回 FD 講演会

日 時：平成 22 年 3 月 23 日（火）  
14 時 00 分～17 時 00 分

場 所：附属図書館 4 階 AV ホール

講演者：「金沢工業大学における PBL」（金沢工業大学 松石先生）

「PBL を基軸とする工学教育プログラムについて」（九州工大 中尾先生）

「PBL—理論的背景と導入の影響」（東京大学-大西弘高先生）

「同志社大学の教養教育 PBL（プロジェクト科目）の試み」

（同志社大学-山田和人先生）

\*第 5、6 回の講演会概要については FD ニュースレター No. 3 を参照。なお、第 7 回は、工学部 PBL 教育推進室が主催した平成 21 年度 PBL シンポジウムに、FD 委員会が FD 講演会として共催したものである。

#### 2-5 FD 活動の公表

本年度の FD 活動に基づいた FD ニュースレター No. 3 を発行した。

#### 2-6 中期計画における年度計画の実施と次期中期計画における年度計画案の提案

中期計画に基づき全学の教育委員会に報告すべき工学部 FD 活動の内容の公表方策について評価・検討を行った。更に、次期中期計画における年度計画案を検討し提案した。

### 3. 残された課題、将来解決すべき事項

#### 3-1 授業アンケートの web 化の導入

昨年度より、大学院での科目も含めマークシート方式を用いた全科目アンケートが実施されている。そして、今年度、アンケートの web 入力の一部試行を実施した。今後、学生の負担にならない入力方法や回収率を見直しつつ、web 化の本格導入を行う必要がある。

#### 3-2 公開授業週間の参加者数拡大と実施時期の工夫

メールや web ページを用いて全教員へ公開授業週間の通知を行った。のべ参加者数は 114 人に達したが、1 人で複数の授業に参加している場合も多くあり、引き続き個々人の参加者数拡大が必要である。また、今回は後期にのみ実施したが、前・後期の実施や、実施期間の拡大・縮小および PBL 教科などの場合は発表会の期間に設定するなどきめ細かい対応や実施方法の工夫、学生へのアナウンスなどを図る必要がある。

#### 3-3 大学院（工学府）のアンケート内容や結果の解析法

昨年度より、大学院の全科目に対して授業アンケートを行っている。大学院での授業には授業形態が学部の形態と異なる科目が多いので、このことを考慮に入れたアンケート内容や解析法を考える必要がある。

### 4. 委員会の議論に使われた資料

主な資料として

- (1) 授業アンケート
- (2) 平成 20 年度 授業アンケート解析結果
- (3) 公開授業週間のアンケート結果

(4) 平成 21 年度 FD ニュースレターNo. 3

**5. 工学部の現状に関する意見、又は改善に関する提言**

教育方法の開発・改善という従来の活動に加え、昨年度に引き続き、教職員の教育能力向上と学生の学習意欲向上にとってどのような手段が有効なのかを検討する必要がある。

授業アンケートの web 化導入に向けて、実施方法や回収率に関する更なる検討が必要である。

FD 講演会や公開授業の参加者数を、継続して増やす方策を検討する必要がある。

**6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点**

昨年度『教職員の教育能力向上にとってどのような手段が有効なのか、将来像を確立し、それに向かった方策を検討すべきである』という提言が引き続きあった。このことに関して、幅広く授業に参加できる公開授業週間を設けると共に、FD 講演会で、理系学生の教育方法や理工系学士課程教育の課題と題する講演を頂き、また、工学系企業における人財育成や医学系、教養教育系での PBL 教育の取り組みなど幅広い内容の講演会を実施した。

### 3. 2. 6 大学院工学府・工学部安全環境委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

##### (1) 安全衛生ミーティングの実施および実施結果の評価

昨年度と同様、「安全衛生ミーティング」の実施要綱をもとに、各教室で7月および12月に安全衛生ミーティング実施のアナウンスと「安全衛生ミーティング記録」の提出依頼を行った。各研究室でヒヤリハット事例など事故につながる恐れのある危険因子を学生と教職員で共有できたとの報告が多数見られ、本ミーティングが当初の実施目的を達成していることが確認された。また、本ミーティングを今後継続して行っていくことが事故防止に効果があるとの認識で一致した。

##### (2) 研究室安全衛生教育等の実施要項について

「安全衛生教育」と「安全衛生ミーティング」は実施してきたが、決まりがなく実施要項の整備が不可欠であった。第一回安全衛生委員会において、この実施要項作成の必要性について認識で一致した。そこで委員長を中心に実施要項の作成を行った。メール会議の形式で作成の要項に意見等をまとめ、正式な規定として決定した。その内容は次の通りである。「研究室安全衛生教育実施要項」、「研究室安全衛生ミーティング実施要項」、「安全環境チェックの実施要項」、「研究室安全衛生教育実施報告書」、「研究室安全衛生ミーティング記録」、「安全環境チェックリスト」

##### (3) 学部生における安全衛生教育体制の整備

学部1年生と院1年生に対して新入生オリエンテーションで安全教育を行っており、また、学部4年生と院生に対しては所属研究室で安全衛生教育と安全衛生ミーティングを実施していることから、学部2と3学年生に対しても安全衛生教育を行う必要があった。そこで、本委員会において、「学部2と3学年における安全衛生教育実施要項」と「学部2と3学年安全衛生教育実施報告書」を作成し、今年度から実施すると決定した。

##### (4) 「実験・実習における安全の手引き」の改訂

本年度版の内容について、分野ごとに担当を定め改訂作業を行った。

##### (5) 中期目標・中期計画の達成評価と次年度の計画

ほぼ計画に従い活動を進め「3」の達成度と評価できた。また、次年度以降の計画に関しては、遅れの見られる防災パンフレットに関する項目のみ修正を加え、残りは従前通りとすることとした

#### 2. 今年度採択した事項

(1) 「研究室安全衛生教育実施要項」、「研究室安全衛生ミーティング実施要項」、「安全環境チェックの実施要項」、「学部2と3学年における安全衛生教育実施要項」と「学部2と3学年安全衛生教育実施報告書」の作成と実施を決定した。

##### (2) 災害時の避難場所（改訂版）

非常時の連絡体制パンフの作成や建物の名称変更に伴う表示の改訂を行った。

#### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

(1) 防災マニュアルの見直し、防災パンフレットの作成と配布

(2) 戸畑消防署と連携し防災訓練の実施

#### 4. 委員会の議論に使われた資料

(1) 工学部の平成19年度版「実験・実習における安全の手引」

(2) 中期目標・中期計画 ファイル

#### 5. 安全衛生委員会との連携に関する提言

安全衛生委員会は毎月会合を行っている。本委員会の委員長はオブザーバーとして安全衛生委員会に出席し、重要課題は本委員会に報告することが実施されてきた。今後ともこの体制を維持し、両委員会は積極的に連携を強化することが必要である。

#### 6. 問題点

研究室配属前の3年生まで、配属後と院生の間には安全衛生教育の体制はほぼ確立されている。今後の課題として、物理、化学、基礎実験における安全環境を確保する体制の整備が必要である。

### 3. 2. 7 大学院工学研究院情報化推進委員会

#### 1. 今年度、委員会が取り組んだ課題

- (1) 本委員会組織に関わる検討
  - A. 正副委員長の選出、及び全学情報化推進委員会への副委員長のオブザーバー参加
  - B. 情報ネットワーク・セキュリティ専門部会への参加
  - C. 情報セキュリティポリシー策定専門部会への参加
  - D. 情報セキュリティポリシーに関する基本規程等・実施規程・ガイドラインの説明会及び講習会のための実施検討 WG への参加
  - E. 全学統合 ID 管理システム導入 WG への参加
  - F. 戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討 WG の運営
  - G. 工学研究院基盤ネットワーク機器管理グループの設置と運営
  - H. 工学部工学専門教育用計算機・ネットワークシステム運営委員会への委員の推薦
- (2) 違法行為防止、及びセキュリティ向上についての検討と対処
  - A. 情報モラル教育についての検討と実施
  - B. 情報セキュリティポリシーに関する説明
  - C. 新入生用情報モラル・セキュリティパンフレットの検討
  - D. 情報セキュリティインシデントへの対応
  - E. ソフトウェア管理簿を用いたライセンスの管理
- (3) 全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法の検討と実施
  - A. ウィルス対策ソフト
  - B. マイクロソフトキャンパスアグリーメント
  - C. Mathematica
- (4) 工学研究院の情報化に係る施設設備に関する検討
  - A. 戸畑キャンパスネットワークの整備・管理
  - B. ノーツサーバーの統合
  - C. 工学専門教育用計算機・ネットワークシステム用ドメイン名
- (5) 附属図書館に関する検討
  - A. 学生用図書の見直し
  - B. 雑誌購入調査（和、欧）
  - C. 九州工業大学研究報告
  - D. 図書館に対する要望

#### 2. 今年度、委員会が採択した事項

- (1) 本委員会組織に関わる検討
  - A. 正副委員長の選出（第1回）

正副委員長を選出し、副委員長が全学委員会へオブザーバー参加することを確認した。
  - B. 委員会における業務等の確認（第1回）

本委員会における業務等をまとめ確認した。
  - C. 工学部工学専門教育用計算機・ネットワークシステム運営委員会への委員の推薦（第6回）

標記運営委員会が新設されたことに伴い本委員会から委員を推薦した。来年度からは副委員長を推薦することを決めた。
- (2) 違法行為防止、及びセキュリティ向上についての検討と対処
  - A. 平成 21 年度前学期情報モラル向上週間の取り組み（第1、3回）

昨年度に決定した企画の内容を確認し実施した。実施内容としては、1 年生については「情報リテラシー」の講義において「情報倫理デジタル小品集3」の DVD の閲覧を実施した。2 年生以上については、各教室において、学生を集めて DVD を閲覧させるとともに、可能であれば、情報セキュリティポリシーに関する説明を実施した。以上の実施記録を委員会に報告し、実施状況を一覧としてまとめた。
  - B. 平成 21 年度後学期情報モラル向上週間の取り組み（第3、4、7回）

情報モラル教育に e-learning を活用することについて、利点、課題、実施内容、実施手順、選択肢の観点から検討した。「情報倫理デジタル小品集3」のビデオ閲覧とそれに関連する小テ

ストの受講ができるコンテンツの作成を e-ラーニング事業推進室にお願いした。

取り組みの全体としては、学生向けに「情報倫理デジタル小品集3」を利用した教育を実施するとともに、教員にも同ビデオの閲覧を案内し啓蒙した。1年生については、これまでと同様に情報系工学基礎科目（情報 PBL）での対応を基礎科学に依頼し実施した。また、前期に未実施の教室については、「情報セキュリティポリシーに関する基本規程等の制定に伴う学生向け説明会」も実施した。

学生向けの教育に関しては、実施形態を講習会形式とするか、e-learning 形式とするかの判断を各学科等に委ねた。e-learning を活用する場合には以下の手順とした。工学部で1つのコースを用意し、必須講義や各研究室などで説明資料を配布した。情報モラル向上週間が終了した後、e-ラーニング事業推進室と委員長が協力して受講状況を整理し、各学生の受講状況を各委員に配布し、教室および学年毎に受講者数等をまとめて委員会に提示した。データより、学生が積極的に学習したことが分かった。e-learning を活用して効果的なモラル教育が可能であることが分かった。今後、対面での講習会とバランスを取りつつ、多様な教育を効率的に実施していくための手段として有効であると考えられる。

#### C. 平成 22 年度前学期情報モラル向上週間の取り組み（第 7、8 回）

平成 22 年度前学期の企画を策定した。すなわち、新入生（学部、院）のオリエンテーションでネットワークの利用と情報セキュリティポリシーに関する説明を実施すること、1年生については「情報リテラシー」において DVD の閲覧を実施すること、2年生以上については、学生を集めて、情報セキュリティポリシーに関する説明を実施すること、実施記録（実施日、時間帯、参加人数、実施対象）を委員会に報告すること、を決めた。

#### D. ソフトウェア管理簿を用いたライセンスの管理状況のとりまとめ（第 1、5、6、7 回）

工学研究院では、平成 18 年度よりソフトウェア管理簿を用いて各研究室にてライセンス管理を行ってきた。委員会では、折に触れ委員を通じて各研究室の管理簿の更新を依頼してきた。法令を順守するだけでなく、順守しているエビデンスを示すことが社会的に求められるようになってきている。今年度、全学委員会にライセンス管理状況を報告することとなったことを受け、各研究室のソフトウェア管理簿を調査し状況を取りまとめた。管理簿を未提出の研究室も若干あったものの、管理についての意識は高いことが確認された。引き続き、普段から管理簿を更新するように注意を喚起するとともに、定期的に状況を調査することで、ライセンス管理を徹底することが重要と考えられる。

#### E. ソフトウェア管理簿のオンライン化のためのシステム開発（第 7 回）

従来、表計算ソフトによるソフトウェア管理簿を用いて各研究室にてライセンス管理を行ってきた。ソフトウェア管理簿のオンライン化について木村委員から発案とプログラムの提示があり、各研究室における管理簿のメンテナンスの負担を大幅に軽減できることから、工学研究院情報基盤室からの提供という形でシステムの構築を進めることとした。ライセンス管理の強化は末端の管理者の作業負担を増加させるが、今回の取り組みは情報技術の活用によって、その作業負担を軽減させるものであり、重要かつ有用であるといえる。

#### F. 平成 22 年度新入生用情報モラル・セキュリティパンフレットの改訂（第 6、7、8 回）

平成 22 年度向けの改訂案について検討し、全学委員会に提言した。

#### G. インシデント対応手順（第 6 回）

情報セキュリティポリシーに基づく「インシデント対応手順」案について検討した。

### (3) 全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法の検討と実施

#### A. 平成 21 年度ウィルス対策ソフトウェアの工学研究院における運用（第 1 回）

全学委員会の決定内容を受けて 2009 年度工学研究院の基本方針を策定し、インストール許可申請書及びアンインストール報告書を更新した。

#### B. 平成 21 年度マイクロソフトキャンパスアグリーメントの工学研究院における運用（第 1 回）

全学委員会の決定内容を受けて 2009 年度工学研究院の基本方針を策定し、インストール許可申請書を更新した。

#### C. 全学運用ソフトウェア（MSCA、VB）の研究室未配属生への配布窓口（第 2 回）

学生への利便性向上のために、研究室未配属生へのソフトウェアの配布窓口を工学研究院情報基盤室に一本化することにした。

#### D. ウィルス対策ソフトウェアの更新（第 3 回）

全学委員会からの照会でウィルス対策ソフトウェアの更新に関して検討した。継続の重要性や

MAC 版の情報を全学委員会に伝えた。全学委員会で来年度も今年度と同じソフトウェアを採用することとなった。検討によって契約経費の低減につながった。

#### E. 全学運用ソフトウェア (MSCA、ウィルス対策ソフト) の申請の電子化と管理のためのアプリケーションの開発 (第 1、3、7、8 回)

従来は紙ベースでの申請と集計を実施していたが、Web 申請方式について木村委員から発案とプログラムの提示があり、申請者及び管理者の負担を大幅に軽減できることから、Web 申請方式に移行することを決定し、工学研究院基盤室と共同開発することとした。情報技術の活用によって、作業負担を軽減させるものであり、重要かつ有用であるといえる。

#### (4) 工学研究院の情報化に係る施設設備に関する検討

##### A. 戸畑キャンパスネットワークの整備・管理 (第 1、2、3、6 回)

「セキュア・ネットワーク基盤システム」の更新に関連して、戸畑キャンパスのネットワークの現状を把握し、整備や管理について検討するという趣旨で、昨年度の委員会において「戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討 WG」が設置された。今年度、メンバーの更新と補充を行い検討を進めた。その成果として、キャンパス内の建物とネットワーク機器の現状把握、基本方針、ネットワーク構成を策定した。統一機器をレンタルで措置してもらい、建物内ネットワークについては各学科が主体となって管理できるようにした。

さらに、運用や設定についての情報を共有することで管理を容易にすることを目的として、「工学研究院基盤ネットワーク機器管理グループ」を設置した。本グループにおいて機器更新の打合せや調整等が行われ、建物毎の更新が無事完了した。今後、本グループ内で情報や意見の交換が活発化できれば、キャンパスネットワークの効率的で安全な運用が可能になるものと期待される。委員会では本グループを組織として維持し、グループからの意見や要望を取り入れ支援することが重要といえる。

##### B. ノーツサーバーの統合 (第 5 回)

ロータスノーツ作業部会からの提案について、ハードの保守およびライセンスの観点から工学研究院のノーツサーバーを全学サーバーに統合することを承認した。

##### C. 工学専門教育用計算機・ネットワークシステム用ドメイン名 (第 7 回)

工学専門教育用計算機・ネットワークシステム運営委員会から提案されたドメイン名の利用を承認した。

#### (5) 附属図書館に関する検討

##### A. 工学部学生用図書購入予算額配分 (第 2 回)

従来通り教員現員数で各系に予算を按分することを決定し、選書を実施した。また、10 月には第 2 回選書を実施した。

### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

以下の事項について、引続き主体的に取り組んでいく必要がある。

- (1) 情報セキュリティポリシーの不断の周知徹底
- (2) 情報モラル向上のための啓蒙活動
- (3) ソフトウェアライセンス管理の徹底と支援
- (4) 戸畑キャンパスネットワークの安定的な運用管理体制の維持と支援

### 4. 委員会の議論に使われた資料

#### (1) 本委員会組織に関して

- A. 大学院工学研究院情報化推進委員会平成 21 年度委員名簿
- B. 工学研究院情報化推進委員会における業務等 (2009 年度版)
- C. 大学院工学研究院情報化推進委員会内規
- D. 平成 21 年度全学情報化推進委員会 (専門部会) 等委員名簿
- E. 九州工業大学工学部工学専門教育用計算機・ネットワークシステム運営委員会内規

#### (2) 違法行為防止、及びセキュリティ向上に関して

- A. 九州工業大学コンピュータ・セキュリティ・インシデント対応機構図
- B. ネットワーク・セキュリティ講習会スライド (情報化推進委員会 2009 年度)
- C. 平成 21 年度前学期情報モラル向上週間実施一覧
- D. 平成 21 年度後学期情報モラル向上週間における講習会実施状況

- E. 平成 22 年度前学期情報モラル向上週間の取り組み
- F. ソフトウェア管理簿を用いたライセンスの管理状況
- G. インシデント対応手順案
- H. 情報セキュリティポリシー策定専門部会からの報告と依頼事項 (2010/02/08)
- (3) 全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法に関して
  - A. ウィルス対策ソフト
    - I. ウィルスバスターの運用に関する工学研究院の基本方針 (2009 年度版)
    - II. 平成 21 年度ウィルス対策ソフトウェアの全学的運用
    - III. ウィルス対策ソフトウェアインストール許可申請書、及びアンインストール許可申請書
  - B. マイクロソフトキャンパスアグリーメント
    - I. MSCA に関する工学研究院の基本方針 (2009 年度版)
    - II. 平成 21 年度 MSCA の全学的運用
    - III. MSCA インストール許可申請書
- (4) 工学研究院の情報化に係る施設設備に関して
  - A. 戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討 WG
  - B. 戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討 WG からの報告と提案
  - C. 工学研究院基盤ネットワーク機器管理グループ名簿
  - D. Notes サーバーの統合
- (5) 附属図書館に関して
  - A. 平成 21 年度工学部学生用図書購入予算額配分 (案)
  - B. 「情報リテラシー授業」報告
  - C. 附属図書館運営委員会資料
- (6) 全学情報化推進委員会資料
- (7) その他

## 5. 工学研究院の現状に関する意見、又は改善に関する提言

情報セキュリティの向上については、次期中期目標・中期計画にも記載しており、重要な課題である。その中でも特に、学生・職員に対する情報セキュリティの研修プログラムに関しては、最終的には、各部局で責任を持って実施することになる。効果的な方法を策定するには、工学研究院におけるこれまでの取組や特性を考慮に入れ、全学委員会等と密接に連携することが重要と考えられる。

## 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

### (1) ネットワークの安全性および情報セキュリティポリシーの不断の周知徹底

ネットワークに安全性については、戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討 WG の成果、また、工学研究院基盤ネットワーク機器管理グループの設置と活動によって、安全性が向上している。引き続き、基盤ネットワーク機器管理グループで情報を共有し安全性を維持向上していくことが期待される。

情報セキュリティポリシーの周知徹底については、新入生のオリエンテーションおよび情報モラル向上週間の取り組みで学生に周知を行っている。教職員（責任者、システム管理者、一般職員）向けの講習会については、情報セキュリティポリシー策定専門部会委員が中心となって開催してきている。しかしながら、情報セキュリティポリシーに関する基本規程に明記されているように、今後は基本的には各部局で実施していく必要があり、工学研究院における対応方法について議論し策定していく必要がある。

### (2) 法令順守の観点から、ソフトウェアのライセンス管理の重要性の周知と管理強化

ソフトウェア管理簿を用いたライセンスの管理について、周知を実施するとともに管理状況を調査することで管理を強化した。今後、ソフトウェア管理簿のオンライン化及び全学運用ソフトウェアの申請の電子化によって、管理作業の軽減を図ることで管理の充実が期待される。

### (3) 工学部情報基盤室の位置づけと業務分担・責任範囲、業務依頼の方法の明確化

「戸畑キャンパスネットワークの整備・管理方針検討 WG」のメンバーの補充、「工学研究院基盤ネットワーク機器管理グループ」への参加、メーリングリストの作成、全学運用ソフトウェア (MSCA、VB) の研究室未配属生への配布窓口の一元化といった事項について、情報基盤室に業務を依頼した。しかしながら、標記事項の明確化については進んでおらず、基盤室長と委員長とが相談しながら対応し、実績を重ねていく中で明確化していく必要があると考えられる。

### 3. 2. 8 大学院工学府広報委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 社会人プログラムのリーフレットのリニューアル
- (2) 工学部のホームページの全面改定

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 社会人プログラムのリーフレットのリニューアル
- (2) 工学部のホームページの全面改定

#### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

工学部ホームページがほとんど活用されていないことから、全面改定に着手した。高校生や社会人が大学について調べるための手段のひとつとして、ホームページの重要性が年々増している。このため、ホームページを充実させ、要望に合わせて迅速に追加・変更する必要がある。内容の充実と迅速な対応を成立させるためには、工学部内でホームページを自作することが望ましい。このため、工学部情報基盤室に作成を依頼した。しかし、今年度は試作完了したものの、公表する段階に至っていない。次年度の早い段階に本委員会で評価して公表することが望ましい。また、それに合わせて英語版の工学部ホームページのリニューアルも必要である。ただし、タイムリーに公表したい内容でも本委員会の承認がなければ公表できないのであれば、機を逸することになる。追加・変更・修正に関しては、本委員会の承認があるものと事務局・基盤室の判断でよいものに切り分け、迅速に対応できる仕組みも必要である。

#### 4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 平成21年度委員会名簿
- (2) 九州工業大学広報委員会規則
- (3) 九州工業大学工学部・工学研究科広報委員会内規

#### 5. 工学部・工学府の現状に関する意見または改善に関する提言

工学部、工学府における入学試験志願倍率を上げるためにも日本だけではなく、近隣アジア諸国への広報活動の強化が極めて必要である。そのために工学部ホームページの充実は必須であり、今後、日本語、英語を含めた工学部ホームページの迅速な運用の仕方を検討する必要がある。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

昨年度の残された課題として、英語版のパンフレットあるいは工学部ホームページの効率的な管理があげられていた。工学部ホームページに関しては、ほとんど活用されていない現状では、現状のホームページを修正・変更しても大きな効果は得られないと判断し、全面改定に踏み切った。しかも迅速に対応するには工学部内での自作が必要と考え、また、HP作成技術、管理・運用の技術者育成も兼ね、工学部情報基盤室に依頼し、作成をしてもらったが、公表するには至っていない。なお、英語版のパンフレットの改定は未着手である。

次年度以降に効果的に広報活動を行うためのホームページ(英語版、日本語版を含め)の内容の吟味、パンフレットのあり方を検討する必要があると考えられる。

### 3. 2. 9 工学部広報委員会

#### 1. 今年度、貴委員会が取り組んだ課題

工学部広報委員会は学部学生募集活動の実施母体である。当委員会に係わる定例的な活動は、オープンキャンパス、大学説明会（高校訪問）、本学が主催する入試説明会、業者等が主催する大学進学説明会への参加、高校等から依頼される工学部見学、大学案内の編集補助等である。

以下に各活動の取り組み課題をまとめる。情報工学部と連携を取りながら、高校訪問のための大学説明資料の統一、高校への訪問教員の調整、新聞・列車広告の実施等、全学的に統一性のある学生募集活動の充実に努めた。また、広報室員の増加等、工学研究院広報室との連携を強め、質の高い学生募集活動の充実に努めた。

- (a) オープンキャンパス：土曜日開催、スタンプラリー・学科何でも相談コーナーの参加者増およびアンケート回収率向上のための工夫、保護者向けの説明会の開催、主要行事への追加。
- (b) 大学説明会（高校訪問）：県内高校に対する工学部・情報工学部分担。岡山以西の全高校への案内送付。
- (c) 進学説明会：業者主催の説明会への積極的参加。
- (d) 大学主催入試説明会：工学部の説明。
- (e) 高校からの工学部訪問への対処：大学概要の説明への協力。
- (f) 大学案内の編集補助：研究室及び学生推薦等の取材協力、共通部分の企画。発行時期の検討。
- (g) 大学広告の作成：新聞広告の作成。
- (h) 工学研究院広報室との連携：工学部の学生募集活動の充実化。

#### 2. 今年度、貴委員会が採択した事項

前項目の活動及び各課題を解決するため下記事項を採択した。

- (a) オープンキャンパス
  - (1) 今年度のオープンキャンパス開催日は8月7日(金)と8日(土)であり、工学部でははじめて土曜日に開催した。その際、オープンキャンパスに伴う休日の振替については工学部総務係と連携した。参加人数は1502人（前年比+217人工学部のみ）（1日目737人、2日目765人）で、過去最高の来場者数であった。
  - (2) 実施内容は次の通りである。午前の部では、学科・コースの説明および本学が用意した見学コースに沿って各学科の施設見学を行った。見学コースは、①機械知能・電気電子・応化と②建社・マテリアル・総合システムの2コースとし、移動距離が短く、極力日陰を歩くことができるように見学順路を設定した。午後の部では、テーマ別の自由見学を実施した。午前の部で見学できなかった学科への見学を促すために、スタンプラリーを実施した。アンケートの回収は、昨年度と同様に、スタンプラリーの景品交換場所をメインとし、各学科に回収箱を設置した。また、昨年度と同様に正門に広報室事務補佐員を配置した。
  - (3) 各学科の説明においては、昨年度と同様に説明者の服装、態度に関して改善をお願いすると共に、より平易な説明を心がけていただけるよう依頼した。また、各学科で教職員による「何でも相談会」を実施した。
  - (4) 保護者向けの大学説明会をはじめて行った。8月7日(金)、8日(土)の二日間で100名を超える参加があった。
  - (5) アンケート回収率は、53.1%（昨年度42.8%）であり、昨年度に比べ向上した。
  - (6) 期間中にボランティアで協力していただく生協学生委員に対して、昨年同様、服装、態度に関して改善をお願いすると共に、説明内容をキャンパス生活などに限定するように依頼した。
  - (7) 本年度のアンケート結果(5点満点)は、以上の(1)～(6)の結果、学部・学科紹介の「わかりやすさ」4.01(昨年度4.02)、「満足度」4.05(昨年度4.07)、研究室見学の「わかりやすさ」4.04(昨年度3.99)、「満足度」4.13(昨年度4.09)で、昨年度のレベルを維持できた。
  - (8) 教務委員会へ依頼することで、オープンキャンパスを大学の主要行事として追加することが認められた。
- (b) 大学説明会（高校訪問）
  - (1) 今年度は、岡山以西の全高校に大学説明会の案内を送り、県内85校、県外197校の計282校(昨年度、県内86校、県外111校の計192校)を訪問して、生徒向け・進路指導教諭向けの説明会を

実施した。工学部からは教員 9 名で 35 校(昨年度、10 名で 54 校)を訪問した。さらに、「工学部ってどんなところ?」と題した出前講義を 3 校で実施した。

- (2) 工学部または情報工学部教員 1 名で各校訪問を実現するための、説明内容を統一した両学部共通パワーポイントの修正を実施した。
- (c) 進学説明会  
業者主催進学説明会については、積極的に参加する方針で 28(昨年度 27)の説明会に参加した。広いエリアで入学希望者を募るという考えのもと、県外で実施される進学相談会にも参加した。
- (d) 大学主催入試説明会  
昨年度から高校教諭からの質問に柔軟に対応するため、学部広報委員が出席することとしている。開催 11 会場(昨年度 11 会場)に対応した。また、工学部説明用パワーポイントの作成も行った。
- (e) 高校からの工学部訪問  
理数教育支援センターが受付けている大学訪問(見学、大学模擬授業、インターンシップ)に対して 20 校(昨年度 19 校)に大学説明を実施した。なお、例年 PTA のみの訪問があったが、本年度はなかった。
- (f) 大学案内の編集補助  
昨年度と同様に、平成 22 年度の大学案内も大幅に変更せず、学生のコメントとデザインの変更程度にとどめることを確認した。
- (g) 大学広告の作成  
昨年から実施している新聞広告に対して、デザインを担当した。昨年度、大学全体の新聞広告の横に情報工学部単独の新聞広告の掲載があった。このような状況を避けるために、今後の学部学生募集に関わる新聞広告について申し合わせ事項を確認した。
- (h) 工学研究院広報室との連携  
学生募集活動の経験がある教員を工学研究院広報室員として迎え入れ、広報室員の増加を図った。また、高校訪問等の事務連絡などの実施により、広報委員の活動補助を強化した。

### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

充実したオープンキャンパス、高校訪問を目標に活動を行ってきた。しかし、以下のような課題が残されている。

- (a) オープンキャンパス  
今年度も午前中の見学に対して、「午前の部で自分の見たい学科が見られなかった」という意見が多く、3 学科しか見学することができないことへの不満がみられた。この対応として、見学コースの希望をとることや全学科の見学ツアー企画することなどが考えられるが、参加者数が増加していることや過去の実施状況から特定の学科へ参加希望者が偏ることなどから、現状の施設では対応は困難であると考えられる。従って、募集案内には今年度と同様に、「午前 3 学科見学、午後自由見学」であることと、その趣旨は「皆さんが持っている学科のイメージと学科で実際行われている内容には違いがあり、この機会に各学科で勉強できる内容を知ってもらいたい」ことを、事前に説明する必要がある。また、今年度、午前中見学時に保護者向け説明会を実施した。情報を求めている保護者も多く、学生募集の有効な一つの手段であると考えられる。保護者向けの説明会を来年度も継続するとともに、入学者のアンケート等でその効果について検討していく必要がある。
- (b) 大学説明会(高校訪問)  
工学部の方針は、①進路指導教諭だけではなく可能な限り生徒に直接説明する、②マイナスの広報活動を避けるべく訪問を希望する教員であれば誰でも良いというやり方はとるべきではない、であるため、情報工学部と比較して訪問校数および訪問教員数が少ない。昨年度と同様に、確実な広報活動が可能な訪問担当教員数(広報室員)の増加を図る必要がある。
- (c) 進学説明会  
広い地域での広報活動を実施するため、参加が少なくても必要な県、高校訪問が手薄な県を見つけ、参加の判断をするためのデータ収集が今後とも必要である。なお、地域だけでなく、本学受験レベルの高校が参加する説明会の選別も必要不可欠である。
- (d) 大学主催入試説明会  
短期間に広範囲の地域で実施されるため、今後担当委員の振り分けが問題となることが考えられ

る。高校訪問と同様に広報室員の増加を図る方策を検討する必要がある。

(e) 高校からの工学部訪問

昨年度は広報室員で対応した。本年度は委員(主に委員長)も説明担当として対応した。今後は、理数教育支援センターからの大学説明実施依頼が直近の場合もあるため、委員長のみならず、委員も説明担当として対応する必要がある。

(f) 大学案内の編集補助

社会情勢・受験生の動向などを考慮しつつ、各学科・コースの説明内容を適切に見直して行く努力が必要である。ただし、1年間使用するものであるため、あまり極端な見直しをした場合、逆効果もあることを十分考慮しなければならない。

(g) 大学広告の作成：高校生向けの宣伝のための電車吊り広告、新聞広告の作成

現在、大学広報については、全学・学部学生募集専門部会と全学・広報委員会の二つの全学委員会から情報が発信されている。今後、これらの連携を図り、より効果的な広報について検討する必要がある。

#### 4. 委員会の議論に使われた資料

高校訪問アンケートおよび調査結果、オープンキャンパスアンケートおよび調査結果、大学案内、進学説明会趣意書等。

#### 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

(a) 工学研究院広報室との連携

工学部広報委員で上記の活動を行うことは多大な負担となる。また、広報活動の質は、各委員の意識によって異なる。従って、各委員の負担の軽減を図り、質の高い広報活動を維持するためには、委員の選出方法の検討に加え、工学研究院広報室との連携を図り、広報活動の経験がある教員を工学研究院広報室員として迎え入れることが不可欠となる。しかし、現状では委員の選出方法について制限を設けることは難しく、工学研究院広報室員の充実を図ることが妥当である。広報室員は、現状、ボランティア的な要素が否めず、適切な評価がなされていない。従って、広報室員の選出・任命方法および評価方法を検討する必要がある。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

(a) 編入生募集

昨年度、工学部の編入生募集は学部一括 20 名となり出願件数(23 名)がかなり減少したこと踏まえ、①工学部広報委員会として高専への募集活動方法を検討する必要があること、②ただし、高専生は専門学科を専攻している点と本委員会の構成員が准教授までである点を考慮すると、従来の高校に対する募集活動とはかなり異なることなるため、本委員会は立案のみに限定して実施は別組織という方針で臨むべきであること、との提言があった。

本年度は出願件数(38 名)であり、出願件数については改善された。これは、各学科で行われた高専訪問や高専生からの大学見学などを行った結果である。しかし、組織的な募集活動にはいたっておらず、今後さらなる検討が必要である。

### 3. 2. 10 大学院工学府学務委員会

#### 1. 委員会が取り組んだ課題

##### 1) ダブル・ディグリー制度について

ダブル・ディグリー制度により受け入れを行う学生の修了要件、教育課程についての審議を行うとともに、他大学における実績について調査することとなった。

##### 2) 課程B学生について

工学府が申請し採択された“組織的な大学院教育改革推進プログラム”と課程Bを組み合わせたシステムが検討され、来年度より実施されることとなった。

##### 3) 中期計画・年度計画について

中期計画・年度計画において学務委員会が担当する事項は、教育課程、インターンシップ、学外との連携、成績評価、指導教員等に関する項目である。それぞれの項目について審議し、データベースへの入力を行った。

#### 2. 委員会が採択した事項

##### (1) 学生の除籍について

##### (2) 学生異動について

##### (3) 長期履修申請について

##### (4) 博士後期課程指導教員グループについて

##### (5) 日本育英会奨学金大学院奨学生の選考について

##### (6) 大学院工学研究科学修細則(案)の改正について

##### (7) 博士後期課程指導教員グループの決定・変更について

##### (8) 博士後期課程の指導教員グループ、論文審査委員会の構成について

##### (9) 外国人研究生の受け入れについて

##### (10) 外国人特別研究学生の受入れについて

##### (11) 「教育・研究活動報告書」の提出依頼について

##### (12) 学年暦(案)について

##### (13) 9月末修了者の認定について

##### (14) 社会人修学支援講座(技術者大学院講座)科目等履修生・聴講生の受け入れについて

##### (15) オリエンテーションスケジュールについて

##### (16) 博士前期課程学生の他研究機関における研究指導について

##### (17) 工学府研究指導等計画書について

##### (18) 工学府時間割表について

##### (19) 短縮修了の取扱い等について

##### (20) 派遣学生報告書について

##### (21) 日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除候補者の推薦について

##### (22) 修了査定について

##### (23) 派遣研究学生について

#### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

##### (1) ダブル・ディグリー制度により受け入れを行う学生の修了要件、教育課程の確立

##### (2) 中期目標・中期計画の実行

#### 4. 委員会の議論に使われた資料

##### (1) 工学研究科学学生便覧教授要目

##### (2) 九州工業大学大学院工学研究科委員会規則

##### (3) 九州工業大学大学院工学研究科運営委員会内規

##### (4) 九州工業大学大学院工学研究科学務委員会内規

##### (5) 九州工業大学中期目標・中期計画

##### (6) 九州工業大学における日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除候補者選考に関する規程

#### 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

- (1) 中期計画・年度計画に基づき、新しい試みやこれまでにないシステムが提案され、実行されつつあるが、全体的に十分に消化しているとは思えない。もう少し、的を絞った改革が必要であると思われる。

#### **6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点**

- (1) 社会人に対する長期履修制度は評判も良く、学生募集には効果的である。さらなる制度の改善により、今以上の入学者数も期待できる。

### 3. 2. 1 1 大学院工学府入学試験委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 大学院入学試験専門部会委員の選出について審議した。
- (2) 出願資格認定委員会委員の選出について審議した。
- (3) 平成22年度工学府博士前期課程入学試験（推薦、第1回）実施日程について審議を行った。
- (4) 博士後期課程外国人留学生特別選抜に係る面接免除者の選考方法について審議を行った。
- (5) 平成22年度博士前期課程入学試験（推薦選抜）合格候補者の選考について審議した。
- (6) 平成22年度博士後期課程入学試験の出願資格認定について審議した。
- (7) 中期目標・中期計画について審議した。
- (8) 平成22年度博士後期課程入学試験(外国人留学生特別選抜) 面接免除候補者の選考について審議した。
- (9) 九州工業大学大学院工学府における国際共同教育学生選抜実施要項（案）について審議した。
- (10) 平成22年度博士前・後期課程（第1回募集）入学試験合格者の選考について審議した。
- (11) 平成21年10月入学博士前・後期課程入学試験合格者の選考について審議した。
- (12) 国際共同教育学生選抜実施要項に基づく平成21年10月入学大学院工学府博士前期課程入学試験合格者候補者の選考について審議した。
- (13) 平成21年度10月入学大学院工学府博士課程（外国人留学生特別選抜）入学試験に係る入試ミスについて審議した。
- (14) 平成22年度九州工業大学大学院工学府博士後期課程入学試験の出願資格認定について審議した。
- (15) 平成23年度九州工業大学大学院工学府入試日程(案)及び募集人員(案)について審議した。
- (16) 平成22年度工学府博士課程入学試験（第2回募集）実施日程について審議した。
- (17) 平成22年度大学院工学府博士後期課程入学試験(外国人留学生特別選抜) 面接免除候補者の選考について審議した。
- (18) 平成23年度九州工業大学大学院工学府学生募集要項（案）について審議した。
- (19) 平成22年度博士前・後期課程（第2回募集）入学試験合格者の選考について審議した。
- (20) 国際共同教育学生選抜要項に基づく平成22年度博士前・後期課程入学試験合格候補者の選考について審議した。

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 博士後期課程の外国人特別選抜において、入学試験日に来日が困難な受験生に対して書類審査のみで面接を免除する制度を設け、その受け入れ方法を決め、実施した。
- (2) ダブルディグリー制度に基づく国際共同教育学生選抜の方法を具体的に決め、実施した。
- (3) 博士前期課程外国人特別選抜において合格者発表ミスが発生したことを受け、合格候補者報告に正・副2名の確認を行うこととし、再発防止策を講じた。
- (4) 大学院工学府出願資格の判定に関する申し合わせとして、過去に個別の入学資格審査により出願資格を認められた者の出願資格は当該年度以降も有効であり、以後の入学資格審査は要しないこととした。

#### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 博士後期課程の定員充足は改善される方向にあるが、さらなる改善に向けた検討
- (2) 生命体工学研究科の学生確保促進を考慮した、工学府の適切な第2回募集実施の検討
- (3) 新カリキュラムでの大学院入試平成23年度本格実施に向けた改善の検討

#### 4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 各専攻の入試実施期日に関するアンケート結果
- (2) 「中期目標・中期計画」
- (3) 国際共同教育学生選抜要項（案）
- (4) 平成23年度九州工業大学大学院工学府入学者選抜要項（案）
- (5) 平成23年度九州工業大学大学院工学府博士前期課程学生募集要項（案）
- (6) 平成23年度九州工業大学大学院工学府博士後期課程学生募集要項(案)

#### 5. 工学府の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 外国人留学生特別選抜試験要項を改善し、博士前期課程の筆記試験免除の拡大や後期課程の面接免除の制度を設けたが、この結果、受入学生の質の維持ができていないかどうかの検証が必要である。

(2) ダブルディグリー制度や博士前期のB課程を利用した新しいカリキュラムなど、ドクターコース受入の多様化が図られており、この件に関しても受入学生の質の維持を検証する必要がある。

**6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点**

(1) 外国人留学生の受入に関して、前期課程後期課程共に新しい制度の下で留学生の受入が行われた。

### 3. 3 教員組織

#### 3. 3. 1 教員の配置

##### ① 大学院工学研究院

表 3. 3. 1 大学院工学研究院教員現員一覧

(平成21年4月1日現在)

系	講座名	教授		准教授		講師		助教		合計	技術職員等
		現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
機械知能工学研究系	機械工学部門	5	梅景 俊彦 金元 敏明 鶴田 隆治 野田 尚昭 水垣 善夫	6	河部 徹 吉川 浩一 黒島 義人 清水 浩貴 長山 暁子 宮崎 康次	1	高藤 和樹	3	谷川 洋文 田丸 雄摩 吉田 幸一	15	13
	宇宙工学部門	4	赤星 保浩 橘 武史 松田 健次 米本 浩一	1	平木 講儒	0		3	井上 昌信 各務 聡 西川 宏志	8	
	知能制御工学部門	4	石川 聖二 小林 敏弘 坂本 哲三 田川 善彦	4	大屋 勝敬 金 亨燮 黒木 秀一 相良 慎一	0		2	西田 健 タノ・ジュークイ	10	4
	小計	13		11		1		8		33	50
建設社会工学研究系		9	秋山 壽一郎 久保 喜延 毛井 崇博 幸左 賢二 永瀬 英生 仲間 浩一 山口 栄輝 山崎 竹博 渡辺 義則	8	伊東 啓太郎 鬼束 幸樹 木村 吉郎 重枝 未玲 寺町 賢一 徳田 光弘 日比野 誠 廣岡 明彦	0		2	加藤 九州男 合田 寛基	19	3
	小計	9		8		0		2		19	22
電気電子工学研究系	電気エネルギー部門	4	近藤 浩 趙 孟佑 匹田 政幸 三谷 康範	3	大塚 信也 白土 竜一 渡邊 政幸	0		1	小迫 雅裕	8	9
	電子デバイス部門	5	大村 一郎 高木 精志 並木 章 西垣 敏 藤原 賢三	3	和泉 亮 川島 健児 内藤 正路	0		6	佐竹 昭泰 鶴巻 浩 羽野 一則 松平 和之 山内 貴志 渡邊 晃彦	14	
	システムエレクトロニクス部門	6	桑原 伸夫 重松 保弘 芹川 聖一 二矢田 勝行 前田 博 水波 徹	4	池永 全志 生駒 哲一 市坪 信一 中司 賢一	0		6	河野 英昭 張 力峰 水町 光徳 山脇 彰 楊 世淵 横尾 徳保	16	
	小計	15		10		0		13		38	47

物質工学研究系	応用化学部門	8	横野 照尚 鹿毛 浩之 古曳 重美 清水 陽一 竹中 繁織 柘植 顕彦 松永 守央 吉永 耕二	7	新井 徹 荒木 孝司 植田 和茂 岡内 辰夫 北村 充 坪田 敏樹 山村 方人	0		7	大塚 圭一 下岡 弘和 馬渡 佳秀 毛利 恵美子 高瀬 聡子 村上 直也 森口 哲次	22	6
	材料開発部門	5	恵良 秀則 大谷 博司 寺崎 俊夫 長谷部 光弘 松本 要	5	秋山 哲也 篠崎 信也 高須 登実男 廣田 健治 横山 賢一	0		6	伊藤 秀行 大坪 文隆 北村 貴典 山口 富子 山根 政博 和才 京子	16	5
	小計	13		12		0		13		38	49
基礎科学研究系	数理学部門	4	池田 敏春 加藤 幹雄 酒井 浩隆 仙葉 隆	6	浅海 賢一 木村 広 鈴木 智成 平山 至大 藤田 敏治 三浦 元喜	0		0		10	2
	量子物理学部門	4	岡本 良治 鎌田 裕之 出口 博之 西谷 龍介	3	岸根 順一郎 中尾 基樹 美藤 正樹	0		0		7	
	小計	8		9		0		0		17	19
先端機能システム工学研究系		3	小森 望充 鈴木 芳文 本田 崇	5	大門 秀朗 孫 勇 高原 良博 竹澤 昌晃 脇迫 仁	0		1	徳永 辰也	9	0
	小計	3		5		0		1		9	9
人間科学系		8	井上 寛 田吹 昌俊 鳥井 正史 橋本 年一 藤澤 正明 本田 逸夫 村田 忠男 ラックスン・イソ. c	7	アブドゥルハク 恭子 李友炯 イウヒョン 今井 敦 岡野 裕司 中村 雅之 虹林 慶 水井 万里子	3	大野瀬津子 八丁 由比 東野 充成	0		18	0
	小計	8		7		3		0		18	18
合計		69		62		4		37		172	214

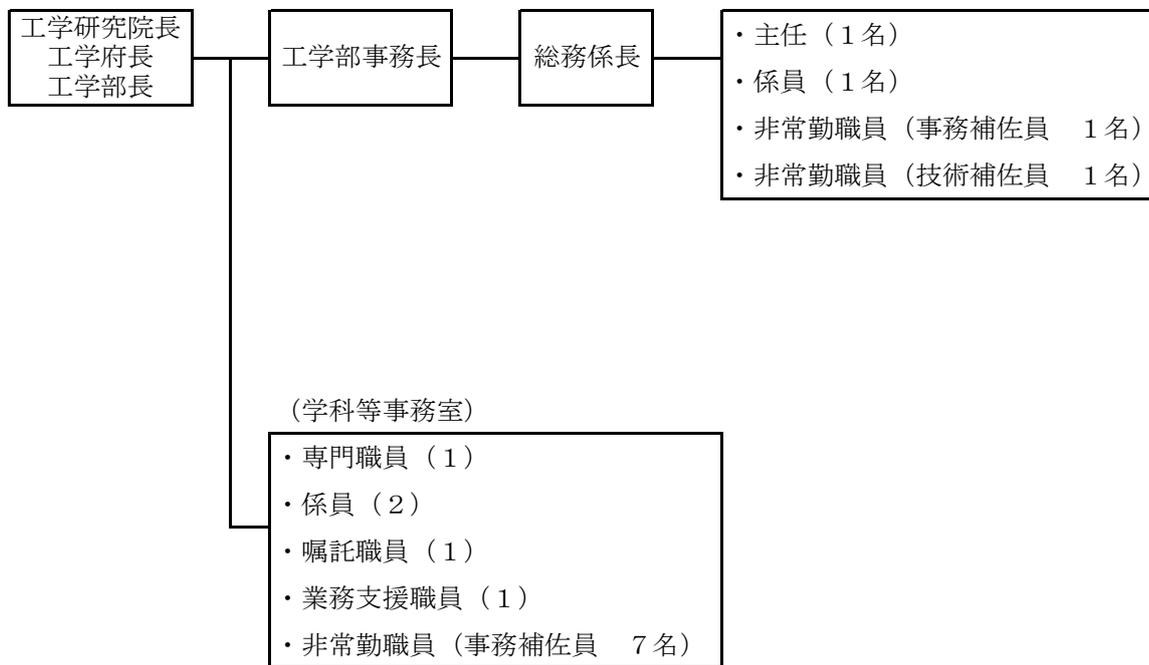
② 大学院工学府

表3. 3. 2 大学院工学府連携講座 (定員外)

(平成21年4月1日現在)

専攻名	教授		准教授		講師		助教		合計	
	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
先端機能システム工学専攻	1	納富 啓	1	西 敏郎	0		0		2	0
合計	1		1		0		0		2	0

### 3. 4 事務組織



※学科等事務室の非常勤職員は、勤務場所が学科等事務室になっている者の数。

図 3. 4. 1 事務組織図 (平成 21 年 4 月 1 日現在)

## 4 大学院工学研究院・工学府・工学部の財政

### 4.1 運営費交付金配分状況

表 4.1.1 運営費交付金配分額、学部運営費、教室配分額年次変化

(単位：千円)

区分 \ 年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
運営費交付金配分額	423,601	391,496	409,336	381,132	480,984
学部運営費 (うち光熱水費保留分)	129,965 (11,357)	104,257 (11,383)	101,843 (11,460)	100,975 (11,313)	194,407 (116,320)*
各学科等配分額	293,636	287,239	307,493	280,157	286,577

(\*) 平成21年度より光熱水費の全額を部局で管理することとなったため、額が例年よりも大きくなっている。

表 4.1.2 平成21年度費目別配分額

(単位：千円)

費 目	配分額	比率 (%)
研究経費	71,568	14.88
教育経費	146,470	30.45
業績等配分経費	27,822	5.79
事項指定経費	37,717	7.84
学部運営費	81,087	16.86
光熱水費留保額	116,320	24.18
その他	0	0.00
合 計	480,984	100.00

表 4.1.3 過去 5 年間の学科等別積算校費配分額の推移

(単位：千円)

年度・科目		学科等		電気電子 工学科	物質工学 科	共通講座	機能システム創成 工学専攻	その他	
		機械知能 工学科	建設社会 工学科						
平成 17 年 度	教育・研究費								
	研究経費	15,293	7,819	19,641	16,382	17,155	7,667	0	
	教育経費	33,289	15,317	35,181	25,547	5,727	10,299	7,655	
	業績等配分経費	7,880	3,518	10,858	7,915	3,680	3,077	0	
その他	1,727	0	35,141	1,846	0	1,022	129,965		
平成 18 年 度	教育・研究費								
	研究経費	10,370	5,281	12,415	11,065	12,193	5,018	243	
	教育経費	38,681	17,456	40,536	31,887	5,972	12,848	7,175	
	業績等配分経費	5,286	2,641	8,547	6,145	3,360	2,107	0	
その他	1,872	0	33,928	1,652	0	2,218	112,600		
平成 19 年 度	教育・研究費								
	研究経費	13,089	6,967	17,504	14,861	15,400	6,371	300	
	教育経費	37,310	16,395	40,249	32,817	6,540	13,270	7,175	
	業績等配分経費	4,232	1,621	5,712	4,530	2,445	1,726	7,579	
その他	1,422	0	33,928	1,652	0	2,218	114,023		
年度・科目		系		電気電子 工学研究系	物質工学 研究系	基礎科学系	人間科学系	先端機能システム 工学研究系	その他
		機械知能 工学研究系	建設社会 工学研究系						
平成 20 年 度	教育・研究費								
	研究経費	13,282	7,533	16,232	14,836	7,527	7,418	5,516	0
	教育経費	33,475	15,284	37,650	34,375	0	2,257	18,378	0
	業績等配分経費	3,629	1,646	5,667	5,423	1,476	1,177	1,419	0
その他	1,564	0	32,443	1,526	0	0	3,072	108,307	
平成 21 年 度	教育・研究費								
	研究経費	13,984	7,600	15,200	15,592	7,192	7,600	4,400	0
	教育経費	35,464	17,051	38,413	35,279	0	2,929	17,384	0
	業績等配分経費	4,325	1,827	5,338	5,432	549	1,282	1,629	0
その他	753	0	32,439	1,502	0	0	3,023	204,797	

#### 4. 2 科学研究費補助金の採択状況

※金額は、直接経費のみ。

(転出を含み、転入を除く)

表 4.2.1 科学研究費補助金採択状況 (平成17～21年度)

(単位：千円)

種目	平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度	
	件数	金額								
特別推進研究	2	125,000	2	35,470	2	26,700	1	11,700	1	11,700
特定領域研究	3	14,600	5	21,500	4	18,400	1	2,600	—	—
特別研究促進費	—	—	—	—	—	—	1	8,000	—	—
新学術領域研究	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3,300
基盤研究 (A) (海外)	—	—	—	—	—	—	1	11,600	1	10,600
基盤研究 (A) (一般)	—	—	2	23,500	3	33,200	3	28,200	3	20,000
基盤研究 (B) (一般)	15	68,600	15	59,300	12	40,600	7	42,800	10	43,200
基盤研究 (C) (一般)	23	30,400	23	27,900	21	30,900	26	28,300	22	26,000
挑戦的萌芽研究	9	10,600	7	12,400	8	11,100	4	4,900	3	3,200
奨励研究	—	—	—	—	—	—	1	580	—	—
若手研究 (A)	—	—	1	15,900	1	2,100	2	4,000	—	—
若手研究 (B)	17	25,300	16	20,100	17	23,600	16	17,600	13	17,600
特別研究員奨励費	1	600	—	—	1	900	—	—	4	2,500
計	70	275,100	71	216,070	69	187,500	63	160,280	58	138,100

表 4.2.2 平成21年度科学研究費補助金学科等別申請、採択状況

(上段数字は継続課題で内数)

系	機械知能工学研究系	建設社会工学研究系	電気電子工学研究系	物質工学研究系	基礎科学研究系	人間科学研究系	先端機能システム工学研究系	合計
事項								
申請件数	31	14	31	38	10	13	9	146
採択件数	6	5	12	6	4	1	0	34
	11	10	15	9	6	1	2	54

※申請件数・採択件数ともに、非常勤研究員を含む。

また、申請・採択件数には、特別推進研究の継続及び特別研究員奨励費を含まない。

#### 4. 3 外部資金導入状況

##### 4. 3. 1 寄附金（奨学寄附金）

学科等	年度	平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学研究系		17	13,500	13	9,770	18	13,070	14	13,902	17	12,800
建設社会工学研究系		18	22,354	24	32,840	15	22,800	20	57,130	13	15,390
電気電子工学研究系		14	11,390	15	11,280	11	8,550	22	12,670	18	18,987
物質工学研究系		39	27,780	42	26,357	35	23,225	36	28,170	26	19,240
共通講座		3	4,500	5	2,400	4	5,980	—	—	0	0
基礎科学研究系		—	—	—	—	—	—	3	954	2	1,950
人間科学系		—	—	—	—	—	—	—	—	0	0
先端機能システム工学研究系		10	5,200	8	5,385	6	3,900	5	49,723	8	5,010
合計		101	84,724	106	88,032	89	77,525	100	117,799	84	73,377

##### 4. 3. 2 民間等との共同研究

学科等	年度	平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学研究系		9	6,168 (6,168)	8	5,670 (5,670)	8	7,489 (7,489)	19	19,260 (19,260)	7	5,620 (5,620)
建設社会工学研究系		5	7,100 (7,100)	5	10,806 (10,806)	4	8,500 (8,500)	4	3,000 (3,000)	3	9,986 (9,986)
電気電子工学研究系		26	46,930 (46,930)	24	36,085 (36,085)	27	39,649 (39,649)	34	49,657 (49,657)	26	69,789 (69,789)
物質工学研究系		26	30,500 (30,500)	20	25,399 (25,399)	26	32,791 (32,791)	34	43,154 (43,154)	27	31,555 (31,555)
共通講座		2	3,050 (3,050)	2	2,500 (2,500)	3	3,750 (3,750)	—	—	—	—
基礎科学研究系		—	—	—	—	—	—	3	2,400 (2,400)	2	1,000 (1,000)
人間科学系		—	—	—	—	—	—	0	0 (0)	0	0 (0)
機能システム創成工学専攻 (先端機能システム工学研究系)		3	900 (900)	4	2,000 (2,000)	7	14,699 (14,699)	2	12,598 (12,598)	2	10,395 (10,395)
合計		71	94,648 (94,648)	63	82,460 (82,460)	75	106,878 (106,878)	96	130,069 (130,069)	67	128,345 (128,345)

※下段の（ ）数字は民間負担分の歳入金額で内数。

※複数年契約を含む。

#### 4. 3. 3 受託研究

		表 4. 3. 3 受託研究受け入れ状況								(単位：千円)	
学科等	年度	平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学研究系		10	29,007	15	24,283	12	18,514	13	30,148	13	25,448
建設社会工学研究系		4	12,300	2	6,465	3	19,015	5	18,483	2	12,000
電気電子工学研究系		10	54,484	12	72,469	17	79,013	21	58,781	23	68,501
物質工学研究系		10	28,441	11	24,903	10	149,586	18	109,638	19	97,956
共通講座		1	4,250	1	5,696	2	4,640	—	—	—	—
基礎科学研究系		—	—	—	—	—	—	1	2,000	2	4,860
人間科学系		—	—	—	—	—	—	0	0	0	0
機能システム創成工学専攻 (先端機能システム工学研究系)		3	2,556	5	10,633	7	21,737	3	21,072	4	18,092
合計		38	131,038	46	144,449	51	292,505	61	240,122	63	226,857

※複数年契約を含む。

※注意事項

- ・ 束ね契約もありますが、申請を1件としています。
- ・ 知的クラスターは1テーマを1件とし、代表者の所属で分けています。
- ・ 受託事業は含まれていません。

#### 4. 3. 4 寄附講座

		表 4. 3. 4 寄附講座受け入れ状況					(単位：千円)	
名称	所属学科	寄附者	年度別受け入れ金額					教員組織
			平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	
電力系統 制御工学	電気工学科	九州電力(株)	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	平成21年度 客員教授 1 客員助教 1

#### 4. 3. 5 寄附金の利息

大学院工学研究院・工学府・工学部では、寄附金の利息を共通経費として運用している。

表4.3.5に平成21年度の使用内訳を示す。

表4.3.5 平成21年度寄附金共通経費使用報告

(単位:円)

受入額		使用額	
事項	金額	事項	金額
前年度より繰越	8,992,153	出欠管理システム一式	9,450,000
明専会大学・学生支援事業より繰越	500,000	国際交流打合せ会議費(ロレーヌ工科大学)	99,720
寄附金立て替え経費より繰越	2,850	国際交流打合せ旅費(昌原大学校)	92,925
寄附金オーバーヘッド分	3,065,897	国際交流打合せ旅費(サレント大学、ローマ・ラ・サピエンツァ大学)	332,605
		国際交流記念品	39,080
		国際交流打合せ会議費(揚州大学)	44,000
		シンポジウム会議費(PBL・FD委員会・工文融合教育合同シンポジウム)	34,990
		(小計)	10,093,320
		繰越額	2,467,580
合計	12,560,900	合計	12,560,900

## 5 大学院工学研究院・工学府・工学部と社会のつながり

### 5.1 地域貢献活動

#### 5.1.1 大学公開

大学公開事業の一環として実施している高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況を表5.1.1に示す。

表5.1.1 高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況

年度	参加校数（校）	参加者数（名）		
		大学全体	学部別	
平成17年度	224	1,481	(工)	892
			(情)	589
平成18年度	255	1,543	(工)	968
			(情)	575
平成19年度	/	1,701	(工)	1,065
			(情)	636
平成20年度	/	2,198	(工)	1,285
			(情)	913
平成21年度	/	2,427	(工)	1,502
			(情)	925

※19年度より、個人の参加申込みとなったため、参加校数のデータは取っておりません。

## 5. 1. 2 公開講座等

表 5.1.2 公開講座等実施状況

(単位：名)

年度	講座名	対象	参加者数
平成17年度	エネルギー・エレクトロニクスの未来技術	一般市民・高校生	14
平成18年度	第3回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙を切って作るふしぎな図形」	小学生以上	59
	八幡大谷市民センター 折り紙講座	市民対象	27
	第4回 ジュニア・サイエンス・スクール 「光の不思議を体験しよう」	小学校4年生以上	55
	明治学園小学校 天体観測会	5年生	41
	戸畑子ども会 折り紙講座	小学生	50
	第5回 ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機で学ぶ飛行機の仕組み」	小学校4年生以上	73
	第6回 ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	中学生	17
	第7回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙をたたんで作るふしぎな模様」	小学生以上	64
	第8回 ジュニア・サイエンス・スクール 「圧力ガンガン」	小学校4年生以上	68
	第9回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正六角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	99
	第10回 ジュニア・サイエンス・スクール 「超伝導ってなんだろう？」	小学校4年生以上	63
	第11回 ジュニア・サイエンス・スクール 「発泡スチロールのリサイクル」	小学校4年生以上	44
	第12回 ジュニア・サイエンス・スクール 「燃える不思議－花火のひみつ－」	小学校4年生以上	88
第13回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正六角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	97	
平成19年度	第13回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙を組んで作るふしぎな立体」	小学生以上	97
	第14回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」	小学生以上	
	第15回ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	中学生	41
	第16回ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機で学ぶ飛行機の仕組み」	小学4年生～中学生	41
	第17回ジュニア・サイエンス・スクール 「正方形や長方形や三角形の折り紙をたたんでみよう！」	小学生以上	86
	第18回ジュニア・サイエンス・スクール 「光と色のマジック！～発光体～」	小学生以上	67
	第19回ジュニア・サイエンス・スクール 「天気のおぞに挑戦しよう！」	小学4年生以上	69
	第20回ジュニア・サイエンス・スクール 「身近な化学…しょっぱいだけじゃない塩水のお不思議」	小・中学生	131
	第21回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙をたたんで切って開いてできる、ふしぎな模様」	小学生以上	79
	第21回ジュニア・サイエンス・スクール(2回目) 「折り紙をたたんで切って開いてできる、ふしぎな模様」	小学生以上	70
	第22回ジュニア・サイエンス・スクール 「燃える不思議－花火のひみつ(2)」	小学4年生以上	85
	もりつね祭ブース出展	一般	
	毎日新聞社主催「ふしぎ発見ワークショップ」への協力	一般	
	インフォネットフェスティバル2007への協力	一般	
	青少年の為の科学の祭典 実験ブース出展	一般	
北九州市児童文化科学館「わくわくサイエンスキッズ」への協力	一般		
こどもエコクラブ全国フェスティバル in 北九州	一般		

平成20年度	第23回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」	小学生以上	ブース 出展
	第24回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体」	小学生以上	105
	第25回ジュニア・サイエンス・スクール 「天体観望会：大型望遠鏡で月や惑星をみよう」	中学生	228
	第26回ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	小学4年生～中学生	29
	第27回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 水環境館」	小学生以上	ブース 出展
	第28回ジュニア・サイエンス・スクール 「正6画形で作るふしぎな立体」	小学生以上	78
	第29回ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機の最新技術」	小学4年生以上	30
	第30回ジュニア・サイエンス・スクール 「音と楽器の科学」 「ミニチュア電子ピアノの作製」	小・中学生 中学生	28 16
	第31回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(初級)」 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(中級)」	小学生以上	36 44
	第32回ジュニア・サイエンス・スクール 「磁石を使って魚ロボットを動かしてみよう」	小学生以上	28
	もりつね祭ブース出展	一般	
	青少年の為の科学の祭典 実験ブース出展	一般	ブース 出展
	北九州市児童文化科学館 「わくわくサイエンスキッズ」への協力	一般	ブース 出展
	福岡市少年科学文化会館 「音と楽器の科学」への協力	一般	ブース 出展
	福岡市少年科学文化会館 「わくわく科学カーニバル」への協力	一般	ブース 出展
	北九州市立中原市民センター	小学1～6年生	約30
	北九州市立三六市民センター	小学生（主に1～3年生）	約40
	福岡県高校化学部会研修会	高校教員	20
	天文講演会 「生命の歩み-君はどこからきたのか-」	小学校高学年以上一般まで	162
	中学理科教員サークル研修 「天気のおぞに挑戦しよう！」 「光の不思議を体験しよう」	中学教員	約20
	飛幡中学校 「燃える不思議-花火のひみつ-」	中学1・2年	14
	インターンシップ 福岡県立八幡工業高等学校	高校生	2
	平成21年度	福岡県高校化学部会研修会	高校教員
第33回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」		小学生以上	ブース 出展
第34回ジュニア・サイエンス・スクール 「多角形をたたんで作るふしぎな模様」		小学生以上	59
北九州市立永犬丸市民センター		小学1～6年生	約50
北九州市立前田市民センター		小学1～6年生	25
第35回ジュニア・サイエンス・スクール 「皆既日食観察会」		小学生以上	420
第36回ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」		中学生	42
日本化学会九州支部「化学への招待」への協力		小学生以上	63
北九州市児童文化科学館 「わくわくサイエンスキッズ」への協力		一般	ブース 出展
戸畑区「いいっちゃ戸畑」への協力		一般	ブース 出展

戸畑区まちづくり推進課推進課 「安川・松本家と戸畑の百年」記念事業への協力	一般	33
天文講演会 「宇宙を身近に～宇宙開発者たちに聞いてみよう～」	小学校高学年以上一般まで	103
第 37 回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(初級)」	小学生以上	32
「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(中級)」		40
北九州市立三六市民センター	小学 1～6 年生	約 40
第 38 回ジュニア・サイエンス・スクール 「ソルバトクロミズム：周りの環境で色が変わるカメレオン分子を作ってみよう」	小学生以上	45
第 39 回ジュニア・サイエンス・スクール 「家庭の科学—電気製品の仕組みと安全な使用法」	小学生以上	30

### 5. 1. 3 北九州市民カレッジへの協力

本学は、福岡・北九州地域リカレント教育推進協議会主催のリカレント教育の実施大学の一つになっていたが、その後継事業として、平成17年度から北九州市民カレッジが始まった。これらの事業にこの5年間に協力したセミナーの実施状況を表5. 1. 3に示す。

表 5. 1. 3 北九州市民カレッジ（リカレント教育）協力セミナー実施状況 (単位：名)

年 度	セミナー名	参加者数	備 考
平成17年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成18年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成19年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成20年度	現代社会を支える化学－最先端機能物質から環境・リサイクルまで	18	市民カレッジ
平成21年度	原語で読む現代ドイツ文学 －ダニエル・ケールマン『陽の下で』－	27	市民カレッジ

### 5. 1. 4 出前講義

近年、社会的問題となっている、いわゆる青少年の「科学離れ」「理工系離れ」対策の一環として、小・中・高等学校の生徒を対象に本学の教官が小・中・高等学校に出向き、理工系分野の学問の最前線の話題や魅力等について分かり易く講義をする。

表 5.1.4 出前講義

年度	講義名	実施件数	対象者
平成17年度	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	7	高校生
	やさしい情報通信の世界ーインターネットの基礎と応用ー	2	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用ー脳をまねてロボットを動かすはなしー	6	中・高校生
	電子が創るナノワールドー高校理科から最先端技術へー	6	高校生
	光触媒を使った太陽光による環境浄化	1	高校生
	身のまわりのペットボトルのリサイクルーペットボトルをもっと知ろう！ー	1	高校生
	身近な金属材料のリサイクル	3	高校生
	地球を救う水と風のエネルギー	1	小学生
	君も色のマジシャンになってみませんかー新幹線から制がん剤までー	2	中学生
	3次方程式の解法ー楽しい数学ー	1	高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	4	高校生
	進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	1	高校生
	テレビはなぜ見える！ーテレビ・ラジオの原理と電波のふしぎー	5	小・中学生
	迷路とマイクロマウスー人工知能ってなにー	2	小・中学生
	物理と工学ー物理は何の役に立つ？ー	2	高校生
	風を生活に役立てる最先端研究ー何がわかってて、何がわかってない？ー	1	高校生
	ひとにやさしいまちづくりって？ーバリアフリーのまちづくりー	1	小・中・高校生
	平成18年度	天気予報の物理と数学ー流れの力学から気象予報士になる方法までー	2
エコポ・ワークショップ！植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化ー自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てようー		1	小・中・高校生
魚のすみやすい川づくり		1	中・高校生
身近な科学の話ー理科（科学）の学習の意味を考えるー		3	中・高校生
3次方程式の解法ー楽しい数学ー		1	高校生
宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？		2	高校生
万有引力の法則の初等的な導出法ーニュートンが目指したものー		1	中・高校生
相対性理論と4次元時空間ーアインシュタインが目指したものー		3	中・高校生
進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者		1	高校生
ニューラルネットのロボットへの応用ー脳をまねてロボットを動かすはなしー		1	高校生
エネルギーと環境		1	中・高校生
平成19年度	「アポロ13」はただの冒険映画じゃないー技術者ってカッコいい！ー	4	中・高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用ー脳をまねてロボットを動かすはなしー	5	高校生
	やさしい情報通信の世界ーインターネットの基礎と応用ー	2	高校生
	テレビはなぜ見える！ーテレビ・ラジオの原理と電波のふしぎー	4	小・中・高校生

シミュレーションで学ぶデジタル通信の仕組み	1	高校生
聞こえないことと、その支援方法	1	中・高校生
視覚障害者のための福祉機器について - 視覚障害を体験して考えてみる -	1	中・高校生
電気のいろいろな作り方 - 身近なもので電気をつくろう -	3	小学生
超伝導体による浮上実験 - 超伝導体と磁石はどう違うか? -	8	小・中・高校生
シャボン玉から知る複合材料の科学	2	中・高校生
携帯電話もパソコンもテレビも車も集積回路 (LSI) がぎっしり - LSI ってなに? 半導体ってなに? -	3	小・中・高校生
水の不思議 - 20°Cで、あたたかい氷をつくってみよう! -	1	小・中・高校生
遺伝子とゲノムと生命 - やさしい遺伝子のはなし -	1	中・高校生
医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術 - 生物に学ぶドラッグデリバリーシステム -	2	高校生
マイクロ波が促進する化学反応 - 電子レンジで化学の実験 -	1	小・中・高校生
身のまわりのプラスチックとリサイクル - ペットボトルやビニールについてもっと知ろう -	2	小・中・高校生
あっ、プラスチックが水に溶ける! - プラスチックのリサイクルを考える -	2	高校生
生ゴミからプラスチックと肥料をつくる - リサイクルを考えよう -	2	小・中学生
魚のすみやすい川づくり	1	中・高校生
風を生活に役立てる最先端研究 - 何がわかって、何がわかってない? -	1	高校生
エネルギーと環境 - おまけ 僕や私の生きる道 (技術者編) -	6	中・高校生
天気予報のしくみと地球の気候変動 - 気象現象の物理と数学 -	3	高校生
身近な物理現象と、大学での研究例との関係 - 多様な知識と好奇心が共通にある -	1	小・中・高校生
3次方程式の解法 - 楽しい数学 -	2	高校生
宇宙とは何か? 時間とは何か? 人間とは何か?	1	高校生
相対性理論と4次元時空間 - アインシュタインが目指したもの -	1	高校生
やってみなくちゃ分からない折り紙飛行機 - ものづくりの秘密 -	2	小・中学生
「紅の豚」はただのアニメじゃない - 技術者っていいもんだ! -	4	中・高校生
進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	2	高校生
平成20年度 もてる男の顔・対称性とその顔認証への応用 - バイセキュリティの世界 -	4	小・高校生
やさしい情報通信の世界 - インターネットの基礎と応用 -	3	高校生
テレビはなぜ見える! - テレビ・ラジオの原理と電波のふしぎ -	3	小・高校生
音声のブラインド信号分離 - 聖徳太子プロジェクト -	2	高校生
世界最速のデジタルオーディオ IC	1	高校生
脳と機械の「見る」 - 人間の視覚のしくみとロボットへの応用 -	3	小・高校生
ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	2	高校生
環境にやさしいプラスチックで作る自在に曲がる電子デバイス - ポリマーで拓く未来の情報機器とロボット -	1	高校生

	携帯電話もパソコンもテレビも車も集積回路 (LSI) がぎっしり ーLSI ってなに？半導体ってなに？ー	4	高校生
	超伝導体による浮上実験 ー超伝導体と磁石はどう違うか？ー	10	小・中・高校生
	生物の生み出すナノ工作の世界 ー生物の働きを生み出すタンパク質達を眺めてみようー	1	高校生
	DNAと遺伝子 ーやさしい遺伝子のはなしー	5	高校生
	医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術 ー生物に学ぶドラッグデリバリーシステムー	3	高校生
	エコポ・ワークショップ！植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化 ー自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てようー	3	小学生
	魚のすみやすい川づくり	1	高校生
	風を生活に役立てる最先端研究 ー何がわかってて、何がわかってない？ー	2	高校生
	地球温暖化問題と自然エネルギー ー風力発電を含めてー	2	小・高校生
	エネルギーと環境 ー新聞から学ぶ 原発と温暖化対策ー	1	高校生
	お日様パワーは地球を救う ー太陽電池のはなしー	2	高校生
	光触媒を使った環境浄化について	1	高校生
	生ゴミからプラスチックと肥料をつくる ーリサイクルを考えようー	3	小・中学生
	あっ、プラスチックが水に溶ける！ ープラスチックのリサイクルを考えるー	1	高校生
	ためになるけど、ホントはコワイ確率の話。ー確率にだまされるな。確率は人の生命も左右する鋭い牙にもなる。確率は科学の大事な根っこ。ー	1	高校生
	正多面体のはなし ー折り紙でいろいろな立体をつくらうー	1	小学生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	1	高校生
	天気予報のしくみと地球の気候変動 ー気象現象の物理と数学ー	2	高校生
	「アポロ13」はただの冒険映画じゃない ー技術者ってカッコいい！ー	2	高校生
	「紅の豚」はただのアニメじゃない ー技術者っていいもんだ！ー	4	高校生
	自動車の出来るまで ーものづくりの現場を見てみようー	5	高校生
	工学部ってどんなところ？	5	高校生
	僕や私の生きる道（工学編） ー人生なんとかなるもんだー	2	高校生
平成21年度	もてる男の顔・対称性とその顔認証への応用 ーバイセキュリティの世界ー	9	高校生
	情報工学のもたらす新世界探訪 ー情報工学の可能性は∞ー	3	高校生
	やさしい情報通信の世界 ーインターネットの基礎と応用ー	1	高校生
	テレビはなぜ見える！ ーテレビ・デジタルテレビの原理と電波のふしぎー	4	高校生
	音声のブラインド信号分離 ー聖徳太子プロジェクトー	1	高校生
	世界最速のデジタルオーディオ IC ー20年目の夢ー	3	高校生
	見えないことと、その支援方法	1	高校生
	聞こえないことと、その支援方法	1	高校生
	いつも働いている脳 ー早寝、早起き、脳にご飯をー	2	高校生
	人間の見るしくみをしらべてロボットの見るしくみをつくってます ー脳の視覚のしくみをコンピュータで実現ー	10	中・高校生
	自動ピアノから学ぶ人間の不思議 ー人の感覚を探るー	2	高校生

生物の動きを真似たマイクロマシンと磁場ー先端医療デバイスからアミューズメントロボットまで	3	高校生
ニューラルネットのロボットへの応用ー脳をまねてロボットを動かすはなしー	2	高校生
携帯電話もパソコンもテレビも車も集積回路(IC)がぎっしりーICってなに?半導体ってなに?ー	2	高校生
カーボンナノチューブによる半導体ナノテクノロジーーカーボンナノチューブとは?ー	3	高校生
超伝導体による浮上実験ー超伝導体と磁石はどう違うか?ー	11	小・中・高校生
電気のいろいろな作り方ー身近なもので電気をつくろうー	2	小学生
生物のつくるナノ構造を観察しよう!ーコンピュータを使った新しい自然観察ー	1	高校生
DNAと遺伝子ーやさしい遺伝子のはなしー	1	高校生
医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術ー生物に学ぶドラッグデリバリーシステムー	1	高校生
なぜ砂糖や塩に味を感じるのか?	1	高校生
エコポ・ワークショップ!植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化ー自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てようー	1	高校生
魚のすみやすい川づくり	1	高校生
風を生活に役立てる最先端研究ー何がわかってて、何がわかってない?ー	2	高校生
地球温暖化問題と自然エネルギーー風力発電を含めてー	2	高校生
お日様パワーは地球を救うー太陽電池のはなしー	4	高校生
電子レンジで化学の実験ーマイクロ波が促進する化学反応ー	3	高校生
生ゴミからプラスチックと肥料をつくるーびせいぶつの不思議な世界ー	1	高校生
生ゴミからプラスチックと肥料をつくるーリサイクルを考えようー	1	高校生
あっ、プラスチックが水に溶ける!ープラスチックのリサイクルを考えるー	1	高校生
データを科学する:判断や認識に潜む危うさを見抜くー血液型で性格判断できるってホント?認識って実は何?ー	2	高校生
正多面体のはなしー折り紙でいろいろな立体をつくろうー	3	中・高校生
相対性理論と4次元時空間ーアインシュタインが目指したものー	1	高校生
宇宙とは何か?時間とは何か?人間とは何か?ー科学と技術ー	2	高校生
「アポロ13」はただの冒険映画じゃないー技術者ってかっこいい!ー	2	高校生
「紅の豚」はただのアニメじゃないー技術者っていいもんだ!ー	4	高校生
自動車の出来るまでーものづくりの現場を見てみようー	5	高校生
工学部ってどんなところ?	3	高校生

### 5. 1. 5 情報公開

大学院工学研究院・工学府・工学部の情報公開の実施状況を表5. 1. 5に示す。

表 5.1.5 各種情報公開の現状

現在公開（公表） している情報等	編集方針	年間発行回数、 発行時期	公開・情報提供先	編集組織の名称
大学院工学研究院・工学府・工学部自己点検・評価報告書	大学院工学研究院・工学府・工学部とその関連部局における自己点検・評価を行い、その結果を公表する。	1回・2月	大学公式ホームページ上で、学内外へ公開	大学院工学研究院部局評価委員会

5.2 学生の国際交流

表5.2.1 外国人留学生(国籍別・課程別・費用別)在学状況一覧表

◎外国人留学生在学状況

平成21年5月1日現在

(単位：人)

所属・課程・費用別等	国籍	国籍別																			合計							
		中国	マレーシア	韓国	ベングラデシュ	インドネシア	ベトナム	オーストラリア	ラオス	フランス	ネパール	インド	南アフリカ	パレスチナ	ミャンマー	シリア	ベルギー	メキシコ	コスタリカ	モロッコ		ブラジル	ホンジュラス	フィリピン	キューバ	スリランカ	タイ	
工学部 工学研究所	博士後期課程	4			3	3						1	1														12	
	博士前期課程	14		1	1		2	1			1																23	
	学部生	1	6				1	2																			10	
	研究生/聴講生	7		8				4									1										20	
	国費	4			2	2	1		1				1	1	1	1											14	
	本国政府派遣																											5
	私費	22	1	6	2	1	2	4	2	1	1						1										43	
JASSO			3																								3	
国籍小計		26	6	9	4	3	3	4	3	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	65	
情報工学部 工学研究所	博士後期課程	2	3		2	2						1															15	
	博士前期課程	6		1		1															1						9	
	学部生	12	2				1	1																			18	
	研究生/聴講生	5		1			1																				7	
	国費	1			1	1												1	1					1			7	
	本国政府派遣		1																								1	
	私費	24	4	2	1	2	1	1	1	1										1	1	1					41	
JASSO																											0	
国籍小計		25	5	2	2	3	1	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	49	
生命体工学研究所	博士後期課程	7	4	3	3																						17	
	博士前期課程	10		4	1	1				3															1	1	21	
	学部生																										0	
	研究生/聴講生																										0	
	国費	1		4			1			1															1	1	9	
	本国政府派遣																										0	
	私費	16	4	3	3	1					2																29	
JASSO																										0		
国籍小計		17	4	7	3	1	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	38	
合計	博士後期課程	13	7	3	8	5	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	44	
	博士前期課程	30	0	6	1	2	3	0	1	3	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	53	
	学部生	13	8	0	0	0	2	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28	
	研究生/聴講生	12	0	9	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27	
	国費	6	0	4	3	3	2	0	1	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	
	本国政府派遣	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
	私費	62	9	11	6	4	3	5	3	2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	113	
JASSO	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
国籍小計		68	15	18	9	7	5	5	4	3	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	152	

※ JASSOは、独立行政法人日本学生支援機構による大交流計画奨学金または留学生交流支援制度(短期受入れ)によって在籍する者

※ 研究生/聴講生は、協定校等からの特別聴講(研究)学生を含む

表 5. 2. 2 外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧

【改組前入学者】

(平成21年5月1日現在) (単位:人)

所 属 区 分	機械知能工学科 機械知能工学専攻			建設 社会工学科・専攻	電気電子工学科 電気電子工学専攻		物質工学科 物質工学専攻		機能システム創成工学専攻	合 計
	機 械 工 学 コ ー ス	宇 宙 工 学 コ ー ス	制 御 工 学 コ ー ス		電 気 電 子 工 学 コ ー ス	電 子 通 信 シ ス テ ム コ ー ス	応 用 化 学 コ ー ス	マ テ リ ア ル 創 成 加 工 学 コ ー ス		
博士後期課程	2		1		3		1			7
博士前期課程					1			1		2
学部生 2年生以上	2		1	1	2					6
学部生 1年生	/			/		/		/		/
研究生・聴講生	/			/		/		/		/
短期留学生	/			/		/		/		/
合 計	6			1	6		2		0	15

【改組後入学者】

(平成21年5月1日現在) (単位:人)

所 属 区 分	機械知能工学科 機械知能工学専攻			建設社会工学科 建設社会工学専攻			電気電子工学科 電気電子工学専攻			物質工学科 物質工学専攻		総合システム工学科 機能システム創成工学専攻 先端機能システム工学専攻		合 計
	機 械 工 学 コ ー ス	宇 宙 工 学 コ ー ス	知 能 制 御 工 学 コ ー ス	建 築 学 コ ー ス	地 域 環 境 デ ザ イ ン コ ー ス	都 市 再 生 デ ザ イ ン コ ー ス	シ ス テ ム エ レ ク ト ロ ニ ク ス コ ー ス	電 気 エ ネ ル ギ ー 学 コ ー ス	電 子 デ バ イ ス コ ー ス	応 用 化 学 科	マ テ リ ア ル 工 学 科	機 能 シ ス テ ム 創 成 専 攻	先 端 機 能 シ ス テ ム 工 学 専 攻	
博士後期課程	1		2						1				1	5
博士前期課程	2		3		2		5	5		3			1	21
学部生 2年生以上	1		1		1									3
学部生 1年生	1													1
研究生・聴講生	2							1		1				4
短期留学生	3				7			3		2	1			16
合 計	16				10		15			6	1	0	2	50

表 5. 2. 3 学生の海外派遣

年度	国名	交流協定校	学 生 派 遣 数
17	イギリス	サリー大学	交流協定による派遣 3 名（工学研究科 2 名，情報工学研究科 1 名）
	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修 8 名（工学部 8 名）
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修 1 2 名（情報工学部 1 2 名）
		シドニー工科大学	交流協定による派遣 1 名（工学部）
	韓国	忠州大学	相互交流 1 2 名（工学部 1 2 名） 短期留学 1 名
		昌原大学	相互交流 8 名（工学部 8 名）
		韓国海洋大学校	相互交流 1 0 名（情報工学部 1 0 名）
マレーシア	プトラ大学	交流協定による派遣 2 名（生命体工学研究科）	
18	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名（工学部 8 名）
	イギリス	サリー大学	交流協定による派遣 1 名（情報工学研究科 1 名） 短期留学 1 名（工学部 1 名）
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修 1 2 名（情報工学部 1 2 名）
		シドニー工科大学	交流協定による派遣 1 名（工学研究科）
	韓国	忠州大学校	相互交流 1 4 名（工学部 1 4 名）
19	イギリス	サリー大学	短期留学 1 名
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名（工学部 8 名）
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修 1 2 名（情報工学部 1 2 名）
	韓国	忠州大学校	相互交流 1 2 名（工学部 1 2 名）
浦項工科大学		合同ワークショップ 2 4 名（生命体工学研究科 2 4 名）	
20	イギリス	サリー大学	短期留学 2 名
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名（工学部 8 名）
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修 1 2 名（情報工学部 1 2 名）
	フランス	ロレーヌ工科大学	短期留学 1 名
	韓国	忠州大学校	相互交流 1 2 名（工学部 1 2 名）
21	イギリス	サリー大学	短期留学 1 名（工学府 1 名）
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名（工学部 8 名）
	フランス	国際宇宙大学	短期留学 3 名（工学府 3 名） 派遣先：アメリカ
	ニュージーランド	オークランド工科大学	語学研修 2 名（情報工学部 2 名）
	オーストラリア	シドニー工科大学	短期留学 2 名（工学部 1 名、工学府 1 名）
	インド	バナラスヒンドゥー大学	短期留学 1 名（生命体工学研究科 1 名）
	韓国	釜山大学	短期留学 1 名（工学府 1 名）
忠州大学校		相互交流 1 2 名（工学部 1 2 名）	
浦項工科大学		合同ワークショップ 1 3 名（生命体工学研究科 1 3 名）	

## 6. おわりに

部局評価委員会委員を4年間務め、その最後の年に委員長を仰せつかりました。先般の本学に対して行われた法人評価の現況報告書の作成にあたっては、教育目標の達成度を示すエビデンスとして「現状と課題」から多くの分析結果が引用されました。それは、長年、同じ方法で、本学の在学生・卒業生・修了生・企業の意識を調査・分析したものは、他に無かったからです。「現状と課題」の必要性をこの時痛感しました。今回発刊された「現状と課題」でも、平成17年度（2005年度）から5年間の結果が掲載されています。調査項目は、初年度（平成17年度）から、1）明らかに評価が上昇、2）評価が上昇しているが、最近、頭打ちか下降気味、3）評価がほぼ一定、など様々な傾向を示しています。特に、2）の傾向を示す項目については、それが短期的なものなのか、何らかの兆候なのか、今後の動向を観察する必要があります。いずれにしても、「現状と課題」には貴重な情報が含まれていると思います。これが工学研究院・工学府・工学部の教育研究活動の改善に役立てば幸いです。最後に、「現状と課題」の発刊にあたり、多大のご協力をいただいた委員、関係事務職員をはじめ多くの皆様に感謝致します。（渡辺義則）

今回、達成度をまとめるに当たり、前から気になっていた、語学力についてチェックを行って見た。学生の意識としては、語学の達成度については、相変わらず顕著な改善は見られていないが雇用主の大学院生の評価については、ここ数年改善の傾向が得られている。この原因については、良くわからないが、各教員の自覚と日常の地道な努力が、徐々に結果に現れているのではないかと思う。私が最初に部局評価委員会になったのは2001年である。当時、工学部が分野別教育評価の試行対象校となり、資料をまとめるにあたって、データの少なさに愕然としたことを今でも覚えている。その後、達成度評価に関する調査を続けて来ていることは、「継続は力なり」と言われているように、重要なことと考える。（桑原伸夫）

本年度より部局評価委員会委員を担当し、初めて「現状と課題」の編集に参加いたしました。今回の「現状と課題」では、アンケート結果に基づき、平成17年度（2005）から5年間における在学生・卒業生・修了生の意識・満足度等が分析されています。多くのアンケート項目において、良好な状態が保持されるか、あるいは、良い方向へと推移しているという解析結果が出ています。多くの教職員の皆様が色々と努力された成果が反映されていると思います。一方、アンケート項目によっては、もう少し改善が必要であろうと思われる結果も出ています。これらの解析結果が学生にとってより良い大学となるために利用されることを期待しております。（大屋 勝敬）

昨年より部局評価委員会委員を拝命していますが、今回の調査で私の担当した部分だけ

で言うと、昨年に比較してやや教育・研究環境が悪くなっている印象を受けました。これを法人化以降の大学機構の急激な変化と関連付けるにはまだ時期が早すぎると思いますが、継続的な観察が必要であろうと思われます。その意味でもこの自己評価システムが、教員と学生の間これまでの一方的な知識伝達を双方向的に変え、さらに教員同士の相互理解を行う手段として、今後も重要な役割を担っていくことを期待しています。(大谷博司)

部局評価委員会は、本誌「現状と課題」の卒業生・修了生アンケートや企業アンケートを基盤に工学部・工学府・工学研究科の教育について調査・分析が任されています。その一委員として述べさせていただければ、独立法人化以後の統計から読み取られることは、全体に卒業生・修了生の満足度は良好でむしろ傾らかに上がっていることで、喜ばしいことだと感じます。これは、教職員の日頃の努力の賜物といえるところが大きいのではないかと感じる一方、卒業生アンケート項目[11]のような科目の理解度を問うアンケートに対しては、あまり芳しい結果になっておりません。これは、ゆとり教育を受けてきた学生に対する教育のあり方について教職員側の対応の遅れなどが原因している可能性があり、再考する必要があるように思えます。企業アンケートからは卒業生・修了生についてお褒めの言葉をいただくところが多々ありますが、語学を含むコミュニケーション能力や熱意・粘り強さ・積極性が要望されております。(鎌田裕之)

部局評価委員を昨年に引き続き今年度も務めさせて戴きました。そして昨年同様、報告書の一部の執筆を担当させて戴きました。今年度のアンケート内容は例年とさほど大きな違いはないと思いますが、昨年同様に景気の影響か例年より厳しい結果が出ているようにも感じました。景気が悪い時のアンケート結果は、企業にとっての真実に近い回答とも考えられますので、それらを真摯に受け止める必要があると思いました。また、アンケート結果の中に、例年同様評価の低い項目があります。この評価をどのようにすれば改善できるのかを議論し、具体的な提言まで踏み込めれば、このアンケート活動は本学の教育と研究の向上に大きく寄与するものと思えます。評価の低い項目に関して、関係する委員会等での議論につながることを願います。(小森望充)

一昨年より部局評価の委員を担当させて頂いております。改めて感じることは、学生や企業の方々には様々なことを言い様々な評価をするが、彼らの示す数字や言葉の中には真実が秘められているということです。よって我々大学人の使命は、それを真摯に受け止め今後の教育や研究の改善に役立てることだと思えます。ただし点数され記録された評価が一人歩きを始め、各教員が本来持つ理想の教育や研究に悪影響を及ぼすようなものになっては本末転倒です。周辺からの評価ばかりに惑わされることなく、企業や学生の意見を傾聴しつつ、理想的な教育、効果的な教育を模索して行けばそれでよいのではないかと思います。(田吹昌俊)

2011年（平成23年）2月

---

平成22年度 大学院工学研究院部局評価委員会委員

渡辺 義則	工学研究院 教授【委員長】
桑原 伸夫	工学研究院 教授【副委員長】
大屋 勝敬	工学研究院 教授
大谷 博司	工学研究院 教授
鎌田 裕之	工学研究院 教授
小森 望充	工学研究院 教授
田吹 昌俊	工学研究院 教授
葉石 研次	工学部事務長

---